招魔の祈り　~law distorters~

平山コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
招魔の祈り ~ｌａｗ ｄｉｓｔｏｒｔｅｒｓ~

【Ｎコード】
Ｎ６３８２Ｖ

【作者名】
平山コウ

【あらすじ】
魔界から魔物を喚び出し使役する特殊技能。それにより人間と契約した魔物を招魔と呼び、需要のある社会。招魔と魔法の扱いを教える教育機関、浄法院で学ぶ日々に二人の生徒がいた。落ちこぼれ主人公と首席幼なじみ。彼らも普通の学園生活を送るはずだった。しかし、主人公にはある秘密があって……。
多くの想いが交錯する（ほのぼの入り）召喚＆バトルファンタジー。

【1】－1　出会いと日常

――幼い少年が一人、岩に腰かけていた。
場所は、名前も知られていないほど古い洞穴。入口は大人がぎりぎり入れるかというほどのものだが、中はそこそこ広いようだった。そんな形状のため、光はあまり入らないはずなのだが、薄明かりでもあるかのように暗くはなかった。
岩もずいぶんと古いようで、少年ほどの体重でも表面がざあっと音を立てて少しずつ崩れていく。鮮やかな青髪を持つ少年はそこに腰掛けたまま石にでもなったように動かない。ピクリとも動かない。

「……」

少年はただ目の前の空間を眺めるようにしているが、その目は現実のものを捉えていなかった。薄汚れた服をまとって、モニュメントか何かのようにただ静かに座っていた。

そんなとき、少女が現れた。
美しいスカーレットの髪を肩まで伸ばし、同色の瞳がくりっとしている。運動はあまりしていないだろう、華奢な体。年の頃は少年と同じくらいか。その少女が洞穴の入口に立っている。
すん、すん、と鼻をすすりながら、洞穴の中へと入ってきた。しかし少女は一度立ち止まると、洞穴の中すべてを見ようとしているのか、きょろきょろと周りを見渡した。いつもやっていることなのか、まるで人がいないことを確認するようだった。
そして、少女は視線を前に向けて止める。少年に気づいたのだ。
自分だけが見つけて、誰もいないはずの静かな洞穴で座った少年。

興味が湧いてきたのか、少女は視線を少年から動かさない。
しばらく時間が流れた。が、やがて少女がしびれを切らす。少女は陽の光が当たっていた入口から駆けだすと、少年の方へと向かう……前に、こけた。

「いたた……」

恥ずかしくなってあわてて起き上がると、肘に走る痛み。見るとそこには軽い擦り傷があった。血も出ていないが、あとに残るズキズキとした痛みが不快であった。

「ってそうじゃなくて！」

自分がしようと思っていたことを思い出し、また歩き出す。向かう目的地は、ぼろぼろの少年。
たどり着くとそこには、反応も示さない少年の姿。少女は早速行動に移した。

「ねえ、キミ？」
「……」

反応はない。そのことを少女は悲しく思うが、まだ、諦めない。
もう一度、

「ねえったら～」

そう言って、少女は肩を揺さぶってみる。返事はない。しかし、少女は嬉しくなった。なぜなら、少年の瞳の奥で何か反応したようであったからだ。

「こうなったら……」

何故か、少年が返事するまで声を掛け続けてやる、と意地になった。

「ねえねぇ」
「……」
「キミ、きこえてる？」
「……」
「なまえ、なんていうの？」
「……」
「……もぅ」

手強い相手に早くも諦めかけてしまう。
少女は、悩む。もうそろそろ戻らなければ、次の稽古の時間に間に合わなくなる。早く帰らないと先生に怒られてしまう。
もう一度、悩む。帰らなければならないのだが、このまま帰ると、もう少年がいなくなってしまう気がするのだ。それはなんとなく、嫌だ。
うーん、と少女は悩み続ける。こうしている間にも時間は経って、自由時間が減っていることには気づいていない様子である。しかし、少女は真剣に考えた。と、そんなとき、

「……きみ、だれ？」

ようやく少年が口を開いた。少し声は枯れていて、めんどくさそうな声だった。
少女が目を向けると、そこにはこちらを見上げる少年。焦点をつかみきれていない目が少女のくりっとした目と合う。少女は嬉しくなった。

「あ、やっとしゃべってくれた！」

きゃっきゃと騒ぐ少女であったが、少年の様子は変わらない。相変わらずぼーっとしていて、少女の姿を目に写しているかどうかさえ怪しい。それを見た少女はまた悲しい気持ちになり、少し落ち込む。本当に感情豊かな少女であった。

「……目、どうしたの？」

一瞬、少女は戸惑う。そして気づいた。少年が話しかけてくれたのだ。そして、自分の目がどうなっているかを確認する。目元が少し赤くなっていた。

「あ、これ？　えとね、ちょっとないちゃったの」

「……なんで？」

「あ、だいじょぶだから。なんでもないの」

反射的に強がってみせたが、そこで話が終わってしまった。気まずい空気が流れ、少女は自分の手をいじり始める。実は少し先生に怒られただけだったのだが、何故か少年に言うのは恥ずかしかった。

しばらくして、とりあえず足が疲れてきたので、少年の隣に座る。もう時間のことなど気にすら留めていないようだ。

少女は何とはなしに空を見上げる。と言っても、そこにあるのは空に浮かぶ綿飴ではなく、暗い色の土の天井だ。だから少女は、この向こうには何があるのかな、とぼんやり考える。

「きず。だいじょうぶ？」

だから隣からそんな声が聞こえたとき、少女は驚いた。少年を見

ると、その視線は少女の肘に向いている。

「あ、うん。ぜんぜんいたくないし……」

「だめだよ。ばいきんが入るかもしれないよ」

そういって少年は立ち上がり、少女の無傷の方の手を引く。そして洞穴の奥へと歩く。少年の初めての行動であった。

「あ……」

意識せずに声を出してしまう。急な行動に対する驚きの声。のはずなのだが……

「……」

心臓が跳ねる。すぐに収まるはずのその勢いは止まることを知らず、少年に持たれている部分が熱を持っているように感じられた。こんなことは初めてだった。

そして、自分がこんな風に男の子と触れ合ったことがなかったことに気がついた。

「……あった」

そう、少年は言った。目の前にあるのはちょうどいい湧き水。岩盤からしみ出しているらしく、どうやら地下水のようだ。

「洗って……ばんそーこー、ある？」

「う、うん……」

少女は言われたとおりに傷口をそっと洗った。その後、ポケットにあった絆創膏を取り出す。すると、少年がかして、と言った。

「え？」
「はってあげるよ」
返事を待たず、少年は少女の手から絆創膏を取ってしまう。そしてそのまま少女の腕を取って、肘にぺたっと貼る。少女が戸惑ったせいで少しずれた。
「……おわり」
「……ありがと」
やることが終わってまた黙る少年。なぜか突然黙ってしまった少女。
二人の間にしばらくそのまま沈黙が流れた。そのせいで少女は思い出してしまった。今頃、先生が怒っているだろうことを。
「あ、えっと、その……」
言うべきか迷う少女。しばらく考えていたようだったが、やがて……決めた。
「ね、ともだちになろう？」
「……ともだち？」
「あしたもここにいて……ね？」
少女は願いを込めるように、少年の目を真っ直ぐ見る。それを少年が見ているかどうかは彼のぼーっとした目ではわからない、が、
少年はかすかにうなずいた、気がした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

都市シレンティア。この世界に残る唯一の都市。それは、だだっ広い荒野の上にぽつんと存在していた。
遠く離れた場所に集落などはまだ存在するところもあったりするが、都市として発達しているのはこの場所だけであろう。
その都市の中央区、この都市のシンボルとしてそびえ立つ高い灯台のような建造物――『物見塔(ものみのとう)』の傍に控える全四階建ての建物。その内にある一室で、

「レヴァン」

そう呼びかける声がした。しっかりとした、厳しさが感じられる女性の声。しかし、それに答える者はいない。

「起きろ。レヴァン・グラフェルト」
「…………んぁ？」

先程より大きくなった同じ声で、ようやく一人の少年が目を覚ます。
レヴァン・グラフェルト。色が落ちたような淡い水色のぼさぼさ髪に澄んだ碧眼を持ち、幼げな顔つきを弛緩させ、起きていてもどこか別のところを見ているかのように目が緩んだ少年である。『イレーネ浄法院』に通うただの生徒だ。

「気持よさそうだったな、レヴァン」
「……おはようございます、エルゼ教官」

視界を照らす陽光の眩しさに目を細めながら、レヴァンは顔を上げた。すると目の前には女性が。
コンパクトに結い上げられた茶髪に、凛々しい顔立ち。身長は高いほうで、男性の中でも低くはないレヴァンに並ぶ。この学校最凶の教官と名高いお人である。
いまだ寝ぼけ眼をこすっている状態のレヴァンを見て、エルゼ教官と呼ばれた女性がニヤリととても平和には見えない笑みを浮かべながら言った。

「よくもまあ、わたしの目の前で熟睡してくれるものだ」
「あ、はは……恐縮です……」

今は講義の時間。指定の制服などはないため、各自で普段着を着て講義を受けていた。レヴァンの周りでは板書をとっているのか、カリカリとペンを走らせる音が聞こえる。
皆、面白いほどに見て見ぬふり。それもそうだろう。下手に関わったら鬼教官の餌食なのだから……。

「……まあいい。次寝たら、見せしめに正門にはりつけにするだけだ。わかったな？」
「わ、わかりました……」

そう言って、教官は教室の前へと戻り、講義を再開する。それを見て、レヴァンはひとまずほっとため息。
そして、横を向く。そこで笑いを必死にこらえている少女を見て、不満の言葉を口にする。

「……なんで起こしてくれないんだよ、フロル？」
「ふふ。だって、つついても起きないんだもん」

そう言って答えたのは、美しいスカーレットの髪を持つ少女だ。
年はレヴァンと同じ十七歳。腰まである髪をゴムで簡単に束ねている。華奢な四肢に整った顔立ち。ほっそりとした顎を手にのせ、フロルは丁寧に板書を写していた。

「楽しそうだな？　レヴァン？」
「は、はい！　教官の講義はためになります！」

再び叱責されたレヴァンの隣からくすくす、と。

「……笑うなよ」
「ふふっ」

止まらないらしく、堪えてはいるものの、笑い続ける。そんな様子にレヴァンは憮然とした顔になるが、それがまた少女の笑いを誘う。
はあ、とため息をつきながら、レヴァンは笑い続ける少女から意識を逸らし、青い空を窓から見上げた。
明るく、見ているだけですっきりするような青空。そんな光景を見て、レヴァンの心はずっしりと重くなる。さんさんと輝く太陽は昼寝をするには最高であろうが、身体を動かすとなると話は別だ。
今日も大変そうだ、とレヴァンは思わずため息をついた。

「よし、今日の講義は以上だ。各々準備をして来い。出来次第、第二修練場に集合しろ。いいな？」

はい、とクラスメイト皆が声を揃える。それに満足したようにうなずいた後、教官は教室を出て行った。その瞬間、教室の空気が一気に弛緩する。そして直後、どんよりと皆のテンションが下がった。

その理由はこの学校では主に一つしかない。

「第二修練場だって～」

そうフロルが言ったとき、レヴァンの心は深海の底に沈んでいく思いだった。

「体術……か。あんま動きたくないんだけどな」

「だね」

この学校には数多くの修練場が用意されている。その中でも、第二は体術を専門に修練を重ねるところである。

「んじゃ……行くか」

「ていっても、行くのは別々の更衣室だけどね」

のぞかないでよ、と念を押してくるフロルに、呆れたように「するかアホ」と言い返してから、レヴァンは修練用の練習着に着替えるために教室を出た。

「ぎゃあああああああああああああああああああ！！」

学校には似つかわしくない悲鳴。

レヴァンは周りを一応確認するが、紛れもなくそこは学校の第二修練場である。しかし、そこに繰り広げられた光景はまさに地獄絵図であった。

「もっと早く走れ！」
「ボケボケするな！」
「ほら、最後のやつは縛り上げるぞ！」

件のエルゼ教官がそう声を張り上げながら、へばっている生徒を自慢のトンファーで強く、本当に強く、叩いて追いやる。

「ぎゃあああああああああああああああああ！！」

ついでにこの声は叩かれた生徒の声である。

「ほら、おまえもだ、レヴァン」

そう言って教官はトンファーを振り上げる。それを感じて、あわててレヴァンは叫んだ。

「ってちょっ……仕方ないじゃないですか！」
「何がだ？」

そんなふうにとぼける教官にもの申すために、レヴァンは顔だけをすぐ後ろに向ける。

「こんなふうに走れば、遅くなるに決まってるでしょう！」

後ろで紐引かれているタイヤに堂々と座っている教官に向けて言った。

「ほう？　それは、私が重いということか？」
「どんなに軽い人でも、人一人は充分重いですよ！」

そんな教官付きタイヤを引いて走っているのは、レヴァンである。いわゆるタイヤ引きをやらされているのだ。

「だが、ただランニングしている奴らがバテてるっていうのに、貴様はまだ余裕そうに見えるが？」

教官が片眉を上げて疑問を口にする。たしかにレヴァンの息もまだそんなに上がっておらず、教官に言い返せるほど。そんなに疲れているようには見えない。しかし、

「声を出していないと、今にも倒れそうなんですよ！」

その声に込められた悲痛さは本物だった。

「まあ、そういう事にしておこう」

「解放はしてくれないのっ！？」

「ほらさっさと行け。あいつに追いつけ」

そう言って、教官はレヴァンの前を走る男子を示す。瞬間、その男子の顔が恐怖に染まった。それはそうだ。今までレヴァンに追いつかれた者が悲鳴を上げているのだから……。

かわいそうだな、とレヴァンは思う。ぎりぎり追いつかないぐらいで走れば、教官の目もごまかせるはず———

「追いつかないとおまえがトンファーの餌だ」

「……ごめん、そこの君」

仲間を見捨てるときの、悲しい顔をしながらレヴァンは足に加速をかけた。前の男子がひっ、とおののき加速するが、むなしくも、

「ぎゃあああああああああああああ！！」

華々しく散った。

本日三人目である少年を吹っ飛ばしたあと、教官は何故かさわやかな顔をしている。そんな鬼にレヴァンは最初から気になっていたことがあった。何気に速度を緩めながら、「教官、聞いてもいいですか？」と声をかける。

「何だ？」

「体重どれくらいで……ぐはっ」

最後まで言う前に、背中に当たる強い衝撃。おそらく拳だろう。

「デリカシーの無いやつは嫌われるぞ」

「そりゃ、困りますけど……じゃあいったい何なんですか、この重さは？」

今のところ問題なく？タイヤ引きをしているが、明らかにいつもよりおかしい。別に、先の方でスカーレットの髪の少女がこちらをニヤニヤ気味に笑いながら走っていることにイラッときたわけでは決してない。後ろで目をギラギラさせている狩人――――ではなく教官に、レヴァンは尋ねた。

「……なんでタイヤが通った後の土がえぐれてるんですかっ？」

すると教官は、「うん？」と今気づいたみたいな顔をする。その後、自分の下にあるタイヤを見て、言う。なんでもないことのように、

「それは、タイヤにおもり用の特殊合金が仕込まれているからに決まってるだろう」
「おかしいっ！？」

おもり用の特殊合金って言えば、握りこぶし大で数十キロの品物である。そんなモノがあったら腰が砕ける。
そんなことを心のなかで叫び続けるレヴァンであるが、後ろで光るトンファーを見ては、走らざるをえない。

「ほら行け。次だ」

そんな神からの啓示をきいて馬は走る。もはや半泣きで走り続けた。

結局今日は十人餌食になった。

「よし、準備運動は終わりだ。さっさと二人組になれ」

すでに疲労が濃い顔を悲しみに染め、生徒たちはパートナーを探す。訓練が早く終わると教官が指導に来てしまうので、なるべく実力が拮抗した者がパートナーとしてはベストである。
しかし、レヴァンは動かない。なぜなら、動いたとしても———

「レヴァン。私と組め」

教官からお声がかかるのだ。レヴァンはやっぱりか、と息を吐いて、声の方へと向かった。教官は生徒たちに組み手をするように指

示した後、レヴァンの方を向いた。

「元気そうだな」

「皮肉ですか？」

そんな会話を交わしてから、どちらともなく互いに構えをとる。どちらも基本形で、喉と水月を拳で守る型だ。

お互いに目をそらさず、同時に視野全体で相手の動きの流れを読み取っていく。空気が突如として、緊迫したものになっていた。

「……ふ」

ふいにそんな音を聞いたかとレヴァンが思うと、教官はすでにレヴァンとの距離を半分ほどつめていた。身のひねり方からいって、右拳が来るだろう。問題はストレートかジャブか。

そんなことを考えているうちに距離は全て埋まっていた。

来た。やはり右。渾身のストレートらしい。それがうなりを上げてレヴァンの顔に迫る。

レヴァンはそれに集中し、紙一重で避けようと身体を横に反らして――――

「んぎゃっ！？」

そのまま殴られた。スクリュー回転できれいな放物線を描いて吹っ飛び、修練場の端に設置してある金網にガチャーンとぶつかる。そのままレヴァンの身体から力が抜けてしまった。

うわあ、とか痛そ～、とか様々な同情の念が組み手をしている生徒たちから生み出されるが、教官が一睨みするとたちまち消えてしまう。まったく友達思いの友人たちである。

「おい寝るな。さっさと起きろ」

吹っ飛んだレヴァンに近づいていきながら、そう簡潔に教官はラウンド2のゴングを鳴らす。レヴァンはうう、と呻きながら、倒れたままだ。どうみても起き上がれそうにない。

そんなレヴァンをしばらく観察してから、教官は女神のような微笑を浮かべた。そして、

「早く起きろ」

「ぶべっ！？」

レヴァンを蹴り上げるという悪魔のような行動をした。

「ひどいっ！？　蹴り上げるなんてあんまりだ！？」

思わずレヴァンは怒鳴ってしまう。それに教官はしたり顔になって、

「ほら起き上がれるじゃないか。サボるな馬鹿者」

そう言って拳を放つ。顔面に向かって飛んできたそれをレヴァンは、うあっと驚きながらも上体を反らし、避けてしまう。

わずかに避け損ねた耳の端が、ヂッと音を立てる。拳は外れても、巻き起こされた風が頬を激しく撫でた。それだけ鋭い拳ということだ。先程のものより強力だろう。

「これはくらったら死ぬ……」

「よし。続けるぞ」

「……え？」

――もしかして教官のスイッチ入れちゃったりした？
そんなことを思うと同時、教官はガシッとレヴァンの襟首をつかんだ。
「今日も貴様には愛情をかけてやろう」
「え、う、うそ？　や、やめてええええええええええ！」
レヴァンがイヤイヤと体を動かすも、ずるずると引きずられていってしまう。砂が背中を削るのを感じながら、レヴァンは顔を前に向ける。すると見送っていたのは、皆の憐憫たっぷりの視線。レヴァンは泣きたくなった。
実際、少し泣いた。

皆に見送られ、吹っ飛ばされる前より奥まった場所へと移動した。フェンスや倉庫の影になるそこは、組み手をしている生徒たちからは見えない場所で、よく学校の職員たちが紫煙をくゆらせていたりする。
その場所で立ち止まると、教官はレヴァンに無言で構えを促した。レヴァンがおとなしく構えると、教官もまた若干腰を落とす。
これといった合図もなく、”本当の”組み手は始まった。
レヴァンは嫌がりながらも反応せざるをえない。教官が放つ右腕の初撃を自らの左腕で擦りながら受け流し、その反対から攻めに転じ、拳を突き出す。それは教官に躱されてしまう。
相手の動きを読み、予測をしながらも、とっさに動けるように緊張感を保つ。時にはフェイクを混ぜ、相手の反応を探る。
しばらく打ち合っていただろうか。最初のうちは互角と思われた打ち合いも、だんだんと教官が押すような形になっていった。そし

てやがて、
「詰みだ」
激しく攻防していた二人の動きがピタっと止まる。教官の右手がレヴァンの喉、左手が水月に鋭く突くような形で配置してあった。
「……さすがです、ね」
「当然だ。教官だからな」
そういって、二人は離れる。それにともなって両者の間の緊張の糸も緩んだ。レヴァンは、ふうっと息を吐き出した。
教官は関節の柔軟をした後、腕時計を見る。
「もう時間だな。……レヴァン」
「はい？」
「他の者に、もう授業は終わりだと伝えておけ。次の講義に遅れるなよ」
「……はーい」
そんなだらけた声に、教官は片眉を吊り上げ、
「返事は？」
「はい！　短く一回で！」
「わかればいい」
うむっと満足そうにうなずいた後、教官は職員室へと戻ろうとする。
「と、そういえば」

そんな言葉とともに教官が思い出したように歩みを止め、半身だけこちらを振り向いた。その顔には不敵な笑みを浮かべていた。

「次は手を抜くなよ？」

それだけ言って今度こそ教官は去っていった。その背中をレヴァンはしばらくぼーっと見送ってから、ブンブンと頭を振って深呼吸。気分をすっきりさせてから、皆のもとへと戻る。

律儀にも組み手を続けていた生徒たちに授業終了の旨を伝えて、解散させた。今日の演習授業も疲れたな、とぼんやり思っていた。

「レヴァン、おつかれっ」

だからそんな声が聞こえてきたとき、苛立ちすら湧いたのも仕方ないんじゃないかと思う。視界の端からスカーレットの色。現れたのは、昔からの友人であるフロル・アイヤネンである。華奢な体からは考えられない運動能力と、優秀な成績でこの学年の代表を務める少女だ。学年と言ってもクラスが別れているわけではなく、というか、一学年が五十人ほどしかいなかったりする。

「おまえ、ずっとニヤニヤ笑ってただろ」

「ふふ、最後の方はさすがに苦笑が混じったけどね」

「それは言うなよ。悲しくなる……」

そう言って二人は並んで男女更衣室への道のりを歩き出す。なにかと仲は良かったりする。

「結局、教官と組み手？」

「……さすがにわかってらっしゃるね～フロルさん。なんでニヤニ

ヤしてるのかな～？」
「別に笑ってないよ～」
説得力のない言葉を聞きながら、レヴァンは今からの予定に意識を向けた。となりの少女に確認するように尋ねる。
「今から講義？」
「うん。そうだよ」
「……やだな」
「勉強しなよ～」
「うるさいな。俺は優等生じゃないんだよ」
「……」
流れで出た言葉であったが、フロルは顔を悲しそうにして、口をつぐむ。そんな、レヴァンの言うところの優等生である少女を見て、レヴァンはしまった、みたいな顔をした。少女は、優等生という言葉を快く思っていないのだ。
「……ごめん。言い過ぎたよ」
レヴァンは謝った。それにフロルはにこっと笑って、
「いいよ。でも、頑張ろうね？」
「……わかった」
仕方ないな、と言った感じでうなずくレヴァン。それにまたフロルは笑顔になった。
「じゃ、またあとでね」

いつのまにか到着していた女子更衣室の中へ入っていく。結局頑張るって言ってしまったなとか思いつつ、見送ったあと、レヴァンも、

「さっさと汗流すか」

と、男子更衣室に入った。

【1】－1　出会いと日常（後書き）

話がまだ続きであっても、区切りが入れやすい場所で話を切る場合もあります。というよりもそのほうが多いかもしれません。そのあたりはご容赦を。

【1】―2　儀式

「やべえええええ！？」

厳しい修練のせいか、シャワーが心地よく感じてしまい、時間を忘れていた。とんだ不覚。レヴァンは廊下での猛ダッシュそのままで教室に駆け込んだ。二分前、セーフ。

と、同時に。

「何やってる。もう始めるぞ」

すぐ後ろに教官が入室してきていた。まだ二分前なのにと思いながらも、レヴァンはおとなしく席に着く。そこから、本日二度目の講義が始まった。

「全員いるな？　よし。では、アイヤネン」

「はい」

「前回の授業内容を前に来て描け。復習だ」

そんな指示に、わかりました、と頷いて、フロルは席を立つ。そのままスタスタと前に行き、チョークを持って黒板に線を引き始めた。

「……」

いや、その表現は適切じゃない。真剣な目を黒板に向けながら、フロルは円の中に直線を織りまぜるような模様を描いていた。記号、図形など、そのどれもを用いながらも、出来上がっていくのはその

どれでもない。

魔法陣。

巨大凶暴化した獣に対抗するために用いられる技術である魔法。それを発動するために必要不可欠なものである。

ここ、イレーネ浄法院はこの都市唯一の魔法を教える学校であり、訓練施設である。都市を守る「浄魔士」になるための人材を育成し、輩出するために設立された。授業は主に講義と演習の二つで、講義では魔法などについての知識を学び、演習でそれを生かした訓練が行われるというスタイルをとっている。

しかし、入学資格が魔力親和性のため、入学者は少ない。近々、入学資格を緩和するという話も出てきているが、そのあたりはまだ噂の域を出ない。

と、そこでフロルが最後の直線を引き始める。それが端から端までゆっくりと引かれていき、魔法陣は完成する。この世の理を曲げる、力ある形が描かれ――――

しかし、何も起こらない。

「よし、さすがだな。席に戻れ」

フロルは教官の言葉に従う。それを確認した後、教官は口を開いた。

「前回この、火の出現魔法陣を教えた。が、すでに知っているように、人間は魔力を持たないために、このままでは魔法は発動しない。魔力を得るためにはどうすればいいか。レヴァン、わかるな？」

「……ふぇ？」

「魔力を持つ魔物と契約する。それが唯一。そうして契約が成功した魔物のことを『招魔』と呼ぶ。レヴァン、そのあくびの中に握り

こぶしを突っ込んでみるか？」
「ひいぃ。すいません！」
　呑気にあくびをしたところを注意され、ビビリ上がるレヴァン。その姿を見て教官は鼻をならし、
「……まあいい。話を続ける」
　教官は一度咳払いをした。
「先程言った招魔は、体内に一定量の魔力を宿している。魔力量は個体によって違いがあるが、これに魔力を借りて人間は魔法を構築することができるということだ。そこまでは理解しているな？」
　そう言って、教官はおもむろに指を伸ばすと宙で動かし始めた。その指先はほのかな蒼光に包まれ、その軌跡を残していっている。その軌跡がかたどるのは、先程フロルが描いたものと同じもの。教官が最後の直線を描き終えると同時、ボッと音を立てて現れるのは、宙に浮かぶ炎の球体。
　教官の、こういう感じだ、という言葉と全員を見渡すような視線に、生徒一同コクコクと頷いた。
「貴様らも、いつか招魔を呼ばなくてはいけない」
　……何が言いたいんだろう、とつぶやく声があちらこちらからあがる。それに、淡々とした顔で、教官は告げた。
「これから、『招魔の儀』を行う。各々心構えをしておくように」
「「「…？　って、はあ！？」」」
「それだけ元気なら問題ない」

まるで、明日は遠足だ、みたいに教官は気軽に言った。実際は、『招魔の儀』は浄魔士を志す者にとって生涯の一大イベントであるというのに、だ。

「というわけだ。それでは、第一修練場に集まれ。そこで儀式の用意をしている」

そうして、質問など受け付けないまま、教官はささっと出ていってしまった。あまりの早業にとり残された生徒たちは当然、

「今から？　ちょっすごい不安なんだけど……」

「低いランクの魔物が出たらどうしよ～」

と、まあ似たようなことを言い合ったりして騒いでしまう。声が大きいのも不安からくるのだろう。しかし、さすが鬼教官に育てられた生徒である。落ち着いている者もいた。

「レヴァンくん、不安じゃないのっ？」

そう、ただひとり落ち着いているのはレヴァン。フロルでさえ少し緊張したような顔をしているのにである。

レヴァンは話しかけてきた近くの女子の方へと意識を向けた。亜麻色のショートヘアをゴムで束ねて、内側の元気というものが雰囲気にまで出てしまっている活発そうな少女だ。

ぱちっとした作りをしている目を向けてくる少女に、レヴァンは少し考えるようにして口を開いた。

「んー、不安というか……ほら、俺劣等生だからさ。どうせ失敗するし……もう開き直っちゃってるんだよ」

「えーそうなんだ？　でも、みんなに大人気だよね、レヴァンくんって」

否定もしてもらえないことに一抹の寂しさを感じながらも、えーそうかぁ、と言って、

「そりゃフロルのおかげだろ？」

と、レヴァンは答える。すると、その女子はとんでもないといった顔をして、

「それだけじゃないよー。男子にも女子にも人気あるんだからっ」

「えー男子に人気は嫌だなあ」

レヴァンが言うと、その女子はニヤリと笑った。

「わたしはいいと思うけどねっ」

「ははは～……マジで？」

そんな冗談に二人して笑いながら、

「じゃあ、私も開き直っちゃおっと。それじゃまた修練場でねっ」

「ああ、また」

そうして修練場に向かった女子の背中を見送る。あれだけ明るい性格なら男子どもが騒ぐ理由もわかるなぁ、とレヴァンは呑気に思う。

友達でも見つけたのか、少女は小走りで駆けていった。それを見終わった後、レヴァンは振り返った。

「で、おまえはなんでそんな睨んでんの？」

そう、隣の席の少女に尋ねる。少女は目線をわずかにそらしながら、

「……睨んでないよ」

「でも怒ってるじゃん。そうやって少し無口になるところ、昔から変わんないぞ？」

「怒ってないもん」

「いやおまえ、それは無理が……」

「怒ってないもん」

「……まあいいけどさ」

漏れてしまう苦笑をため息で隠しながら、レヴァンはよいしょっと立ち上がった。そしてフロルの方を向くと、

「姫様。ご一緒しませんか？」

芝居がかった動きで少女に手を差し出す。

「……そんなんじゃわたしの機嫌は直んないんだから」

フロルはそんなことを言いつつも、レヴァンの手を取って立ち上がる。やっぱ怒ってたんじゃんという言葉はこらえておいた。

「んじゃ、とりあえず行くか」

「そだね」

そう言って二人はまるでいつもの訓練に行くような足取りで、儀式の会場へと向かったのだった。

『招魔の儀』

それは十年ほど前、この都市の最高権力者――「監視者（モニター）」である、イレーネ・セイレンが考案したものである。元は神社での祭事に用いられていた「降魔の式」という名の召喚の見せ物であったが、一時的な顕現しか出来ない「降魔の式」を改良、汎用化し、契約者と招魔の間に絆のような不可視のバイパスをつないだ方法である。これにより招魔は契約者へと魔力を供給し、その身を守ったりするようになった。

それだけ重要かつ慎重にすべき儀式であるのだが……。

なぜか連絡を聞いて十分。レヴァンたちは、修練場へと足を運んでいた。

第一修練場。ここは魔法を訓練するために用意された場所である。様々な環境での魔術戦の訓練を想定して、やけに広く、荒野や草原、湖などいろんなものがある。そのためあまり修練場には見えないという不思議な場所でもある。

「全員、一列に並べ。いいか、あまり騒がしくするなよ？」

そんな教官の言葉に生徒たちは一列に並ぶ。その行列の先にあるものは、地面に描かれた複雑怪奇な魔法陣。あまりに難しくてレヴァンにはどんなものなのかさえわからない。並んでいるのは五十人ほどだろうか、全五学年中のうちレヴァンたちの所属である第二学年しかいないようだった。

「ラナ・オールウィン、Bランク」

レヴァンが観察するように周りを見回しているうちに、すでに儀式は始まっていた。声の方、つまり教官がいる方へと目を向けると、そこにはラナと呼ばれた一人の少女がフェレットのような生き物を抱えて、かわいー、と言っていた。

「ってあれ？　あの子……」

レヴァンが目を凝らしてよくみると、それは先程話しかけてきた少女であった。どうやらその子は心配するほど悪い結果ではなかったらしい。レヴァンはそのことに安堵した。

「相変わらず、お人好しなんだから」

「……サラリと人の心を読まないでくれませんか？」

後ろに並んでいるフロルに、レヴァンはもはや恐れを感じる。そんなことを知ってか知らずか、スカーレットの少女は笑顔だった。笑顔のまま、

「どうする？」

とレヴァンに尋ねた。

「……まあ、なるようになれ～って感じだな」

「いいのかな～」

仕方ないだろ、と言いつつ、レヴァンは前を向いた。

そこには次々と生涯のパートナーとなる招魔を得ていく生徒たちがいる。そして列の先頭。今から儀式を行うのだろう、背中まである艶やかな黒髪を持つ少女が緊張の面持ちで立っていた。

「よし、次」

教官が言った。名前を聞く様子はない。全員の名前を覚えているためであろう。レヴァンたちの想像を裏切って、かなり真面目なお人であった。

「……は、はい」

こちらの少女は怯えているようで、声が震えていた。しかし、震えながらも勇気を振り絞って、やがて決意したように魔法陣の中へと踏み込んでいく。

と、その瞬間、

【……契約の資格を持つ者よ】

地面が揺れて、底から響いてくるような声が魔法陣から聞こえてくる。声自体は女性の声のようにも聞こえ、さほど恐ろしくない。しかし、聞いてしまえば動けなくなるような到底人間には出すことの出来ない、力ある声であった。

【……力を、欲するなら、祈りを、捧げよ。心を、奏でよ】

その言葉とともに魔法陣が白く、強く輝く。その中で、黒髪の少女は以前授業で習ったように膝をついて、聖女のように祈りを捧げた。すると魔法陣はさらにその輝きを増し、同時に声が再び聞こえてくる。

【……祈りは、聞き届けられた。力を貸し、与えよう】

声が言い終わると、魔法陣の輝きが少女の前方へと集中し、直視が出来ないほどに目を灼くような光となった。やがて光が収まるとそこにいたのは――

一匹の黒い子犬。

「アミナ・スピノラ、Cランク」

そう言い渡す教官の声に、わずかにがっかりしたように表情を曇らせる少女。それも仕方が無いだろう。ランクは、Sを頂点としてA、B、Cと続き、少女は最低ランクであると言われたのだ。ランクは見た目の種族と大きさを元に決められる。いくら成長で能力は伸ばせるからと言って、明るい顔はできないだろう。

しかし、それも一時のこと。可愛らしい子犬の姿を見て、少女は優しげににっこりと笑った後その場を後にした。

「へえ……子犬はCランクなのか～」

着眼点はそこか、と突っ込みたくなるようなセリフを吐くのはレヴァンである。彼が少女の表情なんて逐一見るわけないのであった。そんな様子の少年にため息をつくのは幼なじみの少女。スカーレットの髪を指先でいじりながら、苦笑を滲ませている。

「よし、次」

そんな声で次から次へと儀式は行われていく。

B、B、A、C、C、B、C……

Sランクは一回も出ない。というか、でたらおかしい。Sランクは現役の浄魔士であっても未だ四人しか存在しないためである。よって、万が一Sランク相当の招魔が来れば、成績優秀者として飛び級ぐらいはさせられるだろう。

そんな職員たちの期待とは裏腹に、生徒たちはそわそわとしていた。

「うわ、不安だよ。ど、どうしよう……も、もし……」

――招魔が現れなかったら。

そんな不安を持つものがいるようで、場が静寂になることはなかった。いつもなら友人とのたわいない雑談で騒がしくなるところを、今回は皆の顔には心配の色。教官も分かっているのか、大きくなってきた声を収めるつもりはないらしい。

「よし、次」

また一人と儀式が済んだ。Aランクの招魔が出たようで、他の生徒達にスゲーなおまえ、と言われていた。

「へえーAランクかぁ……」

といっても、レヴァンは全く興味がないようであったが。と、そのとき、

「次のやつは来いと言っているだろうが」

そんなお優しい言葉とともに教官がレヴァンの襟首を力強くつかみ、引きずる。そう、いつのまにかレヴァンの番が回ってきていたのだった。

「レヴァン、魔法陣に入れ」

「わかりましたよ……」

首をさすりながら、レヴァンは魔法陣へと目を向ける。地面に描かれたそれはただの模様に見え、とても光り輝いたり魔物が現れたりするようには見えなかった。
ふうっとレヴァンは軽く深呼吸をすると、気を引き締める。周りの生徒も結果が気になるのか、何故か少し静かになっている。
それを視界の端で確認しながら、レヴァンはゆっくりと足を魔法陣の中に踏み入れた。
すると魔法陣は白く、そして強く――

【……】

光らなかった。

いや、確かに反応はした。したのだが……それが声になる前に、ただの模様に戻ってしまったのだ。
そんな結果にレヴァンは、はあっと盛大に溜息をつくと、魔法陣を後にした。

「ほう、招魔の儀すらこなせないか。貴様は本当に魔法関係は劣等生だな」
「教官？　慰めもしないで、ダメ出しですか？　普通に傷つくんですけど……」

そうやって落ち込んだように下を向いたレヴァンを、教官は口の端で笑って見て、

「しかし予想はしていたんだろう？」
「……」
「前代未聞の召喚失敗をやらかしたやつが、予想もなしでそこまで落ち着いていられるはずがないだろうが」

フッと意味ありげに笑った後、教官は特に何もなかったかのように「よし、次」と言って話を進めていた。

「ていうか、次って……」

フロルである。少女はスカーレットの髪をたなびかせて、わずかに緊張した様子で前へと進む。

「アイヤネンさんって学年主席でしょ？　もしかしたらSランク出すかもしれないって職員の先生たちの間では噂なんだって」

そう、近くにいた女子生徒たちが話している。

招魔の強さに何が関係しているかは、未だにわかっていない。しかし、フロルに期待が向けられるのは仕方ないことだった。

他にも、あちらこちらから似たような話が聞こえてきていた。今までのテストで満点以外取ったことないんだよな、とか、ほんと完璧な人だよね～とか。

それを聞いて、

「あちゃー、緊張してるな……。かわいそうなやつ」

そうレヴァンはつぶやいた。見ている先はフロルの横顔だ。そこにあるのは魔法陣を見つめている目の真剣さ。しかし、それは他人が見ていたらの話だった。

「……うわぁ。今の状態でからかい過ぎたら、絶対ぶっ飛ばされるな……」

長い付き合いのレヴァンが見るとそんなことを思ってしまうほど、

プレッシャーを背負っている顔であった。そういうときのフロルはなにか失敗をやらかしてしまう事が多いのだが……この儀式では特にやることはないので心配はいらないだろう。
レヴァンがそうこう考えているうちに、フロルは魔法陣へと踏み込もうとしていた。一歩手前で立ち止まり、右足をゆっくりと上げる。
それにともなって辺りは静寂が支配した。
優等生の招魔が気になるのか、近くで雑談をしていた契約済みの生徒たちも集まってきていた。そんな多くの視線に、一瞬身震いしてからフロルは足を踏み出す。生徒たちの関心がぐわっと高まった。

しかし、魔法陣は光らなかった。

「……え？」

そう言ったのは誰か。それはわからないが、この場にいる全員の心の声と解釈して問題はないだろう。それほどまでに全員が事実を認識出来ていなかった。そのことは教官であっても例外ではない。

「アイヤネン、もう一度魔法陣に入りなおせ」

めずらしく焦ったような声に、フロルは言うとおりにするが……。

【……】

やはり結果は同じであった。

「馬鹿な……」

信じられないというような声音で教官はつぶやく。そんな様子を見ながら、フロルは魔法陣を後にした。そのままスタスタとレヴァンの方へと来る。

「おつかれ～」
「はぁ。優等生もここまでかぁ……」
「別に、筆記試験は一位のままじゃん」

そんな落ち込んだ様子もなく、二人はワイワイと話す。が、周りの生徒達は気を遣っているのか、話しかけてはこなかった。ただ遠巻きにこそこそと話しているだけで……。

「……なんか、感じ悪いね」

とフロルが言うほどの印象だった。

「……よし、次」

さすがというべきか、教官は気を取りなおし、次々と儀式を進めていく。
それからの結果は全員が良かった。次から次へとBランク以上が誕生し、後ろで控えていた研究職員たちも、今年は優秀だ、と小声で話し合っている。

「しかし、アイヤネンが失敗とは……」
「どういう事だろうか……？」

しかし、嬉しいことの中でも、いや、だからこそ、その場にいる全員の疑問を拭うことは出来ないまま、呆気無く儀式は終了し、各

々解散となったのだった。

【1】ー3　寡黙な少女

「……はぁ」
「どうしたの？　今日は体術ないよ？」

『招魔の儀』の翌日。早朝から全員で自主練したり講義を受けたりして身体に疲労が蓄積され始めた頃、レヴァンは今の気分と対照的なきれいな青空を見ていた。真上に登った太陽が今日も今日で元気いっぱいである。

「ねえ、ほんとにだいじょぶ？」

思わず漏れたため息に心配してくるフロル。そんな少女に弱々しい笑みを浮かべながら、レヴァンは正直に話した。

「昨日、寮に帰るときにさ……教官にあったんだよ……」
「ありゃりゃ」
「それでな、理由を聞かれたんだ」
「理由……って、何の？」

本気でわかんないらしいフロルに内心ため息をつきながらも、続ける。

「『レヴァン、すでに契約をしてるのか？』ってさ」
「……あぁね」

ようやく納得したらしい。話したことによりさらに思い出してし

まい、レヴァンは再び、はあっとため息をつく。
すでに契約をしているのか？　その質問は『招魔の儀』失敗の理由を聞いていることに他ならない。
「で、なんて答えたの？」
「答えてない」
「え？」
そう、レヴァンは答えなかった。なぜなら、答える前に「いや、アイヤネンはまだしも、貴様にそんな才能があるとは思えん」と断言されてしまったからである。
「うわぁ……それはちょっと悲しいね……」
「はは、まあな」
お互いに乾いた笑い声を発し続けるが、しばらくしてどちらからともなく、はあ、とため息をついた。何に遠慮しているのか知らないが、クラスメイトたちはレヴァンたちに話しかけてこなくなり、以前に比べて周りが静かになっていた。
「ったく、コソコソと……」
「何話してるんだろね？　混ぜてもらおっかな」
「いや、無理だと思うぞ？」
そんなことを言い合いながら、ふと周りを見渡す。すると、外される視線が一、二……三……大体二十三か。
「うん。やっぱ無理っぽい」
「むぅ……。なんでかな……」

そんなことを言うフロルに微笑みながらも、腫れ物に触るかのような周りの態度や視線にレヴァンはわずかな苛立ちを感じていた。
そんなとき、がらがらーと音を立てて教室の扉が開く。

「席に着け。講義の時間だ」

いつものように二分前に来た教官を見て、生徒がそそくさと自分の席へと戻って行く。教官も教壇へと立ち、唐突に黒板に何かを書き始める。そこにはレヴァンが見てもわからないような魔法陣が描かれていく。

「では、このすでに教えた火の出現魔法陣だが……」

あれ？　習った？　そんな顔をしているレヴァンに気づいたのかいないのか、

「今日中にこれに手を加えて、応用、発動してみろ。手本は見せてやる」

教官が本日の目標が立てる。と、この時点で補習者が誕生した。

「「ありゃ」」

言わずもがな、レヴァンとフロルである。魔力を借りることの出来ない二人にとって、課題は不可能なものだった。

「では、やってみせる。しっかり見ておけよ？」

そう言って教官は指を伸ばす。すると、その先がほのかな蒼色に発光し、宙に線を引いていく。教官は素早く火の出現魔法陣を描い

てしまう。
が、まだ終わらない。
それを基礎として、くの字を左右対称となるように重ねて組み込んでいく。すると、
「まあ、こんな感じだ」
教官がそう言うと同時、生み出された炎が形を変え、小振りなナイフのような形へと変わった。
教官がそれを握って軽く斬り払う動作をすると、ブワンッブワン、とすごい音がなる。
「えーっと……あれって確か……」
ぼんやり覚えている知識を動かそうとレヴァンが考えようとすると、フロルがすかさず言った。
「変形陣『剣（つるぎ）』を組み合わせた炎剣だよ。わざとくの字を小さくしてナイフにしてるみたい」
「あ、それそれ。よく覚えてるな」
「ふふ。レヴァンも勉強しなきゃ～」
そんな感じでいつもとそう変わらない会話をしている二人であったが、周りはそういうわけにはいかなかった。なぜなら、
「あれを今日中にしなくちゃなんねえの？」
というわけだからである。不安げな生徒たちを見て、教官は魔力の供給を絶ってナイフを消すと、

「変形陣の組み込みに失敗すると、魔法陣が爆発するから気を付けろよ？」

とサラッと言ったが、それは生徒たちの顔色を悪くするだけだった。その様子にうむ、と満足気になり、では始める、という言葉とともに教官は今日も教鞭をとる。

「では、今日の講義は以上だ。昼食を摂って各自第一修練場に集合。実習の後、課題をこなした者から解散だ」

ではな、と言って教官はいつものようにささっと出て行く。これから実習までの間、教官が何をしているのか気になってしまうのはレヴァンだけだろうか。

「ふう……やっと飯だ……腹減った……」

息絶え絶えでなにか深刻そうだが、なんてことはない。腹が減っては戦はできぬという言葉があるように、昔から食事というのは大切なのである。

「まあ……ほんとに戦になるかも知んねえけど……」

頭の中に鬼教官を想像し、はあっとため息。最近ため息が増えてきているように感じるレヴァンであった。

「……ふぅん。魔物の中にも特別な強大種『精獣』が存在する。『聖獣』とも言い、一属性中の魔物の中で最も大きな力を持つとされ

ている、かあ……」
「ってちゃんと授業のノートまとめてるし。すごいなぁ……」
「なに言ってるの。ちゃんと聞いてないの、レヴァンくらいだよ？」
「え、うそ？」
「ほんと」

そう言ってふふっと微笑むのはフロル。確かに彼女の言うように周りは前の講義の内容を必死でまとめているようだった。

「うわ、ほんとだ……」

しかし、自分はやろうとしない。そこまでのやる気はレヴァンにはなかった。そんなレヴァンをフロルは仕方ないなぁみたいな目で見て言った。

「せめて実習ではいい成績とってよ？」
「なんだよせめてって」

わずかに憮然とした顔になるが、レヴァンはすぐに元の表情に戻った。あまりの空腹のためだった。

「……もぅ。仕方ないんだから」

そう言って、ででんっと取り出すのはまるごと一袋の煮干。

「さあ、たんと食べてね」
「食えるかっ！？」

つまんない、とかふざけたことをぼそっと言って、フロルはすごすごと煮干をしまう。いや、そこまで気落ちしなくてもと思うとこ

ろなのであるが、まさかこのためだけにあれだけの煮干を持ってきたのだろうか？
レヴァンが空恐ろしく感じていると、
「……煮干、欲しいかも」
そんな声が聞こえてきた。
「「……？」」
レヴァンとフロルはしばらくお互いを見る。そのどちらもが喋っていないことを確認して、レヴァンは声が聞こえてきた方向、つまり自分の後ろを振り返った。そこには、一人の少女が。平均よりやや小柄な体格で、背中までありそうな艶やかな黒髪を複雑に結っている。小さく整った顔立ちが清楚なイメージを持たせるような少女だった。
その少女はほのかに笑ったかと思うとこちらへ歩み寄ってきて「……お昼ごはん、一緒に食べていい？」と聞いてきた。
特に断る理由もなく、そして少しでも賑やかになることを望んだレヴァンは二つ返事で承諾する。するとその少女は近くのイスと机を動かした。と、ここでレヴァンは思い当たった。
「あ、黒い子犬を出してたよね？」
「……アミナ・スピノラ、よろしく」
「そっか、こっちこそよろしく」
「よ、よろしく」
レヴァンとフロルは、突然のアミナの登場に驚いたようであったが、すぐに馴染む。二人とも基本来る者は拒まない主義であった。と、いうよりも、

「てか、俺達と話してていいのか？　周りの奴ら、遠慮してるみたいだけど」

そうである。先日の失敗のせいで、今日まで他の生徒と話すことが多くなかった。そのためしばらくはフロルと二人だけになってしまうと思っていたレヴァンであったのだが、

「……周りに合わせたって仕方ない。レヴァンたちと一緒のほうが楽しそうだって思った」

そうやってなんでもないことのようにアミナは言った。表情を見る限り、本当にそういう考えらしい。そんなアミナを見て、

「……そっか」

レヴァンは安堵した。

「ありがと、アミナちゃん。これからよろしくね」

フロルの方も嬉しかったのか、握手をしていた。フロルの喜びが大きすぎて、アミナが振り回されている。微笑ましい物を見るように目を細めながら、レヴァンは自分のイスに深々と座った。

「良い雰囲気であるな」

「ああ、確かに。仲良くやっていけるといいんだけど」

フロルが振り回そうとし、負けじとアミナが大きく振った結果、もはや握手に見えなくなってしまっている。

「それは問題なかろう。わが主(あるじ)は人見知りのようだが、悪い人間ではない」
「……そうだな。あまり話したことないけど、仲良くしていきたいよ」

そうして、会話は終わる。フロルがアミナの手を取って振り回しているのを見ながら、レヴァンはふうっとイスに腰掛けていた。そして、

「……ってあれ？」
――いま、誰と話してた？

今更そんなことに気づいて、レヴァンは周りを見回した。しかしいるのは、疲れて小休止している少女二人と遠巻きに見ている生徒たち。とても会話が出来る相手などいなかった。一番可能性が高いのはフロルたちのうちの誰かだが、先程の声は腹に響くような――

「む？　誰を探している？」

そう、このような重く低い声……って、

「下？」

聞こえてきたのは自分の足元。反射的にそちらを見たレヴァンの目に写ったのは、
一匹の黒い子犬。

「……疲れてんのかな？」

幻聴でも聞こえたかと思いそんなことをつぶやくレヴァンであっ

たが、

「我を見て疲れたとは、いい度胸だな小僧」

なんて、その子犬はレヴァンへと声をかけてきた。おまけに子犬のくせになんだか偉そうな喋り方で……

「……え？　なに、おまえ。しゃべれるの？」

「馬鹿にするな。人間の言葉など容易い」

「……へぇ。で、おまえ何？」

「無知な者だな」

「余計なお世話っ！？」

「では教えてやろう。我が名は――――」

「……ミグルス、態度、だめ」

どうやらミグルスというらしい黒い子犬の言葉を遮ってそれを持ち抱えたのは、いつのまにか来ていたアミナだった。

「む……我が主、名乗りの邪魔をするな」

「……態度、だめ」

「確かにおぬしからは『他人に向かって偉そうにするな』と言われてはいるが……」

「……だめ」

「いや、しかしな……」

「……だめ」

「……気をつけよう」

そんなミグルスの反応にアミナは薄い微笑を浮かべて、ミグルスを床に下ろす。

「……ごめん」

突然、アミナが謝罪の言葉を口にする。え？　なにが？　とレヴァンは思った。

「……ミグルス、わたしの招魔だから」

「そういうことか。いいよ、気にしてないし」

笑ってレヴァンが言うと、少しぼんやりとした後にアミナはほんのり頬を桜色にしてありがとう、とつぶやくように言った。

瞬間、レヴァンの喉がつまった。後ろから来る圧迫感（プレッシャー）。

「レヴァン。……アミナちゃんと”仲良い”ね？」

何故であろうか。フロルの言葉をすごく裏読みをしてしまう。まるで真綿で首を絞めるような感じであった。そんな感覚に寒気すら覚えつつ、ギギギと音を立ててレヴァンは振り向いた。

「フロル、落ち着け」

「落ち着いテるヨ？」

「……オッケー。おまえはたしかに落ち着いてる。……怖ぇけど」

「怖い？　ナにが？」

「あえて言わせてもらうなら、その自覚がないとこ、かな？」

そう言いながら、じりじりと下がっていくレヴァン。逃げ場がないかをさっと確認するが、壁が近いために、いい動きは出来ないだろう。なぜこんなことになったのかレヴァンは知らないが、今のフロルには勝てない。殺（や）られる。

「……よかった。私、人見知りだから。レヴァンとは話せる、

みたい」

危機的状況にもかかわらず、アミナの言葉になるほどそういうことかとレヴァンが納得すると、

「……そゆこと」

と、納得したような声。と同時に周りの圧迫感が消失した。どうやら勝手に完結してくれたらしい。レヴァンはふーっと息と共に気も抜けてその場に脱力してしまった。

「小僧、無事か？」

自分の心配をするのが足元でおすわりしている尊大な子犬だけというのが悲しくなって、思わず空を仰いでしまったレヴァンであった。

【1】－4　魔法と実習と幼馴染の悪戯

「へぇアミナちゃんの招魔ってしゃべれるんだ？」

そんなフロルの声の中、一同（三人と一匹）は食堂で昼食を摂っていた。食堂の利用人数は少なく閑散としているが、自主練の前になると突然混雑しだしたりする。

「でもよかったのか？　他の友達とメシ食わなくて」

レヴァンは胸にしまっておこうと思っていた質問を結局口にする。なぜ距離を置かれている自分とフロルに話しかけたのかが分からなかったからである。その質問を発したときアミナの顔に悲しみの色が入った。

「……友達って呼べる人、いなくて」

「え？　なんで」

「……話し方が、変だから。あまり話さなくなった」

そういってついには顔を伏せてしまう。レヴァンは納得した。なるほど形は違えど、自分たちとアミナは同じような状況だったのだ。

「そっか。……せっかちな奴らだな。一生懸命話してくれてんのに聞かないなんて」

レヴァンは言った。話し方ぐらいで対応を変えてしまう周りのみんなとやらに対して、少し苛立ちが入ってしまったかも知れなかった。そんな様子に気づいたのか、アミナは嬉しそうにふっと笑った

後、

「……ありがとう。その反応、初めて」

と言った。その微笑みを見て、友達としての一歩が踏み出せたかなとレヴァンは思った。自然と笑顔を返していた。

そのやりとりを見ていたフロルも心配無用と判断したのか、

「ふふ。ミグルス、おいしい？」

「うむ。この食料は我も気に入っておるのだ」

そう言って、ミグルスに餌をあげている。その手にあるのは煮干だ。最初、レヴァンに食べさせようとしたものである。

「にしてもミグルスってなんでしゃべれるの？　しゃべれる招魔って珍しいよ」

フロルは特に驚いた様子も見せずに、新たな煮干をミグルスの口元へと持って行きつつ尋ねていた。

「我は賢いのでな」

煮干を頬張る子犬はまるで信じて疑っていないかのような口ぶりで言う。それを半眼で見ながら、レヴァンが言う。

「なぁにが賢い、だよ。ただ偉そうなだけだろ」

「……ほう？　小僧、痛い目に逢いたいようだな」

そう言ってそのまま怪しい雲行きになろうとしたところで、アミナが落ち着いてとミグルスを宥めるようにして場を収めていた。フ

ロルもアミナという少女と知り合って、早くも馴染んできている様子だ。フロルが同い年の女の子と楽しそうに話している姿を見て、レヴァンも先程まで抱えていた不安を霧散させた。

「しかもなんでこの世界に顕現したままなの？　招魔って、主人が危険にさらされたときか命令があったときしか出てこないんだよね？　それ以外のときは魔界にいるって習ったよ」

続いての質問にミグルスは煮干を食べるのを一時中断した。その顔をフロルに向け、

「我は特別であるからな。確かに生まれは魔界であるが、常に主の近くに顕現（いること）ができるのだ」

と、人間であれば胸でも張っていそうな声で言う。そうしてまた煮干へととりかかる。あれだけあった煮干もいつのまにか三分の一ぐらいにまで減っていた。

レヴァンも呆れたような顔でミグルスを一瞥した後、自分のラーメンに意識を向けた。

「ところで小僧、少々聞きたいのだが」

「ん？　どうした」

再び意識をそらされたことに、疲れたようにレヴァンがミグルスに目を向けると、そこには存外真面目な（？）顔をしていた子犬がいた。ミグルスはしばらく、簡単なTシャツとカーゴパンツというレヴァンの格好をじーっと確認して、ぼそっと、

「そんな姿をしているが、おぬし、もしや――」

「……何の話？」

ミグルスがなにか言い始めたところで、アミナが興味津々と言った様子で小首をかしげて尋ねてきた。それに邪魔をされたというわけではないだろうが、

「……いや、大したことではない。忘れろ」

ミグルスは口を閉じた。

変な奴、そう思いながらレヴァンはこっちに意識を向けているアミナと雑談をし始めた。招魔が可愛くて（？）戦闘に出そうと思わない、とかから始まり、招魔との生活について話していた。

「いいなぁ」

そう言って羨ましそうな目でアミナを見ているのはフロル。招魔が顕現する瞬間って興味があるんだよね、と言いながら、定食のほぐした鮭をご飯と共に口に運んでいた。そのときだった。

レヴァンの横、誰もいない空間が波打った。

「うわっ！？」

そう驚いて、飛び退くレヴァン。

「これってまさか顕現――」

『おい、貴様ら』

フロルが最後まで言い終わる前に波の中心から声が聞こえてくる。それと同時に、同じ場所からひょいとイタチのような動物が出てきた。しかし、レヴァンはイタチを気にする暇はなかった。聞こえて

きた声に脊髄の方まで覚えがあったからだ。

「教官！？」

というわけであった。

「招魔を使っての遠隔会話……。かなり難しいらしいけど……」

「……かわいい」

フロルがなにやら驚いたように言って、アミナはちょこちょことイタチを撫でていた。と、そこで教官の声が再び聞こえてくる。

『私が嫌いなことを知っているか？』

「嫌いなこと、ですか？　授業にやる気がない生徒ですか？　それとも、待たされるとかそういう事ですか？」

『よくわかってるじゃないか。まあ、そういうことだ』

「それがどうしたんです？」

レヴァンの疑問に教官の声が黙った。フロルやアミナと顔を見合わせて首をかしげていたが、やがて声が来た。

『今なら許してやる。それだけだ、ではな』

そう言って会話は終わったようだった。顕現していたイタチも霞となって消え、そこには元通りの食堂だった。

「なんだったんだ？」

そう言ってレヴァンがふと時計を見た時だった。何気なく見たはずであるのに、何故か釘づけになる。時計が指している時間は昼休

み終了を指していて……

「……え？」

レヴァンはもう一度よく見るが、針が巻き戻ることはない。夢から覚めたような気分だった。

「で、でも、まだ食堂には人が……」

そう言って周りを見渡すと、人は人でも事務員や職員しかいなくて……

深呼吸。そして――

「やべえええええええええええええええええ！？」

遅れて気づいたフロルとアミナも顔面を蒼白にし、急いで片付けだす。慌てて食器を返却した後、全速力で食堂を後にしたのだった。

「重役出勤、ご苦労だな」

「「「すみません……」」」

並んで正座させられる三人。結局、十分近く授業に遅刻していた。教官は険しい目で縮こまっている三人を見ていたが、やがてふっと笑うと、

「実習を始める。準備をしろ」

そう言って三人を正座から解放した。解放された者は助かったと口々に言う。三人は他の生徒達の横へと並んだ。

今回の授業は魔法の実習だ。数人ずつにわかれたグループ内で魔法戦を行い、自身の得意な魔法を見極めることが主な目的であるらしい。さらにいうと、招魔の使用は禁止である。

「念のため、防護魔法を個人にかける。これで魔法を受けても身体が燃えたりすることはない。安心しろ」

その言葉とともに数名の職員が生徒全員に簡易的な防護魔法をかけていく。魔法をかけられた生徒たちは一瞬淡い光に覆われた。そのあと光は右手に集束されて、最後には手の甲に盾のような印が残る。どうやらその印は魔法が効いている証拠らしい。

「分かれたな？　では始めろ」

そんな合図に生徒は一斉に魔法陣を、素早くかつ慎重に描こうとし始める。とそこで、

「教官」

レヴァンは声を上げた。ちょうど近くにいた教官がそれに答える。

「なんだレヴァン」

「なんだ、じゃないですよ。なんで俺参加することになってるんですか？　戦えませんよ？」

「ふむ、それは見返りが足りないということか？」

「え？　いや、そうじゃなくて――」

「仕方ないやつだな、貴様は」

レヴァンの言葉を遮って、教官は呆れたようなため息をつく。そして、

「全員聞け！　レヴァン・グラフェルトを気絶させたやつには成績を上増ししてやるぞ！」

と、叫んだ。

「……え？」

レヴァンが恐怖に打ち震えながら見渡すと、周りはいつのまにか全員狩人。教官の宣言が聞こえていた者たちが成績という獲物を手に入れる為にその指先を空中でぶらぶらさせていた。レヴァンは多くのギラギラした視線にゾクゾク感じて――――別に来なかった。ただ怖いだけであった。

ふと耳元で嫌な音が聞こえる。レヴァンがそこを意識すると野球のボールほどの火の球が通り過ぎるところであった。

声も上げられない。ただ、一つ分かったことがあった。狙われている。間違いなかった。

とそこで、再び火球が。魔法としての難易度は最低ランクだが、当たったら痛い。想像するまでもないことだった。それが三つ同時に別方向から肩や腹へと狙ってきていた。

「うわあああああ！？」

レヴァンは叫びながら、横に跳ぶ。直後火球どうしがぶつかる轟音。熱風がレヴァンをくまなく撫でていった。

「殺す気かっ！？」

そう叫んで振り向くと、ちっ外したか、という声が聞こえる。

「教官！　俺魔法使えないのに！」

余裕がなくなってきたのか、レヴァンは叫んだ。教官はレヴァンの様子を見て、

「だが、アイヤネンは余裕そうだぞ？」

「へ？」

教官の言葉に、レヴァンは別のグループの方へと気を向けた。するとそこにはフロルの姿。

「あの魔法陣は……火の出現。効果範囲は狭い。直前でかわして敵の懐に潜り込めば……」

そんな事をつぶやきながら、それを実行していくフロル。普段目にすることのない真面目な姿に、

「……」

レヴァンは見惚れていた……というほどでもないが目を離せなくなっていた。と、そこでまたもや怒涛の火球が迫る。反応が遅れたレヴァンは全てを避けることが出来ず、肩、肘、脇腹と合計三箇所、上半身に受けてしまう。

「くっ……！？」

無防備な状態でタックルでも受けたような衝撃に、肺に溜まっていた空気が一気に押し出される。

――なにが安心しろ、だ……。

そんなことを思いながらレヴァンはなんとか体勢を整えた。

「言い忘れていたが、レヴァンとアイヤネンには体術が認められているからな」

「それを先に言って欲しいんですけど！」

教官の遅すぎる連絡に、レヴァンは不満を大いに込めて叫んだ。

と、景気よく答えたはいいが……

「やっぱ無理だよなぁ」

と、レヴァンは走りながら思った。根拠は前方から来る火球と風刃の数の多さである。

「ま、これを乗り越えれば……」

そう言ってレヴァンはさらに加速する。高速を保ったまま攻撃をかわし、相手を一撃で沈めるためである。視野の中ですべての攻撃を把握し、その攻撃の間隙を突くために向かっていく。

だが結局、まともにぶつかってしまい、気絶してしまうレヴァンであった……。

「引き続いて捕獲の実習を行う。捕縛の魔法は覚えているな？」

そんな教官の言葉にコクコクと頷く生徒たち。このころにはレヴァンも目を覚まし、またもや参加させられていた。

「指先以外に魔力を放出するなよ？　暴発して死んでも知らんからな」

教官は注意事項を軽く話してから、生徒を実習に向かわせる。レヴァンは教官に問いかけた。

「教官。俺、魔法は使えないんですけど……どうすればいいですか？」

「確かに……ではアイヤネンは知識面で他の生徒のサポートへと回れ。レヴァンは……よし素手で行け」

「……なにがよしですか、教官。今そこで元気に走り回っている体長二メートルの大猪をですか？　正気ですか？」

もはや半泣きであった。声にまで涙が滲んでいた。そんなレヴァンに教官は、

「それ以外使えないからな」

「ひどっ！？」

結局、前線に立って囮になることが決まったレヴァンであった。

「大体、あんな猪どこから連れてきたんですか？」

「物資配達員の親父の招魔だ」

瞬間、レヴァンは「牛乳が一番だ！！　さあ飲め飲め！」と言っていたムキムキのおっちゃんを思い出した。

「え？　配達員も招魔持てるの？」
「当たり前だ。『監視者（モニター）』の許可さえあればな」

そこで話は終わりだと打ち切ってしまう教官。それはつまり実習の開始を意味していた。
開始、という声と共に生徒たちが魔法陣を展開し始める。先ほどと違うのは展開の速度か。捕縛の魔法はどの形態であれ難易度が上がってしまうため、慎重になってしまうのだ。
生徒たちの魔法陣が出来上がりつつあるのを確認してから、レヴァンはすっと前へ進み出た。大猪の気を引いて、捕縛を成功させるためである。
がふっと獣らしく目標がレヴァンの方を向く。そして、どちらも走りだした。八割ほど本気を出さないと追いつかれてしまうような速度で、大猪はレヴァンを追いかけ始めていた。

「レヴァン！　支援魔法送るから！」

そう言って他の生徒へ魔法陣を教えるフロル。生徒の手を使って、複雑な魔法陣を描いていく。魔力が使えなくとも、フロルが所有する知識は疑うまでもないものであり、同時にレヴァンが安堵するのには充分なものであった。
レヴァンは頼んだ、と大声で返事を返し、そのままチラッと後ろを見るとそこには相変わらずの大きな存在感。追突したら痛そうだな、など考えてしまうほどだ。
と、そこで魔法陣が出来上がったのか、満面の笑みでフロルがレヴァンを見る。その手元にある魔法陣はこの世の理をねじ曲げようと光り輝き、その内から生まれた新たな赤光がレヴァンを包んだ。

「よし」

自らの身を包んだ光が浸透したのを確認し、レヴァンは生徒たちの方へと走る。正直すでに限界が近く、支援魔法に頼ってハイスピードで逃げるつもり……だった。

「あれ？」

自分の動きがいっこうに改善されないのを不思議がる。どうやら肉体を活性化させる類のものではなかったらしい。仕方がないので体力を振り絞って生徒たちの方へと向かった。

ふと、気になって後ろを見た。すると、おかしなことに大猪は他の生徒達を見る素振りもなく、ただ一心不乱にレヴァンの方へと走っていた。

この時点でなにか行動を起こしたほうが良かったのかも知れない。生徒たちのすぐそばを通っていても猪は執拗にレヴァンを狙ってきていたからである。まるでレヴァンしか目に入っていないように、だ。ここでレヴァンはようやく気づいた。あの少女の、発動する瞬間見せた笑みの正体に。

「てめ、フロル！　いったいなにしやがーー」
「みんな、捕縛魔法はつどーう！」
「ちくしょう！　あとで覚えてろよおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

頭上を埋め尽くすほどの縄の嵐を見て全力で見事な捨て台詞を叫んだ後、猪とともに縄に埋もれていくレヴァンであった。

「……おい。なんでほどいてくれないんだ？」
「仕方ないじゃない。誰の魔法かわかんないんだから」

教室。すでに夕暮れに染まっている中で、縄で縛られたままのレヴァンとその傍らにうずくまるようにしてフロルがいた。
すでに参加者全員に魔法を解除してもらったあとなのだが、何故かいまだほどけない縄がレヴァンの動きを制限していた。よって仕方なく、実習終了後も二人は居残りで解除に勤しんでいるところである。といっても、縄で縛る魔法なので手でほどくしか方法はないのだが。

「はぁ。なんでわたしが居残りしなくちゃならないんだろ」
「そりゃおまえ、俺に変な魔法かけた挙句に異常な連帯感で縄だらけにしたからだろうが。ざまーみろー」
「別にこのままおいて帰ってもいいんだよ？」
「……ごめんなさい。言い過ぎました。優しい優しいフロルさんには僕を解き放って欲しいです」
「ふふ。わかればよろしい」

そういって満足そうな笑顔を浮かべたあと、フロルは再び結び目の中央に指を突っ込もうとした。が、魔法の完成度が高いために小指の指先すらろくに入り込まなかった。

「ああもう。ほんとに固いなぁ。一体誰の魔法だろ？　かなり優秀な人なのは確かだけど」

結び目を敵のように見ながら力をいれる。勉強するとき以上に真剣な表情を無意識に浮かべていた。しばらく縄相手に格闘するフロルであったが、五度目に指先を差し込み損ねたとき、ついに投げ出した。

「無理だよ！」

そう言って床であるにもかかわらずフロルはごろっと寝転がった。レヴァンは「もう諦めたのかよ」と呆れたような表情になって同じように天井を仰ぐ。するとずいぶんと新しい汚れのないものが視界に広がる。それもそうだろう。この校舎は建てられて五年も経っていないのだ。それをぼーっと見てから、首が痛くなってきたので再び前を向いた。

「ぶっ！？」
「なに？」

突然吹き出したレヴァンをいぶかしむように、フロルが寝転んだまま、顔をレヴァンに向ける。と同時にレヴァンは顔をそらした。そして、そのままの状態だと危険だと判断し、

「スカート」

レヴァンは一言だけ口にした。
ほとんど反射的にフロルが自分の体を見ると、気でも抜けていたのか、かなり際どいラインまでスカートがめくり上がった状態であった。普段着として使った短めのスカートがいけなかった。
しかし、直後フロルの顔に浮かんだ表情は、レヴァンが見慣れていたものだった。

「ちらり」
「……」
「ちらちら」
「……」
「ほら、ちらっちら――」
「……頼むから許してください」

目を硬くつぶったままレヴァンが懇願した。それを聞いてフロルは、もう純情なんだから♪とくすくす笑った。
レヴァンが恐る恐る目を開けるとフロルはものすごく上機嫌な顔で座っていた。それにレヴァンはまた一つため息。と、そのとき教室の扉が開いた。

「貴様ら、まだ残っていたのか。もうそろそろ――」

と、ここで言葉は止まる。入ってきたのは教官で、その言葉通りもう教室を閉めるほどの時間なのであったが、

「なにをしている？」

教官はすっと目を細めて目の前の光景を見た。その、フロルのいまだ際どい姿と縄で縛られたレヴァンという光景を。

「……邪魔したようだな」

「「違います」」

即否定する二人を面白そうな視線で見る教官。いまさらのようにスカートの裾を正すフロルをしばらく観察してから口を開いた。

「そういえばアイヤネン。あの『囮魔法（ルアー）』、どこで習った？」

そんな唐突な質問にフロルは疑問符を浮かべる。もう一度同じ質問を教官が繰り返すと、理解したのか、今日の実習の時のですかと聞き返した。レヴァンはその時の出来事を思い出し、思わず苦い顔をした。

「ああ。あの魔法はかなり難易度が高い。講義では教えていないはずだが」

そう言って教官は手近な椅子に座る。自然と胸ポケットへと伸びていた手を、気がついたのか収める。おそらく教室で喫煙はまずいと思ったのだろう、職員的に。

「えっと、実は家にある魔導書を読んで……」
「ほう。勤勉だな」
「はは……ありがとうございます」

フロルが答えると教官は感心したようにうなずく。タバコが無いせいか少しばかり落ち着きがなく、指先を弄んでいた。

「学年首席の実力はそのせいか」
「儀式には失敗しましたけどね」

フロルは軽く笑っていた。けれど、教官はそうもいかないようだった。原因はわかるかと少し気にしたように聞いてくる。そんな教官を見て、

「俺のときはそんな真剣に聞いてくれなかったのに～」
「黙れ。成功しない貴様が悪い」
「ひどいっ！？　フロルも失敗したじゃないですか！」
「学年首席と落ちこぼれの対応が違うのはあたりまえだろう？」
「……はっきり言われると傷つきますよ」

そんな台詞にふっと笑う教官を見ながら、レヴァンはがっくりと肩を落とした。

「……まあいい。どうせ聞いたところで解決出来るわけではないからな。せいぜい筆記で成績を残せ」

気が削がれたため教官は話を打ち切りにしてフロルにそれだけ言うと、そういえばと思い出したようにレヴァンの方を向いた。

「レヴァン、貴様まだ実習終わってないだろう？」

「へ？」

そう言ってどう見ても悪巧みしかしていないような笑みを浮かべる教官。それに嫌な予感を感じつつもレヴァンは聞き返した。

「大猪を捕らえろという実習内容を貴様だけこなしていないということだ」

「……ってちょっと待ってください！　それはもともと無理な――」

「では、補習をしなくてはな？」

さらに教官は笑みを深める。それはもはや悪魔にしか見えなくて……

「……もしかして、この縄の術者って……」

「ついてこい」

「え？　今から？　ちょっ待っ――」

そういって引きずられていくレヴァン。

「あでぇー」

慣れない言葉を使い、手を振って見送っているフロルを恨みがましい目で見ながら、地獄の門を叩くレヴァンなのであった。

【1】―5　発覚

「……つん」
「……」
「……つんつん」
「……」
「……返事がない。ただの屍のよう――」
「勝手に殺すな」

ゆったりと起き上がるレヴァン。アミナはそんなレヴァンをじーっと見ていた。そんな視線を感じたのか、レヴァンは口を開く。

「……いやーまさか縄で縛られたまま組み手をしてボコボコにされると思わなかったけど、なんとかなったなー」
「ふふ、教官に気に入られてるよね～」
「てめ、そういえば。なにがあでゅーだよ。助けてくれたっていいだろ？」

拳を握って抗議するレヴァンをけらけらと笑うフロル。一方アミナは心配そうな表情で見ていた。そんな様子のアミナに大丈夫だからと安心させて、レヴァンはうんっと背伸びをした。
教官のシバキの翌日であり、自主訓練の時間であった。どうも教官は書類仕事にかからなければならなかったらしい。とは言っても、ここで練習しなくては他の生徒に差をつけられてしまうため、実質全員参加の通常訓練であった。
レヴァンは筋肉痛に苦しむ身体を頑張って動かしながら、フロルやアミナとの組み手を見ていた。

「じゃあ始めよ？」

そう言って構えを取るフロル。アミナもそれを見て真似をする。そんな向かい合った二人を脇から見ながら、レヴァンはフロルに了解の意を伝えた。

「行くよ～？」

「……うん」

そうして組み手が始まった。フロルとアミナに好きなように組み手をさせ、レヴァンが助言を贈るというかたちをとっていた。レヴァンは魔法にはからっきしでも、体術は人一倍得意であったからである。

しばらく互いに打ち合う二人をぼーっとした目で見つめて、

「あーアミナ、脇を軽く閉めて。フロルは腰をもっと低く」

全然見ていないかと思えばそうでもないようで、レヴァンは的確に二人の悪い部分を直していく。その度にわかった、と返事する二人。その真面目さのおかげかみるみるうちに上達していた。始めの方にあった突きのぎこちなさも今は殆ど無く、流麗な動きで打ち合っていた。

「……もういっか」

ここまで来るともう特に言うこともなくなるので、レヴァンは本格的にぼーっとし始めた。ふと仰いだ空が珍しく曇っていたため少し驚く。まったく天気予報はあてにならないなと思いながらも、分厚い雲の向こう側を見てやろうと見続けていた。しかし晴れる気配もない。本当に雨でも降るかも知れなかった。

と、そこで何かが脇腹をさわる。

「……よそ見、だめ」

「へ？　アミナ？」

てっきりフロルが怒ってくるかと思っていたレヴァンはけっこう驚く。フロルの方へと視線をやると、そこにはにやつく少女の姿が。その顔には「アミナの言うことは聞かないわけにはいかないもんね～？」。それに苦笑しながら再びアミナの方を向いて謝ろうとする。すると、さっきまではいなかった奴がいた。

「小僧。自らの役割も果たせないとは、情けない限りだな」

「……おまえ、忘れた頃に出てくるよな。今までどこにいたんだ？」

「うむ。人間たちの捧げ物を貰ってやっていた」

「……あーはいはい、餌付けされてたわけか」

む、と軽く唸ってから何か反論しようとしたミグルスを、アミナが絶妙なタイミングで抱え上げてさえぎった。ナイスタイミングだとレヴァンは感謝した。

しばらく不満そうな顔をしていたミグルスだが、やがてもうよいと諦める。フロルがねえねえとレヴァンを呼んだ。

「ところでどうだった？」

「ん？」

「いや、組み手」

「ああ、二人とも上手に動いてたよ。フロルのほうはさすがだな。アミナも、相手の肩を見て攻撃を予測するといいよ」

最後に二人に軽いアドバイスをして、レヴァンは練習を終わることにする。あと少しで時間も終わるので、余裕を持って準備するた

めである。また、女性側としてはシャワーを使う時間が欲しいだろうと、レヴァンなりに考えた結果だった。
終わりを告げると、フロルとアミナはふうっと息をつき、クールダウンをし始めた。それも早めに終わらせると、

「ふー今日も疲れた～」
「……眠くなった」

二人にレヴァンは思わず「まだ今日の講義は終わってないけどな」と言う。爽快感を奪わないでとフロルに怒られ、アミナをしょぼんとさせてしまっていた。
ごめんごめんと謝りながら、レヴァンは二人と一匹を連れて練習に使っていた第二修練場を後にしようと歩き始めた。そんなときだった。

「んだとテメエ！」

そんな怒りの声が修練場に響いたのは。

「……なんだ？」

ほんの少しの興味でレヴァンは後ろを振り返る。すると、それほど離れていないところ、レヴァンたちよりさらに修練場の中心に近い位置に強気そうな赤髪の男子生徒が紺の髪を持つ生徒の胸ぐらをつかんだまま至近距離で睨んでいた。

「ケンカかよ……」

子供か、と思いながらも目を離さないレヴァン。喧嘩の原因と先行きが気になってしまっていた。

「レヴァン」
「わかってるよ」

フロルは、昔レヴァンが喧嘩を止めに入って返り討ちにされたことを思い出したのか、制止の言葉を口にするが、レヴァンは最初からその気はなかった。
そんなやりとりの間にもケンカは進んでいく。どうやら相手を見下すような態度に腹が立ってつかみかかっているような状態であるようだった。

「手を離してくれ」
「ああ？　なんでつかまれてると思ってんだ？」
「それは、無能な君が僕の才能に嫉妬してつかみかかって――」
「てめ、だからその言い方がムカツクんだよッ！！」

次第にヒートアップしていくやりとりを見て、レヴァンはだめだこりゃと思った。

「だいたい、才能才能ってなんだよッ！　それがどうかしたのかよ！」
「僕は招魔がAランク、魔法の成績もトップクラス。どちらも平凡でしかない君とは大違いだ。君は浄魔士を志していないのか？　才能がものをいうに決まっているだろう？　これだから無能な奴は……」
「テメエ、いいかげんにしろよ！！」

どこまでも見下したような冷たい声色と態度に、とうとう赤髪が

キレた。拳を掲げ、そのまま振り下ろす。訓練されたような鋭い動きじゃないが、強い衝撃を与えそうな拳であった。それをもう片方の少年は冷たく一瞥し、

「守れ」

そう一言つぶやいた。殴りかかった側の拳はそのまま相手の顔面へと向かい、しかし当たることはない。小型で緑の飛竜が拳を受け止めていた。

「疾風竜（ワイバーン）……」

フロルがつぶやいた。

「風属性で攻撃型小型竜の一つ。発する風にはものを切り裂く力が付加されているらしいよ」

「……すげぇ」

「……図書館みたい」

フロルの説明にレヴァンとアミナがそろって驚く。

「はっ。招魔に頼って、自分には力がないんじゃないのかよ？」

自分の拳が遮られた恥ずかしさをごまかすためか、挑発をかける強気そうな生徒。しかし、それが意外と効いたようだった。

「なんだって？　君と一緒にしないでくれ」

そういって赤髪の手を振り払い、数歩下がって魔法を展開し始めた。

「させるか！」

隙を与えまいと赤髪が拳を振るうのだが、先ほどと同じように疾風竜（イバーン）に防がれてしまう。チッと舌打ちして、来い、と声を発する。すると、赤髪の招魔――群青色のコウモリが出現する。

一気に危険が増した状況に周りが制止の声をあげるが、二人は聞こえていないようだった。

「はっコウモリか、お似合いの低ランクだね」

「ウゼェぞ、ナルシスト！　ナメてんじゃねえよ！　行け！」

言い争った後、赤髪が招魔のコウモリに指示を出す。招魔は主人の命令を聞いて、キィッと鳴き声を上げると、紺の少年の方へと飛ぶ。

展開している魔法陣はかなり大きく、そのため紺の少年は動かない。そのまま行かせるわけもなく、疾風竜（ワイバーン）が牙を剥いた。その鋭い牙がコウモリを捉えにかかる。が、

突然、コウモリが鳴いた。

耳を破壊する勢いの超音波を耳に受け、レヴァンを含めその場にいた大多数が、ふらついた。……事前に耳を塞いでいたフロルとアミナを除いて。

「……フロル、なんで教えてくれねえの？」

「忘れてたってことで♪」

「おまえなぁ……」

ゆっくりと立ち上がりながらフロルの話に耳を傾ける。群青のコウモリは発する超音波で招魔を混乱させる能力だ、とのこと。それを事前に聞いていたアミナも耳へのダメージを回避できたらしい。

「くっ……」

近くで聞いたためか、顔をしかめながらふらつく紺の少年。しかし、その魔法陣は出来上がりつつあった。魔法陣の大きさは少年の身長を軽々と超えるほどで、普通の魔法陣の大きさの三倍以上はあるだろう。

こりゃあっちの勝ちかねぇ、とレヴァンが呑気に思っていた。そのときだった。隣からあっと聞こえたかと思うと、

「だめっ！！　魔法陣の展開をやめて！」

――え？

そう思ったレヴァンは思わずフロルを見る。紺の少年も同じなのか呆気に取られたような顔をしていた。そんな少年にフロルは続けた。

「少し間違ってる！　大きな魔法陣ほど失敗が大きく響くって知ってるでしょ！？　だからそれ以上の展開は――」

なんとか止めさせようとしているフロルが言い終わる前に少年の表情に変化が見えた。純粋な驚きだけだった表情が、かっと赤く染まる。フロルに見とれたとかそういうことではない。多くの羞恥と怒り、だった。

「うるさいっ！！」

言葉を止めるフロル。少年はどこか危なげな目で、叫んだ。

「うるさいうるさい！　どうせ僕より下等なくせに、無能なくせにそんな分際で僕に注意するな！　僕はどこも間違っていないっ！」

ち、ちが……、とフロルが否定しようとするけれども、少年のヒステリックな叫びが続いて聞き入れられなかった。紺の少年にはもう周りが見えていなかった。

赤髪の少年の方は、紺の少年の異常さに気づいたのか怒りを鎮めていた。そんななか、紺の少年は一人声を上げ続ける。

「無能のくせに！　無能のくせに！　無能のくせに！　僕が才能の違いを見せてやる！！」

そういって少年は魔法陣の最後の直線を――

「だめ――――っ！」

――引き終えた。直後、

「なっ、魔法陣が歪んで……っ！　何故だ……僕は完璧なはず――」

蒼色に光り輝き、理に干渉するはずの魔法陣。それが少年の目の前で少しずつ、そして決定的に形を歪めていった。それを見た紺の少年の驚愕をかき消すように、やがて、

ゴオォッッッ！　と耳を吹き飛ばす轟音と目を灼く光が生まれた。

魔法陣が爆発したのだ。周りの生徒達がとっさに上げた悲鳴も全く意味をなさず、爆発とそれに伴う爆風は修練場全体を巻き込んだ。もちろん、レヴァンたちも無関係ではなかった。

巻き起こった土煙が場を埋め尽くし、やがて緩やかな風がそれを

少しずつ流していった。爆発の時とは対称的な静けさで徐々に土煙は飛んでいき、やがて周りが見渡せるまでになった。
いたーい、とそこらじゅうから声が上がる。生身であったら全員が死んでしまってもおかしくない状況であったのだが、そうならないわけが実際には存在した。
招魔である。自らの主をかばい、前に躍り出た招魔がそれぞれの属性を前面に展開し見事に守護の役割を果たしていた。

「我が主。無事か」
「……あ、ありがとう」

ミグルスは氷で作られた壁を壊しながら、アミナの元へと戻った。自分が五体満足に動けることに安堵したアミナであったが、すぐに大事なことに気づいた。

「……フロル、レヴァン……ッ！」

近くにいたはずの二人がいなかった。辺りをきょろきょろと見回すが、姿が見えない。まだ鳩尾ほどの高さまである土煙を目を凝らして見渡すが、成果はない。やきもきしながらアミナは探し続けた。

「何故それほどまで案ずるのだ？」

不思議そうに言うミグルスの言葉を理解したアミナは声に怒りを含めて言い返した。

「……二人とも、私のともだち」
「む？　そんなことは理解している」
「……二人とも、爆風に」
「うむ。確かに」

じゃあなんで、という目をしてミグルスの目を覗き込むアミナ。招魔の守護がない状態で今の爆風は致命的である。命の保証はないし、命あってもかなり危険な状態が予想される。そんな常識的判断をしたのであったが、ミグルスの瞳には本当に疑問の色しかなく……。口をつぐんだアミナにミグルスは再び言った。

「なぜ安全だとわかっている者を案ずる？」

え、とアミナがつぶやいたとき、突然、辺りがざわつき始めた。誰か怪我人が見つかった――訳ではなさそうであった。悲しい雰囲気は感じられない。まるで不可思議な現場に遭遇したような……信じられないものを見た、そんな感じであった。

「……二人、とも……」

ようやく開けた視界の中に求めていた人影を見つける。多少離されていたようだが、生きていることが奇跡である。思わず声をかけ、アミナが近寄ろうとした、そのときに異様なことに気づいた。

二人は立っていた。レヴァンの方は服がところどころほつれてかなり汚れていたが、フロルの方は驚くことに全くと言っていいほど汚れていない。……先程まで大量の土埃が舞っていたにもかかわらず、である。アミナでさえ全体的に土っぽくなってしまっているのに、だ。そしてなにより目を引いたのは……

レヴァンが前に掲げた手のひらを中心に、二人を覆うように蒼色の半透明なものが薄く放射されていた。

さながらそれは体すべてを守るような大きな盾のよう。フロルを後ろへやっているところも相まって、今の爆風をレヴァンが防いだような構図になっていて……。

え、どういうこと？　と辺り中から声が漏れ、ちょっとしたパニックになりかけた。

「何事だ。当事者は私のところに――」

爆音を聞きつけたのか、ようやくやってきた教官は厳しい顔を周りに向けると、言葉を止める。周りでひそひそ言い続ける生徒と、その視線の先にいる明らかに異端な少年を見た。そして――

「……レヴァン、説明してくれるか？」

「……はい」

聞きなれないような、静かな返事がその場で響いた。

【1】－6　静かな説得

騒ぎを起こした生徒二人は、職員に連れられて反省室へと向かった。それを見送った後、場所を教室に移した。外で話をするのは落ち着けないし、距離をとって取り巻くような話し方はよくないという判断のもとであった。

しかし、場所が変わっても心の内まではそうはいかない。生徒たちは相変わらずレヴァンを遠巻きに見ていた。

「全員、席に着け」

教官の言葉に表面上はいつもの光景に。しかし、漂う空気は明らかに常ではない。レヴァンは無意識のうちに俯いていた。心配そうにフロルとアミナはレヴァンに視線を送る。

「……レヴァン、説明を頼む」

教官の言葉にわずかに震えた後、困ったような笑い顔。いつものようなほのぼのしたものではなく、胸の痛くなるような泣き顔にも見えた。

周りを見ないように俯きながら、長い沈黙のあとレヴァンは言った。

「……俺は人間じゃ、ありません」

周りの息を飲むような反応に一瞬顔を歪ませるも、レヴァンはすぐに表情を元に戻して、ぽつりぽつりと口を開きだした。

「俺は、魔物なんです。人型っていう特殊な形ですけど、こうやって――」

ゆったりとした動きで腕を持ち上げる。その腕は蒼光に包まれていた。それも半端ではない密度である。下手につつけば制御できずに爆発させてしまうほどの魔力を腕の周りだけに凝縮させていた。

「――魔力が自由に扱えるんです」

辺りがしんと静まった。

全員がまるで反応出来ていなかった。それもそうだろう。クラスの一員としか思われていなかった少年が、実は人間ですらないと示されたのだから。
「……属性は」
「わかりません。ただ大きな魔力を扱えることしかわかってないんです」
静寂の中、疑問を発したのは教官だった。そうか、と静かにつぶやいて、教官は続ける。
「では、招魔の儀の失敗もそれが原因と思っていいんだな？」
レヴァンが肯定を示すと、教官は表情とは裏腹に納得したような言葉を言った。再び静寂に支配される。他の学年は自習中なのか、教師の声も聞こえてこない。生徒たちにとっては気まずい沈黙であり、レヴァンにとっては……辛い静けさであった。
そして、教官の質問はまだ終わったわけではなかった。しばらく迷うような素振りを見せてからやがて、教官は口を開いた。
「……貴様は契約が出来るのか？」
凛々しい雰囲気を崩さない姿勢に軽く感服しながら、レヴァンは質問に答えようと口を開こうとする。けれど、
「私が契約者です」
毅然として言い切ったのは、フロルだった。驚いたように目を見開く面々。その中でも何か言おうとしたレヴァンに、
「いいの」
制止の声をかけた。
「私を庇おうなんて考えなくていいから」
そういって、教官の方へ向いた。同時にレヴァンの方へと寄る。
「……なるほど。アイヤネンの失敗も、そういうことか」
教官はようやく納得したように声を出した。一人で考え事をしていた様子であったが、しばらくすると顔を上げ、ふむ、と勢いづけると、
「本日の講義は切り上げる。各自自主訓練に励め。以上」

そう言って教室を後にしてしまった。
「……」
教官が去った後、教室は再び、というよりそれ以上にいやな沈黙だった。身動きすらためらわれる空間。
こんな空気をレヴァンとフロルは知っていた。
「……また、バレちゃったね」
フロルがレヴァンだけに聞こえるように話しかけた。
「なんで契約のこと言ったんだ。言わなきゃこんな晒し者みたいにならなくて済むのに……」
レヴァンは周りを見渡した。周りの奇異の視線が刺さってきていた。直接目を合わせようとはしない態度にイラついた。舌打ちをする寸前でフロルが返事をしてきたので、レヴァンはあわててやめた。だって……、とフロルは言う。
「孤児院での時も今も、私を守るために……」
そこで言葉を止め、泣きそうになるフロル。脊髄反射的に「関係ねーよ」とレヴァンはつぶやいていた。
「え……？」
「関係ない。招魔として契約者を守るのは当然だろ？　それにそんなことで謝られたら、招魔の意味ないよ、俺」
レヴァンは微笑んだ。無理に笑っているということが丸分かりなぎこちないものであったが、フロルは、
「……そうだね」
気にすることをやめた。

「……ねえ」

声をかけられる。レヴァンがその声の主を探して顔を上げると、すぐに見つかった。亜麻色のショートカットをした少女だ。運動後であるからか、ゴムで髪を束ねていなかったが、それは、少し会話したことのある少女だった。

「ラナ……だっけ？」
「うん。聞いてもいいかな……？」
レヴァンは促す。少女はおずおずと言った感じに口を開いた。質問の内容は、レヴァンの過去について。
「自分は魔物だって言ったよね？　ってことは魔界で過ごした記憶、あるの？」
そういった質問は過去にもされていて、レヴァンは慣れていた。
「いや、ないよ」
あっさりとそう答える。それを見て、ラナが表情を明るくした。
「じ、じゃあ――」と言いかけた優しい少女を、
「でも、人間としての記憶なんてのもないんだよ」
できるだけ優しく見えるように微笑んで遮った。意味が分かっていない様子のラナにレヴァンは続ける。
「記憶がないんだ。十歳で孤児院に入った時が最初の記憶でさ……だから、本当に魔物かどうかもわかんないけど――」
人間には、見えないだろ？
そんな言葉にラナは言葉が継げなくなってしまう。レヴァンは思わず苦笑をもらした。こんなことは相手を気味悪がらせること以外しないだろう。しかし、自分が魔力を操ったのを見られた以上、レヴァンは隠すことはしたくなかった。昔と同じことになろうとも嘘をつくことはしたくなかった。
そんなことを考えていた時だった。諦観した表情でため息をつこうとした時だった。周りの視線が移動した。レヴァンからフロルへ。そして二人ともを見るような視線に。そして、
「……化物」
瞬間、レヴァンは、つぶやいた男子生徒を殴り飛ばしていた。
ゴッとすごい音がなり、生徒が吹っ飛ぶ。落ちこぼれが打っていいような強力さではなかった。周りはおろか、生徒自身が吹っ飛ば

されたことに気づいていなかっただろう。
　ようやく状況を理解した者たちは、悲鳴を上げる。そのまま混乱に包まれそうになったその場を、
「黙れッ！！」
　レヴァンの一喝で強制的に静寂へと戻された。
「フロルは関係ないだろうが！　フロルは普通の人間だ。俺を使役しているからといってそれは変わらないだろ！？　フロルのこと化物とか思った奴出てこい！！　俺がぶっ飛ばしてやるッ！」
　炎がうねるような怒りを叫んだ後、レヴァンは殴り飛ばした者も含め、周りの生徒たちを見回した。全員がレヴァンから目を逸らし、顔を俯け、無関係を主張している。レヴァンはその態度に腸が煮え返るというのを実感した。フロルがなにか言っているのが視界の端で映っていたが、気にすることも出来なかった。
「確かに俺は化物だよ！　否定出来ない。……でも！　フロルは違う！！　ちゃんとした人間……いや、ちゃんとしすぎてるぐらいだ！　優等生で、性格も問題ない！　おまえらも憧れとか持ったことあるだろ！？　そんなフロルに手のひら返したように接してんじゃねえよ！　あんまりだろうが！！　……だから――」
　ひとしきり叫び続け、何度も声が裏返るレヴァン。しかしその勢いも次第に弱ってきて、やがて最後には激情は消え失せていた。
「――……だから、フロルは関係ねぇんだよ……」
　そういってレヴァンは俯く。周りの視線を見ることが出来なかった。きっと呆然としているであろうことを思いながら、レヴァンは足を教室の出口へと踏み出していた。
「……レヴァン」
　フロルだろう。レヴァンはその呼び止めるような声に従う気には、なれなかった。
　入口の目の前まで来たところで、脇にいる人影に気づいた。小柄で、それ相応の不安そうな目でレヴァンを見てくるのは、アミナ。
「……あ……」

「……言わなくて、ごめん」
遮った言葉に込められた純粋な悲しみに、アミナは言葉を返すことが出来なかった。
そんなアミナを見て顔をくしゃっと歪めてから、レヴァンは入口を出て自分の部屋がある寮へと足早に向かった。階段を降りるところでフロルらしき人の声が聞こえた気もしていたが、振り向こうとは思わなかった。思えなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翌日。比較的気候も穏やかで過ごしやすい朝。
朝の自主練が終わり、準備ができた者から、講義を受けるため生徒たちが教室に集まりつつあった。
全員がなんだか微妙な表情を浮かべていること以外はいつも通りの光景である。友達と雑談している者、講義の予習復習に励む者。それぞれが自分のやりたいことをやるという時間であった。
そんななか、一人。ある生徒が入ってくると、全員がそちらを向いた。レヴァンであった。
全員の視線を感じたレヴァンが気まずげに顔をしかめた後、無言で端の席を目指す。が、ふっと後方の席を見やるとそこで一人の生徒と目があって立ち止まってしまう。その頬に貼ってあるガーゼを見てレヴァンは思い出した。前日レヴァンが殴ってしまった生徒だった。
しかし、相手の方から目をそらした。気持ちの悪さを感じながらも、レヴァンは歩みを始める。隅の席に荷物を置くと、レヴァンは立ち尽くした。しばらく悩むような表情を見せるが、やがて、
「……はぁ」
自分にしか聞こえないほどのため息をついた。そして、再び歩き出す。

「……」
「な、なんだよ……」
たどり着いた目的地は、目が合った生徒のところだった。
刈り込んだような短髪のガタイがいい生徒だった。その生徒が、突然目の前に立ったレヴァンを動揺と恐怖が混じった瞳で見ていた。
「ゴメン」
「……は？」
呆気に取られたのは教室にいる全員だろう。まさか謝罪の言葉が来るとは思っていなかったのだ。
「殴って、悪かった」
レヴァンはもう一度謝ってから、深く頭を下げた。生徒はそれに困惑した様子であったが、レヴァンは気づかない。しばらくの間頭を下げていたが、やがて顔を上げた。その胸中に渦巻くもののよどみ具合に生徒も気づいたのだろう。何も口にすることはなかった。
弱々しい笑みを残してから、レヴァンは荷物をおいた席についた。いつもなら誰かとたわいない話でもしている頃にもかかわらず、憂鬱な気分である。イライラはしなかった。ただ、やるべきことが終わったというように、ぐでっとうつ伏せる。レヴァンはぼんやりと意識を遠くへやった。

＊＊

自分が魔力を扱えると分かって最初に感じたのは優越感。
フロルを年長の子たちから守るために、代わりにボコボコにされていた時だ。フロルの悲痛な声を聞きながら、反応をやめてはいけないとだけ念じていた。フロルの方へと意識が向かないように。自分をいじめて満足してくれるように。そう考えながら、耐えていた時だった。
いじめる側の一人がフロルの名前を口にしてレヴァンから離れた。頭の中で何かが切れたと自覚したときには、周囲で蹴りつけていた

子どもたちが全員二メートルほど離れて倒れていたのだ。命を奪ったわけではなかったが、異常な力の存在が露呈した瞬間であった。
結果、忌み嫌われることになった。同じ孤児院の子は近寄らなくなり、その場所の管理者である大人たちにさえも化物だ悪魔だと言われ続けた。それが自分の名前かと勘違いしてしまうほどに、呼ばれ続けた。
しかし、それだけなら良かったのだ。自分が化物だと言われたとしても、それで傷つくのは自分だけ。感情を高ぶらせなければ、魔力の暴発もない。おとなしくしていればよかったのだ。なのに、なのにだ。
フロルまでもが忌み嫌われるようになってしまった。
自分は化物。それは仕方ない。そのせいで周りと深く関わるわけにもいかない。それも仕方ない。だけど――
自分のせいでフロルまでが同じ扱いを受ける。ただの人間であるはずのフロルが化物の主やらと言われてしまう。それは、それだけは、許せなかった。

＊＊

「……くそっ……」
浄法院を自主退学しよう。レヴァンがそう決意したのに時間はかからなかった。
「……よし」
軽く勢いづけてから、立ち上がる。フロルはまだ来ていない。教官に言うなら今のうちであった。行くか、とレヴァンはつぶやいてから身体を教室の入口へと向け、歩き出そうとしたとき、
「……アミナ」
目の前にはいつのまにかアミナが立って、レヴァンの目を見つめているところだった。なぜだかいつもより真剣な視線を受け止めたレヴァンはふうっと息をついて気を落ち着かせてから、

「そこ、どいてくれないか？」
以前のような声を保って頼んだ。少しだが笑うことにも成功したレヴァンであったが、
「……どこ、行くの？」
すぐに歩き出すことには失敗した。なんて答えようかと悩んでいたが、レヴァンが言葉を発する前に、アミナが口を開く。
「……話、先に聞いて」
話？　そうレヴァンが首をかしげたのを見て、アミナはもう一度うなずく。
正直、話を聞く暇などなかった。急がないとフロルがやってきてレヴァンの意図を見抜き、止めにかかるだろう。フロルに知られないうちに手続きを終わらせておく必要があった。にもかかわらず、
「わかった。なるべく早く話してくれ」
少しならいいか、と聞く態度になってしまっていた。
小さくうんと頷いてから、アミナは深呼吸した。緊張しているだろうことが伝わってくる。小柄な身体を自分で抱きしめているような状況だった。
怖いのだろう。うっすらとレヴァンは思った。なぜなら人外の者に話しかけているのだから。怖くないはずがない。その証拠に、声が聞こえないような距離からの遠まわしな視線が感じられていた。
落ち着いたのか、アミナが顔を上げた。少し不安げな顔で、
「……レヴァン、魔物って本当？」
「……そうだよ」
「……ミグルスと、同じ？」
「……そうなるかな」
レヴァンの声がしぼんでいく、と同時に顔を俯かせた。沈黙が周囲を囲む。昔のことを思い出した。このやりとりを繰り返したとき、次見ることになるのはいつも、怯えている視線なのだ。
だからレヴァンは自分の中で覚悟した。少しだけ仲良くなったアミナの態度が変わっても、傷つかないように。

結果から言って、自分の中の覚悟は役に立たなかった。不安と恐怖を胸にためながら、レヴァンが顔を上げる。そこにあるのは、恐怖に染まる顔でも、軽蔑するような視線でもなく、

見惚れてしまうような、優しい微笑み、だった。

そこにはレヴァンが恐れていたような感情は見当たらなくて……。レヴァンは太ももをつねった。痛い。夢ではないようだった。――ではなぜ？　なんで、

「なんで、笑ってるんだよ……？」

そう、レヴァンは泣きそうな声でつぶやいた。その声に答えるのも、罵倒や悲鳴ではなく心が震えてしまうほどに暖かい声だった。

「……レヴァンのこと、知れたから」

いつも距離をおくようにしか接してくれなかったから。だからレヴァンのことを知れて嬉しいと、アミナはそう言った。

「で、でも俺、人間じゃ――」

「……ミグルスと同じ。全然、怖くない」

そんなこと、納得出来るわけなかった。そんなことを考えられるなら、長い間忌み嫌われることもなかったはずなのだ。

そんなレヴァンの心情を汲み取ったのか、アミナは真剣な顔になってレヴァンの目を捉える。

「……わたしのせい」

「……え？」

「……レヴァンが距離置かれているのは、わたしのせい」

完全に理解出来ていないレヴァンに分かってもらうために、アミナは言葉を紡いだ。

「……わたしがうまく喋れないから。感じ悪いってみんなに思われてるから。わたしと関わったレヴァンが、距離置かれる」

「……は？　そんなこと……そんなの全く関係ないだろ？」
若干慌て気味にそう返すレヴァン。アミナはにこっと笑った。
「……うん。関係ない」
「へ？」
またもや意味が分からなくなるレヴァンに、アミナは極上の笑顔を向けて言った。
「……だから、レヴァンも関係ないの」
「……あっ……」
ようやく分かったらしい人外の少年にアミナは子を諭す母のような声で、告げる。
「……レヴァンが魔物でも、わたしの友達。だって……レヴァンはレヴァン、だから。だから、自分を追い詰めていかないで」
レヴァンはそのときなにも言えなかった。それほどまでにアミナの言葉は真っ直ぐ心にすっと届いて、響いた。だから、レヴァンはすっかり震えてしまっている声でつぶやく。
「……俺、人間じゃないのに」
「……関係ない」
「……俺、忌み嫌われてるのに」
「……関係ない」
「……俺、魔力が出せるのに」
「……関係ない」
そしてレヴァンは、自分の中の硬く押し固められたものが溶けていくのを感じながら、最後に言った。
「……俺、アミナを傷つけるかもしれない」
「……関係ない。ていうより――」
アミナはレヴァンの手を優しくつかんだ。
「――そんなことしないって……信じてるから」
そう優しくアミナがつぶやくと同時に、レヴァンは天井を仰いだ。

天井がぼやけて歪む。久しぶりの視界だった。少したって、アミナの方を向くと、桜色に頬を染めながらレヴァンの手をまだ握っていた。握って、くれていた。
「……アミナ」
「……ん」
さりげなく目元をぬぐって席に座り直すと、アミナが隣に腰掛けながらいつものように小首をかしげて聞いてきた。
「……どこか行くんじゃ、なかったの？」
「……いや、もういいんだ」
そう言って、レヴァンはふっと不器用に笑う。つい先程までと同じように弱々しくても、その笑顔の中には悲しい色は見られなかった。そんな空気を感じながら、
「……これから、よろしく」
「……こちらこそ」
二人は、お互いに笑顔を交わした。

その後、フロルも教室へとやってきて、やがて講義が始まった。フロルは雰囲気だけでなにか感じ取ったらしく、レヴァンとアミナに快活な挨拶をかけてきた後、アミナの隣りに座る。
周りの視線は相変わらず刺さってくるが、レヴァンは気にしないことにした。それこそレヴァンにとっては「関係ない」のだ。
講義中にもかかわらず、楽しそうに紙と鉛筆で意思疎通を図るフロルとアミナを見て、窓辺で気持よさそうに寝ているミグルスを見て、レヴァンは自然と笑顔になった。
前とは違う道を歩んでいけそうだな、と静かに思った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【1】−7　休日と初の実戦

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

——キィィィ……ン。

坑道の中、澄んだ音が響いていた。不規則に音を奏でては、壁へと染みて消えていく。それは美しくもあり、同時に少し悲しい気分になるような音だった。

「ふうっ……ふうっ……」

汗を流して動いている数人の男が、そんな音を鳴らしていた。

シレンティアを出て、東へずっと離れた場所。シレンティアが管理している数ある鉱山のうちの一つである。資源を多くは有していない都市であるシレンティアにとって、かなり重要な場所と言っても過言ではなかった。

数人の男達は、鉱山の最奥の担当だ。掘り出した鉱物を控えている別の作業員に手渡し、作業員はそれを資源車と呼ばれる運搬用車両へと積込む。

「ノルマ達成しましたー」

背後から聞こえてくる作業員の報告に手を振って答えてから、男達はどさっとその場に腰を下ろした。あまり長居すると体調が悪くなるという場所なのであるが、辛い肉体労働の後であるので仕方ないとも言えた。

「おーいてて……」

「大丈夫ッスか？　また腰痛めたんじゃ……」

「おっさん、もういい年なんだから無理するんじゃねえぞ〜」

「馬鹿にするんじゃない。こちとら、まだまだ現役だ。無駄口叩いてる暇があったら、いっぽしに偉くなりやがれ」

「「へーい」」
そんないつもの会話を繰り広げながら、しばしの休憩を取っていた。この鉱山での仕事はもう終わりだが、都市に戻ればまた次の仕事が入ってくる。そのため、今のうちに休んでいないと体がもたないのだ。
「ったく、若造が調子に乗りおって……次もビシバシ使ってやるからな。せいぜい覚悟しとけよ？」
「うえ～」
「マジかよ……」
そんなやりとりに周りがどっと沸く。きつい仕事の合間の楽しいひとときであった。
「よし、てめえら戻るぞ。稼ぎ時だ」
しばらく話し込んでから話題が少なくなってきたところで、最年長のたくましい男が立ち上がる。続いてうーいとか言いながら、全員が立ち上がって、資源車の方へと歩き出した。
と、そのとき、
「……ん？」
一人の若い働き手が、視界の端で光るものを捉えた。なにかが自分の持つ懐中電灯の光を反射したようだった。ちゃんと意識する前に、その場所へと向かった。
たどり着いてみると、地面に近い位置にあったのは半分ほど地面に埋まったこぶし大の鉱石だった。輝き方からして、宝石の原石かも知れない。
「おい。なにしてる」
年長のリーダーがそばに来る。青年は指さして示した。
「これは、宝石か？　それにしてはずいぶんと輝いてるな。それに大きい」
ふうむと考え込んでいるリーダーを見た。リーダーにも分からないものなんて珍しい。そう思った青年は、採ってみますと言って、切削する道具を構えた。

周りの岩石を削り始めて、五、六分。案外簡単に取ることができた。ころんと足元を転がった鉱石を、仕事の後、手袋を外していた手で掴み上げた。
「これ、なんですかね？　やっぱ見たこと――」
と青年がここまで言ったところで、変化が起きた。
「――痛っ！？」
「な……どうしたッ！」
地面を転がっていく鉱石はひとまず意識から外し、リーダーは青年に近づいた。苦悶に歪めた顔で自分の手のひらを抱えている。それを確認すると、
「……火傷……か？」
赤くただれていた。青年も混乱したような声で、わかりません……とつぶやいた。
「熱かった……んですかね？」
「俺に聞くな」
そう言って、リーダーは、青年が制止の声を上げる間もなく、ひょいと件の鉱石を掴み上げた。
「……ふうむ。軍手越しにはなにも感じないが」
「そうなんですか？」
青年も無事な方の手に軍手をはめて、試す。あ、たしかに、と納得行かないような声を上げた。
「……どうします？　これ」
「とりあえず、監視者（モニター）へ報告する。おめえは先に次の仕事に向かってろ」
「わかりました」
リーダーと青年は外へと向かった。イレギュラーなことが起こって、困惑する二人であったが、
「よし、一旦戻るぞ」
判断は監視者（モニター）に仰ごうと、いつも以上に早く、車両はシレンティアへと向かったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ふわぁ……」
今日は定休。講義も訓練もなしというとてもありがたい日である。そんな訳で誰もいなくなった寮を出て、レヴァンはいまだ眠そうな目をこすりながらとりあえず商店街にでも、と歩いていた。足を投げ出すように歩くレヴァンの姿は、傍から見たらとても、有名な「イレーネ浄法院」の生徒とは思わないだろう。

都市シレンティアは、大きく分けて三つの要素で出来ている。
始めはシレンティアの中央。そこにそびえ立つ灯台のような外見の建物が『物見塔（ものみのとう）』である。灯台のようなと表現したが、それに比べると異様に高い。最上階は地上からでは確認がしづらいほどである。目立った装飾も何もなく、ただそこに佇立する存在である。それでいてなぜか威圧感のようなものは感じない。浄法や政治、その他都市の運営が一手に集まっている場所であり、最上階では『監視者（モニター）』が都市の外に生息する害獣の動きを見張っている。
二つ目は『物見塔』を囲むように存在する「生活区」である。都市の住民の家宅、商店街、浄魔士用の武器鍛冶、学校など、多くの人々が協力しながら日々を一生懸命に生きている場所である。レヴァンたちが通う浄法院も教育目的が違うが学校であるので、生活区の最も中心寄りに建てられている。
そして三つ目は生活区を、というより都市全体を囲うようにして設置された「隔壁」である。外に広がる荒野には害獣を始め、様々な危険が存在する。それらの脅威から都市を守るのがこの「隔壁」なのだ。同時に、当たり前ではあるが浄魔士の仕事場でもある。

「……大変そうだな、浄魔士って」
ふとレヴァンがつぶやく。フロルは用事があるからということでいない。寮の自室でだらだら暇をもてあそんでいた流れでレヴァンはここまで来たのだった。が、
「……寮で寝てればよかったかねぇ」
商店街に着くなり情けない後悔を口にする。商店街、特に大通りを包む異様な熱気に挫けそうなレヴァンであった。
どうやら今日は、商店街の店が後援している抽選会みたいなものがあるらしい。商店街で買い物をした人に配られる抽選券で参加する形式で、賞品は豪華かつ実用的な家具家電であるのだとか。
うまく客寄せしてるな、とかぼんやり思いつつ、レヴァンは目を離した。あまり興味がわかなかったのだ。そのまま通りすぎようとする。
したのだが、
「……アミナ？」
異様な熱気を振りまく主婦たちの中に、一人、アミナが混ざっていた。
身長が足りなくて抽選が見えないのか、一生懸命ぴょんぴょんと跳ねていた。それがなんだか微笑ましく、見過ごすことが出来ずに、レヴァンは足の向きを変えた。
変わらず跳ねているアミナの後ろから、さきより軽い足取りで近づいていく。しかし、ずいぶんと近づいても、アミナがレヴァンに気づくことはなかった。仕方がないので、軽く声をかけた。
「何してんの？」
「……ッ！？」
ばっと身を翻して反射的に距離をとろうとするアミナ。ここ最近の修練の成果か、いい動きであったが、人の混雑でそんなことは出来なかった。
「……そこまで警戒されたら傷付くなぁ」

「……レヴァン？」
苦笑を滲ませて頭を掻くレヴァンを見て、アミナは不思議そうに小首をかしげた。その目が純粋に尋ねたそうにしていたので、レヴァンは一足先に答えた。
「暇だったからさ、ちょっとブラブラしようかなって。アミナは？　こんなところで何してんの？」
自分の聞きたいことが当てられて恥ずかしくなって、アミナは頬を染める。少し口ごもった後、少し小さくなった声でレヴァンに答えた。
「……この抽選会、景品欲しい」
「そっか」
一度レヴァンは抽選会場に目をやって、ふうんと何度も頷いた。そのままの流れで「豪華なのが欲しいの？」と聞いてみるが、アミナはそうではないと言う。
「え？　じゃあなに？」
「……ぬいぐるみ」
そんな言葉に会場の並べられた景品を見る。目立った場所に豪華な家具がある。そしてその横には、確かに抱え込むぐらいのサイズのクマのぬいぐるみがいた。
「あれか。へぇ、五等か……」
レヴァンは納得したようにしきりに頷く。「五等目指して参加する人も珍しいな」とレヴァンが漏らすと、アミナもくすっと笑って、「……そうかも」と返した。
しばらくレヴァンがアミナからぬいぐるみの可愛さについての熱心なレクチャーを受けている。すると、
「では抽選会を開催いたしまーす！」
商店街の店員の声と共に、やがて抽選が始まった。

「残念だったな～」
「……うん。残念」
そう言ってトボトボ歩くアミナ。レヴァンはそんな少女の様子を見て苦笑を漏らした。
商店街を出口の方へと歩いていた。この場所は本当に平和で、浄魔士とはあまり関わりがないため、レヴァンの訓練で疲れた身体には安らぎであった。
ああ、教官がもう少し優しければな、とレヴァンがぼんやり思っているところに、アミナが話しかけてきた。
「……レヴァン」
「……ん？　なに」
「……今日、用事は？」
即答できるはずの質問に、レヴァンは少し考えるふりをしながら、
「いや、特にないよ。ここで会ったのも何かの縁ってことでアミナについていってるんだけど……」
だめか？　と問いかける。少女はぬいぐるみを抱えるはずだった腕で自分を軽く掴んで言った。少し顔も赤くなっていた。
「……だめじゃ、ない」
そんな返事を微笑ましく思いながら、レヴァンは同時に感謝していた。自分の正体を知った上で仲良くしてくれていることに。
「……どうしたの？」
「ん、いやなんでもない。それよりこれからどこ行くんだ？」
無理やり過ぎたかな、と話題の転換について反省するレヴァンであったが、アミナは気にした様子もなく「……公園」と質問に答えた。
「公園？」
レヴァンがオウム返しに尋ねると、公園、とアミナも繰り返して答えた。
何をするのかも聞かないまま「そっか」とだけ答えて、レヴァンはついていくことにした。

生活区には基本的に何でもある。商店街を中心としてその付近には住宅が林立し、ゲームセンターなどの娯楽、中央から外れたところには病院、学校なども建てられている。中でも公園は多く、アミナはこれから商店街にほど近い、自然公園へと向かうようだった。
抽選の参加者だったのか、多くの人々が商店街から出て行く。その流れに乗りながら、レヴァンたちは並木道を歩いた。
熱いとまでは感じない優しい陽光に、レヴァンは歩きながら眠ってしまいそうになる。そこをアミナに注意され、お互いに笑う。穏やかな時間が過ぎていった。
やがて人の波を抜けだすと、そこにはけっこう大きな自然公園があった。
入ったところから遊歩道が、中央の湖を一周するように敷かれている。湖の周りや遊歩道の外周にベンチも置かれており、運動や休養など多目的に使えるように整備されていた。
アミナは外周のベンチを選ぶ。レヴァンが目的のベンチへと近づくと、そこは予想以上にいい場所だということが分かった。
湖を一望できる風景。背後は木々が多く植えられていて、小さな森のようになっている。そのおかげか、空気が他とは違うようだった。眩しい陽射しも木々が丁度良く日陰の役割を果たしてくれていた。
うんっと背伸びをするレヴァン。存分に体を伸ばして、ふーっと長い息をつく。そのまま前を向くと、
「……で、あいつは何やってんだ？」
そう言って向かい側のベンチを見た。アミナもつられて見ると、苦笑を浮かべる。そこには見慣れた動物の姿があった。
「うむ。我が名はミグルスと言う」
「わんっわんっ」
「ほう、そうか。おぬしは飼い犬か」
「わわんっ。わんっ」
「む？　……ああ、あれがおぬしの主か。なんだかずいぶんと腑抜

けた――」
「？ー……」
「フ……すまぬ。主を悪く言ったことは申し訳ない」
そんな様子で黒と白の子犬が会話？をしている光景は、なんだかシュール。
「……ずいぶん仲良さそうだな」
もはやレヴァンは呆れてしまうのであった。
その後、しばらく辺りが静かになる。運動する者もなく、レヴァンも、そしてアミナもなんとなく口を閉ざした。しかしそれが気まずいわけでもなく、ほっとするような穏やかな時間が過ぎた。
ほんの十年前は野生の猛獣への対応が間に合わず、安心して過ごすことも出来なかったのだが、招魔を扱えるようになってからだろう、安定してきてベンチで昼寝寸前まで出来るようになった。
「ほんと、『監視者（モニター）』さまさまだよなぁ……」
レヴァンでさえそう漏らすほど、『監視者』の業績は大きく、この都市の全住民の尊敬と信頼を集めるものだ。そのためか、都市を守る浄魔士という存在は志す者もかなり多い。
そんな事を平和な公園で思いながら、レヴァンは軽く目を閉じる。

「……レヴァン」
「……んあ？」
レヴァンがうとうとしていると、アミナが声をかけてきた。
「どうした？」
「……もうそろそろ、帰る」
「ん？　結局何がしたかったんだ？」
まだ公園に来てからそれほど経っていないことにレヴァンは疑問を抱きながら聞くと、ゆっくりしたかっただけ、と答えが帰ってきた。
「でも、あんま時間経ってないよな？」
少しぼんやりしたような声のままレヴァンが尋ねると、アミナは

くすっと笑って、
「……かわいかった」
「え？」
「……寝顔」
どうやら気づかないうちにレヴァンは寝てしまっていたようだった。なんだか恥ずかしくなってレヴァンが立ち上がると、目の前にちょこんと鎮座する動物が。
「小僧らしいマヌケ面であったぞ」
「うっさいわ」
相変わらず姿に不相応な言動に反抗した後、レヴァンはアミナの方に振り返って、
「んじゃ、帰ろうぜ」
そう言った。いや、言い終わろうとした時。

突然、辺りが軽めのサングラスをかけたように薄暗くなった。

「……なんだ？」
「……我が主（あるじ）、注意しろ」
レヴァンとミグルスが同時に警戒の声を発する。太陽を確認するが、空には雲がなく太陽は依然燦々と輝いたままだった。……直視できるのは異常であったが。
「どういうことだ……？」
レヴァンが周りを見渡しても、異常の原因らしきものはない。人もあまりいないので、騒ぎにもならない。ただ突然暗くなった、としか意識していないようだった。
「……レヴァン」
アミナが側へと寄ってきて、そっとレヴァンの服の袖をつかんだ。アミナと目を合わせ、大丈夫だからと声をかけてから、
「で？」
傍らで毛を逆立てている黒の子犬に尋ねた。ミグルスは首を横に

振るような動作をして、
「……わからぬ。しかし只事ではない。気を引き締めるがいい」
「……わかった」
レヴァンは周りを注意深く見渡す。いまだ変化はない。それでも気を抜かず、普段見ないような集中力で目を光らせた。
何分経っただろうか。時間の感覚がなくなり、一秒も長く引き伸ばされていく。しだいに集中力も弱まっていき、レヴァンがクソッとつぶやいた。
そしてこの薄暗さにも慣れてきたそのときに、

キィィィィィィィィィィィィィィィィィッ！！

ガラスに引掻き傷を付けるような、とっさに耳をふさいでしまうほどの耳障りな音が突如この場を支配した。
呑気に散歩をしていた一般の人々も、さすがに異常を感じ取ったのか動きを止めて困惑した瞳をしていた。
レヴァンが目をより鋭くし、音の聞こえた方——ベンチの後ろの森を睨んだ。ミグルスも毛を逆立て、アミナを守るような位置にいる。理解が追いついていないのはアミナだ。レヴァンとミグルスを交互に見て、困惑しているようであった。
「……小僧」
「……ああ。こりゃやばい……」
なにが、とアミナが訪ねようとしたそのとき、ふたたび先程と同じ不快な鳴き（・）声が聞こえてきた。
レヴァンが苦々しくつぶやいた。と同時に、レヴァンたちが睨んだ先、そこにある茂みがガサガサと音を立てた。
「くそ。近いな」
ビクっと身体をすくませるアミナを庇うように立ち位置を変えながら、レヴァンとミグルスが目を離さずにいると、やがて「ソイツ」は現れた。

「ッ！？　……冥種……！！」
アミナが信じられないというようにつぶやく。それは、この都市に住む者全員が恐れ、忌み嫌う化物だった。その全身の色はよく見ないとわからないほど濃い濃紫色で、猟犬のような姿形であった。しかし、通常の魔物と決定的に違うところは、その体表に不気味な黒の斑模様が入っていることと、まるでオーラか何かのように黒色の気体を身体全体から放出していることか。その気体は人には有毒なもの。それが辺りを埋め尽くし、陽光を遮るほど濃かった。
レヴァンが顔をしかめる。その後周りを見渡して、舌打ちをした。魔物を目にしたために急いで逃げているようであったが、公園内にはこの付近の住民がまだ残っていた。
「なんでこんなとこに、はぐれが出るんだよ……」
「ふむ。冥種、か。しかし、これはまた厄介な化物のようだな」
はぐれ。
ときどき都市内に魔物が出現することがある。その個体のことをそう呼ぶのだ。
「で、どうする気だ」
ミグルスが普段以上に低い声音で尋ねてくる。それをレヴァンは横目で見ながら、
「……残念ながら、作戦立てる暇はないみたいだ」
そう言った。直後ッ！！
キィィィッという金切り声をまき散らしながら、冥種が初速からトップスピードでレヴァンたちの方へと向かってきた。
「ハッ！」
それに対応するのはレヴァン。冥種に負けないほどの速さで飛び出した。
あっというまに両者は近づく。冥種のほうは振り上げた腕を叩きおろし、レヴァンはそれを迎え撃つような掌底。武器を使ったわけでもないのに発生するゴッという鈍い音。お互いの初撃を受け止めた。

続いて出たのはミグルスだった。レヴァンの足元まで素早く移動し、魔物に向かって吠えた。それは咆吼というには頼りないものであったが……しかし、

『■■■■ッ！？』

魔物が驚くような反応をして大きく下がって離れた。

よく見てみると、その右前足は凍りついていた。

「無事か、小僧」

「ああ。……おまえ、氷の魔物だったのか」

感心するような意外なものを見るような、そんな判別しがたい声を上げながら、レヴァンは再び目の前の脅威を睨み据えた。

睨みつけたまま、手のひらに力を入れて開いたり閉じたりしてみる。レヴァンの手はあまりいい動きをしなかった。魔物の人外の怪力に腕がしびれていたのだ。

「……くそ」

自分にしか聞こえない程度に悪態をつくレヴァンに気づいたわけではないだろうが、ミグルスが落ち着いた声で尋ねる。

「……魔力は纏っているか」

レヴァンが首肯すると、ミグルスはフッと息を吹き出した。

「ならいい。アレに直接触ったら、腐るぞ」

そう言って前を向く。レヴァンも警戒を強めた。冥種が体勢を立て直したようだった。

相変わらず耳障りな音を立てて、突っ込んでくる。腐食特性を持った魔物――これを冥種（めいしゅ）と言う――には知能はない。シレンティアの一般常識である。

「おい、バカ犬」

「小僧、氷漬けにされたいのだな？」

額に怒りマークすら浮かべている隣の子犬の言うことを聞き流し、真剣な顔で続けた。

「アイツには力じゃ無理だ。真っ向から勝負するのは厳しい」

「……ふむ。ではどうする」

「だから――」
と、そこまでレヴァンが言ったところで冥種が仕掛けてくる。攻撃を受け止めることはせずに、避けざまに脇腹に鋭く蹴りを入れる。
『■■■■■■■！！』
魔力で筋力を強化した一撃はさすがに重かった。獣はバランスを崩し、ズザァァッと手ひどく倒れる。
それを確認してレヴァンは続けた。
「――だから、手伝ってくれよ」
「ほう……」
ミグルスが驚いたように声を漏らす。そして、「仕方あるまい」と首を縦に振った。
「よし、じゃあ――」
行くぞ、と言おうとしたところで、状況が一変する。悪い方へと一気に転がった。
金属をぶつけ合うような無機質な音を鳴らしながら、冥種は、
「■■■■■…ッ！」
レヴァンたちから離れていた、アミナを視界に捉えていた。
「……やばいっ！？」
レヴァンは迷わず飛び出した。が、魔物の方もアミナに向かっている。速度はほぼ同じ。しかしこのままではアミナが攻撃を食らってしまうだろう。レヴァンは自分の迂闊さに死にたくなった。
「アミナぁッ！！」
叫びも虚しく、冥種はアミナに到達した。
その爪が振り下ろされるのを見ながら、アミナは恐怖で動けないままその場で尻餅をつく。冥種の凶器はすぐそこまで迫り、そして――
鮮血が、紅の花びらのように散った。
しばらくしてから、意識せず閉じていたまぶたをアミナはゆっくりと持ち上げる。いつまでもこない痛みに不思議に思っていると、

目の前にいたのは冥種ではなかった。
「……こんなの、おいしいのかねぇ？」
左腕を切り裂かれた上、噛み付かれているレヴァンが、アミナを守る壁のように騎士のように足で踏ん張っていた。
「……あ、あぁ……」
アミナが声にならない声を出す。それと同時に、レヴァンも叫んだ。
「ミグルスッ！！」
その瞬間、アミナの体が震えた。恐怖ではない。単純にその場の気温が下がったのだ。
「我……氷の眷属……氷の末裔――」
驚くほど平坦な冷たい声音でミグルスがつぶやくと、その場の気温は突然ぐっと下がり、やがて、
ピキッピキピキ……――
『■■■ッッッ！？』
足のほうから魔物が凍りつき始める。
「行け、小僧」
冥種の身体を三分の二ほど氷で覆ったとき、ミグルスがレヴァンに止めを刺すよう命じた。レヴァンは小さく、しかしはっきりと頷くと、足を踏み出す。
「俺の腕なんて安いもんだ」
呟きながら、右腕を掲げるレヴァン。その腕に次第に蒼光が集まっていく。冥種は恐れるような反応を示し逃れようとするも、魔氷がその行動を制限する。
「でも、アミナを狙おうとするのは、やめろよ」
淡々と語るように言う。その間に右腕の蒼光は集まって圧縮するというのを繰り返している。それは触れた物を盛大に吹き飛ばすほどの力を内包していた。
「この怒りを全部テメエにぶつけたいけどな。仕方ないから、三割だけにしといてやるよ。だから――」

そう言ってレヴァンは腕を後ろへ引き重心を落とす。そして、ちょうど全身氷漬けになった冥種に向けて、
「――残りの七割はあの世で味わえッ！！」
全力で右拳を叩き込んだ。

リィィィ……ィィィィ……ン――――

衝撃は魔氷を貫き、体組織を凍結させていた冥種は氷と共に砕け散った。鈴のようなはかない音を響かせながら、粉々になったそれらは虚空へと消えていった。

あとに残ったのは静寂。そしてレヴァンの息切れの音だった。
突然訪れた静寂に、誰も動くものはいない。しばらくそのままの状態でいた後、最初に動いたのはレヴァンだった。と言っても、力の使い過ぎと安堵による筋肉の弛緩で膝をついたのだ。
「……レヴァン……ッ！」
慌ててアミナが駆け寄ってその身体を支える。ミグルスもレヴァンの方へと近づいたが、レヴァンの心配というよりも契約者の側に移動しただけという感じだった。
「大丈夫」
それだけ言ってアミナに微笑みかけるレヴァン。確かに息切れはしているが、辛そうな顔をしているわけではなかった。
しかし、アミナが心配するのは止めなかった。その視線はレヴァンの左腕に向いていた。
「……でも」
「大丈夫だから。だから――」
そんな泣きそうな顔するなよ。
レヴァンは困ったような顔をして無事な右手を動かそうとする。
しかしそのとき、左手に違和感を感じた。

ほとんど反射的にレヴァンが左手を見ると、
「っておいミグルス！　何してんだよ！？」
その左手は、傷の部分が丸ごと氷に覆われていた。そのすぐ隣でミグルスがこちらを見てきていた。
「何をとはなんだ。止血をしてやったのだろうが」
「……へ？」
「その程度の怪我は迅速に治せ。じゃないと――」
そこまで言ってふいっとミグルスは顔を背ける。
「――主が心配するだろうが」
そこには明らかに主への配慮以外の感情もこもっていて……
「……そうだな。ありがとう」
レヴァンの言葉を驚いたような顔で聞いた後、ミグルスは自らの主の後ろ、レヴァンにとっての死角へと回った。
それを見送ってから、レヴァンは泣きそうなままのアミナへと向き直る。
「……ごめん」
急な謝罪にレヴァンは驚いた。とっさに返事ができないレヴァンを待たず、アミナは続けて口を開く。
「……私、魔法で援護、すべきだった」
そんな暗い雰囲気をレヴァンはまず真剣な顔で受け止める。そして納得した。アミナが泣きそうなのは自分への心配だけではなかったのだと。
「……私、浄法院生なの、に。この時のため、魔法を習っているのに……」
アミナは自分を責めるような言葉を並べると、俯いてしまった。
レヴァンはしばらく何もしなかった。何をしていいかわからず、ただアミナを見た。しかし肩が小さく震え出したのを見ると――その肩を、レヴァンは優しくつかんだ。左腕が激痛を訴え、顔が痛みに歪んでしまったが、アミナに見られていないので良しとした。
「アミナ」

できるだけ優しく聞こえるよう声を出すと、アミナは顔を上げた。レヴァンはそれを確認すると、

「どうだ！　俺に惚れちゃったか？」

顔全体でにこやかに笑った。

「……え？」

呆気に取られた様子のアミナを無視して、続けて口を動かす。

「女の子を守るために身体を張る男の子。いやー俺ってかっこ良くなかった？　まあ、今ので惚れてしまっても仕方ないよ。うん」

途中からはアミナから目を逸らし、早口でまくし立てるレヴァン。そんなレヴァンを変わらずポカンとアミナが見ている。

「男の子の存在意義はここにあると言ってもいいと思うんだよね！　いやぁ、今のをいろんな子たちに見せられなかったのが残念だな～」

自然公園中に聞こえるほどの大声でレヴァンはにこやかな顔のまま話す。そしてそのまま、アミナの方へと顔を戻す。自分の左腕を指し示した。

「だから、これは名誉の負傷だよ」

「……あ」

驚いたような顔のアミナの目を、奥まで覗き込むようにして見る。そしてレヴァンは、

「……帰ろう？」

優しく微笑んだ。

とそこで、公園入口方面の少し離れたところからフンッと鼻を鳴らす音が聞こえてきた。

「なにが惚れてしまっても仕方ない、か。おぬしが惚れられるのなら、我は求婚されるに違いない」

「なんだって？」

眉をひそめてレヴァンがミグルスの方を見る。そのまま言い合い

を始めてしまう二人。そんなやりとりを、レヴァンの横顔を見ながら、アミナはつぶやく。
「……ちゃった、かも」
「ん？　どした？」
「……ううん、なんでもない」
アミナはすっと立ち上がる。レヴァンもそれに続いて立ち上がると、アミナはレヴァンをじっと見ていた。その顔はほのかな笑顔で、
「ほんとになんでもない？　なんか顔赤いぞ？」
「……うん。顔は赤い、かも」
そういってふふっとアミナは微笑む。レヴァンは「うん？　顔は赤いけど大丈夫？　どういうこと？」と一人首をかしげて悩み始める。
それをアミナは優しい瞳で見て、
「……レヴァン、置いてく？」
「うむ。それがいい」
「……って！？　いつのまにそんな離れたんだよッ！？」
いつのまにかアミナはミグルスと同じ位置まで歩いていた。そのまま踵を返す二人をレヴァンが追いかける。一応怪我人として扱って欲しいと思うレヴァンと、その一方で、
「……～♪」
アミナの足取りはややスキップ気味だった。

【1】-8　魔物の望み

「全員揃っているな？」
教官が一通り見渡して確認すると、よしとつぶやいた。
「知っている者もいるとは思うが、そろそろ対抗模擬戦の時期だ」
教官はそう言うと、黒板を使って説明を始めた。
対抗模擬戦は、各学年ごとで実践に近い形式で試合を行い優勝を争う行事のことで、通常の教育機関でいう体育祭のようなものだ。しかしこのときに良い結果を残すと、それに応じた成績をつけられる、というメリットもある。
「詳しくは廊下にでも貼り出しておくから見ておけ」
教官の説明後、こそこそと生徒たちが騒がしくなる。期待と不安が、五分五分というところか。これからの頑張りが直に反映されるので、気合が高まる生徒たちだったが、しかし、教官は生徒が喜ぶことをよしとしない人柄だった。
「まあ、おまえらの実力には期待していない。せいぜい足掻いてこい」
本人は激励のつもりだろうが、これで生徒たちのモチベーションは半減だった。
それをまるっきり第三者的な目で見るのは、レヴァン。フロルは緊張し始めたアミナを「応援してるからね！」とプレッシャーで追い詰めていた。
そんな様子を目に留めた教官が、思い出した、というように口を開いた。
「レヴァンとフロルも参加しろとの決定だ」
その瞬間、場が凍った。
レヴァンとフロルも驚きを隠せない様子で教官を見つめている。
他の生徒達の視線はレヴァンたちの方へ集中している。

「……決定って言いましたよね？　誰のですか……？」
恐る恐るといった感じでレヴァンが尋ねると、教官はサラリと答えた。
「誰って……監視者（モニター）だが？」
「監視者っ！？」
浄魔士を統括する存在であり、政府の議会と同等の権力を持つほどの人が？
そんな疑問を口にしようとしたレヴァンであったが、同時に気になることもできた。
「……フロル？　どうした？」
フロルがなにか嫌なことを聞いたように、眉をひそめていたのである。
「……ううん。なんでもないよ」
しばらくの沈黙の後にそう返すフロル。大丈夫なわけがないのだが、考えにふけりだしたようだったのでレヴァンは尋ねることが出来なかった。
そんなやりとりも生徒たちの目にさらされている。気にした途端、渋面を形づくってしまうレヴァンだったが、笑顔を浮かべている者もいた。
「……レヴァン、フロル、私負けない、から」
「あ、ああ。そりゃ俺たちも負けらんないな」
「う、うん。そうだね」
アミナの嬉しそうな声にフロルも現実世界へ帰還する。
とてつもなく微妙な空気に耐えられなくなる前に、教官は特に何もなかったように連絡を再開した。
「近々模擬戦も行われるため、この際、実習も形を変えることにした」
疑問符が飛び交い始めたその場を一喝して鎮めた後、詳しい内容を口にする。
「これからグループに分かれてもらう。メンバーは自由だが、上限

は五人だ」
　分かれろ、という言葉で席を立って生徒たちは戸惑いながらもグループを形成し始める。レヴァンたちはそのまま動くことなく座ったままだった。
「よし、分かれたな。登録してやるから、リーダーを決めて申請しに来い」
　全員教官の指示に従う。レヴァンたちのグループは、本人以外満場一致でフロルがリーダーに決まり、
「やだなぁ、そーゆーの」
　とかぐちぐち言いながらも、フロルは申告に向かった。
　教官は生徒たちの申告を聞きながら、同時に手際よく出席簿のようなものにその内容を書いていく。やがて、フロルも申告した。
「アイヤネンたちは二人でいいのか？」
　そう教官が言ったとき、その内容を理解したのは何人いただろう。
「やだなぁ教官。俺、フロル、アミナで三人じゃないですか」
　そうレヴァンが反論すると、その返事を待っていたかのようにすかさず教官は切り返した。
「ん？　おまえは人間じゃないからな」
「……いや、そうですけど」
　一瞬音を立てて固まった空気を、レヴァンが言葉をつなげることで緩和した。しかし、この教官の一言はギリギリであるとその場の全員がそう思った。
「冗談だ」
　そのため、教官のこの言葉はなんの助けにもならなかった。周りの生徒は気まずい顔をしたままである。
　しかし教官はそんなことを気にした様子もなく、口端をニヤリと持ち上げた。
「ま、劣等生を一人と数える気はさらさらないがな」
「ひどッ！？」
「文句言う前に、成績を残せ、成績を」

このやりとりに生徒の大半が苦笑し、幾分かいつもの空気を取り戻すのだが、
「レヴァン……」
「大丈夫」
心配そうに見てくる幼馴染を一言で収め、レヴァンは微笑む。それだけで、長年の付き合いであるフロルは追及するのはやめた。レヴァンにとってはありがたかった。
「そういうわけだ。各々切磋琢磨し、己を磨くように。以上」
時計を見て危機感が出たのか、強引に話をまとめる教官。実際のところまとまってなどいないのだが、教官に逆らえる者などいない。結局、そのまま終わってしまったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「はッッ！！」
烈帛の気合で放たれた相手の掌底を、手首を返す動きで軌道をそらしてかわす。最小限の力で洗練された防御だった。そのまま相手にできた隙を逃さないよう、指先を伸ばした突きを打つ。
「ッ！？」
驚愕とともに距離をとろうとする相手に、さらに詰め寄る。そして右の手のひらを広げ、掌底の形を作る。近過ぎる距離から強力な攻めは出来ないはずだった。
そう判断したのか、相手はその攻撃を防ぐ手を片手だけにし、もう一方の手でカウンターを叩き込もうとしているだろう。相手が力を溜めるのが分かった。
しかし慌てることなく、空いている手を肘に当てる。ここが狙い目だった。
「やぁッ！」
かけ声とともに肘にある手で、自らの肘へ掌底を放つ。その掌底は右肘を思い切り伸ばし、結果、

「……かはっ」
超近距離であるにもかかわらず、強力な掌底を放つことになった。そんな攻撃を片手で防ぐことなど出来るはずもなく、相手はバランスを崩す。そこにすかさず、
「私の勝ちだね、アミナ」
フロルはアミナの鳩尾へ拳を押し付けていた。
「……うん」
実習の時間。第一修練場にて。グループ毎に分かれて訓練をしていた。教えを請いたいときは自ら教官のもとへ赴くという仕組みで、これから実習の形式はこのようになるらしい。
招魔という「力」が生み出されてまだ年が浅いため、熟練した浄魔士が貴重なこの時代。そのため、教官は少ない。教える側の不足を補うにはちょうどいい方法であった。
「にしてもアミナ、強くなったよね。最初は私も少し手加減してたけど、今は必要ないよ」
純粋な感嘆を含んだフロルの言葉に、アミナは感謝で答える。
「……フロルの武術、レヴァンに？」
続けてかけられた質問に、フロルは目を丸くする。
「……よくわかったね？」
「……うん」
続けて、
「……私が強くなる、のも、レヴァンのおかげ」
とややうつむき気味でそう言った。不思議に思ったフロルがアミナの顔を覗き込むと、その顔は桜色になっていた。それを見てフロルがなにかを考え込む。
「……これは早急に対策を考えないと」
「……？」
「いや、うん。アミナは気にしなくていいからっ」
焦ったように取り繕うフロルに、アミナが逆に不思議そうな顔を向けたとき、周囲の気温低下とともに二人は残りのメンツのことを

思い出した。
その当人たちを見るといまだ修練の途中だった。
「小僧、右手の魔力が薄まっているぞ」
「くッ……！」
ミグルスが放つ氷の弾丸を、レヴァンが魔力をまとった腕で弾く。異なる個体の魔力は反発する性質があるため、魔力の皮膜さえあれば強力な魔氷といえども腕が凍りつくことはない。
しかし、デメリットもある。反発するということは、それだけ衝撃も強くなるということなのだ。うまく衝撃を受け流さなければ、腕を折ることもあり得る。そのため、怪我をしている方の腕はなるべく使わないようにしていた。応急手当の魔法で怪我は目立たない程度までふさがっていたが、回復したかと言われるとそうでもなかった。違和感がしばらく残るのだ。
しばらくそんな応酬を繰り広げ、体術に優れるレヴァンも次第に動きが鈍ってきた。
「どうした。先程までの威勢は虚言か？」
「……ぬかせ……ッ！」
言葉とともにレヴァンの動きが速くなる。それにミグルスは好戦的な笑みを浮かべると、
「……って、ちょ、おい！　これ、まじ、速す――」
加速したレヴァンが対応出来ないほど、氷弾の射出間隔を短くした。
じりじりと下がっていくレヴァン。ミグルスは間隔を緩めることはしない。
「……この……くそッ」
レヴァンは悪態をつくと、くるっと一回転。すると氷弾の一つがミグルスの方へと飛んでいく。絶妙な力加減と巧みな柔法で返したのだった。
「フッ」

驚いた様子を笑いで隠して、ミグルスはそれを避ける。レヴァンは舌打ちを鳴らす。
氷弾を撃ち落とし、ときたま反撃を試みるレヴァンに、容赦なく射出し続けるミグルス。それが長い間続いた後、目を細めてレヴァンを眺めていたミグルスがふと言った。
「小僧。基本魔力は操るものだ。操られるようになるな」
「……わかってるよ」
「同時に魔物の力そのものでもある」
氷弾を緩めて語りだしたミグルスに訝しげな視線を送るレヴァン。それに気づいたのかどうか。ミグルスは構わず続けた。
「この世の理を一部分にしろ改変してしまう大きな力。魔力というのは魔物が操るというその仕組み上、その個体の望みを叶えるとき、より大きな働きをする」
だからどうしたと言いかけるレヴァンを遮って、話は続く。ついには氷弾を撃つのをやめてから、その小さな黒犬はレヴァンの目をまっすぐ捉えた。レヴァンは意味が分からずとりあえず話を聞いていた。
「おぬしはその魔力で何を望む？」
だから、子犬が放った疑問の返事を、
「……」
レヴァンは言葉にすることが出来なかった。
「何の話してるの？」
「……訓練、終わった？」
「あ、ああ。終わったよ」
助け舟的なタイミングの二人にレヴァンはすかさずのっかる。ミグルスは呆れたような顔をして、その場から離れた。また他の生徒達に食べ物をもらいに行くのかもしれない。
その小さな後姿を見送ってから、レヴァンは思考を切り替えた。
「二人も組み手は終わったのか。どうだった？」
すると二人はお互いに不足していると思う技術について言う。

「私は足運びかな？　相手との距離がつかめないの」
「……体勢を崩されたときの対処」
二人に技術的な工夫を教えた後、レヴァンは精神的な指導もする。教育機関ではしないような方法であったが、少女二人には合っているようだった。
体術の訓練が一区切りつくと、次は魔法の訓練。フロルが教師役となって残りの二人に指導する――
「……フロル、寝不足か？」
はずが、レヴァンの疑問に進行が滞る。
「え、なんで」
「隈が出来てる」
自分の目の下を指し示すレヴァンにフロルは苦笑した。
「ちょっと夜更かししちゃって」
「魔法使うのに大丈夫か？」
魔法は失敗すると、爆発するという厄介さがある。それを含んだ質問だったが、フロルが「だいじょぶだいじょぶ」と気楽に言うのでレヴァンは心配をやめた。この幼馴染は滅多なことで失敗というものをしないのでそこまで心配していたわけではなかったが。
「それじゃ始めるよ～」
今日は光系にしよっか、と地面に模様を描いていくフロル。それは光系発散魔法の陣で、数秒ほど強力な光源を生み出すという目眩ましの魔法だった。
地面に描かれた魔法陣を見てまず動いたのは、アミナだった。
「……がんばる」
小さな手をぐっと握って気合を入れると、右手を宙空に掲げた。そのまま同年代平均以上の速度で地面のものと同じものを形作っていく。
そのまま危なげ無く描くこと数秒。やがて魔法陣が出来上がった。その瞬間、陣の中心に顕現する拳ほどの大きさの球体。それが突如強烈な光を生み出した。少ししてそれもなくなる。

一連の様子を見たフロルは、うんうんと頷いた。
「アミナ、よかったよ！」
ぐっと突き出した親指に、嬉しそうな顔でアミナは応える。しばしの間そのように喜びを分かち合ってから、
「じゃ、次はレヴァンね」
と、フロルはレヴァンの方へと向いた。しかし、レヴァンは、
「ッッッッッッッッッッッッ……！？」
目を押さえて地面を転がりまわっていた。
「……いったい何してるの？」
フロルが呆れたように、アミナが驚いたように目を丸くしている先で、レヴァンはようやく動きを止める。そのあと、呻くように、
「目がいてぇ……」
とつぶやいた。
「もしかしなくても、さっきのアミナの魔法をまともに見たの？」
「……だからどうした」
「光系魔法って言ったのに」
フロルが呆れたため息をついた。
「……大丈夫？」
「あ、ああ。悪い」
心配したアミナがレヴァンを助け起こす。礼を言って立ち上がったレヴァンとそれを心配のまなざしで見るアミナはもうすっかり仲良くなったようだった。
「始めるよ」
「……どうした、フロル？　なんかムッとしてるけど」
「……してないよ。早く準備して」
「わ、わかった」
何故か発生した威圧感に言葉をつまらせながらもレヴァンは準備する。
地面の魔法陣をよく見て大体を覚える。そして気合を入れ直すと、その指先に力を込めた。

「ってちょっと！　魔力多すぎ！」
「そ、そうか？」
言われたことを正すように集中して、続ける。
しかし、レヴァンが丁寧に描いていても、
「線が曲がってる！」
「わ、悪い」
……。
「魔力がまた濃い！」
「っとと……！」
……。
「円がゆがんでる！」
「まじかよ……ッ！」
……。
「もー、どれだけ間違ってるの」
一つ一つのプロセスで必ず注意が入り、時間もかかる。すでにアミナの三倍ほどの時間が経過していた。
そんななかでレヴァンもだんだんイライラとし始める。これほど神経を使うのはレヴァンの得意とするところではなかった。だから、
「レヴァン、もっと速くまっすぐ――」
「あああああ！　もういい！　俺には無理だッ！」
そう叫びながら腕を思い切り振り下ろすのも仕方ないといえば仕方ないのかもしれない。しかし、熱くなった頭は直後に一気に冷めることになる。
「「あ」」
フロルとアミナ。二人がつぶやいたのが聞こえ、何気なく自分の目の前に視線を戻す。先程までそこにあった魔法陣は未完成のままこの世の理を変えることなく役割を終え、すでに消失してしまったはずだった。
「……」
――だったのだが、そこにはまだ魔法陣が残っていた。客観的に

見てぐにゃぐにゃに描かれた上に、最後の一本は必要以上の力で引かれたため、それに引っ張られる形で形を歪めていた。そして最も重要なのは、魔法陣は手順だけで言うなら完成しているというところにあった。
魔法陣が光り輝き、
「えっと……」
描かれた魔法陣に沿って魔力が循環し、
「あの……」
しかし魔法陣の歪みから魔力が滞り始め、
「これって……」
そして、
「青春は爆発だっ！？」
反発する魔力どうしが反応を起こし、爆発を生じさせる。
最も近くにいたレヴァンは、迫り来る恐怖に意味不明な言葉を叫びながら爆発、爆風に飲み込まれていった。

「……怪我もしてないなんて。私もびっくりだよ」
「別に助けてくれてよかったんだけど」
驚いた顔をして覗き込んでいたフロルに、レヴァンは地面に転がったまま軽口を返した。爆発の直前、フロルはアミナの後ろへ隠れ、アミナは顕現して現れたミグルスが守った。今は、ミグルスが呆れ尽くしたような表情をして去った後だ。アミナも最初の頃のように過度に心配する様子はない。慣れてきたということなのだろうが、こんなことに慣れられても正直レヴァンは嬉しくなかった。
「……大丈夫？」
それでも心配してくれるアミナに、レヴァンは心を和ませる思いだった。
「ほら、大丈夫なら立った立った」

「お、おいっ、ちょっと……」
突然そう言うフロルに不思議そうな顔をしながらも、レヴァンは力を入れて立ち上がる。多少関節がきしむ感じがするが、動かす分には問題ないようだった。魔法の失敗をしてこれだけで済むということがすでに異常なことであるが、レヴァンの身体は頑丈であるのだった。
「なんか最近扱いが酷くないか？」
「そう？　そんなことないと思うけど」
感じることが思い過ごしかどうかは、レヴァンには判別できなかった。しかし、ここ最近のフロルがなにか変わった気がするのも思い過ごしとするのは難しい気がした。
「そ、そういえば、最近冥種が増えてるらしいね」
なぜか焦った様子のフロルの話題転換に、レヴァンの意識も現実へ戻る。そして、その話題が興味深いものであったため、へえ、という顔をした。
「そうなのか？」
「うん。なんか、シレンティアの周囲でけっこう目撃されるらしいよ」
冥種は浄魔士にとって最も危険な相手とされている。そのため、それが増加傾向にあるという知らせは、嫌な知らせ以外の何物でもなかった。
ふーん、と納得した様子のレヴァン。しかし、もう一人はそうもいかなかった。
「？　……なぜ、知ってる、の？」
「え？」
疑問で返すアミナに、予測してなかったのかフロルが聞き返す。
「……報道でそのニュース、入ってない。もしそれが、本当なら――」
ここで、少し考えるような仕草をした後、
「――物見塔（ものみのとう）の職員しか知らない、はず」

アミナが言うのと、フロルの顔色が驚愕に染まるのは同時か。
「……どういうこと？」
一人状況がわかっていないレヴァンの発言だったが、フロルにはさらなる追求に聞こえたようだった。
「え、えっと……わたし、実は物見塔に知り合いがいるの」
なぜかしどろもどろ気味に話すフロル。頷くことしかしないレヴァンと違って、アミナは何かを探ろうとするように、じっとフロルを見つめ続けた。その表情をひとしきり見て、
「……そうなの」
とつぶやいた。
「？」
アミナやフロルの変化についてはわかるものの、その原因が分からないレヴァンは口を出すことができない。
「んじゃ、さっきフロルが言ったことがホントなら、浄魔士が大変になるってことだよな」
だから、話を続けることに専念した。すると二人もそれに乗って話を続ける。
「うん。それに合わせてはぐれも増えるかもしれないって」
「……はぐれ」
話題が話題なだけに明るい声では話さないが、雑談感覚で話し続ける。そんななか、アミナがふとつぶやいた。
「……そういえば、あのときも」
「……ああ」
アミナが言っているであろうことを思い出し、レヴァンも声を漏らした。
「え、え？　何の話？」
一人だけ分かっていないフロルが、ものすごい勢いで食いついてきたので、レヴァンは大雑把に説明する。先日、はぐれに襲われたときのことを。
驚愕に染まりきったフロルの顔を見ればわかるとおり、はぐれな

んてものはめったに出会うことなどなく、最近問題視され始めたほどなのだ。
「ち、ちょっと！　それってかなり危ないことじゃない！」
驚愕がそのまま心配に変わったフロルが、大きな声で言う。そのおかげで周りで訓練している生徒たちがこちらを注視する。
「フロル、目立ってる」
「……ご、ごめん」
慌ててトーンを落とすフロルを確認して、今度はアミナの視点で説明を開始した。しかしその説明は、
「……とてもかっこよく、て」
とか、
「……冥種と互角に、戦ってた」
と、自分を褒めちぎるものばかりでレヴァンは照れ死んでしまいそうになった。
「……それで、レヴァン、助けてくれた」
そこで頬をさっと赤らめるアミナ。先程からの褒め殺しで同じく顔の赤いレヴァン。その二人を見て、
「……ふぅん」
フロルは大層不機嫌だった。しかし、すぐににっこり笑う。
「そんなことがあったんだ？」
「……フロル？　なんか目が怖いぞ」
思わず後ずさりするレヴァンに、フロルは深い笑みのまま自然な感じで腕を掲げる。
「訓練、しよっか」
フロルはそのままその手を動かし始めた。残るのは蒼い軌跡。
「……レヴァン、頑張って」
「ちくしょうッ！！　俺、なにか悪いことしたか！？」
本能と持ち前の反射神経で、レヴァンはダッシュでその場に背を向けた。

【1】-9　読書と夜間訓練

「死ぬ……」
「はは……ゴメンゴメン」
結局、数十個に及ぶ火球と鬼ごっこを繰り広げ、地面に力なく転がっているレヴァン。その訓練着はところどころ焦げて、ほつれていた。
「ほんと、どうしたんだ？　いつもの悪ふざけと違って力がこもってる気がしたんだけど」
「な、なんでもないよっ。それより、ほら、次は私たちの訓練を見てよ」
そういってフロルがレヴァンの手を引っ張って立たせようとする。納得がいかないながらもまあいっかと気持ちを切り替えて立つ。確かに訓練時間中だしな、と後付けでレヴァンは考えた。
「……お疲れ様」
「ついに心配してくれなくなったな」
アミナの変化を悲しく思いながらも、三人でいることに馴染んできたということでレヴァンは自分に納得させておくことにした。
「にしても、おまえら真面目だよなぁ」
レヴァンは体術の訓練のため再び柔軟運動をしている二人をぼんやりと眺めながら、その場つなぎで放った言葉だった。けれど、残り二人はそうは受け取らなかったようだった。
「……レヴァン、は？」
言葉を紡いだのはアミナだった。
「ん？」
質問の意味が分からずに、レヴァンは聞き返す。すると次はフロルが口を開いた。
「レヴァンは浄魔士になる気あるの？」
人間じゃないから浄魔士になれるわけないだろ。

笑って冗談っぽく言おうとしたレヴァンは、喉をつまらせた。フロルが予想以上に真面目な顔をしていたからだ。
アミナの方を見ると似たようなもので、それに加えどこか不安そうな顔をしていた。
その二人の顔を見て、先ほど自分が返そうとした言葉を聞きたいのではないとわかった。
レヴァンはふうっと息を吐くと、二人の目を真っ直ぐ見つめ返した。そして自分の考えを口に出す。それが二人の聞きたいことだろうと思ったから。
「……ああ。なりたいって思ってるよ」
それを言った直後、二人の顔がじんわりと赤く染まる。予想外の反応に、恥ずかしいのはこっちなのにとレヴァンが戸惑っていると、
「……二つ名、欲しい？」
アミナがおずおずといった様子で尋ねてくる。レヴァンはちょっと考えた。
「別に最高ランクになりたいわけじゃない。ただ、自分の知っている人を冥種みたいな奴らから守れたら、て思うよ。そのためには浄魔士になるのが一番だろうし。それに二つ名持ちって物見塔専属だったろ？　そうなると逆に自由に動けなさそうだ」
まあ、こんな化物には無理かもしれないけどね。
言葉を重ねていくうちにさらに恥ずかしくなって、そんな締め方をするレヴァン。しかし、それを見守る二人の顔は、とても優しいものだった。レヴァンが自分を卑下するとき、いつも一緒に悲しい顔をしていた二人は、ここにはいなかった。
「な、なんだ……？」
反応はその優しいまなざしだけで見つめてくる二人に、胸を掻きたくなるような気恥ずかしさを感じていたレヴァンだったが、やがてフロルが口を開いた。
「ほんとの化物はそんなこと思いもしないよ……」
「え……」

反応が追いつかないレヴァンにアミナは手を握ってきた。
「……レヴァンはレヴァン」
「……」
身体から力が抜ける。「あ、ずるい」という、空いてる方の手を握るフロルの声を聞く。
ああ、かなわないな……。そう思った。レヴァンはなにか話している様子の二人をこっそり盗み見るようにしてから、二人に聞こえないよう息を漏らすようにつぶやいた。
「……ほんと、俺は恵まれてる」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「俺の望み……」
虚空に向けてつぶやく言葉はその場に響いて、空気に溶けていく。
レヴァンはミグルスに言われたことを考えていた。
確かに自分が望むことに魔力を使うことは今までにほとんだなかった気がする。
ふーっと長い息を吐いて机に突っ伏す。今は講義の後、つまり放課後だった。修練場の整備かなんかで訓練も休みだ。
目を閉じる。訓練がなかったせいか疲れて眠ることはなかったが、だらける分には心地良いものがあった。
「……おせー」
待ち人がなかなか来ないことに呟きながら、顔の向きを変えた時だった。がらがらーと教室の扉が開く。
「おまたせ」
「遅いぞ、フロル」
講義が終わってすぐ手伝ってほしいことがあると残されたレヴァンが文句を口にすると、契約者の少女はゴメンゴメンと手を合わせ

て謝った。
「まあ、いいけどさ。で？　何を手伝えば？」
「とりあえず図書室についてきてよ」
「図書室？」
うん、と頷くとフロルはさっさと歩き始める。仕方なくレヴァンは図書室へと向かう。
校舎内にある図書室に着くと、フロルはどこからか取り出した鍵を使って入っていった。レヴァンも続くと、そこには放課後の静かな場所。利用者もおらず、司書の教師すらいなかった。
「今、職員会議があってて。この鍵は前もって司書の先生に借りてたの」
レヴァンの思っていたことに気づいたのか、フロルは説明をする。そのまま奥の本棚へと向かう。
「……あった」
何か探している様子だったフロルがそうつぶやくと、最奥から二番目のところにある本棚で立ち止まった。その棚には「特Ａ魔道書」という札がかかっていた。
「……特Ａ魔導書って閲覧禁止じゃなかったか？」
レヴァンがつぶやくとフロルは驚いたような顔を見せた。「そんなこと知ってるなんて……」となにやらふざけたことを言っていたので、レヴァンは無視した。
「無視、ひどい……。……私、先生から許可もらったの」
「許可？」
「なにせ学年首席ですから」
えへんと胸を張りながら言う姿に、レヴァンは反応しないようにしながら本棚にあるうちの一冊を手にとろうとした。
バヂッ。
「いつッ！」
「あ、気をつけて。魔力と反応するから」
「言うのおせーよッ！？」

静電気を強力にしたような電撃に灼かれた手をさすりながら、レヴァンはおとなしくフロルの後ろに下がる。本が嫌いになりそうだった。
フロルは何事か呟きながら、一冊、また一冊と重ねて持つ。手に持ちきれなくなると、そばにある机へ置いて、また本を取っていく。それを繰り返した。
何を手伝わせる気なんだ、とレヴァンは思う。自分の中にある魔力のせいで魔導書に触れられない。そんな状態で他に手伝うことがあるのだろうか、ということである。
「レヴァン、じゃこれを全部私の寮の部屋まで運んで」
だからこの台詞を聞いたとき、レヴァンは怒り狂いそうになった。なんとか心を落ち着けてフロルに言う。
「俺、触れねえよ？」
「これ使って」
そう言ってフロルが差し出すのは厚手の作業用手袋。
「直接は触れないけど、これならたぶん大丈夫」
ああそっか、と納得するレヴァン。さっそくそれをはめて積み重なった本を抱える。
「っと、これは多すぎだろ」
「ゴメン。どうしても必要で……」
そうしてフロルも少しばかり抱えた。
「寮に帰ってから研究でもしてんの？」
「うん」
それなら仕方ないか、と何かと寛容なレヴァンは歩き出す。この手の手伝いは初めてではなく、フロルの寮の場所はわかっていた。

「それでね、その娘が追い払ってくれたの」
「へー、凄い子もいたもんだ」
道中雑談をかわし、歩き続ける二人。今はフロルのルームメイト

の話だった。
「最初、知らない男の人達が来たときは怖かったんだけど、その娘のおかげでね」
寮は学校の敷地内ではないために、赤の他人がおしかける、ということはあり得るのだが、フロルが体験したのは犯罪一歩手前の時だったんだろう。
今のところルームメイトのいないレヴァンは、嬉しそうにルームメイトについて話すフロルを目を細めて見ながら歩いていた。
よっと、本を抱え直したとき、レヴァンは変なことに気づいた。
「ん……？」
熱くなっているような気がして、手のひらを見やるレヴァンだったが、
「……」
見た瞬間、思わず絶句した。
「どうしたの？」
立ち止まったレヴァンを見てフロルがそう尋ねてくる。レヴァンは、迷っている暇はないと判断し、正直に言うことにした。
「手袋、見てくれ」
「うん……？」
フロルが上体を傾けて可愛らしくレヴァンの手を見る。すると、
「……うわぁ」
手袋の表面が、溶けていた。
「うわぁ、じゃねえ！　なにが大丈夫だ！」
「いやー『たぶん』って言ったし」
「そんな問題じゃなくねっ！？　どうなってるんだよ！」
そんな間も手袋は少しずつ溶けていき、レヴァンの手のひらは熱を蓄えていく。焦るレヴァンを尻目にフロルは手のひらを見ながら、考察をした。
「……魔導書が反応してる。レヴァンは放出してるわけじゃないから――」

ぶつぶつとつぶやいた後、フロルは顔を上げた。結果を告げる。
「たぶんレヴァンの魔力保有量が多いから」
「解決のしようがない！？」
「ほら、急がないと手が丸焦げだよ～」
「冗談じゃねえッ！？　って、ああもう！」
先に走りだしたフロルを追いかけるようにして、レヴァンも走る。必死に悪態をつきながら走りながらも、その顔には滲み出すような笑顔が浮いていた。

「はは……助かった……」
「おつかれ～」
女子寮入口。その入口に息を切らしながら横たわる男子生徒は、それなりに注目を集めている。しかし、そんなことを気にするほどの余力はレヴァンにはなかった。
手袋が溶け始めるというハプニングの後、なんとか火傷を負う前に女子寮へとたどり着いた。女子寮の入口まで来れば荷物は寮の管理人が運んでくれるので、そこでレヴァンの役割は終了なのだった。レヴァンは顔を横へと向ける。そこに置いてある手袋は、ずいぶん手のひら部分の生地が薄くなっていて、あと少しで盛大に火花を散らしていただろう。
危機をともに乗り越えてくれた戦友を、丁重にたたみながらポケットへしまう。そしてレヴァンはこの危機を作り出した悪の権化の方へと文句を垂れた。
「ごめんって言ってるじゃない」
すでに開き直った様子の少女を見て、レヴァンはため息を一つ。まあいっか、と再び顔を上に向けた。
「女子寮の入口で大の字になっているとは。なかなかの強者だな、レヴァン」
声を聞いてビクっと震えた後、レヴァンは慌てて起き上がる。入

口のドアの前には、レヴァンの予想通り教官が腕を組んで立っていた。もはや言い逃れも出来ない気がするけれど、レヴァンは事実を伝えようと慌てて口を開く。
「い、いや、その、女子寮に来たのはフロルの手伝いをしていたからで――」
「そういえばアイヤネン、聞きたいことがあるんだが」
しかし、まさかのスルーだった。
「？　どうかしましたか？」
首をかしげて尋ね返すフロルに、教官は腕を組みなおして尋ねた。
「実習の時に気になったんだが……おまえ、いくつかの魔法陣いじってないか？」
「っ。どうして分かったんですか？」
え、そうなのか、と驚くレヴァンは二人とも無視して、会話を続ける。
「まあ、これでも教官だからな。効率のいい見事な改良だったな。誰かに教わったのか？　それとも独学か？」
「え、えーっと……母が……」
孤児院育ちのフロルに母はいない。そう思って「お、おい」と諌めようとするレヴァンだったが、
「ああ。あいつか……」
教官が納得するように頷くのを見て、驚愕するのだった。
「え、母を知ってるんですかっ！？」
フロルはフロルで驚いたらしい。教官はその反応を楽しむような表情を浮かべた後、さらりと告げた。
「まあ、なんというか……――」
「ち、ちょっと待ってください！　フロルの母さんっているんですか！？」
昔を思い出すような表情をした教官。さすがに黙ったままでいられず、レヴァンが教官に向かって尋ねると、「ん、ああそうか」と教官は説明を開始した。

「アイヤネンの父親は確かに亡くなっているが、母親は生きている。だが、仕事の都合で面倒を見きれなかったために、アイヤネンを孤児院へ預けていたそうだ」
初めて知る情報にポカンとするレヴァンに、フロルが申し訳なさそうなまなざしを送ってきた。それに心配ないよ、と意味を込めて返す。
「そ、そうだったのか……」
いまだ驚きが抜けないレヴァンに教官が声をかけた。
「ところでなんだが……」
「はい？」
「おまえ、大丈夫か」
質問の声色から教官の尋ねていることを察したレヴァンは、苦笑をして見せた。
「まあ、みんな怖がってるみたいですけど……フロルやアミナが相手をしてくれるので、心配はないですよ」
そう言ってからレヴァンはフロルの方をちらりと見やる。そのときにフロルの顔が火照っていたような気がした。
「そうか……」
そのつぶやきと共に、教官はレヴァンの顔を見た。しばらくの間それが続き、レヴァンが照れ始める頃、教官はレヴァンから目をそらして口を開いた。
「まあ、なんだ。……今度組み手でもするか」
「えっ！？」
その言葉を聞いて、なにか悪いことでもしたかとギョッとするレヴァンであったが、教官の表情を見て考え直した。教官は顔までそっぽを向いて、目をしきりに泳がせていた。真っ白な肌も心なしか血色がいいようだった。
「……ありがとうございます、教官。気を遣ってもらって」
「な、何の話だ？」
動揺しているような教官を珍しいものを見たという感じでレヴァ

ンが見ていると、その視線に耐えられなかったのか、
「ま、まあまた今度しごいてやる。訓練を怠るなよ」
そういって女子寮の奥へと向かってしまう。教官は寮監として女子寮に部屋をとっているのだ。
教官の見せた優しさにいまだ驚きながら、教官の去った方を見る。レヴァンが心のなかで感謝の言葉を送っていると、
「レヴァン」
「ん？」
「教官は、そ、その……こ、攻略対象外だよっ」
フロルが訳のわからないことを大声で言って、去ってしまう。
「……なんのこと？」
魔道書運んでやったんだからお礼ぐらいいってくれてもいいのに。そんなことをレヴァンは思うが、女子寮の入口に一人立ち尽くす男子という特異な状況にすぐに気づく。
まいっか、とひとり呟くと、レヴァンはその場を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

深夜。唯一開放されている第二修練場。
そんな明かりのない闇の中、風を切る音が響く。一人の浄法院生の青年が体術の訓練をしていた。
何もない場所で習得している型どおりに身体を動かしている。
その拳は空気を叩き、
その脚は空気を切り裂き、
手のひらも、拳から手刀、突きへと変わっていき、重心の高さも一つの動作ごとに異なっていた。その動きは決まった形が無いようでいて、同時に洗練されたものだった。
青年が一度動きを止め、場所を変える。修練場の端にある樹の近くへと移動した。
たどり着くと、一つ青年は深呼吸をした。そして力強く樹の幹を

蹴る。
　ガッという音とともに、その枝の持つ葉が結構な数、ひらひらと落ちてくる。その落ちてきた葉に対して、一つ一つ手刀を叩き込んでいった。
　そのまましばらく続くと、やがて葉は全て地面に落ちる。
その全てが半分ずつになっていた。
　青年は肩を軽く何回かずつ回すと、その場にあぐらをかいて座った。そのまましばらく心を落ち着ける。
最初、その闇の中で聞こえるのは呼吸音ぐらいなものであったが、時間が経つに連れて、それもだんだんと気にならなくなっていく。
それはまるで青年の存在が、夜闇に溶けていくようで――
「ふわぁ～あ」
　思わずといった様子で特大の欠伸をかました後、その青年――レヴァンはそのまま寝っ転がりたくなる衝動をこらえて勢いをつけて立ち上がった。
「あーやばい。すごい眠い」
　さっきまでの緊張した空気はどこへやら。何度目かの欠伸をかきながら、レヴァンは出口の方へと歩いて行った。
　深夜練習。夜目の訓練にもなるこれは、現役の浄魔士も好む修練の方法である。夜、辺りが静かになる時間帯にすると、集中力向上の効果も望めるのだ。
　レヴァンが深夜練習を好むのにはそんな深い理由があるわけではなく、落ち着いて身体を動かせるから、という一点に尽きるのだが。

　シャ……ン……シャラ……ン……――――

　と、そこで、レヴァンの耳に入ってきた音があった。
「ん……？」
　レヴァンはその音の方へと釣られるようにして足を向ける。
けっこう歩いた先、出口の脇で木が林立して傍からは見えにくくな

っている場所。そこには意外な人物の姿があった。
「……もう、一回」
「主、無理をするな。魔力を扱い過ぎると体に負担がかかる」
アミナとおそらくミグルスだ。おそらくというのは、闇の中で姿が見えにくいからだ。二人はなにやら技の練習をしているようだった。
レヴァンは声をかけようと口を開くが、アミナの横顔を見て口を閉じた。真剣な空気に水をさす真似は出来なかったのだ。
「……いく」
「うむ」
短い応酬の後、まずはミグルスに変化が現れる。ミグルスに冷気が宿ったかと思った瞬間、そこを中心に広がるようにして冷気がその場を支配した。しかし、アミナだけはその影響を受けていない。
『氷』の属性展開。
招魔の技能の一つで、戦闘を有利に進めるものだ。周りのエリアを自らの属性で占有し、相手の動きを制限、または自己の活性化を促すのである。
その後、アミナが動いた。指先に蒼光を灯し、この世の事象を書き換えようと素早く魔法陣を描く。しかし常とは違う方法で。
アミナは地面に陣を描いていた。
地面に描くといっても、掘り込むわけではない。魔法陣は地面より少し浮いていた。
レヴァンが頭の上に疑問符を浮かべていると、答えはすぐにわかった。というよりも、身を以てわからされた。
地面に描かれた魔法陣は単純な風の出現魔法。しかし、範囲に関する記述が広く設定してあった。レヴァンも巻き込まれるほどである。
そんなことを知りもしないレヴァンが魔法陣を見やると、魔法陣は自らに与えられた役割を遂行し始める。
その場に風が吹き荒れた。と、同時に、

「……やばッ！」
レヴァンが反射的にバックステップをすると、足を離したその地面が瞬く間に、
ピキピキピキ……――――ッ。
音を立てて凍りつき始める。
「……」
とんでもないことだった。アミナを中心とした半径五メートルは最低でも凍りつくというのには膨大な魔力が必要なはずなのである。
それと同時に、レヴァンは納得した。そのための風の出現魔法だったのだ。
属性展開した『氷』を風魔法で拡散、その効果を招魔の力及ばぬところまで届かせる。見事な連携である。
レヴァンは肌についた霜を振り払うと、一面雪景色になっているその中心へと目を向ける。そこには少し疲れた様子のアミナが立っていて、ミグルスが伺候している。その周りを見てみると、林立していた木々のうち中心に近い順に凍りついていて、一番手前の木などは表面がボロボロに傷ついていた。おそらく氷の粒が刃と化し、作用したのだろう。
ぺたん。
そんな擬音がぴったりといった様子でアミナが座り込む。それまで身じろぎもしなかったレヴァンがここでやっと動き出そうとして、
「いつまで隠れて見るつもりだ」
ミグルスがそう声を発する。その言葉に苦笑しながら、レヴァンは二人の方へと歩み寄っていった。
「……レヴァン？」
なんで？　というアミナの顔に経緯をざっと説明をする。深夜練習に来たこと。ふと聞こえた音に引き寄せられて来たことを。
この時わかったのは、聞こえてきた音というのは氷の粒と粒が奏でる音だったということだ。
「それで、さっきの技は？」

レヴァンが直球で聞くと、アミナは一旦口ごもる。こんな深夜に練習するぐらいだから、知られたくないのかもな、とレヴァンが考え直して、言いたくないなら、と言おうとしたとき、アミナの口が開いた。
「……これで、私も戦え、る」
その一言でレヴァンは察した。
アミナは自分が戦うための方法を模索していたのだ。その結果、出てきた戦い方がこの「広範囲属性展開」だったのだ。
確かにこれほどの大きさを展開出来れば、大体の敵を弱体化させることが可能であり、一方でミグルスはその範囲内では魔力の効率が上がる。幅広い応用が期待できるものだった。
その、理論で簡単に説明できても実行は困難な成果を目にして、レヴァンは、
「……そうだな」
目を細めて微笑んだ。
「どうだ。我の底知れぬ実力に足でもすくんだか」
そんないつもの調子で自慢げに鼻を鳴らすミグルス。レヴァンはその表情の中に主の成長に対する喜びのようなものを感じたので、軽く鼻で笑っておいた。
「ばーか」
「……む。主、コヤツには直接吹雪を浴びせるべきである」
そんなことを言いつつも、ミグルスは薄く笑ってレヴァンに背を向ける。その背中を見ていると、レヴァンは不意に言いたくなったことがあった。
「おい、アホ犬」
「……小僧、氷のオブジェにでもなりた――」
「お疲れさん」
「……」
さすがに予想外の言葉に目をまん丸にする。そんな黒犬の姿にレヴァンは心中で笑いを含ませた。

しばらくして、ミグルスはふん、と気を取り直すと、どこかへ去ってしまった。本当に自由な招魔である。
「……レヴァン、帰ろう？」
「そうすっか」
アミナに促され、修練場の出口へと足を向けるレヴァン。隣のアミナも何故か上機嫌で、暗闇ではあるが、楽しそうな雰囲気が伝わってくる。レヴァンはそれに首をひねりながらも、アミナと並んで歩いた。
なんだか今日の練習は充実していたように、レヴァンは感じた。

【1】-10　夜更かし

アミナと歩きながら、雑談を交わす。この時のアミナは口ごもることも、どもることもなく、普通に会話のキャッチボールが出来ていた。この調子なら他の生徒とも楽しく話すことが出来るのではないか、ともレヴァンは考えたが、口にするのはやめておいた。アミナが自分とフロルから離れてしまうのを恐れたのかもしれない。

自己嫌悪でやや落ち込んでいると、寮の入り口へとたどり着く。男子寮と女子寮の入口は共通である、というよりも、一つの建物の中で、男女に分かれているに過ぎなかった。しかし物理的な距離が近くとも、女子寮には教官がいるのでわざわざ禁忌を犯そうとする者たちは一人もいない。そのため、何の問題もないのである。

寮の入り口を抜けて、夜勤の受付係の人に帰ってきた旨を報告。そのまま階段を登る。

他の生徒達の邪魔にならないよう、会話は抑えて歩く二人。二階に上がるとそこには、男女共用のロビーがあった。

男女共用だけあって広い。いくつかソファが配置してあり、のんびりするには絶好の場所である。かくいうレヴァンも、入学してこの場所に訪れた際、それからしばらくの仮眠場所としていた。

と、そこで目の端に映るもの。レヴァンは意識せずそちらを見ると、一番隅のソファに一人の少年が眠りこけていた。見たことのない顔。赤黒い髪に浅黒の肌、訓練の後なのか訓練着はボロボロになっていた。そこに感じられる努力の大きさに感心しながら、起こすといけないと思ってレヴァンはそっと離れる。

ついでにこの場所が男子寮と女子寮の境目でもある。向かい合うようになっている男子寮入口と女子寮入口、その間には保健室の扉がある。

「……あれ」

アミナが不思議そうな声を上げて、レヴァンも遅れながら気づく。
その入口は消灯時間とともに締め切られるはずなのだが、開け放たれたままだった。この状況はあまりよろしくない。
「保健室の中を見て誰もいなかったら、先生に報告してくるよ」
「……レヴァンが偉いこと言って、る。明日は土砂降り」
「アミナっ！？　おまえまでそんな事言うなんて……」
レヴァンは不覚にも泣きそうになった。
そんなレヴァンの顔を見たのか、アミナはくすっと笑うと、
「……冗談」
「へ？」
「……レヴァンがいいひとっていうのは、知ってる」
レヴァンがポカンとしていると、見てこないの、と聞かれハッとして保健室の方へと目を向ける。
レヴァンには気配が感じられるが、そんなにあてになるわけではないので確認のために保健室に近づいていった。アミナも近づいていく。それを確認してから、なんとなくこっそりと保健室の扉から顔をのぞかせる。中にいるのは一人で、誰なのかというのは考えるまでもなく分かった。
「フロル？」
「……そう、みたい」
コソコソと話す必要はないのだが、雰囲気的にそうなってしまう二人。そのためフロルにはいまだ気づかれていない。別に脅かしたいわけではないので、普通に声をかけても良かったのだが、フロルはなにか集中しているようだった。
少しの間、フロルを観察した後、そそくさとロビーへ引き返す二人。
「んじゃ、アミナはもう寝たほうがいいよ。明日も大変になりそうだし」
「……レヴァンは？」
「俺？　そうだな……せっかくだから少しフロルと話していくよ。

連携技も考えたいから」
　アミナの「広範囲属性展開」を思い出しながらレヴァンは言ったが、何故かアミナは無表情気味になっていた。
　大丈夫？　と尋ねてみるとブンブンッと首肯したので、レヴァンはそっか、とだけ言って再び保健室の方へと向かった。あまりアミナを引き止めると疲れを残させてしまいそうだというレヴァンの気遣いである。連携技の練習は傍目にも疲れそうなものだった。
「……この気持ちは、なに……？」
　だから、アミナがそんなことをつぶやいた気がしたのも気のせいだろう、とレヴァンは考えた。

　名残惜しそうにアミナが去った後、レヴァンは保健室の扉を開ける。白で統一された簡素な部屋。脇においてあるのは清潔そうなベッドで、中央に置かれたこれまた白色の机。そこには集中してノートをまとめるフロルの姿があった。
「え、レヴァン？」
「よ」
　片手を上げて近づくレヴァンに、フロルは、なんで？　といった様子で見つめてくる。その視線を片唇だけ持ち上げて受け止めながら、イスを引き寄せてフロルの側へと座った。当然のように座るレヴァンにフロルは戸惑った表情を見せた。
「こんな真夜中にどしたの？　……ってそれは私も同じだけど」
　そんな台詞に軽い笑いで返しながら、レヴァンは机の上を見やる。保健室用として少し広めの机であるにもかかわらず、そこを埋め尽くすように本が置いてあった。そのすべてが魔導書である。
「これ、図書館で借りた奴？」
「うん。その節はお世話になりました」
　わざとらしく丁寧に言うフロル。返すレヴァンは苦笑いだ。手に感じた熱の感触を思い出したのだった。

ふうん、とレヴァンが魔導書の山を眺めていると、フロルが目で促してきたので、口を開いた。
「自主練の帰り。保健室の扉が開いてて気になったんだ」
「なるほどね」
「フロルは？　研究っぽいけど……」
レヴァンがフロルの手元をのぞき込みながら言うと、フロルは、当たり、といってからはにかんだ。少し疲れているようだった。
「これが寝不足の原因？」
「これだけじゃないけどね」
フロルは欠伸を一つ。やはり疲れが身体に溜まっているようであった。クラスメイトとしては早く帰って寝かせるべきなのであろうが、幼馴染の身として、それはするべきではないとレヴァンは思った。
「……何の研究か聞いていいか？」
てっきり部屋に戻ろうと促してくると考えていたフロルは、肩透かしを食らったような顔をする。二、三度瞬きをしてまじまじとレヴァンを見てから、フロルはほんの少し笑みを含ませて、自然に自慢げな声を出していた。
「結界、ていうのに挑戦してみてるの」
「結界……？」
「うん。最近、はぐれが出没するでしょ？　都市を冥種から守る手段が必要と思って」
「……なるほど。シレンティアをまるごと結界で覆ったら、侵入されることもないってことか」
そのとおり、と明るい声で言ってから、フロルは魔導書に目を落とした。
「……でも、全然思い通りいかなくて」
例えばこのへん、と考えをまとめたノートを指さすフロル。レヴァンがそれを追うと、そこにはなにやら複雑な幾何学模様と矢印が所狭しと描かれていた。

「……これ、教科書とかに載ってる魔法の構成図って奴？　どんだけ複雑なんだよ……」
「あー、うん。私たちが使う魔法の十倍くらい重ねてる」
魔法というものは、基本、簡単な魔法陣を複数組み合わせて用いられる。例えば炎を打ち出したいというときには、『火の出現陣』、『射出陣』の二つを最低でも組み合わせた魔法陣を描くのだ。
正式な浄魔士でも、使うのは三層式から五層式。それ以上になると、複数人で行使する大規模魔法陣がほとんどである。それにもかかわらず、フロルの描いた構成図には三十以上の陣が描かれているという。
聞くと、浄法院に入学してから構成を考え続けていたらしい。レヴァンは呆れたくなるのをこらえて、質問を重ねた。
「それで？」
「あ、うん。それでこの部分なんだけど――」
そう言ってフロルが指さすものがレヴァンには理解できなかったので、とりあえずうんうんと頷いていると、何故かフロルがじと目でレヴァンを見てから、説明をやめてしまった。
「……全く理解してないでしょ」
「……簡単にしてくれると助かります」
フロルが長いため息をつくと、結局、と言ってからレヴァンの方へと向いた。
「害獣の攻撃を防ぐための強度が足りないの。強度を増そうと思ったら、結界を分厚くしなくちゃだし……分厚くしたらしたで、都市の入口での開閉操作が出来なくなるし……」
困ったな、とフロルは顎をつく。意識せずなのであろうが、その横顔はかなり疲れている様子だった。レヴァンは自然と考え始めていた。
しばらくして、レヴァンが顔を上げる。どうすればいいの、とつぶやくフロルに向かって声をかけた。
「……なあ」

「ん？　なに？」
「それって強度を増さなきゃだめなのか？」
え、と小首を傾げるフロル。わけがわからないといった顔である。疲れているせいなのか、普段見ないようなその姿を見て、レヴァンは、
「い、いや……その、な……」
不覚にもドキッとしてしまっていた。
それを振り払うように咳払いをしてから、レヴァンはもう一度考える。自分がおかしなことを考えてないか確認してから、続けて口を開いた。
「そ、その攻撃を受け流すようにして防ぐというのは、ど、どうでしょう？」
……全然振り払えてないっ！？
自分で自分に驚愕しながら、何故か丁寧語で答えてしまったことにレヴァンは恥ずかしさを覚えた。幸いなことに何かを考えているフロルには気づかれていない。レヴァンは顔から赤みを取るように手で扇ぐ。
しかし、フロルが考える時間が過ぎていくたびに、レヴァンは不安になった。魔力についての知識は、身に纏えるにもかかわらずほぼゼロなので、体術で使う技法を思い出しながら言った考えなのだが……
「……いいかも」
「へ？」
小さくつぶやいたフロルが何を言ったのか聞き取ろうと、レヴァンが耳を近づけたのが失敗だった。フロルは元気よく顔を上げ、結果目の前にきたレヴァンの耳に大声で言った。
「その考えいいよ！　レヴァン冴えてる！」
レヴァンは頭の中でグワングワンと響く賛辞に、「そ、そっか……」とだけ答えた。
「そっかそっか。受け流すようにして、か……。あ、それならこっ

ちの方も――」
　そう言ってまた最初のようにノートにのめり込むフロル。そんな様子にレヴァンは「うわ、これは当分このままだな」と言いながらも優しい笑みを浮かべた。明日も早朝からある訓練に備えるため、フロルの邪魔をしないよう保健室を後にしようとした時だった。
「あ、レヴァン」
「ん？　どした？」
「もちろん手伝ってくれるよね？　まだまだ参考意見聞きたいし」
「……了解いたしました」
　寝る時間は出来そうにないな、と半ば諦観の面持ちでそう思うレヴァンは正しく、フロルに付き合うようにして、レヴァンは保健室で夜を明かすという貴重な体験をしたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「エルゼ・サウスオール様が来られました」
「そうですか。わかりました。入ってもらってください」
　凛とした声が指示を出すと、報告をしてきた塔の職員は一礼をしてから、部屋――とはいってもホールのような広さを持つのだが――を出て行った。それを見送ってから、指示をした者は自らが腰を落ち着ける豪華なイスの中でワクワクとし始めていた。
　ホールのような場所。しかし、用途はホールとしてのそれではなく、謁見の間と呼ばれるべきものだった。飾りっけのない殺風景な壁や天井。その部屋に存在する家具の色のほかは、全てが白色に塗りつぶされていた。そこはなんとも言えず、寂しさを覚える場所だった。
　その部屋の主、中央奥に座る女性が柔らかな桃色の髪を揺らしながら、今か今かと待ちかねていると、やがて部屋の荘厳な扉が重々

しい音を立てて開いた。
「監視者（モニター）。ただいま参上いたしました」
入ってきた女性は、膝をついてから業務的な透明色の礼をする。
それを見て、監視者――イレーネ・セイレンは子供のような笑顔を見せた。
「そんな呼び方しないでって言ってるじゃない」
「しかし――」
「しかしもお菓子もないの。私とエルちゃんの仲じゃない。ね？」
イレーネのまるで友達とでも話すかのような口調にエルゼは跪いたまま、ため息を漏らした。
「……私もその呼び方をやめろと言わなかったか？」
すっかり口調を普段のものに戻すと、立ち上がる。その立ち姿はもう、浄法院で教鞭をとる常の威厳を宿らせていた。
「う～ん、やっぱりエルちゃんかっくい～！」
「……やはり変える気はないか」
やれやれと肩をすくめるエルゼ。そういえばコイツは昔からそうだったな、と昔を少し思い出した。
しかし、すぐに意識を戻すと、エルゼは本題へと話を戻す。
「それで何の用だ。わざわざ呼び出すということは重要なことなんだろう？」
急かすように口を開く旧友に、相変わらずだなぁ、とイレーネは淡く思い出し笑い。それもほどほどに少し真面目になって、話を切り出した。
「資源車が昨日到着してね」
「どこのだ」
「第三鉱山。それで、奥でこんなモノが見つかったらしいのよ～」
そう言ってイレーネが指さす先には台座に置かれた一つの宝石。
その見事な大きさと美しさには他に例を見ないだろう。
蒼玉（サファイア）か、と思ってよく見てみると、エルゼの直感は他のものまで知覚した。

「これは……魔力、か……？」
「正解。ちなみに魔物数十体分の魔力が生み出されているわ」
宝石が魔力を帯びているという事実に心のなかで驚愕しながらも、エルゼは今のイレーネの言葉を反芻していた。
「……生み出している、とはどういうことだ？」
「そのままの意味よ。宝石からは放出している魔力を感じられる。でもその分また新しく魔力が生み出されているわ。どうなっているのか、私にもさっぱり」
真面目になった声音でそう返した後、肩をすくめてみせるイレーネにエルゼは内心驚いていた。
「魔法の第一人者であるおまえが、わからないとはな」
「……別に私が現代の汎用魔法を生み出したわけじゃないわ」
一瞬かすかに見せたイレーネの悲しげな顔に、エルゼは何を言っているんだという意味を込めて眉をひそめてみせる。しかし、イレーネが微笑みで返したことでその応酬は終わった。とりあえず、エルゼの方から質問を出す。
「それで？　研究者共に預けるのか？」
「いいえ。しばらくは厳重に保管して、様子を見ようと思うわ」
「まあ、それが妥当だろうな」
エルゼが鼻を鳴らすと、イレーネは「エルちゃんに褒められた～」とやんわり笑った。やれやれと満更でもなさそうに薄く笑うと、エルゼは壁にもたれた。
「それとね、今度はエルゼ教官に連絡～」
わざわざ教官を付ける意味はあるのだろうかとエルゼが疑問に思う前に、イレーネは困ったような顔をした。
「なんだか最近、というか昨日からなんだけど……冥種が増えてきてるみたい」
「……それは、シレンティアの外か？」
「うん。……あ、別に近いわけじゃないのよ？　半径十キロの監視圏内でね」

だから、エルちゃんは浄魔士の人たちに伝えておいて、とイレーネは頼んだ。
「そこは監視者が連絡を回すべきじゃないのか？」
「だって私、説明するの苦手だし。エルちゃんの方が上手なんだもん」
毎度のお願いに、仕方ない、と嘆息するエルゼ。
「やった～。エルちゃん、愛してるぅ」
「そんな愛情は願い下げだ」
えー、と悲しい顔を作るイレーネを流してから、エルゼは浄法院に通う生徒たちについての話をした。浄法院の卒業者は、九割近くが浄魔士関連の方へと進むため、自然、イレーネに報告する義務が発生するのだ。目の前でぽにゃんとした笑顔を浮かべているのは、国家最高権力者なのである。
「今年は今年でなかなか面白い者たちだが……まだまだだ」
「ふぅん。その割にはエルちゃん、楽しそうだね？」
「そんなことはない」
中身のない否定に、イレーネは笑いを含ませる。と、そこで思い出したことをイレーネは口に出した。
「そういえば、この前中央の自然公園で起こったこと覚えてる？」
「ん、ああ。冥種目撃情報のことか？　しかし、浄魔士が駆けつけたときにはすでに姿はなかったが……」
誤通報だ、という結論になっている出来事を思い返しながら、エルゼは口に出す。そんなエルゼを見て、イレーネはニヤニヤと笑いを浮かべた。
「その事件、解決したのは淡い水色の髪の青年らしいのよ～」
それを聞いても眉一つ動かさないエルゼ。ただ小さく、「……そうか」とだけつぶやいた。
怖くなるような無表情であったが、イレーネはその口元が一瞬吊り上がったのを見逃さなかった。やっぱりかー、とつぶやいた。
「エルちゃんの生徒？」

「何のことだかさっぱりだな」
そうやって嘯くエルゼに微笑みかける。
ちょうどそのとき、重々しい扉が開いて塔の職員が失礼します、と礼をしてから入室してくる。どうやら次の予定まで時間が無くなっているようだった。イレーネは楽しそうに、あるいは名残惜しそうに口を開いた。
「では、これからも浄法院の教官として頑張ってください。お願いしますね、サウスオールさん」
「お任せください、監視者」
その言葉を最後にエルゼが背を向けて、扉の方へと歩いていく。扉でイレーネに対し一礼をすると、職員に促されてその場を後にした。
イレーネはその背中を最後まで見送っていた。

【1】ー11　突然の訪れ

明るい日差しに目を細めながら、レヴァンは道を歩いていた。浄法院の敷地内、校舎と各場所をつなぐ連絡道である。道の両端にはレヴァンが知らないような木が植えてあり、ちょっとした並木道になっている。

爽やかに抜ける風が木の葉を揺らし、それが柔らかな陽光を反射して心洗われるような景色を生み出していた。

しかし、そんな風景と心情が一致しているかと言われれば、必ずしもそうではない。

「最近教官が厳しくなった気がするのは気のせいか……？」

「なんか気合入れてるって感じだよね～」

「……楽しそう、だった」

げんなりと歩いているレヴァンを挟むようにして、にこやかなフロルとアミナ。アミナは顔に感情をあまり反映させないため、にこやかかどうかは疑問ではあったが。

「それにしてもいい天気だよな」

長い間続けたい話でもなかったので、レヴァンが話を逸らす。フロルもアミナもそれが分かって、苦笑を隠しきれない様子であったが、二人とも話を合わせた。

「確かにね。気持ちいいよ」

フロルはうんっと背伸びをしながら、

「……眠くなる」

アミナは目をこすりながら、そんなことを言った。その二人の反応にレヴァンは、そうだ、とひらめく。

「どうしたの？」

尋ねてくるフロルに、レヴァンは考えついた意見を言ってみることにした。

「昼寝をしよう」
ちょうどこの後には授業の予定はない。そして、連絡道をもう少し先に行ったところには中庭があり、そこの芝生は寝転がるのにちょうどいいのだ。
そう思って言った台詞だったが、フロルはがくっと肩を落とす。はて、とレヴァンは疑問に思う。それに応えるようにフロルは口を開いた。
「……いまここを歩いてるのはなんのため？」
「そりゃおまえ、中庭に向か――」
「違うから！　今から訓練でしょっ！」
そうやって声を張り上げるフロルにレヴァンは口を尖らせて言った。
「だって訓練っていっても自主練だろ？　ほんと真面目だな」
「真面目になってよ！？　もう……ほんとテキトーなんだから……。アミナからもなにか言ってあげて」
フロルはアミナの助力を請おうとする。あ、ずるいぞ、とレヴァンが言う先で、アミナはぼんやりと考えるようにしていた。
「……昼寝、魅力的」
「アミナっ！？」
予想外の裏切りに戸惑いを隠せないフロル。それに勝ち誇った様子を見せたのは、レヴァンだ。
「はっはっは。観念するんだな。これで今からは昼寝タイム――」
胸をはって言い切ろうとしたそのとき。
レヴァンの視界の端に何かが映った。
なんだ？　と思う間もなくその何かはレヴァンの視界に極力入らないように高速で近づく。フロルもアミナもまだそれに気づいていない。
そして、レヴァンは反射的に腕を掲げていた。その手のひらには蒼光。そして――

ガッキィィィィィッとすさまじい音が訪れ、直後静寂が支配した。

その音で遅ればせながらフロルとアミナも事態に気がつく。レヴァンが襲撃を受けたのだ。しかし、遠距離からではない。超至近距離だ。

二人がレヴァンの方を向いたとき、そこにいるのはレヴァンだけではなかった。

「ほぉ。魔力の装甲ってか」

「おまえ、誰だ」

襲撃者が手持ちの得物で襲いかかり、それをレヴァンが魔力を帯びた右手で受け止めているという構図だった。赤黒い髪に鋭い目。半袖の道着といった感じの訓練着を身につけている。丈夫そうな筋肉がついているが、ガタイが大きいわけではない。無駄なく引き締まった身体に、レヴァンは熟練の使い手と察した。どこかで見覚えがあるような気もしたが、今は考えないことにした。

しかし驚くべきは、襲撃者の持つ武器だ。あれだけすごい音を立てたにもかかわらず、その手にあるのはただの木刀だったのである。

「名前か？　そんなこと自分で調べろ」

「……そうかよ」

驚いたことに若々しく、見る限りレヴァンとさほど変わらない年齢を思わせた。言葉を掛けあってから、互いに勢いをつけて離れる。一気に距離を作ったところが、二人の戦闘慣れを表していた。

「レヴァン！」

二人が離れたところを見計らって、魔法陣を描きはじめるフロル。レヴァンが離れてからということは、強力な攻撃魔法なのだろう。普段以上に速いその展開速度は並の浄魔士を上回るほどだった。

襲撃者はそれを一瞥すると、

「うわ展開速いな、おまえ。本当に院生かよ？」

そう言ってから動いた。姿が霞むほどの加速をかけて、あっとい

う間にフロルとの距離を詰める。
「え……？」
フロルが呆然とし、その後ろでアミナが驚愕する中で、レヴァンが止めに行く間もなく、襲撃者はその木刀を振るった。
その木刀は風を鋭く斬りながら、そのまま展開途中の魔法陣を真っ二つに引き裂いた。
未完成で魔力の循環を始めていなかった陣は、形を引き裂かれたことで空中に溶けるようにかき消える。
「……展開妨害（マジックリベル）」
敵の魔法陣が完成する前に、その形を乱すことで魔法陣を無効化する技術。そんなとても高度な身体能力を必要とされるものが目の前で行われていた。
「てめぇらには危害は加えない。だから手を出すな」
そんなことを言った襲撃者に対して、敵意をあらわにする少女二人。しかし、二人が睨みつけていると、
「そいつの言うとおりにした方がいい」
レヴァンが常より真剣な声で口を開いた。フロルとアミナは迷うような素振りを見せるが、自分たちが足手まといになる状況もありうると思いなおした。
二人が襲撃者に警戒を向けたまま離れていくのを見て、その襲撃者は満足そうにしていた。
「二人が賢くて助かるな。……あれ、てめぇの連れか？」
「あれとか言うな。……そうだよ」
レヴァンが警戒色の濃い声でそう答えると、謎の襲撃者はそうか、と考え始めた。すでに話が聞こえるかどうかというところまで離れている少女二人を見て、ふむ、とうなずいたかと思えば、
「どっちが本命だ？」
意味のわからないことを問いかけてくる。
「……はぁ？」
思わず気を抜いたレヴァン。そこを狙って攻撃することもなく、

その赤髪は至極真面目な顔をしていた。
「二人とも美人じゃねえか。どっちか狙ってんだろ？」
さも当然という感じで確信しているような赤髪の様子に、レヴァンは心の底から答えた。肩をすくめて、
「いや、そんなんじゃないし」
「……は？」
嘘だろ？　といった顔をした赤髪を呆れ気味に見ながら、レヴァンはもう一度頷いた。
「あんなに可愛いのにか？　……ち、男色家かよ」
「それは否定させてもらうッ！！」
「まあいい」
「スルーッ！？」
心の雄叫びをあげるレヴァン。このまま不名誉なレッテルを貼られたままでは困る。そんな事を考えるレヴァンを、襲撃者である赤髪は見据えた。レヴァンがその目を見返すと、その眼には、
「わりーな。命令には逆らえねぇ」
温度が感じられなかった。
「……命令？」
「テメエを叩き潰せってよ」
レヴァンの漏らすような疑問に即答すると、赤髪は勢い良く地面を蹴った。襲撃者は二歩でレヴァンとの距離を詰めると、そのまま逆袈裟の要領で木刀を跳ね上げてくる。
レヴァンは半身を反らしてそれを避けると、そのまま回転して回し蹴りを赤髪の後頭部に放つ。赤髪は前へと跳んでそれをかわす。
再び距離を取る二人。
「くそ、やるじゃねえか」
「そっちも」
赤髪は口元をつり上げて嬉しそうに、レヴァンは眉をひそめてめんどくさそうに声をかける。
「んじゃ、そろそろ終わらせてやるか」

そう口にした襲撃者のほうが息を整え終わったところで、空気が急に張り詰めた。敵が本格的に殺気を発したのだ。
皮膚が粟立つ感覚に眉をひそめながらも、レヴァンは目を離さない。目を離すと次の瞬間には命がない、なんて状況もありうることを何故か知っていたからだ。とりあえず相手の集中を乱すためにレヴァンは口を開いた。
「俺はやられたりしないって。それよりもおまえの方こそ――」
と、そこまで言った時だった。突然、襲撃者が横に吹っ飛んだ。
「――……え？」
少し遅れてレヴァンは呆然となる。あの赤髪が自ら横に跳んだのではない。強烈な衝撃が横から赤髪を襲ったのだ。そして、その衝撃を発したであろう人は、
「貴様ら、ここで何しているんだ？」
エルゼ教官だった。
「え、いや、なにしてるって言われても……」
途端に言い淀むレヴァンを興味深そうな目で見ながら、教官は自らが吹っ飛ばした少年の方へと目を向ける。倒れたままピクピクとしている赤髪のもとへと近づくと、
「原因はこいつか」
そう言って、その襟首をつかむ。
「……っつ、いてぇ。誰だよ……」
自らを吹き飛ばし、現在自分の首の部分をつかんでいる者を確認しようと、赤髪が首だけで振り向いた時だった。
「……って師匠！？」
レヴァンは聞き捨てならないことを聞いた気がした。
「レヴァン、こいつがいきなり襲ってきたってことで間違いないな？」
「え？　あ、はい……」
なんで知ってるんですか？　この疑問は心の内にしまっておくことにした。教官はそうか、と言ってから赤髪の襟首を後ろ手に引き

ずり始める。
「来い。何処の誰かは知らんが、楽しい目にあわせてやる」
「はあ？　ちょっ待てよ師匠！　話がちげぇ！　コイツをやれば一人前として扱うって話じゃ――」
一生懸命反論する赤髪であったが、虚しくも引きずられていくだけ。なんだか実習の時間の誰かを見ている気がした。
「……なんだったの、あれ？」
危険な空気が感じられなくなったからか、いつのまにかフロルもアミナも側に来ていた。「……レヴァンみたい」というアミナの言葉を訂正させ、レヴァンも教官たちが去った方を疑問符の浮かぶ表情で見続ける。なんとなく事情はつかめたものの、あの赤髪の正体は謎のままである。訓練着らしきものを身につけてはいたが、浄法院の生徒ではないことは確かだ。
しばらく考えた後、レヴァンはくるっと身体の向きを変えた。
「ま、どうでもいっか。それよりも早く行こう。昼寝の時間が――」
そう言いながら歩き始めた時だった。レヴァンの口が止まる。ポカンと開いたまま、教官が向かった方と反対を向いて固まっていた。
その視線の先には、一人の少女。
陽光をキラキラと跳ね返す薄金色の髪。くっきりした目鼻立ち。スラリと伸びた足と、全体的に華奢な印象を与える身体。一言で言うなら、とんでもない美少女だった。
きょろきょろと何かを探している様子の少女がこちらに気がつくと、小走りで走り寄ってくる。
「すみません、少しいいです？」
「は、はい……？」
本能的に緊張してしまうことにレヴァンは自分で恥ずかしく思っていると、金髪の少女は綺麗に微笑んでから、尋ねてくる。
「このあたりに赤い髪の、目つきの悪い人がいませんでした？」
その質問を何度か反芻するレヴァン。提示された特徴が、とても覚えのある物だということを自分の中で確認してから、レヴァンは

頷いて返した。
「それっぽい奴なら見かけましたよ」
「本当ですか？　どっちへ向かったか、分かります？」
「あっちの方です」
レヴァンは教官が去った方を指さす。
「あー、そうですか。ありがとうございます」
それでは、と丁寧にお辞儀をしてから、その少女は場を後にする。去り際に微笑みを残していくのも忘れずに。
レヴァンはしばらくぼーっと見惚れていた。周囲への注意を疎かにするこの状態は、レヴァンにとってかなり珍しいことだった。
だから背中に刺さる二つの視線に気づくのが遅れた。
「……何見てるの」
そんなフロルの言葉にハッとなり、
「……えっち」
「なんでっ！？」
アミナの言葉にツッコミせずにはいられなかった。
「発情するな、小僧。躾がなってない」
「いきなり現れたな、おまえ……」
ミグルスがいつのまにかレヴァンの足元に顕現していた。自分が見下ろしているにも関わらず、見下されているように感じてしまうミグルスの視線。レヴァンははあっと息を一つ吐き、自分の調子をリセットした。
「よし、行くか」
心機一転。そう言ってから歩き出すレヴァンの後ろから、
「あ、逃げた」
「……逃げ、た」
「敵前逃亡か」
三者三様異口同音でハモったのを、レヴァンは聞かなかったことにした。

ぶーぶー文句をいうレヴァンと心なしか肩を落としたアミナを有無をいわさずフロルが引き連れ、結局三人は訓練へ参加した。
その途中、フロルとアミナが組み手をしている最中に他の生徒の失敗魔法が発動し、目的を誤った追尾性雷撃の槍が辺りへ散開する。
そこで迷わず発動されたフロルの囮魔法――最難と言われている行動干渉を行い、対象物の目的を強制的に移すというものだ――によってそのほとんどがレヴァンの方へと向かった。
「ちくしょうッ！」
そう叫んで必死に逃げる姿は、いつかの実習を皆に思い出させるには充分だった。

【1】ー12　望まぬ力…のちに編入生

「……くそぅ」
「……治癒、覚えたほうがいい、かも」
自習の時間が終わり、本日の下校時間。
アミナが心配そうな目を向ける先にはいつものようにレヴァン。軽い電撃を受けて今の今まで地面に倒れ伏していたのだった。
「……帰ろう？」
アミナの言葉に頷いて、レヴァンはよっと立ち上がる。攻撃を受けたにしては軽快なその動きにアミナは軽く目を見張っていたが、レヴァンはそれには気がつかなかった。
それぞれ更衣室で制服に着替えてから、荷物を置いたままなので教室へと向かった。
「そういえばフロルは？」
「……教官から、呼び出し」
「そっか。めずらしい」
何かを考え始めたレヴァンだったが、ま、いっかとすぐ考えを放棄した。アミナは不思議そうな顔をレヴァンに向けた。
「いや、なんでもないよ」
そう言って一人で教室へすっと入っていってしまう。アミナはその後ろを追いかけるようにして教室へと入った。すでに誰もいない教室で、それぞれ自分の荷物が入ったロッカーの方へと向かう。
鍵をガチャガチャと開けてから、レヴァンは中にあるものを取り出した。カバンとほんの少しの教科書と、
「……」
あとはノートの切れ端。
そこに走り書きされていた内容を読んで、ため息をつく。その後、レヴァンは口を開いた。
「あー、悪いアミナ。先に帰ってくれないか？」

「……？」
「ちょっと用事ができてさ。埋め合わせするから」
眉をひそめながらもしぶしぶ了解してくれる少女に、レヴァンは手を合わせて謝罪の念を送った。
「……ん。また、明日」
小さく手を振ってからアミナが教室を出て行ったのを確認してから、レヴァンもふーっと息を吐きながら立ち上がる。そのままどことなく重い足取りでレヴァンもまた教室を出たのだった。

場所は屋上。朝降った雨が、今ぐらいの時間になるとちょうどいいくらいの気温を保ってくれていた。少し強めに吹く風も、許容範囲内。思わずのんびり昼寝をしたくなるような好条件だ。放課後に屋上に呼び出されるというシチュエーションは期待を持ってしまう者もいるのだろうが、レヴァンの心中は空が全く見えないほどの曇天だった。こういった呼び出しは最近レヴァンにはよくあることだった。
「来たか」
さらに深く肩を落としてから、レヴァンは声がした方を向く。屋上入口からすこし離れたところ、そこには複数の男子生徒がいた。学年はよくわからない。
「わざわざ来てもらって悪いけどさぁ……」
そう言って複数のうち一人がゆっくりと近づいてくる。それをレヴァンは感情のよく分からない冷めた目で男子生徒を見ながら、話の続きを待った。
「俺、アイヤネンさんやスピノラさんと仲良くしたいんだよねぇ……」
よく見るとその少年はピアスをつけたり、真っ白の髑髏を模した趣味の悪い腕輪をはめていたりしていた。確か校則で禁止されてた

ような……腕輪はいいんだっけ、とレヴァンは呑気なことを考えていた。
「んで、君邪魔なんだよねぇ～」
ヒヒヒ、と笑う姿はあまり楽しそうには見えなかった。後ろでおそらくは待機をしているだろう者たちも同じように笑う。ひひひ。ヒヒヒ。
へえ、とレヴァンは頷く。話の内容がわかったわけではなく、話の区切りのような雰囲気だったので打った相づちだったのだが、
「はぁ？　ほんとに聞いてんのか、おまえ？」
途端に空気が悪くなる。どうやらレヴァンは失敗してしまったようだった。
「聞いてるよ。で、俺はどうすればいいの？」
疑問そうな顔を作ってそう尋ねるレヴァンに、男子生徒たちは一層ニヤニヤを増す。そうだなぁ、とどうやらリーダー格であろうその生徒が少し考えるようにしてから、レヴァンへと顔を向けた。
「まず俺をアイヤネンさんに紹介して――」
「いやだ」
相手が要求を言い終わらないうちに、きっぱりと断りの返事をするのはレヴァン。言われた側は、は？　という顔をして固まっていた。
「……君さぁ、自分の立場わかってる？」
しかしすぐに気を取りなおして目の形を変えてレヴァンを睨むこの生徒は、少しはこういうことに慣れているのかもしれない。
先より険悪な空気でガンつけている生徒を前にして、レヴァンは困ったような笑みを浮かべて笑っていた。けれど、目はそうではなかった。
「自分の立場？」
問い返すレヴァンが恐れをなしたと思ったのか、ガンつけはそのままでリーダーがひひっと笑った。
「そうだよ？　自分の状況わかってる？」

やけに耳障りに感じる声でそう言うリーダーを、レヴァンはにっこりと意識的に微笑んで口を開いた。
「五人の生徒に囲まれてるってこと？」
「そうそう。だから君が取る行動はもう決まってるよね？」
いつのまにかリーダーの後ろにいたはずの残りの生徒が、レヴァンを囲むように配置されていた。そして、その傍らにはそれぞれの招魔が控えている形である。
「五対一じゃぁ魔物でも無事じゃすまないよ？　そんなことはわかりきったことだから、おとなしくやられて――」
くれないかな、と続くのであろうその言葉を遮って、鼻で笑いそうになったところを懸命に抑えこみつつ、レヴァンは首をかしげた。
「？　五対一で無事じゃ済まないって……おまえらが？」
レヴァンが作った不思議そうな顔に、今度こそ絶句する五人組。このレヴァンの言葉は、疑問という形をとってはいるが、
「――――ナメてんじゃねぇよテメェッ！！」
――事実上の宣戦布告だった。
少々は鍛えているのだろう。風をかき分けながら、拳がレヴァンの顔面向かって飛んでくる。それを片膝の力を抜くことで自然にかわしてから、その両足に魔力を送った。
「くたばりやがれッ！」
友好的にしていた面の皮もすっかり剥がれ、リーダーの生徒が鋭い中段蹴りをレヴァンに向けて放った。さすがリーダー格というべきか、練度が高い。そして、近距離では体術のほうが効果が高いことをしっかりと理解しているようだった。
――アミナは無理かな～。フロルは……避けれる、かな？
そんな感想を頭の隅で思いながら、レヴァンは軽く地面を蹴るようにして飛び上がった。
「「「な……ッ！」」」
名前も聞いていない男子生徒たちがこちらを「見上げて」目を丸くした。その視線を感じながら、五人で作られた輪の中から抜け出

した位置にトン、とレヴァンは軽い音と共に着地した。
軽い跳躍で人を容易く飛び越える。この行為は重力制御の魔法が出来ていない現在、浄魔士でも困難を極めるもの。
これは、レヴァンの魔物としての能力を利用したものだった。
「て、テメェ……何をしたッ！」
腐っても浄法院生。レヴァンが見せた技能の異質さを理解していたリーダー格の男が目をむいて、叫ぶようにして尋ねる。それに対して、
「跳んだ」
楽しそうに、馬鹿にしたように軽く笑いながら、レヴァンは答えた。
そしてそれが、五人組の理性が保たれた最後の瞬間だった。
「ざけやがって……ッ！！」
誰のものかもわからぬつぶやきを聞いたかと思えば、五人同時に攻撃を仕掛けてきた。
しかし先ほどと違うのは相手との距離。広がった分、強力な攻撃も可能ということだった。――たとえば招魔のような。
「やれッ！」
最初に攻撃を放ってきた招魔は闇系の魔物だった。影がそのまま形を変えたような小鳥である。
それが目を瞠るような速さで近づく。レヴァンはどんな攻撃か見極めようと集中していた。小鳥はレヴァンの目の前というところまで来ると、羽ばたく回数を極端に増した。
「うわっ」
レヴァンがそんな声を漏らしたのは驚いたからだ。小鳥の魔物がバサバサ羽ばたいたことに、ではない。
その直後、視界が完全な暗黒に閉ざされたことに、だ。
闇属性補助型の招魔。羽ばたくときに粒子状の闇属性の魔力を飛ばすことによってそれが目を侵し、相手の視界を一時的に奪う、というこの招魔の固有技能だった。

しかしこの能力はレヴァンには、効かない。
「よし、見えた」
一秒を待たずに回復した視界を確認して、レヴァンは自らの横を過ぎようとした小鳥を裏拳でたたき落とした。
驚愕に染まりきった契約者が呆然としているのを、レヴァンは無表情な目で確認してから、その存在を意識の外へシャットアウトした。
「この化物がッ」
残りの生徒が放った悪態と共に残りの招魔が一気に襲いかかる。全て近接型のようで、素早く間合いを詰めてきた。
招魔を前に出して契約者は後方で魔法を紡ぐ。浄魔士のセオリーだが、それは招魔が相手を足止めできる場合に限る。
レヴァンは軽い足取りで一歩踏み出す。すると目の前にオコジョのような招魔がいた。それを造作もなく蹴飛ばす。
ンキュッと鳴き声を上げながら飛んでいく招魔は、そのまま魔法を展開していた生徒たちへぶつかりにいった。
「んわッ！　おい、ナシュ！　テメエ、招魔をしっかりコントロールしやがれ！」
「わ、ワリイ……」
仲間内で軽く揉めている様子をレヴァンは目に収めながら、レヴァンは魔力を解放する。
『属性展開』。そう呼ばれる技能と同じことをしているのだが、レヴァンが起こしたものに属性は存在しない。ただ変換されていない魔力で周りの招魔、そしてその契約者がいる範囲を支配したのだった。
それだけで、招魔たちは一時的に動きを止める。無属性で支配された空間に別の属性を働かせようとするなら、より強力な魔力の変換力が必要だ。しかし、この場の招魔にその力があるものはいなかった。
そして、契約者の方。こちらも動きを止められていた。魔力の流

れを乱されたせいで魔法陣が消えてしまったのだ。そして、それだけではなかった。
基本招魔の攻撃は外的殺傷力しかない。炎なら物を焼き、氷なら物を凍らせる。しかし、レヴァンの展開は無属性。外的殺傷能力がない代わり、契約者たちの身体へ浸透してしまうのだ。
魔力は人間にとって異邦の力。熟練した浄魔士も大きな魔力を扱うことは出来ない。そのため、
「畜生が。俺がやる！」
そう言ってリーダーが指を掲げて、魔法陣を描こうとした瞬間、
「ガハッ」
軽めの吐血で膝を付いた。
それを信じられないような目で見て、固まってしまった他の生徒達にも説明するため、レヴァンは口を開いた。
「俺の属性展開を受けて、おまえらの身体は魔力に侵されてる。体への負荷が限界になってるんだ。それ以上魔法を使ったら体中血まみれになる」
恐怖に染まった五人組をつまらなさそうな顔で見て、レヴァンは入口の方へ踵を返す。相手の招魔が動きを取り戻す前にこの場を去るためだ。
「安心していいよ。明日には魔力も抜けていつものように魔法は使えるようになる」
レヴァンがそう付け足しながら入口の扉を開けたとき、リーダーが苦しそうに喘ぎながらもつぶやいた。
「この……化物……が……」
「……その化物に、たかが人間五人で勝てるとは思わないほうがいいよ」
そう言って自嘲げに唇を片方だけ吊り上げると、レヴァンは屋上を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「いてぇ……」
「どしたの？」
机に突っ伏してつぶやいたレヴァンに、フロルが様子を尋ねてくる。
「ちょっとした筋肉痛でさ」
「……治癒、使う？」
「いや、いいよ。ありがとう」
治癒魔法は人体の改変であるため、最も難しい魔法に数えられる。しかし、アミナの習得した治癒は丁寧でちょっとした傷なら完治するほどの力を持っていた。やさしい申し出だったが、レヴァンはやんわりと断った。
魔力を肉体に込めた翌日は大抵こうなる。自業自得ということで自分を納得させていた。
「でも珍しいね？　どんなに動いても筋肉痛なんてしないのに」
そんなフロルの言葉にドキッとしながらも、レヴァンは顔を見られないよう突っ伏したまま常通りの言葉を心がけて言った。
「昨日、深夜練習しててさ。ちょっと調子に乗りすぎたよ」
そこでぐったりとしてみせる。そんな様子に、少女二人はくすっと笑った。
「老化じゃないの～？」
ニヤニヤしながらからかってくるフロルの言葉にレヴァンが「なんだとぅ」と反発すると、アミナは少しもじもじとした様子で口を開いた。
「……おじいさんになって、も……仲良し」
「なんか、アミナの言葉が心に染みるよ……」
レヴァンが何げに感動している横で、フロルは何故か、しまった、という表情を浮かべていた。

その意味を知るためにレヴァンがフロルに声をかけようとしたところで、教官が教室内に入ってくる。出席確認の時間になったのだ。
「全員いるな？　おい、席に着け」
机の上に座って楽しげに談笑していた男子生徒が自らの席へ戻るのを確認してから、教官は生徒たちを見回した。
「……？」
その際、レヴァンの方を見て笑みを浮かべたのだが、レヴァンにはそんなことをされる覚えがなく、困惑したような表情を浮かべた。
しかし、思考を展開する間もなく、教官が連絡を開始した。
「編入生を紹介する」
「「「……え？」」」
いつものこと、と言えばそれでおしまいなのだが、教官の突然の発言に生徒たちは耳を疑った。
浄法院は、招魔を呼び出せる、つまり魔力にある程度の耐性がある少年少女を浄魔士として育て上げる――浄魔士の認定試験があるため、そのまま浄魔士になれるわけではないが――施設である。魔力耐性は突然変異ではないので、編入なんてする者など存在しないはずなのだが、教官は確かに編入生と口にした。
「入ってこい」
教官の一声に教室内の緊張が高まる。その直後、緊張がそのまま驚愕に変わった。見慣れない生徒が並んで教壇の方へと上がった。編入生は二人いた。
一人は、燐光でも放っているのか、淡く輝いて見えるような薄金色の髪の少女。スラリとした足は眩しくて、男子生徒の大半は目を細めていた。
「「えい」」
「痛ぁ！　なにするんだよッ」
「別にー」
「……なんでも、ない」
他の男子と同じく目を細めていたレヴァンは、フロルたちに涙目

で反抗しながらつま先を抱えるようにしてうずくまった。
　レヴァンが「くそぅ……なんでこんな目に……」と呟きながら目を教壇の方へと移す。そこに立っている少女を再び視界に収める。そこでレヴァンは違和感を感じた。どこかで会ったような気がしたのだ。思い出しそうになかったので、もう一人の方に目をやった。
　今度は男子生徒で、道着のような修行着を身につけていた。しかし、レヴァンが注目したのはそこではない。
柄の悪そうな鋭い目つきとその上にある赤黒い髪。これを見た途端、レヴァンは立ち上がった。それと同時に向こうもレヴァンに気づいたようだった。
「おまえ！　なんでこんなとこにッ！」
　指を突きつけるレヴァンを嫌なものでも見るようにして、
「うるせぇよ……ぐあ！」
　返事を返したところを教官に殴られていた。……グーである。
「自己紹介をしろ、馬鹿者が」
　拳をちらつかせる教官を見たためか、赤髪はしぶしぶと正面を向く。そして、となりの美少女と共に自己紹介を始めた。
「カナン・パルメルです。これからよろしくお願いしますね？」
「……ハンス・パルメルだ」
　二人の簡潔な自己紹介を聞いて、生徒がざわめき始める。
　それに答えようと思ったわけではないだろうが、教官が補足説明を加えた。
「そこの二人は兄妹だ。とある理由によって編入することが決まった」
　そう言って、教官は壇上の二人ををちらりと見た。それを受けてカナンという少女はにっこりと笑う。へー、と聞こえてくる声には単なる納得と、カナンへの興味が同じぐらいの割合含まれていた。
　と、そこで、
「あの二人、もしかして……」
「……気づい、た？」

「あ、やっぱり？　アミナも気づいたんだ」
隣の席でなにやら二人の会話が始まる。レヴァンにはその会話が、壇上の二人を知っているものに聞こえ、気づけば尋ねていた。
「どういうこと？　何の話？」
「いや、何の話というか……」
フロルがどう答えようものかと迷うような素振りを示すと、壇上の教官が生徒たちへ向かって再び口を開いた。
「言っておくが、この二人は『一緒に学ぶ仲間』として編入したわけではない」
「お二人はあのパルメル兄妹ですか？」
教官が意味深な発言をした直後、フロルが割り込んだ。壇上の二人がわずかに目を見開いたのがレヴァンには分かった。
「ほう。さすがだな、アイヤネン」
そう感嘆と称賛の言葉を漏らした後、教官は生徒全員に向けて答えを明かした。
「知っている者もいるかもしれないが、この二人はすでに浄魔士の資格を持っている。貴様らのモチベーション向上のためにしばらくここに通ってもらうことになった。講義と実習は参加させるが、同じレベルとして考えるなよ」
教官のその言葉にピタっと生徒たちは動きを止める。「俺たちと同い年だろ？」とつぶやく生徒もいれば、まじまじと観察するものもいた。
しばらくしてざわめきが収まってきた頃、一人の生徒が質問を発した。
「グループはどうするんですか？」
そういえば、と気づいたように生徒たちがざわめきを取り戻す。
「パルメルさん、俺らのとこにおいでよ！」
「いや、私たちのとこがいいわ！　そうよね、カナンちゃん」
「あ、なにてめ気安げに呼んでんだよ！」
「そんなことアンタに関係ないでしょ」

すべて声をかけられるのは、少女の方のパルメル。困ったように笑うカナンの隣で、ハンスは冷静に教官の方を見ていた。
「静かにしろ」
そう一言教官が言うだけで言い合いはなくなる。
やれやれといった様子で教室中を見渡すと、教官は発表した。
「あー……では、アイヤネンのグループに二人とも入ってもらう」
「「なんでそんな奴と同じチームに……痛ッ！？」」
「うるさい。口答えするな。決定事項だ」
とっさに文句を言おうとしたレヴァンとハンスを、教官がそれぞれチョークと拳で黙らせた。
「カナン。この馬鹿をしっかり連れてこいよ？」
「はい。師匠」
「……師匠はやめろ。ここは教育機関だ」
「あ、すみません、教官」
「おい、師匠！　カナンに言わないでくれ！」
悲痛に聞こえる声を上げながら、訴えるハンスを鮮やかに黙殺。そのまま視線をポカンとする生徒たちに向け、教官は口を開いた。
「話は終わりだ。今日は午前に合同実習を行う。グループ毎に集合しておけ」
そういってからいつにも増して早足で出て行く教官を、ハンスはそんな、という目で見送っていた。

【1】-13　実習再び

「なんでこんなことに……」
第一修練場の真ん中。そこにつったっているのは、レヴァンである。魔法の実習のはずであるなのに、その身体は汗だらけ土だらけで汚れていた。
レヴァンは瞬間的に息を整えると、修練場の奥、少し離れたところを見た。そこでは魔法の実習が行われている。そう、ただの魔法の実習のはずなのだ。
「この野郎！　離れてんじゃねぇ！　戻ってきやがれ！」
ハンスの叫び声から推察できる通り、実習の内容は目標物への攻撃魔法。ついでに言うと、今回は電撃のようだった。
見事な身のこなしで迫り来る生徒たちの電撃をかわし、衰えないスピードで逃げ続けていた。さすが現役の浄魔士、とレヴァンは走り始めながら感心した。
レヴァンはハンスの方へ向けて走る。後ろからくる招魔の群れを押し付けるためである。その意図に気づいたのだろう。ハンスは悪態をつくと進路を曲げる。レヴァンはそれに並走した。
「なんでついてきやがる！」
「この招魔も押し付けようと思ってさ」
そういって明るく笑いかけるレヴァン。確かに出会いは意味不明だったハンスだが、こっちがそうなように自分のことをそんなには嫌ってはいないはずだ。きっと助け合いの精神を見せてくれるはず。そう思うレヴァンだったが、
「ざけんじゃねぇ！　死ぬなら一人で死ねッ！」
「なんてひどいことをっ！？」
ひどいのはどっちだということを他人が言いそうな状況であったが、ここにツッコむ他人はいない。二人以外は招魔も含めて、彼ら

を捕らえようと必死になっている者たちだった。
教官の指令は、レヴァンとハンスの捕獲。突然始まったデッドレースに、死に物狂いで逃げまわり今に至るというわけだった。
「編入早々大変だな……」
「てめぇもいつもこんな扱いなのか……」
現実逃避の一環か、足を動かしたまま、同情と憐れみでお互いをいたわるような優しい目を向ける二人。いまだ気に入らないところはあるけれど、愚痴をこぼせるような間柄にはなれそうだな、と、二人は偶然にも同時に思った。
ブンッ
そんな音を立てて脇を通り過ぎる風の塊。風属性の射出魔法である。呑気に話してる場合ではないと思い直す二人。お互いを見た。
そこにはすでにかつての襲撃者と被襲撃者の二人はいなかった。何の因果か――おそらく、教官の仕業だろうが――同じクラスに所属したクラスメイト。そして、いまこのときは、苦難を共に乗り越える、仲間。戦友という関係で二人は強く結びついていた。
そんなことを同時に思いながら、二人はお互いに強く頷く。そして、
「「後は任せたッ！」」
同時に加速をかけた。
「レヴァン、てめぇ！　なに一緒に逃げてやがる！　意味ねぇだろうがッ！！」
「ハンスこそッ！　そんな悪人面して、弱気過ぎるんじゃないのか！」
自身と並走する相手の姿を認めるやいなや、凄まじいハイキックを互いに放つ。それを危なげ無く受け止めながら、互いに罵り合っていた。
「あん？　やるのか？」

「望むところだッ」
そう言って二人が睨み合いだしたとき、自分たちが足を止めたことに、止めてしまったことに気づいていなかった。
戦友のはずだった二人が互いの胸ぐらを掴み上げると同時、ヒュルル、という不自然な音が二人の近くで聞こえた。
不自然な音というのは浄魔士の感覚で言うと、そのまま魔法や招魔の技発動と同義だ。
二人が、まずい、と思うより先に、
「よし、捕まえろ〜」
「捕まえましょう」
「……確保」
フロル、カノン、アミナが先頭を切って、向かってくる。
「やば。ハンス、逃げるぞ！」
「クソが！」
ダッシュでその場を離れようと向きを変える二人だったが、その瞬間、辺りが薄暗くなった。
「……？」
ほとんど無意識的にレヴァンが上を見上げると、そこにはいつか見た景色があった。
「な、なんて量の縄だよ……」
つられて見上げたハンスが驚愕に立ち尽くす。
そうなるのも仕方ないか、とレヴァンはいつものような苦笑を浮かべた。現実逃避である。
そのままハンスは驚愕、レヴァンは諦観の面持ちで、上空から迫る縄の嵐に飲み込まれて、本日の実習は終了した。

「おまえのせいだぁぁぁぁぁ！」
「てめぇのせいだろぉぉぉぉ！」

二人の拳が互いの頬を撃ちぬく。そのまま二人はそれぞれ正反対の方向に吹っ飛んだ。
「何やってるの、二人とも……」
フロルが呆れたようにそんなことを言うのも仕方のない光景だった。ハンスはすぐに起き上がり、レヴァンの方を指さして言った。
「コイツが邪魔さえしなければ、俺はあんな目に会うことはなかった」
縄で縛られたまま教官と組み手をさせられたときのことを言っているのだろう。確かにあれは二度と味わいたくなかった、とレヴァンは深い共感と共に聞いていた。
「それはこっちの台詞だって！」
しかし、レヴァンは反論することも忘れない。
「ああ？　俺がてめぇの足を引っ張ったとでも言う気か？」
「そのとおり」
「……おもしれぇ。んじゃ、はっきりさせるか？」
そういって、ハンスは教室の窓から修練場の方を指さす。唇の片端を持ち上げて、そのケンカ買ってやる、とレヴァンが宣言しようとしたところで、
「二人とも、お終いにしましょう？」
カナンのストップがかかった。
「パルメルさん？」
「カナンでいいです、レヴァンくん。パルメルだと二人いますから」
いや、こいつはパルメルなんて呼ぶ気も起こんないよ、とレヴァンが正直に言った途端、顔面に叩き込まれそうになった拳を首だけで避ける。ハンスがチッと舌打ちした。
「ふふ、息ぴったりです」
「「どこがッ！？」」
否定するつもりの言葉で、肯定を示してしまう二人。その様子を見て、カナンだけでなくフロル、アミナの二人も小さく笑った。
そのまましばらくハンスとの睨み合いを続けるレヴァンであった

が、ハンスを優しく見守るようなカナンを見て、ふと気になったことがあった。
「そういえば、二人の招魔ってどんなの？」
ふと気になったことでも、知らないこと。レヴァンは真面目に聞いたつもりであったが、フロルとアミナは同時に、え？　という表情をしていた。
「……知らない、の？」
アミナが驚いたようにそう言う。それに対してさらに不思議そうな顔をするレヴァンに、カナンが優しく微笑みながら口を開いた。
「私たちは有名ではありませんから。知らなくて当然です」
「えぇ！？　有名だよ！」
カナンの言葉に否定を示したフロル。もう何が何だかわからなくなっているレヴァン。ハンスは相変わらずムスッとした顔つきで黙ったままだった。
仕方ないなぁ、という表情をすると、フロルはレヴァンの方を向いた。
「浄魔士っていっても、必ず招魔がいるわけじゃないよ」
「……どういうこと？」
常識が覆されたように感じながらも、レヴァンはフロルの話の続きを促す。笑いを表情に滲ませながらも、フロルは続けた。
「浄魔士の中でも特に『装器士』っていう人たちがいるの。普通、浄魔士は前線で招魔に戦わせて後方から魔法で攻撃するスタイルをとるけど、装器士は武器を使って前線で戦うらしいんだよ？」
最後が「らしいよ」となっているのは見たことがないからだろうか。
「そして、その装器士の中でも有名なのが――」
この二人、とフロルはカナンとハンスを示す。ハンスは顔をさらにムッとさせ、カナンは照れたようにはにかんだ。
俺たちと同い年でそんな危険そうなことしてるの、とか、武器ってどんなの、とか質問にはいろいろあったであろうが、レヴァンが

口にしたのは短いものだ。
「……なんで？」
レヴァンが放ったのはその言葉だけだったが、カナンは正しく理解したようだった。
「ここに編入した理由ですか？　師匠がそうしろと言ったからです」
「……師匠？」
「あ、えーっと、エルゼ教官のことです」
もしかしたら、と思っていたレヴァンの予想は確信に変わりつつあった。
「二人ってもしかして、教官の――」
「はい。指南してもらっています」
その情報は知らなかっただろうフロルとアミナも、へぇ、と納得したような顔をしていた。おそらくレヴァンと同じく予想はしていたのだろう。「師匠」なんて呼んでたら予想するまでもないかもしれないが。
「そうなんだ……おまえの武器はどこにあるんだよ？」
前半はカナンに感謝を込めて、後半はハンスに対して問いかける。悪い奴ではないことがわかったことで、レヴァンは友好的に接しようと思ったのだったが、
「てめぇには関係ないだろ」
やっぱりヤメにした。
「……実力がないからか」
「……なんだと？」
レヴァンが思わずこぼした言葉に、ハンスが反応を示してくる。
「まあまあ、二人とも。これからはクラスメイトなんだし。握手でもしたら？」
「それはいいですね」
フロルとカナンの言葉にとりあえず構えていた拳を男二人、同時に下ろす。アミナも心配そうな顔をしていたので、レヴァンはフロルの提案に従うことにした。

「……これからも、よろしく」
笑顔を浮かべ、手を差し出すレヴァン。
「……ああ、こちらこそな」
ハンスも快くそれに応じ、レヴァンの手を強く（・）握り返した。お互い良い笑顔である。
ギリッ……ギリッ……
「……どうしたんだ？　もう離してくれてもいいぞ、ハンス……っ」
「……てめぇこそ。先に離せよ……ッ」
手に食い込む痛みを我慢しながらレヴァンは変わらない笑顔を浮かべた。ハンスの方も似たようなもの。先に離したら負けだ、レヴァンはそう直感した。
「早く離してくれよ……クズ野郎……っ」
「さっさと、離れろ……カスが……っ」
「一体、なにしてるの……」
呆れたフロルの声が耳に入らないまま、レヴァンとハンスの睨み合いはしばらく続くのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「以上です」
「わかりました。どうもありがとう」
一礼して門から出て行く塔の職員を見送りながら、イレーネは今報告された内容について考えていた。
ここ最近のはぐれ出没率が異常に高いというのだ。さすがに居住地にまで侵入されるこの前の事件のようなことは殆ど無いけれど、隔壁周辺での出没が多くなっているようだった。
考えこむような顔を上げる。イレーネは親指と人差指で輪を作って、そこを通して周りを見渡すように顔を周囲に向けた。

大きな窓もない部屋。そこでそんな行動を起こしても、質素な白い壁しか目に入らないはずである。しかし、イレーネの目に映ったのは、違う景色だった。

どこまでも荒れ果てた荒野。ごろごろと転がっている大きな岩。ところどころに存在する害獣たち。魔界とこの世界をつなぐのは儀式ぐらいなものなので、魔物が存在していることはありえない。緑など目に入ることすらなく、その分空は透き通って見える。それは、シレンティアの外の風景だった。

遠視術式。監視者イレーネの魔法である。

術式とは魔法陣の展開を必要としない魔法のことだ。使い方を完全に特定することによって発動を可能とする。しかし、大きな魔力に対応しきれないため、攻撃魔法などに使えるものはない。強力なイメージ力と魔力操作が必要とされるため、使う者は稀だ。だが応用性がない分手間がかからないので、イレーネはよく用いていた。

ちなみに、イレーネはこの遠視術式で見渡せる範囲のことを監視圏内として自らの仕事を遂行している。

しばらく周りを見渡したイレーネは四時の方向で身体の向きを固定する。

その方向の離れたところ、八キロ地点だろうか。そこに存在する台地がひび割れてできた谷がある。イレーネはその入口の方に注目した。

入口になにか黒い物体がかたまっている。イレーネは拡大して再び覗き込む。すると、そこに存在するのは濃紫色の肉体を持つ生物の一群だった。

「やっぱり近づいてきてるわね……」

ため息と共に出てくる台詞は暗いもの。それはそうだろう。視線の先の生物、つまり冥種はただ群れているだけではない。移動しているのだ。真っ直ぐ。シレンティアへ。

これはまずいことになる。イレーネはそう直感した。

冥種数体が都市へ攻撃をすることはこれまで幾度とあったが、群

れをなして攻めてくることは初めてのことだと言っていい。
イレーネは顎に手をやって少し考える時間をとると、手元にある複数のボタンのうち一つをぐっと押し込んだ。
「どうかいたしましたか？」
しばし待つと、職員が扉を開いて現れる。それを確認してから、イレーネは毅然として監視者として言葉を放った。
「ここから南東七キロ強の地点に冥種の群れを発見しました。速やかに全浄魔士に通達を」
それを聞いた職員は目を見開いて驚きを表現しながらも、すぐに近くにいた補助の職員に通達に行かせた。
「その他には何を？」
「浄魔士を数名、偵察に。数と速度を確認させてください。出来るのならば到達予想時刻を割り出してみてください」
わかりました、と言って一礼してから職員は部屋を出て行く。一つ息を吐くと、イレーネは背もたれに寄りかかった。
「……困ったなぁ。エルちゃんにお願いしようかなぁ」
旧友の顔を思い浮かべながら、イレーネは四時の方向を見る。術式を使っていない今は白い壁しか見えてはいないが、その目は遠くを見ていた。
「監視もつらい……」
そう言って顔を向けたまま、再びイレーネはため息をつくのだった。

【1】－14　模擬戦対策

「ついに模擬戦が迫ってきた。各々準備を進めているとは思うが、無茶はするなよ」

教官が講義の途中で言った言葉に、生徒たちは緊張をあらわにした。近くの友人と話し合う者、ひとりで考えにふける者、多種多様な反応を示す中で、レヴァンはつぶやいた。

「模擬戦か……たしかにそんな事言ってたな……」

浄魔士一人と招魔一体の出場で行われる試合。戦闘スタイルの規定はないが、殺傷能力Aランク相当の魔法の使用は禁止される。招魔の能力も対招魔戦闘にのみ許可。招魔を使った契約者への攻撃は禁止ということである。

そして今回以降、特例でレヴァンを招魔として扱うという条件でフロルの参加も認められた。そのためレヴァンは相手側の招魔にしか攻撃を仕掛けられない。しかし、相手の契約者はレヴァンへの攻撃を可能とするので、客観的に見てレヴァンは不利と言えた。

「足ひっぱらないでよね～」

「そっちこそ」

しかしフロルとレヴァンの間には、そのことを気にしたような空気は存在しなかった。

そういえば、とレヴァンは何かに気づいたように振り返る。レヴァンたちの後ろの席には、ハンスとカナンがいた。

「二人は試合に出るのか？」

その質問に少し残念そうに返事をしたのはカナン。

「いえ。残念ですけど私たちは出ません」

その代わりみなさんの試合を見せてもらいます、と言ってカナンは柔らかく微笑んだ。その直後、フンと鼻を鳴らす音がカナンの隣から聞こえてくる。

「せいぜい足掻くんだな、役立たず」

「ありがとよ」
唇を吊り上げながら返すレヴァン。自然と睨みつけあう状態へとなってしまったが、フロル、カナン、アミナの三人は温かい目でそれを見つめていた。しかし、
「仲が良いようで羨ましい限りだな」
教官の一言で全員真面目な顔をして前を向いた。
それを確認してため息を一つつくと、教官は説明を再開する。
模擬戦が開かれるのは来週末。それまでには体調、魔力耐性――術者に魔力による負荷がかかっていない状態のこと――などを万全にして、戦術の一つでも考えておけ、など注意事項のような連絡があった後、教官はふと真面目な声を出した。
「貴様らは招魔を持ち、確かに力のある者もいる」
しかし、と教官は続けた。
「力を持つということは、それに対する責任を負うことと同義だ。そのことをゆめゆめ忘れるな。模擬戦はそれを実感するための行事でもある」
そこまで言うと、教官はニヤリと笑った。教室全体を見渡すようにしてから口を開く。
「敵は、試合表で当たった相手ではない。自分自身だということを胸に刻みつけておけ」
以上だ、と言って教官は身を翻し、教室を後にする。それは模擬戦に向けた本日の訓練の開始を意味している。レヴァンはめんどくさいなと思いつつ、息を一つついた。

「んで？　何故俺がてめぇらの訓練に付き合わなくちゃいけねえんだよ？」
「仕方ないだろ？　教官の指示なんだから」
ちっと舌打ちしながら顔を背けるハンスの姿を目に収めながら、

レヴァンもまた疑問を抱かずにはいられなかった。
ハンスとカナンは現役の浄魔士だ。いくら年齢が同じだとしても浄法院生であるレヴァンたちと訓練を共にすることは、二人にとってデメリットにしかならないはず。レヴァンには教官の考えることがよくわからなかった。
考え込むのもそこそこに、レヴァンは女性陣の方へと目を向ける。修練場の中央側、さほど離れてもいない場所に三人の女生徒が仲良さげに話している姿がうかがえた。
「いつのまにか仲良くなってるよな……」
「……そうだな」
独り言のつもりで放った一言に返事があったことに驚きながらも、レヴァンは好機と見て、話を続けた。
「カナンとは仲良さそうだけど……どんな感じ？」
「あ？　兄妹にどんな感じもクソもあるか」
「そうじゃなくて」
あえてぼかしているということが分かったレヴァンは、しばらく聞いていいものかと悩んでから、浅く行くことにした。
「あんな美人な妹持ってたら、苦労するんじゃないのか？」
そんな質問を聞いて、ハンスが浮かべたうんざりといった表情は、かなり深い思いが込められているようにレヴァンは感じた。
「……アイツを狙ってんのか？」
ハンスの言葉の意味を考える。しかし、よくわからなかったのでレヴァンは正直に応えることにした。
「いや、狙ってないよ」
首を何度か横に振りながら、レヴァンは言った。
「確かにカナンはとても美人だけど……何かに一生懸命な感じがするから。それがなんなのかっていうのはわかんないけど、あまり邪魔をしたくないっていう感じかな」
直感のみで話すことに恥ずかしさを覚えたレヴァンだったが、ハンスの反応はいつものものではなかった。目をわずかに大きくして

レヴァンを見たかと思うと、またいつもの目つきに戻り、
「……そうかよ」
とつぶやいた。
結局、あまりいい話は出来なかったかな、とレヴァンは反省。
困惑するレヴァンを尻目に、ハンスが立ち上がる。その手にはしっかりと握られた木刀。それを何気なく持ち上げて、そして力強く振り下ろした。
レヴァンめがけて。
「……って危なぁっ！？」
地面を転がって木刀を避け、その後素早く起き上がる。レヴァンは一連の動作を流れるように行いながらも、ハンスに言った。
「なにするんだいきなり！」
「……訓練の相手をしてやるって言ってんだよ」
少し恥ずかしそうにそんなことを言うハンスに目を丸くしながら、レヴァンは、え、と言った。
「……今なんて？」
問い返したレヴァンに返って来たのは、言葉ではない。次は横薙ぎに振り抜かれる木刀を上半身を反らしてかわす。
「こっちも質問していいか？」
余裕を見せて言うレヴァンに、ハンスは片方の眉を上げた。
「おまえが最初俺を襲ってきたとき、おまえ、フロルとアミナのことを可愛いって言ってたよな。二人を狙ってるのか？」
それを聞いたハンスはフッと口を綻ばして、
「……かもしれな――」
「話を聞かせてもらってもいいです？」
言い切る前にいつのまにか現れたカナンが、ハンスの腕と自分の腕を絡ませていた。
「……いつのまに」

純粋な驚きを表すレヴァンに対していつものような微笑みを浮かべるカナン。こんな美女と腕を組めるなんていくら兄妹と言っても羨ましいなぁ、とこれまた純粋な羨望のまなざしを向けるレヴァンの一方で、ハンスは顔を青ざめさせていた。
「……どうした、ハンス？」
「疲れたのでしょう。駄目ですね、まだ訓練中なのに」
そう言ってギュッとハンスの腕を抱えるカナン。同時に聞こえるハンスの苦悶の声とコキュという小気味良い音。
「……本当に疲れただけか？」
浄魔士にとって、自らの体調管理も大きな仕事だ。現役であるハンスがここまで苦しそうな顔をしていることに、レヴァンは危険を感じた。しかし、傍らのカナンはなんでもないように返事をする。
……返事ができないほど弱ったハンスの代わりに。
「たまに一気に疲れが出るときもあるみたいです。決して、他の女の子の話をしたから、というわけではありませんよ？」
「……ああ、なるほど」
表面的な納得ではなく、ハンスの置かれた状況に対する正確な理解で出たつぶやきだ。ここにきてようやくレヴァンはカナンの一生懸命さの片鱗を見た気がした。
「……」
ついに膝をガクガクと揺らし始めるハンス。その腕を抱えるようにしているカナン。レヴァンはハンスの腕に注目した。
予想通り――予想したくもなかったが――なんだかハンスの腕は関節を綺麗に極められ、そして外されていたようだった。変な方向に曲がっている。
ハンスが懇願するような視線をレヴァンへと向ける。決して仲良くなろうとはしない自分に助けを求めている。そんな事実をレヴァンは憐れみと共に認識した。
そして、それを受け止めながら、
「それにしてもフロルとアミナの調子はどう？」

「この野郎ッ！？」
今後深く踏み込まないように決意したレヴァンに対してハンスが声を上げる。その声をレヴァンは黙殺。そうしなくては恐ろしい笑顔のカナンに何かされてしまいそうだったからだ。
しかし、声を荒らげてしまったせいでハンスは自ら腕に力を込めるような形になってしまい、
「あ」
そんなカナンの声と共に腕がねじられる。
「ッッッ～～！？」
激痛にのたうちまわることも許されずに、ハンスは気絶することになってしまったのだった。
「どうしたんでしょう？」
キョトンとしたカナンの顔を見て背筋に冷たいものを感じたのは、先のやりとりの真実を知っているレヴァンだけ。今、丁度やってきたフロルとアミナは、ハンスとカナンが腕を組んでいたという事実にしか注目していなかった。
「二人って仲いいね。羨ましいなぁ」
「フロルさんも意中の相手がいるんです？」
「うぇっ！？　い、いや、そんなんじゃないんだけど……」
とたんに挙動不審になるフロルを興味深そうな目で見た後、レヴァンは足元に転がるハンスの体を揺さぶってみた。素晴らしいまでに気絶して泡を吹いている。
「……どうして、泡？」
すぐ近くで同じようにハンスの様子を見ていたアミナが不思議そうな声を出した。レヴァンは真実を告げるかどうかをけっこう真剣に悩んだが、言わないことにした。カナンの心象を悪くする必要はないだろう。
生け贄を一人差し出せばいいだけだし。
そんな考えは、ハンスへの死刑宣告だった。
「どうしてだろうな？」

アミナと一緒に悩んでいるふりをして話を続けるレヴァンであったが、ふと視線を感じて振り返る。瞬間、フロルと目が合った。
慌てたようにして目をそらす幼馴染にハテナマークを浮かべて、まあ用がないならいいか、とレヴァンは再び目の前の死体に目を向けた。ときどき痙攣したようにぴくっと動くのはかなり恐ろしかった。
「……なるほど。レヴァンくんですか」
「な、なんでそうなるのかな！　ち、ちがうよっ？　今のはただアミナと仲よさそうに話しているからで！」
「アミナさんもですか。……強大な恋敵ですね」
「うぅ……っ」
話の内容はいまいちわからなかったが、フロルとカナンが仲よさそうに話しているのを見て、レヴァンは安心したように微笑んだ。
「……でれでれ、してる」
「してないぞっ？」
「……本当に？」
「ほんとほんと」
言い訳するような口調のレヴァンをアミナはじとっとした目でしばらく見ると、つぶやくように言った。
「……うそつき」
「……すいません」
二人の方向を見て笑みを浮かべていたのは事実なため、弁解できないと悟ったレヴァンは即謝罪。その様子を見て、アミナも少しは機嫌を直したようだった。
転がっているハンスの観察もそこそこに、レヴァンとアミナは立ち上がった。仕方ないのでハンスを外周の壁にもたれかけさせるように動かした後、フロルとカナンの話の輪へと二人は戻ろうとした。
「カナンとハンス君はどんな関係なの？」
すると、ちょうどこんな質問をフロルがカナンに向けて放っているところだった。

それはレヴァンがハンスに向けた質問と同じもので、それとなくハンスが避けた話題だ。レヴァンは失礼にならないかと心配だったが、カナンが笑顔になるところを見ると、それは杞憂だったようだった。

「どんな関係と言うと？　兄妹ですけど……」

「だって、二人ってすごく仲良いじゃない。普通兄妹って少し疎遠になるところあるって聞くよ？　それにしては息があってるし、なんだか二人を見てると――」

「……恋人同士」

フロルの後を継ぐように口を開くアミナ。

いや、それは言いすぎだろう、と苦笑したレヴァンだったが、反してカナンは顔をうっすらと桜色に染めて頬に手を添えるようにして照れていた。

「そ、そうですか？　ふふ、そんなふうに見られるなんて。ただの兄妹なんですけど……」

身体をくねらせ始めそうな様子で独り言を漏らすカナンを同じく優しい笑顔で見るフロルとアミナの二人。しかし、

――いや、義理の兄妹だったらそんなこともあるんだろうけど……。

義理の関係は今時珍しくない。お家を上げて名門と呼ばれるような大家は、その評判を落とすまいと実力のあるものを一族に取り込むということがごく普通に行われていた。しかし、

腕を変な方向に曲げたまま倒れたハンスを頭で再生しながら、レヴァンは、あれはちょっとなぁ、と少し考えてしまった。

「わ、私のことはいいんですっ。それよりも二人とも、応援しています」

ハッとして言うカナンの言葉にフロルとアミナは顔を一気に赤くした。

「な、何をかな……？　わ、私には頑張ることなんて……」

「……頑張る」

「アミナっ！？」
身体の前で小さな手をぐっと握って意思を表示するアミナを、フロルは驚いたように見た。カナンはここで少し意地の悪い笑顔を見せる。
「うかうかしてられませんね？」
「～～～～ッ！？」
普段目にすることのないフロルの赤い顔。それを見て楽しむようなカナンの反応。そして、いつものように素直なアミナの反応。繰り広げられるガールズトークに直面して、レヴァンは、
「じ、じゃ、ちょっと体術の訓練してくるよ」
控えめな主張でこの場を去った。
三人は気づいた様子もなくキャッキャと話を盛り上げていた。
ふぅっとため息を一つ。体術の訓練と称したものの、レヴァンは特に訓練をするつもりはなかった。ただあの三人から距離を取りたかっただけである。
「なんか、話を打ち切りづらかったしなぁ……」
話の内容についていけず居心地が良くなかった、だけではない。もっと深刻で物理的な問題が迫ってきているのを感じたために、レヴァンはこうして逃げてきたのだった。
「賢明な選択である」
「おう、ありがとよ」
「……驚かないのだな」
「さすがに慣れたよ」
足元に顕現したミグルスを横目にチラリと見てからすぐに視線を戻す。目の前にはどこにでもあるような木が立っていた。
その木が作り出す日陰によいしょっと腰を下ろして、レヴァンは視線を自分の来た方向へと向ける。そこには仲よさそうに話す女子三人組の姿と、それに近づいていく者の姿があった。
「おぬしはこんなところで休んでいていいのか？」
「大丈夫だよ。アイツらが避雷針になってくれるから」

レヴァンが木陰の心地良さに目を閉じながらそう答えると、少し離れた位置にいる女性陣の声が聞こえてきた。

「それで、ハンスとはどんな感じなの？」

「……知りたい」

「い、いえ……そんな別に距離が近づいてるとか、そう言うのは全然――」

「ほう？　その話は興味があるな。是非とも聞かせて欲しいものだ」

「「「教官！？」」」

「今は何の時間だ？　カナン、言ってみろ」

「自主訓練、です……」

「そうだ。……ん？　どうしたアイヤネン、誰を探しているんだ？

レヴァンなら私が近づき始めた途端に逃げ出したようだぞ」

「う、裏切り者だ……」

「スピノラもだ。交友関係を広げるのは好ましいことだが、時と場をわきまえるべきだと思わないか？」

「……う」

「というわけだ。私についてこい」

「し、師匠。罰です……？」

「ん？　なんで寝ているんだこのバカは。……まあいい。引きずっていくか」

「は、ハンス……」

そんなやりとりの後、それらの気配が遠ざかっていく。女性陣はある意味自業自得と言えるものの、ハンスが可哀想だとレヴァンはチラリと思う。

「しかし何もしないのだな」

「まあな。とばっちりは嫌だし」

心を読んだようなミグルスの発言にレヴァンは素直に頷いた。ミグルスは呆れたような視線を送ったが、すぐに視線を戻す。レヴァンの言うこともももっともだと思ったのか。
仲間たちが教官に連行された方向をぼんやりと見て、
「食べるか？」
「頂こう」
レヴァンはポケットに入っていた駄菓子をミグルスと分けあって、もしゃもしゃと食べた。

ハンスに切りかかられた。
「うわぁ！？」
レヴァンはとっさに頭上に迫る木刀を、白刃取りの形で受け止めた。
「てめぇのせいでさっきは……ッ！」
「いや、俺悪くないし。おまえが他の女を狙っているみたいな発言したせいだろ」
いつものように睨み合いながら、競り合いが始まる。ハンスが木刀に力を込めていき、レヴァンは白刃取りのまま受け止め続けていた。
しかし、いつもならここで入ってくる呆れ声も、今回は非難の色を帯びていた。
「そうだそうだー、なんで教えてくれなかったんだー」
かなり棒読み気味にハイフンを多用するフロルに、残りの二人も同じような内容で同調した。これにはさすがにレヴァンも苦笑を返すしかない。
しばらくブーブーと文句を垂れ続けた一同だったが、自分たちの非も認めてはいるのか、すぐに訓練をしようということになった。
「またしごかれたらたまらないもんね」

「……二度目は、嫌」
フロルとアミナはこう言ったが、カナンは何も漏らさない。教官の弟子だというから、この程度の罰には慣れているのかもしれない。
「んじゃ、始めますか」
そんなレヴァンの声で、訓練は再開した。

【1】－14　模擬戦対策（後書き）

このあとにも訓練シーンは続きます。キリの悪いことしてすみません。

【1】-115　狙われた〇〇

再開された訓練でハンスは、レヴァンへと木刀を振るっていた。
――こいつ、案外やりやがる……。
無作為に繰り出す斬りと突きを、レヴァンがかわしていくという訓練内容。本気を出しているわけではないが、通常の浄法院生には目で追うことが精一杯の攻撃を巧みにかわしていく。それを見て、ハンスは内心驚きを隠しきれていなかった。
浄法院の入学試験は、魔力の適性のみ。体術の習得は個人に任されているので、通常、体術を上達させる浄魔士見習いはめずらしい。
袈裟斬りを避けた上で、軸足を使って直後の突きをレヴァンがかわした。不自然さや動作の滞りなどは全く存在しない動きは、洗練されていた。
ハンスは時折、試しにレヴァンの視界外からの一撃を放つのだが、レヴァンはそれすらもかわしてしまう。その時に攻撃を見ない。このような相手の流れを読むことによる攻撃予知は、実戦経験を積まないと身につけようのないものであった。それに集中することもなくやってみせるレヴァンの動きは、はっきり言って異常というべきものだった。
現役の装器士として活動していたハンスであったが、同年代でかつ練習相手となる者がいなかった。カナンが唯一の例であったが、武器の相性上、他の練習相手を欲しているところだった。
ハンスは口の端を吊り上げる。
「……行くぞ」
「え、え？　なんでいきなりこんな速くなんの！？」
戸惑いを隠せない様子のレヴァンに禍々しい笑みを浮かべながら、ハンスは徐々に実力を出していった。
「あの二人、楽しそうだね」

「……友達どうし」
「よかったです……馴染めそうで」

外野から聞こえてきた声に顔をしかめながら、突きを放った。八つ当たり気味のその攻撃もレヴァンは容易く避ける。
――面白くねぇ。
これは訓練だ。訓練というのは己を高めることを指す言葉である。だから――
「――俺も鍛えねぇとな」
「え、え、え？　なんで更に速くなるの！？」
驚愕に染まるレヴァンの顔を見て愉快そうな笑みを浮かべて、ハンスは「攻める」ことにした。怒涛のごとく繰り出される突き斬りをさすがにかわせなくなったのか、レヴァンも木刀のしのぎの部分を叩いて攻撃をかわすようになった。
「てめぇ、その体術はどこで身につけたんだ？」
「そんなの……どうでもいいだろ？」
レヴァンの記憶喪失を知らないハンスが手を緩めないまま軽い調子で質問するが、レヴァンははぐらかす。
レヴァンの心の機微を理解したのかどうかは定かではないが、ハンスは追及することはしなかった。代わりに木刀のスピードを上げた。
「うえ。まだ速くなるのかよ……」
レヴァンには珍しい呆れ気味な声を上げながら、後退していた身体を前のめりにした。
――――来る。
反射的に思って、ハンスが心を構える。それと同時にレヴァンはハンスの懐に潜り込む、はずだった。
「……？」
しかし、レヴァンは不意に眉をひそめると、即座にバックステップを踏んでハンスと距離をとる。

どうした、と声をかけようとしたところで、ハンスも気がついた。修練場の反対側にいる複数の人間が魔法を発動しようとしているのだ。

この場所は第一修練場。魔法の訓練にも使われるため、魔法発動が確認されたからといってそれがいけないというわけではない。

ただ、現在発動されようとしている魔法の発動者が、真っ直ぐこちらを向いていなければ、の話だ。

おいおい……、とハンスが呆れるのと、レヴァンが走り出したのはほとんど同時だった。

目標されたものが人気のない場所にあれば、被害は抑えられるだろうという考えのもとだろう。確かに、すぐに起こせる行動としては的確である。しかし、その考えはすぐに粉々に砕け散った。

発動された魔法は範囲設定型の大規模魔法だったのだ。

目標を捕捉する魔法に比べ、決まった範囲だけを攻撃する魔法は難易度が格段に低い。目標を捕捉するほどの技量がない者が、複数人集まって範囲型の大規模魔法を発動する意図は、ひとえに目標を逃さないためだろう。

レヴァンが舌打ちをする音が聞こえた。とそこで魔法も発動される。

決められた範囲に空気を圧縮した弾を着弾させる魔法。発射された空気弾は地面をえぐるようにしてこちらへと飛んできた。

空気を使った魔法は事象を改変する力が少なくてすむため、難易度が低い。やはり攻撃した者はあまり技量はないようだ。そして、同時に知識も足りないようだった。

空気を圧縮するだけの魔法は一層式構成。構成が簡単な魔法ほど、それを崩すのも簡単なのである。

しかし数発ならまだしも、それはまがりなりにも大規模魔法だった。数百発はあろうかという大量の空気弾が相応の威力を持って近づいてくる。範囲には遠く離れた女性陣たちも入っている。声が届く距離ではないため、避けさせるのは無理だろう。見た限り攻撃に気づ

いた様子もない。
自らもその範囲内にいるというのに、全く慌てた様子もなくハンスは佇む。しかし、その視線はレヴァンへ。どうするのか気になっていた。
レヴァンがふと手を掲げた。そして何かに集中するように目を細める。

それと同時に戦闘の弾が内側からはじけた。

今度こそハンスは目を見張った。今レヴァンが見せたことをはっきり理解したのだ。
――確かに、人型の魔物だってことは聞いていたけどよ……。
空気弾と相対したレヴァンが自分の前方、限られた範囲にだけ魔力を照射。属性展開とも言えない弱い魔力を空気弾一つ一つに干渉させていったのだ。
空気弾を形成する周りからの圧力。これを不安定にして、空気弾の暴発を促しているのだった。思い切って属性展開をしないのは、空気弾そのものを消すより、誘爆させたほうが対処する数が減るからか。
ちらりとカナンのいる方を確認してから、ハンスは安全を確認する。今のところレヴァンが全ての弾を無効化している。ハンスはのんびりと欠伸などをしながらも、注意をそらすことはしなかった。
レヴァンがちらりとハンスの方を見てくる。とはいってもハンスを見ているのではないことは、表情を見れば言うまでもなかった。ハンスの後方、カナンを含めて三人で話している、フロルとアミナに注意を払っていたのだ。
カナンを心配しないのは正しい、とハンスは思った。仮にも浄魔士、それも体術を極める装器士であるカナンは、たとえ至近距離から空気弾を受けたとしても、損傷を最小限に抑えるよう攻撃をいなすことが出来るだろう。そのように訓練されている。

にもかかわらず、先程カナンの方を見てしまっていた自分に苦笑するハンス。少し過保護なのかもしれないと笑みをこぼした。
ハンスは再び前を見る。そこで繰り広げられている魔力操作に感嘆を示す。
そこでふと、視界の端に動くものを見つけた。魔法の発動者である。
「そういえば、悪意のある攻撃だったな」
レヴァンが一人で何とかしているこの状況で、危険性を感じていなかったハンスが呑気につぶやいた。
そちらを注視すると、複数の男子生徒が見えた。数は四人。その手首には目立つ純白のブレスレットがあった。
――あれは……。
髑髏のデザインをした腕輪に見覚えがあり、ハンスはより注視する。しかしその男子生徒は、魔法がレヴァンによって防がれているのを見て忌々しそうに踵を返した。その折に一人が笛に一回息を吹き込む。その音はない。犬笛の一種だろうか。そしてぞろぞろと揃って修練場を出た。教室棟の方へと戻るのだろう。
仕方ねぇ、とその後を追おうとするハンス。しかし直後ハンスは目の前のレヴァンに違和感を覚えた。いや、レヴァンから発せられている魔力に違和感を覚えていた。
「く……ッ！」
不可解な妨害を受けたように自らの魔力がかき乱されたことに、レヴァンが顔をしかめる。その様子を見て、ハンスは驚愕に目を見開いた。
――まさか、「イアクト」か！？
魔力の流れに干渉し、魔法を不発に終わらせたり逆に強化させたりできる道具のことを「イアクト」と呼ぶ。先程の笛は、おそらく魔力を振動させて不安定にする類のものだろう。
――だがイアクトは希少な鉱物を原料にしてたはず。一介の浄法院生が持てるような代物じゃねぇ。

本気で男子生徒たちの追跡を開始しようとしたハンスであったが、状況がそれを許さなかった。うめき声が聞こえ、その方へハンスは振り向いた。
魔力の部分展開が乱されたため、レヴァンは一度それを消して再び照射を開始したようだった。
が、もとより数が多い空気弾である。充分に展開しないまま、空気弾と相対することになっていた。
そしてレヴァンが次に取った行動に、ハンスは舌打ちをした。
――あのバカ……ッ！
レヴァンは自分自身の体を使って空気弾を無効化していた。つまり、空気弾をたたき落としているのだった。
数が多いために先程は魔力照射という手を使ったのである。それを、単身で止めようとするのは無理な話だ。レヴァン自身もただでは済まないだろう。
しかし、ハンスが舌打ちをした理由はそこではなかった。
ハンスが知るレヴァンの動きは、敵の攻撃を見切り、最小限の動きでかわすものだ。
しかし、レヴァンはそれを使うわけにはいかない。かわしてしまえば後方にいる者たちに危険が向かうからだ。
だからレヴァンは、「自分の体で直撃を受けてまで」空気弾を無効化しているのだ。
「がぁ……ッ」
魔力を体表面に張っているのか、威力の高い空気弾でも切り傷一つできない。しかし、魔力で受け止めるということは、その分衝撃が増すということ。おそらくレヴァンは、空気弾一つにつき自動二輪が突っ込んできたような衝撃を肉体に味わっているだろう。
その様子を見てハンスは、
「……」
何もしない。ただ観察でもするような目でレヴァンを見る。
そろそろカナンも気づいた頃だろう。そう思って、視線を後ろに

向ける。さり気なくこちらを見ていたカナンにハンスはアイコンタクトを送った。
軽く頷いてから、残り二人に断ってから修練場を出ていくカナン。ハンスの指示を受け取って、先の男子生徒たちの正体を探りに行ったのだ。後は報告を聞いた師匠が何とかしてくれるだろう。
しばらく考えにふけっていた頭を強制的に停止させて、レヴァンの方へと意識を向ける。とそこで――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「がぁ……ッ」
脇腹にぶつかった空気弾のせいで肺から空気が押し出される。
瞬間的な酸欠に意識をふらつかせながらも、レヴァンは脇を通りすぎようとしていた空気弾に魔力をまとった拳で裏拳を放った。
直後、不安定な空気弾が爆ぜる。近くの空気弾を巻き込みその辺一帯の空気弾を一気に爆発させる。――近くにいたレヴァンに爆風を浴びせながら。
それにも目を閉じることが許されない。次々に迫る数の暴力にレヴァンはもはや反射のみで動いていた。
魔力を展開する暇もない。必要な「溜め」をする暇がないのだ。残りは三割といったところか。まだ数があることに気分を下降させながら、レヴァンは動きを止めることはない。
突き、払い、蹴り、叩く。
一見形のないただ身体を振り回すような動作。しかしそれは見る者が見れば自由で、どこか洗練されていた。
次々と困難を叩き落す。レヴァンはこの状況にどこか既視感（デジャヴ）を感じながらも、斜め前方を進んでいた比較的大きい空気弾をたたき落とした。
誘爆。その一帯の空気弾は一緒にかき消える。レヴァンはそこへ

の意識を切って反対側から来ていた空気弾に意識を向けた。誘爆を起こした場所の警戒は薄くても大丈夫。ここまでの対処法としては確かにそう判断しても仕方ない。しかし、そのためにここで裏目に出た。

誘爆したはずの一帯から、空気弾の一団がレヴァンを抜けていったのだ。

「しま……ッ！？」

完全に注意をそらしていたレヴァンには反応のしようもなく。空気弾は対処できないぐらい後方へと去ってしまっていた。

とそこで、

「なにしてんだ、役立たず」

そんな言葉とともに、その空気弾が斬られた。それも一つを斬って誘爆させたのではなく、一つ一つ全てを瞬間的に斬って、爆発はその結果に過ぎなかった。

とんでもない技量だった。それを成功させた武器が木刀だということが、レヴァンの感想に拍車をかけた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「なにしてんだ、役立たず」

――全く……。

言葉でも内心でも悪態をつきながら、ハンスは木刀をさやへ収める仕草をした。木刀にヒビが入っていた。

さすがに木刀で魔法を破るのは厳しい。

そんな感想を抱きながら、手元にない自分の愛刀が恋しくなった。

「ったく……師匠の言いつけだから仕方ないけどな」

浄法院内では、愛刀の代わりに木刀を持つことを言われていたハンスはため息をついた。そして、前方で先程より集中して空気弾を落としている馬鹿の姿を見る。

馬鹿なやつだ、とハンスは面白くなさそうな顔で思った。
――後ろで俺がカバーしてるって分かってんのに、なんで全部落とそうとしやがるんだ。どうして俺を頼ってきやがらな……。
と、そこまで思ったところで意識が止まった。自分が思ったことを振り落とそうと頭を激しく振る。
別に頼って欲しいわけではない。
そう誰かに言い訳するハンスなのだった。

レヴァンが最後の空気弾を叩き落とし、危機は去った。
「ハンス」
カナンは帰ってきていない。少し手間がかかっているようだ。カナンのことだから、みすみす逃がすことはないだろうが、バックに大きな組織でもついていたのかもしれない。
「おい、ハンス」
しかし例えそうであったとしても、師匠が何とかしてくれるだろう。そこは絶対の信頼が置くことができる。
「少しは反応しろよ」
肩を小突いてくる馬鹿に舌打ちしそうになるのをこらえ、ハンスは声の方を向いた。それでも嫌そうな顔は隠しきれていないだろう。
「……なんだ？」
「いや、そんな嫌そうな顔しなくても……」
馬鹿が困ったような笑みを浮かべて、頭をかく。しかし、ハンスはそんなところを見ていなかった。
鈍器で殴られたような痣。魔力の装甲を突き抜けた空気による裂傷。
レヴァンの身体中をそれらが覆っていた。おそらく現在進行形で痛みを伴っているだろう。普通なら痛みで気絶しているはずだ。
それなのに、レヴァンは顔色ひとつ変えずににこにこと笑ってい

た。
それにハンスは小さく舌打ちを漏らす。それに気づかないまま、レヴァンは口を開いた。
「ありがとな」
ハンスは、けっこう本気で殴り倒そうかと思った。
ハンスの衝動に気づいた様子もなく、レヴァンはさらに続ける。
「俺の力が足りないばっかりに、手伝わしちまってさ。ホント助かった」
足りないのはてめぇの脳味噌だ、と心の中でハンスが悪態をつく。
「……別に手伝ったわけじゃねぇよ。目の前に邪魔なものがあったから斬っただけだ」
内心とは違いながらも、本音を言ったハンスだったが、レヴァンは何がおかしいのか、にこにこと笑みを崩さない。
それはハンスのイラつきを増した。
「おかげで――」
レヴァンはフロルとアミナの方を見る。つられて見ると、二人は仲良さそうに魔法の練習をしているようだった。
「――二人も怪我せずに済んだようだし」
コイツはやっぱり馬鹿だ。
ハンスは思った。お人好しと言えばまだ救いがある――のかはわからないが、ハンスにしてみれば、甘すぎるというものだった。
誰かを守るために自分を犠牲にする。そんなものに価値など、ない。
自分の大切なものに傷ひとつ付けることなく、その上で自分も元気に戻る。それが最低限守らなくてはいけない常識だ。そうでないと、守ったはずのものも悲しい思いをすることになる。そのことを、ハンスは今までの人生で学んでいた。
だから、イラつく。
確かに目の前の馬鹿には多少力があるようだ。体術だけなら自分と同じレベル。魔力をうまく使えば、自分が負けるかもしれない。

しかし、その力を自分のために使うことを微塵も考えていない。
自分がケガをすることで誰を悲しませるかをわかっていない。
ハンスは遠くの二人をちらりと見た。わかっていない。コイツはとんだ馬鹿野郎だ。
守りたいものは自分を強くするが、強くないと守れない。自分を守れない奴は強くはなれない。
師匠から言われたこの言葉は、ハンスの信念となっている。それに反するレヴァンにハンスはイラついたのだった。
だから、
「まあ、なんというか、とにかくありが……ってうおぁ！？」
突然振り下ろされた木刀を白刃取りするレヴァン。相変わらずの動きの良さにハンスは舌打ちを漏らした。
「おい！　なんでいきなり攻撃を――」
「うるせぇ。訓練だ」
立て続けに木刀を振る。レヴァンは困惑したような表情のままそれを避ける。
うわぁ、とか、あぶね、とか騒ぎながら必死に避けるレヴァンの様子を見ながら、ハンスは嗜虐的な笑みを浮かべた。
コイツは馬鹿野郎だ。根っからの馬鹿野郎だ。自分を守ることもできない馬鹿野郎だ。だから、
ハンスは笑みを深くして、思った。
――自分を守る必要のないくらい強くしてやる。
ついでに自分の訓練にもなるしな、と後付けのように考えたあと、木刀の速度を上げる。
「その笑顔、こ、怖いぞ？」
「黙れ」
その後、陽が落ちるまで休憩も挟まず、ハンスは訓練を続けるのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「バタンキュー」
そんなことを言って、レヴァンは教室の床に仰向けに転がった。
放課後の教室。夕暮れももう終わるような時間帯。その中で、レヴァンは指一本動かすのも億劫になるほど疲労を感じていた。
「まさか、途中から教官も来るとはなぁ……」
「……それは大変だったね」
引きつった笑いを浮かべて労いの言葉をかけるのはフロル。レヴァンの傍らで床に座る彼女は訓練着ではなく、Tシャツとハーフパンツというラフな格好だった。
アミナはミグルスの検査があるらしく、教官に呼び出され、ここにいない。ハンスは、カナンに引っ張られどこかへ行ってしまった。直前の会話から察するに、買い物だと思われるのだが……ハンスの尋常じゃない嫌がりように背筋が寒くなったのは、レヴァンは胸の内に秘めておいた。
レヴァンはちらりと幼馴染の方を見て、すぐに視線を戻す。それに気づいたフロルが、声をかけてきた。
「？　どうしたの？」
小首を傾げるフロルを見ないようにしながら、レヴァンは口を開いた。
「いや、おまえが治癒使ってくれたらいいな、てさ」
それほど消耗しているわけではなかった。たしかに疲労はあるが、休めば治る類。わざわざ治癒を使う程ではなかった。
しかし、レヴァンの姿を見てフロルは納得した様子。レヴァンは自分の思ったことをうまく誤魔化せたことにホッとした。
「ごめんね、使えなくて。なんか苦手で……」
「わかってる。おまえに丁寧な作業なんて似合わないよ」

なんだって〜、と肩を小突いてくるフロルに、レヴァンは横たわったままフッと笑った。
――こいつが知る必要のないことだ。
レヴァンは自分の中でそう結論づけた。レヴァンは内心を表情に出さないまま、天井を見つめ続けた。その時に思い出すのは、先ほどの攻撃のこと。
――狙われている、なんて知らなくていいんだ。
先の生徒たちが放った魔法は、確かに範囲型であった。そして範囲型を使う場合、普通、範囲の中央に目標がくるように魔法を行使する。自分が魔物だからなのか、レヴァンにはある程度範囲を感じることができた。
そして、その中央に当たるのが、フロルだった。
一緒にいたアミナという可能性がないわけではないが、首席ということで何かと有名なフロルが目的と考えるのが普通だろう。主席という立場への嫉妬とレヴァンへの恐怖のせいか。
俺が何とかしないと。
招魔としての自覚を確かめて、レヴァンが決意を新たにしていると、
「ねぇ……レヴァン」
フロルが控えめに声をかけてきた。
「ん？」
聞こえてきた声に弱気な雰囲気を感じて、レヴァンは不思議に思った。いつもならからかいの一つ言ってきてもおかしくない状況であるにもかかわらず、今回に限ってこのような態度はめずらしかった。
「あ、もしかして帰りたかった？」
「い、いや、そんな事じゃなくてっ」
とりあえず思いついたことを言ってみたレヴァンだったが、違ったようだった。てっきり自分が引き止めるような形になっていたのではないかとレヴァンは思っていた。

そうじゃなくて、と言ってから落ち着くように一拍置くフロル。その様子にレヴァンはなにを言おうとしているか見当もつけられない。

不思議そうな顔で続きを待つレヴァンに、フロルは意を決したように口を開いた。

「後悔……してない？」

その言葉に固まったレヴァン。それを質問の意味を理解していないと取ったのか、フロルは繰り返した。

「私の招魔になって、後悔してない？」

レヴァンはフロルを見た。その不安げな顔。わずかに震える手を見て、レヴァンは反射的に答えていた。

「してないよ」

「……でも！」

尚言ってこようとするフロルを強い視線で制して、にっこりと微笑んでみせた。

意識的には違いないが、心からの微笑みを。

「たしかに辛いこともあったよ。忌み嫌われるのなんて、今でも慣れない」

でも、とレヴァンは続けた。

「アミナやハンス、カナンみたいに仲良くしてくれる人もいる。それは紛れも無くおまえのおかげだよ」

なんだかんだ言って楽しいしね。そういってレヴァンはフロルの頭を軽く撫でるように動かした。普通は恥ずかしさでレヴァンの手を払いのけるフロルだが、今回はされるがままになっている。

「それにさ」

手を動かしたまま、レヴァンは口を動かした。目を細めて、自らに言いきかせるように優しい声だった。

「ここにいたら、なにかやりたいことが見つかりそうなんだ」

なすこと全てが忌み嫌われた孤児院時代。いつのまにか目標というものを失っていた自分が、それを取り戻すことが出来るのなら、

それはとてもいいことだと思った。
そして、支えてくれたフロルに恩返しがしたい。
最後の思いだけは言うことなく、口を閉じるレヴァン。沈黙が訪れるが、気まずい思いは微塵も感じなかった。
「……そっか」
フロルがこぼすようにそう言うと、微笑む。いつものような元気にあふれたものではなく、どこか儚げなものだった。
その笑顔に、レヴァンの目が吸い寄せられる。その美しい笑顔を見つめれば見つめるほど、心臓の鼓動が速くなっていく。
自分の異常に戸惑っているレヴァンの様子に気づかないまま、やがてフロルは「よしっ」と言って勢い良く立ち上がった。その表情にはいつものような元気いっぱいの笑顔が戻っていた。
「なーんだ。心配して損したっ」
「おいおい……それはひどくないか」
フロルが本気で言っているのではないことはわかっていた。
ほら行くよ、とレヴァンを立ち上がらせ、手を引いて帰宅を促すフロルはきっと悩み続けているだろう。レヴァンに対して負い目を感じていることだろう。
それでも、それを隠そうと頑張っている。明るくいようと頑張っている。そのことがわからないほど付き合いは浅くなかった。
だから、レヴァンも明るくしていることにした。いつかフロルが負い目を感じることなく自由になれる時まで。
「待てって。自分で歩けるよ」
そう言って、寮へ向かう帰路にレヴァンは一歩踏み出した。その時、
……ウォ……ォォン……。
なにか苦しげで、淋しげな獣の遠吠えを聞いた気がした。
「……ん？」

「どうしたの？」
「……ん、なんでもないよ」
やっぱりハンスとの訓練で疲れているのかな？
そんなことを思いながら、フロルにつられてレヴァンは寮へと帰っていくのだった。

【1】ー15　狙われた〇〇（後書き）

訓練シーンの続きから。
今回は区切りが悪く、長くなってしまいました。集中力に自信のない人、ごめんなさい。

【1】-16　模擬戦…

来たる模擬戦当日。
レヴァンたちはいつもより早く登校して、会場の準備を手伝っていた。
模擬戦は浄法院ではなく、浄魔士の管理下にある外周の隔壁に近い都市の東門前で行われる。観客として議会のメンバーも訪れるので、浄魔士がその護衛につくようだ。ちなみに監視者は、職務で塔から離れることができないため、遠視術式による観戦であるそうだ。
参加者が会場準備をすることになっているので、ハンスとカナンは準備には加わらない。フロルとアミナは会場の方で細々とした通信機器の設置や観客席の整備、レヴァンは浄法院から会場まで必要な物資を運ぶという力仕事である。
三度目の機材運びを終え、レヴァンは再三再四、浄法院へと戻ってきたところだった。
「えーっと、次はA型の角材か……」
手元のメモ帳に目を落としながら、小走りで進む。校舎の裏にある倉庫へ向かうレヴァン。しかし校舎棟の前まで来た所で、そこにパルメル兄妹と教官が話している姿を見つけた。
「冥種の一群が迫るのは来週あたりらしい。二人とも気を引き締めておけ」
「わかってる」
「助言をありがとうございます」
校舎の昇降口を少し入ったところに三人がいたため、話の内容が聞こえなかったが、重要な話をしている様子だった。
邪魔をしても悪いと思って、レヴァンは足を緩めることなく倉庫へと向かった。

「……ぐぇ」
予想外の重労働の末、床に潰れてしまったレヴァン。会場に転がしておくわけにもいかず、フロルとアミナが協力して会場の外れへと移動させたところだった。
会場といってもそこまですごい設営がされているわけでもなかった。
十メートル四方のスペースを空けて、その周りに椅子を並べて観客席を作ったものだ。観客席には日射しを遮るための足の長いテントが構えられ、同じような作りで運営席のようなものも一角に作られていた。
それでもレヴァンが疲労を感じているのは、観客席の土台運びと運営の機材がそれなりの重量があったからである。
「飲む？」
「……うん」
フロルが差し出した飲み物をアミナが受け取る。ストローからチュウと水を吸い込む様子を見て、レヴァンが倒れたまま声を発した。
「俺には？」
「あそこで配っているから取ってくればいいよ」
フロルが指し示す方向には、浄法院の教員たちが飲み物を配っている。日射しが強いため、学校側の配慮として水が配給されているのだ。
その方向を顔だけ向けて見るレヴァン。手をその方向へと伸ばす。が、パタッと力尽きた。
「……取って、くる？」
「駄目、アミナ。甘やかすと癖になるから」
「……俺はペットか何かかよ」
ため息をひとつ吐いてから、レヴァンは起き上がった。
そして、斜め上を見上げた。そこにそびえ立つ「物見塔（ものみのとう）」の頂点を凝視するように、目を凝らした。
「……どうした、の？」

不思議そうな顔でアミナが尋ねてくるのを、レヴァンは、
「なんでもないよ」
笑顔で誤魔化した。
「……？」
その様子にフロルも疑問を感じたが、
「さて、そろそろ始まるから、俺らも用意しよう」
レヴァンがそう言って二人を急かして、話はそこで有耶無耶になってしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「これを感知するなんて……すごいわね」
遠視術式を一時的に解いてから、そう感心したようにつぶやいたのは、塔の最上階でリラックスして座っている監視者イレーネだった。
「どうかされましたか？」
傍らで朝食の用意をしていた側近の女性を見て、微笑んでみせる。
「大したことじゃないの。それにしてもおいしそうね。ありがとう」
「いえ、料理人も喜ぶことでしょう」
そう言ってから、その女性は脇へ下がった。朝食の用意ができたのだ。プレートの上にはおいしそうなオムレツが乗っていた。
「それではいただき――」
「食べる前に用を言え。この覗き魔」
一度持ったフォークを再び置いてから、イレーネは可笑しそうに笑った。
「エルちゃん、覗き魔だなんてひどいよ～」
「事実だろう」
エルゼは、遠視術式を使って生徒を覗き見していた目の前の最高権力者を半眼で見つめた。それにイレーネは更に可笑しそうに笑っ

た。
「ヘラヘラ笑わなくていい。早く言うことを言え」
エルゼに促され、イレーネは仕方ないなー、と口を開いた。
「例の水色の髪の子……レヴァンくんって言ったかな？　その子を連れてきてほしいの」
「……検査でもするのか？」
少し間を開けてそう返したエルゼを不思議そうな顔で見た後、イレーネは本日一番の笑みを浮かべた。
「ふふ。別に人型魔物の調査なんてしないから安心して。エルちゃん、生徒思いなんだね」
「勘違いするな」
そう言ってからエルゼは柱に身体を預ける。無表情を保っているようだったが、イレーネが見るところ、照れているようだった。
「エルちゃん、かーわいっ」
「黙れ」
嘆息しながら言うエルザは少し疲れた様子だった。
「にしても、今年はなんだか才能が目立ってきたね。すごく楽しみ」
そこまで言ってから、そういえば、とイレーネは脇に控える女性に目を向けた。
「娘さん、元気？」
「はい、おかげ様で。浄法院の方に通わせてもらっております」
「優秀らしいわねぇ？」
「そう言っていただけるのも援助をしてくださったイレーネ様のおかげです」
「だって、こんな優秀な側近の娘さんだもの。期待できそうじゃない？」
「光栄です」
軽く一礼をする側近に笑顔を向けたまま、朝食に目を向ける。そのとき視線を感じて顔を上げたイレーネは、自分に白けた目を向けてきているエルゼに気づいた。

「どうしたの？」
「私の仕事はレヴァンを呼んでくることだけか？」
エルゼが単純な質問をかけてくる。イレーネは少しも考えることなく答えた。
「そうだけど？」
途端、エルゼは頭痛でもするのか、こめかみを押さえた。
「……あのな。浄法院の生徒一人を呼ぶなんていう機密性の低いことは通信機器で言えばいいだろう」
「だって――」
心底呆れたような声を出す旧友に、イレーネは満面の笑みで答えた。
「エルちゃんに会いたかったんだもの」
「……はぁ」
エルゼはそれに応えることなく、頭上を仰いだ。
「それにしても楽しみ～。どんな試合を見せてくれるのかしら」
にこにこ笑顔のままそんなことを言うイレーネに、
「おまえが楽しみにしているのは一人だけだろう？」
顔を元に戻してエルゼが修正を促す。それに少しだけ驚いたように目を丸くした後、イレーネは意地の悪い笑顔を見せた。
「エルちゃんもレヴァンくん達には期待してるくせに～」
「うるさい黙れ」
からかわれることを好まないエルゼが、知るかというように踵を返してその場を後にする。それに続いて側近の女性も仕事を終えて、
「失礼します」
と一礼してから出ていった。
その様子を笑顔で見送りながら、イレーネは一人、先ほどのエルゼの言葉を思い出していた。そして、おもむろに遠視術式を再開する。
イレーネは会場で楽しそうに話す三人組、そしてその内の一人である少女を捉えた。

「本当に……楽しみ」
いつもとは異なる、慈しむような声でそうつぶやいた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

模擬戦には予選はない。観客がじっくりと見るためか、二つのフィールドしか用意されてなく、そこで試合が行われるのだ。
形式はトーナメント。敗者復活戦はない。よって、試合に負ければその場で観客に移ってしまう。そのせいか、参加する生徒たちは気合十二分といった顔をしていた。
「それが報われるかどうかが実力なんだけどさ」
そんなことを呟きながら、レヴァンは目の前の試合を見ていた。
第二学年同士の試合。どちらもレヴァンの知らない顔であったが、フロルが言うには総合の成績上位者らしい。
同じ年齢の生徒がどんな戦いを繰り広げるのか興味があったレヴァンは見ていたのだが、その結果はレヴァンがつぶやいた言葉がよく表現していた。
試合が二つしか行われないということは、観客半分以上の視線が選手に注がれるということと同義である。将来有望な浄魔士候補を見極めるために訪れる、隊長クラスの大物浄魔士も少なくない観客。そんな中にあって、簡単に慣れることなどできるわけもなかった。
緊張である。
手足の動きを阻害するまでになっている緊張のせいで、魔法陣が効果を起こすこともなく、戦いは実質招魔どうしの一騎打ちになっていた。
「なんかなぁ……」
苦笑を漏らしてしまうレヴァン。それほど面白みにかける試合だった。
「………緊張、してきた」

選手の緊張が伝わってきたのか、そんなことを言うアミナ。周りを見てみると、意外とそんな生徒は多いようだった。しかし、
「そう？　アミナなら絶対勝てるよ」
その隣にいるフロルは、緊張という言葉を知らないのではないかと思うほどに自然体だった。
「……フロル、余裕」
「そんなことないよ？　ただ、緊張しても意味ないと思うだけ」
笑顔で語るフロルを困ったような表情で見るアミナ。
たしかにわかっててもできないよな、とアミナに共感しながら、レヴァンは二人を見る。しかし直後、そういえば、と口にすると二人に尋ねた。
「ハンスとカナンってどこ行ったんだ？」
「……二人は、浄魔士。護衛に」
「……へぇ。カナンはともかく、ハンスもちゃんと浄魔士っぽいことしてるんだな……」
なんとなく感心しながら、もう一方の試合を見てみる。そちらも第二学年で……やはり同じように緊張で面白みのない試合をしていた。そのため、
「……ちょっと、歩いてくるよ」
そう言ってレヴァンは会場に背を向ける。フロルやアミナが止める間もなく、レヴァンはさっさと人と人の間を抜けだしていった。

抜けだしたはいいものの、することもなくうろつくレヴァン。
「て言っても、そんなに時間もあるわけじゃないし……」
そんなことを呟きながら、足を投げ出すように歩く。ついでになにかないかと周りを見渡した。
ウォォォ……ォォ……ン……――

ふいに聞こえる音。東の方向、以前も聞いた遠吠えのようなこの音に、レヴァンは顔をしかめた。
「疲れてんのかな？　やばいなぁ……試合に支障が出なきゃいいんだけど」
一人苦笑を見せながら頭をかいていると、レヴァンはふっと後ろを振り返った。
「……この気配に気づくか。貴様、実力を隠していたな？」
そこには教官が立っていた。
レヴァンは驚いたような顔を見せる。
「いえ、振り返ったら偶然。教官がいたのでびっくりしました」
「……そういうことにしておくか」
意味ありげに薄い笑みを浮かべると、教官はレヴァンの肩を軽く叩く。
「もう戻れ。試合前に契約者から離れるのは、招魔としてどうなんだ？　契約者が不安がる」
「アイツはそんな奴じゃありませんよ」
笑いながら答えるレヴァンを見て、教官の目がスッと細くなる。
「本当にそうか？」
「え？」
存外真面目な声に、レヴァンは驚きを隠せずに問い返した。そんなレヴァンをしばらく見て、やがてフッと笑った。
「まあいい。とにかく戻れ。もうそろそろ貴様の番だろう」
そう言って促した教官。言うことも嘘ではなく、もうそろそろフロルが文句を言い始める頃かもしれない。しかし、レヴァンは最後に余計な質問を繰り出した。
「教官」
「なんだ？」
「どうして俺の試合開始時間を知ってるんですか？　生徒全員の分を覚えるのは無理だと思うんですけど……」
その言葉に教官は反応を示さなかった。

ただ、落ち着きなくタバコの箱を探し始める。そして一本に火をつけ、口にくわえると、
「そんなことはどうでもいいだろう。とにかく戻れ」
「いや、そんな誤魔化さなくても――」
「いいから戻れ」
「どうしたんですか？　なんか様子が――」
「戻れ」
「……わかりました」
曇り空で特に気温が高いわけでもないのに、顔が赤くなってきた教官。そんな様子を見てレヴァンは不思議そうに首をかしげた。
釈然としないまま、教官に断ってから仕方なくレヴァンは来た道を戻った。
……途中、「攻略対象外！」という少女の声が聞こえた気がしたのは、正真正銘空耳だろう。

「おそーい！」
「ごめんごめん」
フロルのふくれっ面での出迎えに、レヴァンは苦笑で応じる。
会場を後にした時よりも人垣は厚くなっており、通り抜けるのが一苦労だったため、レヴァンがフロルのもとに戻ったときには、あまり時間的余裕は残されていなかった。
「もう！　アミナの晴れ舞台を見逃すところだったんだよ？　ちゃんと反省してよね」
「あぁ。アミナ、ごめん」
素直に謝るレヴァンに笑顔で応じるアミナ。彼女は、傍らのミグルスと作戦会議の真っ最中だった。
招魔は喋らないものが大半である。ミグルスとレヴァンを除けば浄法院にはほとんど存在しないだろう。そのため、アミナの「作戦会議」は周りにとってかなり異な事だった。

次はアミナの試合。そしてその次がフロルとレヴァンだ。自分より前の試合を選手は見ることができるが、直後の試合を目にすることはできない。
そのため、お互いに激励の言葉をかけるタイミングはここにしか無かった。
作戦会議が終わったのを見計らって、フロルがアミナの手を両手で握った。
「お互いがんばろうねっ」
「……うん」
恥ずかしそうに俯くアミナ。しかし、その笑顔は最初の頃の固まったものではなかった。
レヴァンがそれを微笑ましく見ていると、隣に気配を感じた。
「変な目を向けるでない」
「向けてないよ」
隣に来たミグルスを見る。当たり前のことだろうが、その様子に緊張はない。なにを考えているかをぼんやりと理解して、レヴァンは口を開いた。
「この模擬戦は負けても実は大したことない。大怪我もしないしさ」
いきなり語りだしたレヴァンに不思議そうな顔を向けることもなく、ミグルスは続きを促す。それを確認してレヴァンは続けた。
「だけど、アミナにとっては今までの練習の成果を試す時だ」
レヴァンは真夜中の氷景色を思い出しながら、ミグルスの方を見た。わずかに笑みを浮かべながら、
「負けんなよ？」
「おぬしに言われなくとも承知している」
やや憮然とした顔になりながら、ミグルスは言った。それをそのままからかうような笑顔に変えた。
「おぬしも醜態を晒さぬようにな」
「ぬかせ」
お互いに健闘を祈ってから、すでに会話を終えていたそれぞれの

契約者の元へ戻る。
「……行く」
「うむ」
そう確認しあってから、アミナとミグルスは選手控え室へと向かっていった。
自分に自信が持てなかったアミナ。その少女が自ら勇んで向かっていったその姿を見て、レヴァンとフロルは二人ともうれしそうな表情を浮かべていた。
アミナの姿を最後まで見送ってから、
「じゃあ、私たちは特等席でも探そっか」
「そうだな」
レヴァンとフロルも頷き合って、歩き出す。二人もアミナに負けないよう気合を入れ直す。
そんなときだった。

シレンティアの東門が、大地を揺るがす大きな衝撃音を放ったのは。

【1】ー17　決意と反撃

「浄魔士を全員、東門へ！　門を強化し、状況を報告させてください！」

物見塔は慌ただしく動いていた。連絡用の職員があっちへこっちへと動きまわる。

普段ほとんど使わない無線を利用して、イレーネは支隊長全員に連絡を流していた。

パニックの原因は突然響いた衝撃音。そのあまりに大きな音は、すでに四回目が聞こえていた。

東門が壊れる。

自分たちの生活を守っていた隔壁の一部が破壊されるかもしれないという恐怖が、塔の職員の間で広まっていた。

ドゴッッッ！！と、五回目が空気を揺らした。

「いったいどうなってるの……？」

冥種の群れはまだ五キロ地点といったところを移動しているはず。事態の唐突さに混乱しかけた頭を、イレーネは頬を叩いて無理やり冷ました。緊急連絡を回し終わったことを確認して、イレーネは遠視術式を発動させる。すぐに東門の外を確認。

そこには脅威になりそうなものはなにも見当たらなかった。

大きく頑丈な作りをした門。その外には乾燥した地面。そして、そこに揺らめく陽炎。

「……え？」

イレーネは違和感を覚えた。

今日の天気は曇り。地面に当たらない日光は気温を上げることもない。よって温度差による空気の層が出来るわけがない。陽炎が出来るような状態ではないのである。

イレーネはもう片方の手も使って、その陽炎を拡大した。

陽炎は途切れることなく揺らぎ続ける。増大する違和感。イレー

ネがそれを自覚するより早く、陽炎が消えた。
イレーネは驚愕のあまり、すぐに言葉を紡ぐことが不可能だった。
彼女の目は最も恐れていたものを映していたのだ。
陽炎と入れ替わるようにして現れたのは、冥種の一群だった。
群れというには言葉が足りない。数百もの冥種の軍団が、門の外側に殺到していた。イレーネは驚愕した表情のまま、搾り出すようにつぶやく。
「光学迷彩……!?」
光の屈折を操作し、自らの身体を隠していた。
知能がないと考えられていた冥種のこの行動に、イレーネは絶句した。信じられなかった。
レヴァンがこの場にいたのなら、瀕死のはぐれの狼狽する姿を思い出していただろう。
あまりの驚きに呆然としかけたが、イレーネはハッと思い直した。
慌てて手元のボタンを押し込む。
「全浄魔士に通達します！　東門から冥種です！　ただちに態勢を整えて――」
無線で連絡をし終える前に。
大木が砕けるような嫌な音が響いたかと思うと。
東門が破壊された。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

会場はパニックに陥っていた。
東門が大きな音を立てて破壊された瞬間はその方向を見て立ち止

まっていた観客や浄法院生も、なだれ込んできたものの正体を目にするや、怒号と悲鳴を上げて、我先にと都市の中央へ逃げ始めた。
飲み物のグラスが落ちては踏まれ、粉々になっていく音が響きわたる。東門広場や、中央へと続く東通りは狂乱に満たされていた。
とにかく助けを呼ぶ者。家族や友人の名前を叫ぶ者。ついには泣きわめきだす者。
膨れ上がる人の波が、実際の人数の何倍も多く感じさせ、なかなか逃げることができない。それがここにいる者をさらに混乱させた。
ただ迫り来る濃紫色の恐怖から逃れようと、他の者すら押しのけ逃げ惑う人々。
そんな光景を、レヴァンは見つめていた。
「レヴァン、どうしよう……」
隣のフロルが不安げな声を上げる。その声に反応したように大通り側から目を背けると、門の方を観察した。
なだれ込んだ冥種が生活区へ進行する前に、護衛に回っていた浄魔士がそれを食い止めていた。すぐに、連絡を受けたのか増援も駆けつけたようだ。浄魔士たちが態勢を立て直し、迎撃に臨んでいた。
しかし、相手は前代未聞の群れ行動の冥種。一体でも厄介な代物が集団と化して、浄魔士は苦戦を強いられているようだった。その姿は虫のような小さなものから、熊ほどまであるものも存在した。
レヴァンがその様子を見て口を開こうとする。しかし、その前に隔壁に備えられたスピーカーから流れるものがあった。
『全浄魔士へ。警戒タイプCを発令します。第三部隊は民間人を塔のホールへと避難させてください。繰り返します。警戒タイプCを――』
たぶん監視者の声だよな。
そんな感想を持ってから、レヴァンはフロルの手を引いて、中央、塔の方へと向かおうとする。そこまで行けば冥種に襲われることはない。しかしそこで、
『――加えて連絡します』

何かをためらうような間を作ってから、連絡が続いた。立ち止まる必要などなかったが、なんとなくで足を止めたレヴァンは、次の瞬間耳を疑った。

『浄法院生へ。冥種の個体数が想定以上だったため、助力願います。後衛からのサポートをお願いします』

浄法院生が戦線に出ることなど無いに等しい。浄魔士になってからの任務で初めて冥種を相手にするのが通例である。

そのような理由から、聞こえてきた連絡の異質さにレヴァンは困惑を隠せなかった。が、隣の少女は違った。

「レヴァン、行こ！」

握っていたレヴァンの手をぐいっと引っ張って、後衛の浄魔士たちに加わりに行こうとする。とっさのその行動は指示に従う、まさに優等生の行動。

しかし、怖くないはずがない。それを表すかのように、フロルの手は小さく震えていた。

レヴァンは、自らの手を引いて前を走るフロルの背中に呆れたような視線を向けた。

いくら学年首席の成績があるとはいえ、冥種との実戦経験はゼロ。普段実感はわかないが、浄魔士の中には殉職するものも少なくはない。まして自分たちは浄魔士になってすらいない。死ぬかもしれないという不安が心から離れなくて当たり前だ。

――まったく。世話のやける……。

仕方ないから守っていくか、と諦めに似た想いを表情に薄く表しながら、レヴァンはフロルと初めての実戦へと向かったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大通りの民間人避難が終わり、人が少なくなる。

そこにいるのは前線で戦う浄魔士たちと、後方から魔法で援護す

る浄法院生だった。
「主、こちら側の手助けはもういいだろう」
「……わかった」
アミナは自らの招魔の助言の通りに、東門を離れて隔壁を南に沿うように移動する。
想定外の冥種の数と威力に、隔壁もところどころ破壊され、そこからも侵攻を許すような状況になっていた。東門の迎撃態勢が整ったため、アミナは未だ手薄な方へと加勢しようとしているのだった。
「……レヴァンたちは？」
「確認はしていないが……。心配か？」
こんな状況にもかかわらず、ミグルスのからかうような声音に顔を朱に染めるアミナ。その様子を見てから、ミグルスはアミナが答える前に続けた。
「まあ、あやつのことだ。しぶとく生き残っているだろう」
そんな信頼を隠したような物言いに、アミナはくすっと笑った。
「……そう、だね」
感謝の気持ちを込めて返すと、アミナは緊張がほぐれた身体を一生懸命に動かした。
「……私が、頑張らない、と」
移動中に気合を入れなおしたアミナは、目的地に到着すると同時に思わず目を閉じてしまいたくなった。
肩口を切り裂かれ、足を食いちぎられ、冥種との戦いで怪我を負った者たちがあふれていた。
隔壁が崩れそこから侵入してくる冥種。それを浄魔士たちが迎え撃つ。しかし、少ない。圧倒的に人手が足らず、一人、また一人と倒れていく。
また一人、腕を裂かれ、倒れてしまう。
それにアミナは目を閉じないように強く心を持って、駆けた。
「……大丈夫です、か？」
そういってアミナは、一番近くにいた怪我人の傍らに膝をつく。

その怪我人に意識がまだあるということを確認してから、
「……ミグルス」
「安心しろ。守護しておく」
そう言って、アミナは一度目を閉じて集中すると、魔法陣を的確に描き始めた。
しばらくしてアミナが魔法陣をほぼ描き終えた時、浄魔士の戦線を突破した、獅子の姿をした冥種がアミナに狙いを定め、襲いかかった。
アミナは目を閉じていてそれに気づいた様子もない。そのまま、冥種の凶爪がアミナを引き裂こうと振り下ろされたところで、
冥種は丸ごと凍りつき、粉々に砕け散った。
それと同時にアミナの魔法陣も完成する。
魔法陣をかたどる蒼光が輝きを増し、蒼い光球へ。そのまま球体は怪我人の切り裂かれた腕を包んだ。
やがて光球が消える頃には、腕の傷はちょっとした切り傷ほどにまで回復していた。
「完了か？」
「……うん」
額に浮かんだ汗を拭うアミナに、ミグルスは心配そうな顔を向ける。
治癒魔法は効果が薄い。そのことに不満を感じたアミナはフロルと協力して、より効率的な治癒魔法を考案していた。
しかし、劇的に良くなったわけでもなく、効果を期待するには強力な想像力と集中力を必要としていた。それこそ、自分の精神を磨り減らしてしまうほどの。
ミグルスの視線に笑顔を返し、アミナは立ち上がった。足元の怪我人が覚め始めたのを確認してから、別の怪我人の元へと急いだ。
多数の敵を相手にするほどの攻撃は、まだ私にはできない。だから、自分にできることを。そうすることが、自分の目指すものに近づく一番の方法だから。

「………レヴァン、無事でいて……」
そうつぶやくと、アミナは自分の使命を果たしに動き始めたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「くそっ馬鹿みたいに多いな……！！」
悪態をこぼしながら、魔力をまとった素手で冥種を殴り飛ばす。それで冥種の方は気力が尽きたのか、砂のようにサラサラと体が崩れ、そのまま風に乗って消えた。
冥種の弱点は特にない。しかし体力はほとんどないようで、消耗させてそれを尽きさせれば倒すことが出来る。
レヴァンは顎先の汗を拭って、前に目を向けた。そこには二体の冥種がこちらに襲いかかろうとしていた。
レヴァンは膝を軽く曲げてタメを作ると、
足音だけを後に残すようにして消えた。
いや、加速した。目に見えないほどの初速で冥種に近づき、無防備になっている腹部に片方には手刀を、もう一方には蹴りをそれぞれ入れた。
直後、驚いたことに冥種は切り裂かれた。触れるか触れないかの攻撃によって摩擦で切り裂かれたのだ。並の装器士ですらもできないことであろう。安定を失った冥種は、そのまま砂となって消える。
着地した途端左右から襲いかかってきた新手の冥種を、足に魔力を送っての跳躍で回避。そのまま自らの真下でぶつかり合う冥種が、すぐにレヴァンを見た。赤い目がレヴァンを捉えた。
レヴァンは重力に従って落ちていく。このままでは冥種に攻撃されるだろう。しかし、
レヴァンを見上げる冥種は、直後、炎に包まれた。
『■■■■ッッ！？』

断末魔の叫びを上げて砂に還る冥種。それをレヴァンは素早く確認して、レヴァンは後ろから援護してくれている自らの契約者に感謝の意を込め手を上げた。
反応があったことを確認してから、離れすぎた距離を縮めるため、レヴァンはフロルの元へと戻った。
「おつかれさま。怪我は？」
「ないよ。そっちは？」
「私も」
レヴァンは安堵すると、状況を見極めた。
東門外側。冥種自体は確実に減っているが、それでもいまだ数百体という表現で合うような数。それに比べて、怪我などで戦える浄魔士の数は減っている。明らかに不利な状況だった。
フロルとともにレヴァンは、本職の浄魔士に混ざって最前線で冥種を食い止めている。しかし、このままではフロルを危険に晒してしまうことになる。
――援軍の見込みはもうない。士気は低くない……が、やはり数が多すぎる。せめて、冥種の侵攻を阻むことができたら……。
と、そこまで考えた所で、レヴァンは思いついたことがあった。
「フロル」
「なに？」
冥種の群れの真ん中に高位の爆発魔法を落とした後、フロルが振り向いた。レヴァンはその目を真剣に見て、
「おまえの考えたあの結界は出来るか？」
尋ねた。フロルは一瞬ぽかんとしたが、すぐに正気に戻る。
「……結界って、あの？」
レヴァンが真夜中の保健室でフロルから見せてもらったもの。結界の構成図はすでに出来上がっていると以前フロル自身が言っていたのをレヴァンは思い出していた。
「まさかあれを試す気？　失敗したらどうなるかもわからないんだよ？」

「失敗しなければいい。あ、もしかしてあの構成図を描いた紙がないと無理か？」
「いや……構成図は頭の中に入ってるけど……」
あの構成図を覚えてるのかよ、と内心舌を巻きながら、レヴァンは強く働きかけた。
「このままじゃ冥種にシレンティアを乗っ取られる。そうなる前になんとかしなくちゃいけないんだ」
レヴァンは言葉に力を込めるあまり、目の前の両手を自分の両手で力強く包み込んだ。そのうえ、真っ直ぐフロルの目を見つめた。
「え、え、ちょっと、手が……！」
困惑しているようなフロルの様子も気にせずに、レヴァンはなんとかしてもらうように頼み込む。
「どうだ？　やってくれないか？」
「え、えっと、その……」
「……無理か？」
「無理じゃ、ないけど……」
「それなら！」
「う、うん。わかった……」
やはり不安なのだろう。歯切れ悪く承諾したフロルを勇気づけるためにレヴァンは力強くその手を握ってから、離した。
「あ……」
「ん？　どした？」
「いやいや！　なんでもないよ……」
どこか残念そうに、手のひらを開いたり閉じたりするフロル。その様子を不思議そうに眺めてから、レヴァンは周りを確認した。
浄魔士が集まって大規模魔法を展開して冥種を一気に減らす。それを逃れたものを招魔や、数名の装器士が討つ。しかし、それでも全てを倒すには至らず、何体かの侵攻を許し、浄魔士が倒される。
状況は悪くなっていた。
「……フロル」

「……うん。結界は都市の中心から発動しないとダメだから――」
「物見塔か」
示し合わせてからその場を離脱する二人。直後、浄魔士の悲鳴が聞こえ、二人は顔を歪めた。
しかし、立ち止まらない。
二人は真っ直ぐ物見塔へと向かった。

＊＊

重傷を擦り傷程度まで軽減させた浄魔士が再び戦線に加わる。アミナは上がっている息を落ち着けるために、深く深呼吸を繰り返した。
「………どういたし、まして」
「あ、ありがとう」
何人目だっただろう。
数えるのを忘れるほどの人数に治癒魔法をかけ、アミナはかなり精神的に参っていた。幸い、招魔を前衛、浄魔士を後衛というスタイルから、浄魔士は攻撃、招魔はその守護というスタイルに変わって、怪我人は減った。しかし、ゼロではない。
アミナはふらつく足で一生懸命支え、次の怪我人へと向かう。しかし、
「撤退しろ！」
誰かが上げたその声を脳が理解するより前に、
地響きを立てて現れた巨大な冥種に、戦線が吹っ飛ばされた。

「…………え？」
アミナは咄嗟に理解することができない。それほど、目の前のものは非常識すぎた。

高さは五メートル超。体長にいたっては、十数メートルはある象のような形をしていた。ソレが一歩踏み出すたびに、何人もの浄魔士が回避行動を取るハメになる。
その威力は招魔で完全に止めることも叶わない。殺傷能力の高い攻撃魔法を次々と撃ちこむも、冥種にできるのは擦り傷程度。
あまりに浄魔士側は無力で。為す術が、なかった。
「……こんなの」
止められない。私たちじゃこんな大きいのは……。
アミナは我知らず震え、尻餅をついた。しかし、その目は強大な冥種を見続けた。そらすことが出来ない。
どうすれば、いいの……？
アミナが、そう途方に暮れかけたとき。
「士気がくじかれたな。無理もない。これまでとは桁違いの強力な個体」
弾かれたようにアミナが隣を見ると、傍らにミグルスがいた。その目は真っ直ぐ冥種の方へ。
「……主、生命力は残っているか」
「……？」
「まだ、動けるか？」
その答えを聞いて、アミナは戸惑った。
動けても意味のない力の差だ。そのことを実際に目にしたミグルスもわかっているはずなのに。なんでそんなことを。
巨大な冥種は少しずつ、しかし確実に近づいてきている。少しずつ地響きが近くなってきている。
怖い。怖い。止めようと自分を抱きしめていても体が震える。歯の根が合わない。恐ろしい。アミナは頭の中の殆どをその考えに支配されていた。
けれど、
「……まだ、大丈夫」
そう言って、アミナは目の前の困難を正面から見据えた。

確かに怖い。これほどの実力差があれば、一瞬で終わってしまうだろう。地響きを鳴らすあの大木の幹のような足の部分で踏み潰され、腐食効果であとも残らないかもしれない。考えるだけで全身に寒気が襲ってくる。

だけど、諦めたくはなかった。

それだとあの少年に合わせる顔がないから。

ずっとつらい思いをして、でも諦めなかったあの少年に顔向けができないから。

だから、私は諦めない。

「……そうか」

そんなアミナの思いを感じたのか、優しい声音で応えるミグルス。それで何がしたいの、とアミナが疑問を発しようとする。しかし、ミグルスはそれを遮った。

「それなら、その生命力を貸してもらうぞ」

え、と訳がわからず、アミナがミグルスの方を見た時にはその姿を消していた。

「……ミグルス？」

アミナがそうつぶやいたのと同時、アミナの耳に聞きなれた、それでいて大きな音が聞こえてきた。すなわち、物が急速に凍りつく音。

浄魔士たちの声が上がる。悲鳴ではなく、それは驚きと困惑の声だった。アミナがふっとその方向を見ると、

東門すぐ外側まで接近していた巨大冥種が、全身氷漬けになっていた。

そして、その正面。狼のような姿をした大型の魔物が座っていた。

突然の状況変化に全員の反応が追いつかない。

構図からいって氷漬けにしただろうその魔物は、人を背中に乗せ

られるほどの大きさで、オスワリでもするような体勢で、象の冥種をやや見上げていた。
その光景にアミナは言葉を紡ぎ出せずにいた。
他の浄魔士のように畏怖によって、ではない。その姿に見覚えがあったためだった。
あれはまるで、自分の招魔の黒い子犬――

《　聞け、人間たちよ　》

そこで聞こえてくるのは空気を轟かせるような重低音。声といえるのかわからないほどの振動が、離れたアミナにまでのしかかってきた。威厳。この文字を表したような声だった。
《　我が名は「猛き者（ミグルス）」。今、気高き盟約により誘われた氷の精獣　》
異常な力を感じさせる存在を目の当たりにして、他の冥種たちも動きを止めていた。それと並行して浄魔士がざわめき始める。
氷狼（フェンリル）――氷属性最上位の魔物の放つ圧迫（プレッシャー）に、支隊長までもが動きを止めているようだった。そしてアミナも、驚愕とともに気高き氷狼を見つめていた。
――……ミグルス……本当にミグルス、なんだ……。
体の底から溢れてくる安心感を自覚して、アミナの顔はわずかに綻んだ。アミナは立ち上がって駆け寄りたい衝動に駆られるも、身体から力が抜けてしまって動くこともままならない。しかし再び目を上げた時アミナは、こちらを振り返っていた精獣と目が合った、気がした。
《　人間達よ。今、汝らは苦境に立たされている　》
ようやく支隊長が我を取り戻したようにハッとする。その様子を確認したように頷くような素振りを見せると、氷狼は、咆吼を放った。
《　しかしそれがどうした！　数に押し流されようとも、強大なモ

ノが脅かしそうとも、汝らには守りたいものがあるのだろう！　思いだせ、誇り高き者たちよ！　≫

それはこの場の浄魔士たちだけではなく、都市全体に響き渡った。

避難しているはずの家族や恋人を守るため。故郷であり、揺り篭だったこの都市を守るため。再び笑顔で帰るため。

浄魔士たちはその瞳に光を取り戻す。その手にぐっと力が込められた。

――そうだ、俺たちには勝たなくてはいけない理由がある。

≪　降りかかる脅威は全て払い、且つ自らも無事で帰る。それが絶対条件だ。……出来るな？　≫

咆吼に比べるとはるかに小さくなった声には、その場にいる者の心に直接語りかける何かがあった。

そこでその場の指揮をとる立場である支隊長が最初の勢いを取り戻す。いや、それより勝るように声を張り上げた。

「言われた通りだ！　この化物たちを全部倒して、その上で俺たちも生き残る。それが今回の任務だ！」

その声に再び動き出した浄魔士たち。ある者は招魔の魔力を自らの身体に満たし、ある者はその手にある武器を強く握りなおす。

「総員、気合を入れろ！　今から俺たちがこの都市を守る！」

支隊長が、その位を表す純白のジャケットを羽織り直して、腕を突き上げる。

瞬間、冥種を圧倒するほどの声の振動が、地面をも揺るがした。

≪　我も力を貸そう。敵を殲滅するのだ　≫

自らの招魔であるその氷の精獣を最後まで目に収めてから、気力の限界を感じてアミナはゆっくりと目を閉じた。それと同時に浄魔士たちがそれぞれで雄叫びを上げながら、迫る困難に立ち向かう。

浄魔士たちの反撃は、ここから始まった。

【1】-118　未知の力

「住民のおよそ四割ほどが避難完了しました！」
「冥種の侵攻も弱まっているからって、気を抜かないようにしたまえよ？」

は、と敬礼をしてから、連絡員の浄魔士が再び塔の方へと向かう。それを見送ってから、少女は滴り落ちる汗も拭わないまま、魔法陣を描き、完成させ、放つ。目の前に迫っていた三体の冥種が、風に切り裂かれ砂へ還った。

オクタヴィア・アマビスカ。
若干十二歳で精獣の召喚を成功。魔導研究の能力の高さとともに評価され、監視者から二つ名を与えられた少女である。現在の年齢はレヴァンと同じか少し上。亜麻色の長髪を二つにくくってツインテールにした小柄な少女だ。しかし小柄といっても、その身体から放たれる自信のせいで華奢という印象は抱かない。
少女は白と青で作られた、支隊長とは違う趣のコートを羽織っている。それはこの都市で四人しかいない「二つ名」を持つ守護士仕様だ。
オクタヴィアが鋭い視線を辺り一帯へと向ける。
しばらくすると、今度は右手と左手を同時に動かした。魔法の並列発動という高等技術を難なくこなして、少女は建物の陰から襲いかかってきた冥種を合わせて二体焼く。
「疲労はたまるが、招魔の必要はないかな……」
手を休めないまま、少女はそんなことを考えた。
少女の招魔は、未だ数体しか確認されていない精獣のうちの一種、「風属性の竜種」だ。しかし、その身体はあまりに大きく、今回任

された任務には向いていないため顕現させていなかった。
侵攻を許してしまっているといえど、冥種は脆い。塔の専属浄魔士――一般的に守護士という――である自分には充分対処できるレベルだ。

汗を袖で拭いながらそんなことを考えたことが、しかし結果として油断となってしまったのだろう。
突然、耳に不快な高周波が流れた。
ただそれだけのことに、少女は顔を強張らせた。なぜなら自らの隊の浄魔士数人が力なく膝をついたためだ。
そして目の前の建物の陰には、いつのまにか少なくない冥種がこちらを覗き込むようにしていた。オクタヴィアは強力な魔法を組み始める。直感的にそのような行動をとってしまうほど、明らかに今までの個体とは雰囲気が違った。
魔法が組み終わるより早く、冥種のほうが動いた。
しかし、やはり今までの個体とは異なり、いきなり襲いかかることはない。その代わりにそれぞれの口をぐわっと開いた。
関節の動きとは思えないほど大きく開かれた口、口、口。それらを呆然と見てしまった浄魔士たちは先の膝をついた者たちを思い出すべきだったのかもしれない。

「全員、対魔法防御体勢！」

オクタヴィアの一喝がなければ、全員が血を吐くことになっていただろう。
日頃の訓練の賜物か、反射的に各々の招魔がそれぞれの属性で保護膜（シールド）を契約者の前面に広げた。直後、その保護膜からジュウっという音が聞こえてきた。
目を見開く浄魔士たち。一方でオクタヴィアは唇を噛んでいた。

冥種の口から放たれた攻撃。冥種の特性である腐食効果が、咆吼として照射されたのだ。それらが一種の毒のように肉体に浸透するのだろう。部隊の者はそのせいで倒れたのだ。
幸い範囲が狭いためか、大勢がそれを受けることはない。けれど、厄介な力に変わりはなかった。
――まさか、こんなのもいるとは。
内心の驚愕を表に出すこともしないで、オクタヴィアは自己保護魔法を展開した左手を払って、右手で展開していた魔法を完成させた。
同時に冥種の方も、咆吼を放つ。
両者の攻撃が正面からぶつかり合うようにして近づいていき……、
結果、オクタヴィアの魔法が咆吼を巻き込みながら冥種へと向かった。

『■■……■■■■ッッ！？』
「ざまぁみろ、だ。私の得意魔法は風なのだよ」

まるで驚いたような反応を見せた冥種を鼻で笑ってから言い放ったオクタヴィア。冥種たちは咆吼を繰り返すものの、腐食効果の乗った空気ごと押し返され、為す術がない。やがて、黒板を引っ掻くような耳障りな音を立てて、濃紫色の体が風の刃に切り裂かれる。
それら全てが砂に還るのを最後まで見ることなく、オクタヴィアは辺りの警戒に意識を戻した。
周りから漏れ聞こえてくる「さすがだ……」などの声にすこし照れる。褒められるのが嫌いではないので、悪い気はしなかった。が、
「警戒を怠るなよ？」
軽い注意でその場の緊張が丁度良く保たれた。隊の指揮に秀でた

少女なのだ。

「隊長、ご無事ですか？」

「うん。怪我もない」

副隊長である年上の青年に気安い口調で言った後、そのまま乱れた隊列の組み直しを命じた。

去っていく青年浄魔士の背中を見送りながら、オクタヴィアは深呼吸を一つ。

イレギュラーに打ち勝ち、士気も上がった。この調子で一般人の安全を確保しよう。

考えがまとまって前方を見た時、オクタヴィアは妙な違和感を覚えた。なんだか東の空が暗い気がしたのだ。

そのとき肩の通信端末に連絡。

発光ランプの色は赤。監視者からの非常連絡の際の色だった。

非常連絡は通信ではなく、一方的な連絡。耳を傾けると、聞こえてきた内容にオクタヴィアは凍りついた。

――東側から冥種接近。

――体長が十メートル近い超大型種。

端的にまとめると連絡の内容はこの二つ。

超大型。そんなものを止めるためには、自分の招魔が必要だろう。しかし、その余波が都市を壊す可能性もある、というよりも必ず被害を受けるだろう。

その冥種が来る前に都市の外側で仕留めなければ。

そう結論づけ、オクタヴィアは副隊長に後を任せてから、東門の方へと向かおうとする。

「隊長！」

「なんだ！？　私は急がなくてはならないのだよ！　用なら後に――」

「敵襲です！！」

な、と一瞬の間絶句して、すぐにあたりを見渡す。そこにはちらほらと冥種がいる。けれど、それだけでは敵襲だと注意を呼びかける必要などない。

オクタヴィアは空を見上げた。そして、絶句する。

小型竜。鳥類。爬虫類。挙句の果てには悪魔のような外観のものまで。

翼を持つ冥種たちが、空一面を覆い尽くそうとしているかのような光景が広がっていた。

「……全員、射出魔法展開。準備ができ次第、放ちたまえよ」

世界の終わりのような光景を目にしても指示を止めなかったことは、単に現実感の欠如によって恐怖を感じていなかったのか。

しかしその指示は、先のような気迫に満ちた声とは程遠いものだった。

その部下たちである浄魔士たちの顔も、暗い。

それは単純に、負けそうな戦いだから、というのではない。実際に負けたのだ。

浄魔士全員がかなり高位な魔法を発動させる。風が、水が、火が、雷が。色鮮やかなほど多彩な、それでいて強力な魔法が放たれる。

オクタヴィアの得意とする魔法補助の魔法陣。組み合わせた魔法の速度、物質なら質量も共に増加させ、威力を跳ね上げるそれを、彼女の部隊である三番隊の者全員に用いさせていた。これ故に三番隊は、魔法攻撃力随一と呼ばれてきた。

その総攻撃が上空の目標へ真っ直ぐ向かう。

その場に穴を開けるには充分すぎるその魔法は、しかし、冥種の放つ黒の波動に押し負けた。

「……」

三番隊長の少女は、歯を噛み締める。

冥種の波動は一つだけではなかった。咆吼が毒となるものもあれば、波動がそのまま物理的な影響を与えるもの。どうやら、それぞれ個体ごとに違う効果があるようだった。

――これは認識を改めるべきだろう。

自分の中の常識に当てはまらないことに、そんなことを思いつつも、オクタヴィアは手を動かした。

「大規模攻撃魔法『裂風刃』用意！」

敵が再び攻撃を撃つ前に仕掛けようと、指令を下す。部下たちも、まるでそれが来るのがわかっていたように、まったく淀みのない動きで各々の仕事を始めた。

「裂風刃」。それは魔法につけられた固有名だ。

魔法は一般的に、監視者、またはその直轄である研究グループ――その職員を魔導師と呼ぶため、魔導院という通称があり、オクタヴィアもまたここに所属している――から考案される。魔力の性質はいまだ未解明の部分が多く、膨大な回数の実験によって検証しつつ魔法は形になっていく。魔法は即座に開発することが困難、というよりも不可能とされているのだ。

よって、魔導院がすべての魔法を実質開発している。その研究データは全て監視者の持つ「魔法大全」という名の本に記される。その過程で固有名を与えられる魔法も数多く存在するのだ。

はっきりとした基準はないのだが、監視者の判断で危険な魔法と認定された場合に固有名をつけられると同時に、使用者を制限するなどの措置が取られるのが一般的だった。

ちなみに大規模魔法の類は、複数の浄魔士で連携をとり合う必要

があるため、合図としての意味を込めて固有名をつけられる。「裂風刃」もその内の一つである。

ものを切り裂く効果が付与された風を生み出す。自らの身長ほどある三日月型のイメージを変形陣『残月』で形にする。射出陣を幾重にも重ねる。

これら三つの作業を、浄魔士たちはそれぞれ分担して魔法陣を描き始める。

そしてオクタヴィアが、ばらばらに展開されたそれらを一つに収束。結果、特大の刃が完成して、上空へと放たれた。

何層にも重ねられた射出陣の働きで超音波を発するほどの速度まで達した風刃が、空飛ぶ冥種の群れへと着弾する。

その瞬間、着弾したエリアにいた冥種は身体中切り裂かれて、塵と化した。

そして、それだけだった。

「やっぱり無駄か……」

予想はしていた結果であったが、怯みすらせず、開いた穴を他の個体で補充する冥種に、オクタヴィアは歯を剥いて悔しがった。

その天才と呼ばれることもある頭脳でなにかないかとしばらく考えを巡らすものの、やがて苦渋の決断を下す。

「各人、冥種の掃討は放棄！」

一番良いのはこの場所で冥種を足止めすることだが、触れると腐敗してしまう怪物を、それもあの数を相手にするのは自殺行為だ。下手を打てば全滅の可能性すらあるだろう。魔力の盾も、物理的な干渉をするには圧倒的に密度が足りない。

そう考え、オクタヴィアは続けて指示を出した。

「安全を確保し、戦線解体。総員住民の保護へと回りたまえ！　安全は第一だ。お――」

怠るなよ、と締めようとした途端に、金切り音が耳をつんざく。ハッとしてオクタヴィアが上空を仰ぐと、そこには冥種がそれぞれ攻撃を開始していた。

返り討ちに遭わないよう上空を動かないまま、圧倒的な黒の波動を下にいる者に浴びせかけようとする。とても知能がないとは思えなかった。通説が間違っているのかもしれない。

「私が常識に囚われて、足元を救われるとはね」

自嘲気味な笑みを浮かべるオクタヴィア。そのまま両手を胸の高さまで上げたかと思うと、唐突に、そして高速で動かし始めた。

魔法を扱うには、足に筆を持って字を書くような思考集中が不可欠だ。それを多数同時にこなす彼女は都市にも数人いるかという「並立思考」というスキルを持った浄魔士だった。

五指をフル活用して、踊るような動きで動かしながら、同時に三つの魔法陣を並以上の速さで描き上げる。

「これでも隊長としての自覚はあるものでね」

隊員たちを死なせるものか。

一瞬の思考で取捨選択を行い、行動する。完成した魔法は、「運動力倍加」、「保護膜（シールド）」、「光系発散」。目くらましをかまして、その内に隊員たちを高速かつ安全に逃がすための魔法だった。

「総員、合図と共に退避したまえよっ。三……二……」

カウントダウンを始めるオクタヴィアの魔法を見極められないまま、隊員たちは命令に従おうとする。しかし一矢報いておきたいのか、それぞれが単発の上位魔法を展開した。
それらが放たれる。
容易く無効化される。
しかし、オクタヴィアにはその時生まれた隙がありがたかった。

「……一……た――」

オクタヴィアが退避、と言い切るより前。

唐突に、その一帯が、馬鹿みたいに強力な黒の波動に圧倒された。

「……ガ……ッ」
オクタヴィアの身体からは力が抜け、膝をつくことを余儀なくされる。
しかし、魔法発動直前で体内に魔力を残していたオクタヴィアは、黒の波動の侵食を抑えることができた。
問題は隊員たちだ。魔法を放った後、無防備になっていた身体に冥種の波動が流れ込み、全員が血を吐き、肌が裂け、その身体は赤く染まっていた。

「くそ……何なのだ……今のは……」

オクタヴィアはわかっていた。なぜ失念していたのかが不思議なほどだった。
その時、辺り一帯に夜が訪れる。
否、それは巨大な“影”だった。

「予想以上……だな」

オクタヴィアは頭上を仰ぐ。自分たちが相手をしていた群れなど足元にも及ばない。その姿は、人間が想像する冥種のイメージとは一線を画していた。
報告を受けた、例の大型冥種。
大きさは報告よりもやや小さい。住宅一つほどだろうか。しかし、それでもその尻尾を振られただけで多大な被害を受けるだろう。しかし、
それより予想以上なのは、雰囲気、だった。
言いようのない空気の感触と、目を離せないほど濃密な力の波動。先ほどの波動で三番隊をほぼ戦闘不能にしたのはこの個体だろう。
初めて感じる心の動きに困惑していたオクタヴィアは、それが“畏怖”だとは自覚しなかった。
強大種は興味がないかのようにその場を通り過ぎ、緩慢に真っ直ぐ塔の方へと飛んでいく。訪れた夜が明るさを取り戻しても、そこに残されたのは百体は下らない冥種の群れ。
退避。隊員たちは冥種の波動に身体を侵され、身動きがとれない。
迎撃。あんな数の冥種にどうやって？
オクタヴィアは迷いに囚われる。隊員たちの命はまだ心配いらないのだろうが、塔のシェルターへ避難している住民はどうなる？対冥種用に作られた建物も、あの強大種を目にすれば不安にならざるを得ない。今こそ守護士としての責任を果たさなくてはいけない時ではないか。
オクタヴィアは、斜め前方で必死に力を込めて立ち上がろうとしている青年の方を向いた。
「副隊長。ここの指揮は任せよう」
自らに活性化魔法を展開し始める。これで筋肉が一時的に活性化され、普段以上の動きを取り戻す事ができるだろう。

「た、隊長！　無茶です！　おやめくだ――」

青年がオクタヴィアの意図していることを理解したのだろう。活性化魔法は、寿命が縮んでしまうほどに身体への負担が大きい。しかし、彼女は自分にかけられた声を最後まで聞かず、展開を終えようとしていた。そこで、冥種の群れからも攻撃が放たれる。

高速で簡易な保護膜を隊員たちのいる一帯に展開した後、塔にいち早く向かうために魔法を発動させようとしたその時、

魔法陣が、簡易な空気弾を受けて掻き消えた。

「なっ！？」

訪れるはずの効果も現れることなく、魔法陣は消滅。これでは塔へ向かうことも叶わず、次の魔法を用意していないために、上空から来る波動を妨げる手段などない。

頭上を見ると数百の波動。これほどの波動を受ければ、死ぬ可能性も出てくる。様々な形の黒色を、オクタヴィアはただ見つめることしか出来なかった、

が、

「守法弐式――『魔天蓋』」

どこからか凛と響いたその声とともに、

冥種の攻撃は物理攻撃もすべて、巨大な蒼色の盾に阻まれた。

守法弐式？　聞いたこともない……まさか創作魔法？

オクタヴィアが唖然と口を開いたまま、その様子を眺める。三番隊全員を庇う屋根のように拡張された魔力の盾。冥種の攻撃を受け

たそれが、すぐさま変形を始める。
まるで布のように柔らかい動きではためいたかと思うと、その蒼色の布は上昇。不可思議な光景に反応できていない冥種の元まで近づく。そして、

「包囲――迎撃」

先に聞こえたものと同種の声がそう言ったかと思うと、巨大な布は冥種の群れ全体を風呂敷に巻くように、包んだ。
そして、そのまま瞬間的に収縮し、脅威となっていた冥種数百体はその叫びを上げることもなく、瞬く間に消え去っていた。
唖然とするオクタヴィア。突然背後からトンと足音が聞こえた。
身を緊張させて即座に振り向くと、そこには一人の少年がいた。
「これ以上の群れはもう無いらしいから、心配しなくていいよ」
水色の髪を掻くようにして、そう言ってくる少年。コイツが今の攻撃をやったのか、という疑問を抱いたオクタヴィアだったが、少年のシャツの胸元に所属を示すワッペンがないことに目を見開いた。驚いたことに、浄法院生か一般人のようだった。
内心の驚愕を知ったのかどうか、少年は真面目な声音で続けて言った。

「冥種の特殊攻撃は、魔力で抵抗できるから。全員にそれを伝えて」

そしたら戦えるから、とニコリと微笑む少年。
そのとき、冥種の残党が物陰から迫る。

「危な――」

それに気づいたオクタヴィアが庇おうとしたときには、すでに冥種は砂になっていた。

「招魔に相手をさせて一気に叩くより、招魔に守備を任せて攻撃に集中したほうがいいよ」

手刀の切っ先で冥種を切り裂いたのだ。

たしかに、前線ではその戦い方がいいと連絡が回ってきた。しかし、冥種と人間の力の差を考えて、招魔に相手をさせていたのだ。

それなのに、なんだコイツは……。

数百体の冥種を一気に払い、近距離戦では冥種を瞬殺。素手で触れたにも関わらず腐食効果に悩まされている様子もない。

浄魔士の中でもこんな手練はいない。装器士の中でもかなり上級の者で何人いるだろうか。ただの浄法院生なわけがない。

「キミ、ちょっと……」

「んじゃ、後は任せた」

そう言って逃げるように駆ける少年。その方向に思い当たることがあり、オクタヴィアは手を伸ばした。

「ま、待ちたまえよ！　そっちにはあの強大種が――」

駆けていた少年が顔だけこちらに向ける。

「後は任せて」

オクタヴィアはそのまま去ってしまった少年を目で追いかけながら、手を下ろした。

先ほどの実力を見たせいか、少年の放った言葉には安心感があった。

「隊長！」

青年の余裕のない声にはっと振り向く。上空及び地上の前方に、再び冥種たちが集まり始めていた。指示を下さいとの声に、何故か少年を思い出す。

「……招魔に身を守らせ、総員攻撃に集中！　大規模魔法も同時展開したまえよっ！」

おぉ！　という掛け声で士気が上がる。

そうだ、私は守護士であり、隊長だ。隊の仲間全員で乗り越えなくてはいけない。

「……負けてなるものか」

小さく、しかし力強くそうつぶやくと、オクタヴィアは同時に四つの魔法陣を描き始めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「もう！　なに寄り道してるの！」

「寄り道したわけじゃないって」

生活区の中心寄り。そこに建つ住居の屋根から屋根へと飛び移りながら、二つの影が話をしていた。

その片割れである少女がスカーレットの髪をなびかせながら飛ぶ様は、男性が必ず目を向けてしまうほどに美しいものだった。

一方、そんなものは昔から見慣れている少年の方は、水色の髪を困ったように掻いた。

「まったく……いくらあの隊長さんが可愛かったからって」
「ち、違うぞ？　別にそんなんじゃ……てかおまえもよくもまあ、あんなバカでかい魔法を使ったな。魔力が切れたらどうすんだよ」
「レヴァンの魔力が尽きたら……ごめんね、てへっ」
「てへっじゃねぇよ！　ったく……」

会話の阿呆らしさとは裏腹に、軽い身のこなしで素早く屋根を渡っていく。途中危険そうな場所をレヴァンが感知すれば、フロルが魔法を打ち込んで敵の妨害をする。そんな曲芸じみたことを二人はこなしていた。
向かうのは物見塔。しかし、目の前には大きな困難が。

「……大きいねぇ」
「……確かになぁ」

二人して感心したような声を漏らすのは、目の前を飛行する冥種を見たからだった。
しばらく地面から浄魔士が攻撃を仕掛けているのだが、ふらつく程度でいまだ安定した飛行を見せている。これほどの大きさは、前代未聞だろう。
「東門に出たのと同じくらいかな」
隣でフロルがそう考察した時、大きな爆発音のようなものとともに、その巨体が進行方向を変えた。いや、地上の浄魔士が放った大規模魔法で体勢を崩したのだ。
大きな住宅ほどもある巨体が、生活区の噴水広場に墜落していく。下から浄魔士たちの雄叫びが聞こえ、落ちた強力個体に浄魔士たちが群がる。
「……あんまりいい光景じゃないね」
高い場所から見下ろすレヴァンたちには、弱いものいじめのよう

に見えてしまうためか、フロルがつぶやいた。
しかし、この機会を逃すわけにはいかない。
フロルの結界には展開に時間がかかるらしく、あの強力個体が塔に着くと厄介なことになる。なぜあの冥種が塔を目指しているのか定かではないが、なんとか邪魔される前に結界の魔法陣を完成させなければならないのだ。
「行こう」
レヴァンがフロルの手を引いて加速をかけた。
フロルは驚いたような表情を浮かべた後、
「うん」
ほんのり赤い顔で頷いた。

近くの電柱をトントンと危なげなく渡り、一際高めの屋根へと二人は降り立った。そこは自分たちの学び舎の屋根だ。
「学校の屋上って、意外と広いね。お昼ごはんはここで食べてもいいかも」
緊急時とは思えない感想をフロルがつぶやくのを聞きながら、レヴァンは考え事をしていた。その表情を読み取ったのか、フロルの顔も暗くなる。
「……このままだと間に合わないね」
二人が見下ろす先には、人と冥種が入り乱れた混雑道路。住民の避難は終えたようだが、浄魔士たちは冥種の侵攻を抑えるのに苦労しているようだ。その防御網をすり抜けて、すでに十数体は塔の内部に入り込んでいる様子。
塔に入るには、冥種の混雑をくぐり抜けて行く必要があった。そして内部にもいるらしい冥種を引き付けないようにしつつ、最上階を目指す。
これらをこなす前に、強力個体が塔を攻撃するのは目に見えている。もとより二人は、強力個体が先ほどの噴水広場で消滅するなん

て思っていない。なぜか、あの個体にはこちらの攻撃が効かないような錯覚に陥るのだ。
「レヴァン……」
どうしよう、と表情で尋ねてくる少女に、レヴァンは目を向けた。
「方法はないわけでもないけどさ」
「ほんとっ？」
気乗りしない。苦笑気味のレヴァンの顔にはそう書いてあった。
それを読んだフロルは顔を真剣なものにする。
「……他に方法はないんでしょ？　私は大丈夫だから」
レヴァンを力強く励ますように言い切ったフロル。しばらく唸りながら考えていたレヴァンだったが、やがて腹を決めたようだった。
「じゃ、こっちついて来て」
レヴァンが塔とは反対側へと向かう。フロルもそれについて行くものの、レヴァンの意図はさっぱり読めない。
やがて端まで来ると、レヴァンは口を開いた。
「ちょっと失礼」
「え？　……きゃ！」
レヴァンはよっと軽い調子で、フロルを横向きに抱え上げる。要するにお姫様抱っこだ。
「ちょ、ちょっと待って！　な、なんで？　私まだ心の準備が――」
「いいからいいから」
困惑のあまりセルフパニック状態に陥っているフロルに、悪戯っぽい笑顔を見せた。手元のフロルが困りきっていることが腕を通して伝わってくるのを、レヴァンは感じた。

「んじゃ、行くか」

そう言って軽く走りだす。それはまるで助走でもしているような動きだ。というより、助走だろう。距離を進むに連れて、レヴァンの脚を蒼光が包んでいく。向かっているのは真っ直ぐ塔の方向。

「え、え？」

塔には窓があるが、現在開いている場所は、誰かが締め忘れたのか、一つしかない。最上階六十階より二階ほど下のフロア。監視者専用フロアとそれ以下の下層フロアを分けるために空けられた場所である。

そして、レヴァンの視線は一直線にその場所を見ていた。

「も、ももも、もしかして――っ」

「レヴァン・グラフェルト。ハイジャンプ、挑戦します！」

「えぇっ！？」

一気に硬直したフロルの身体をより強く抱え込んで、レヴァンは、

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「きゃあああああああああああああああ！？」

どの冥種よりも先に塔上層に乗り込むため、学校の屋上から思いっきり飛び出した。

「いやースリルがあったなー」

「死ぬかと思ったよぅ……」

何もない殺風景なフロアで、二人は寝転がったまま口から気持ち

を漏らした。
隣で穏やかでない雰囲気を感じたレヴァンはそっと窺い見る。フロルは小さく肩を動かして――いや、鼻をすすっているようだった。
「……もしかして、泣いてる？」
「……そんなわけないよ」

いつもとさほど変わらない声、しかしどこか濡れたような感じのする声にレヴァンは反省した。
「ごめん」
白無地の天井を見つめながら言った言葉に、しばらく沈黙が流れた後、
「……今度、お昼ごはん奢ってもらうからね！」
フロルは元気よく立ち上がった。
そんな様子に苦笑しながらも、レヴァンは安堵する。
「そんなことより行こ？」
急かすような言葉に一つ頷くと、レヴァンは勢いをつけて立ち上がった。その時に若干体勢を崩す。跳ぶときに踏み切った側の足から崩れた。

「どしたの？」
「いや、立ち上がり損ねた」
「ドジだなぁ」

笑い合って、軽く身体を回す二人。レヴァンはここで口を開いた。
「んじゃ俺は――」
「わかった。いってらっしゃい」
最後まで言わせずに言葉を紡ぐフロル。レヴァンは口を開いたま

ま固まった。そのまま二、三度口をパクパクとさせる。

「？　どしたの？　下の階の冥種を掃討するんでしょ？」

「本当に理解してるし……」

まいったな、とレヴァンは頬をポリポリと掻いた。「いったい何年幼馴染やってると思ってるの」とフロル。その言葉にレヴァンは重ねて苦笑する。

「……気をつけてよ？」

「わかってる。そっちもな」

互いに拳を突き合わせた後、フロルは上へ、レヴァンは下へと続く階段にそれぞれ足をかけた。

【1】-19　戦いへ

迫る凶爪。
「……ッ」
レヴァンは紙一重でそれをかわして、手刀で獣系冥種の脇腹を切り裂いた。見とれるほど細かい粒子になっていく冥種を最後まで見ることなく、迫り来る別の冥種に狙いを定める。

――さすがに無茶したかな。
軽い調子でそんなことを考えながら、レヴァンは左手で右手を包んだ。その手の中からは、血が滴り落ちていた。
いくら魔力で強化していても、所詮は素手。すでに何体屠ったかわからないその手は限界が近づいていた。そんなことをぼんやり考察しながら、死角から階段に向かっていた一体を蹴り裂く。
浄魔士の増援――助けた職員によると三番隊――が来たお陰で、新しく塔内に侵入する冥種はいなくなった。しかし、すでに入った個体が持ち場を離れられない職員たちに迫っている。レヴァンは、それを掃討するために塔の上層から降りてきていた。

「もう一踏ん張り頑張るか」
そういって足を踏み出した時、レヴァンは階下から新たな冥種が上がってくるのを感知した。そちらの方へ目を向けてみると、ちょうどそこから姿を表す。しかし、今回は同時に四体。
まとめて相手するのは無理と判断し、後ろに下がって距離を取ろうとするレヴァン。
しかし、バックステップをしようとした所でこちらに狙いを定めた四体の冥種の内、後ろ側にいた二体が金切り声を上げたかと思うと、まとめて砂へ還った。

突然消えた同族に驚いたのか、動きを止めた冥種にチャンスとばかりにレヴァンは両踵落としを仕掛ける。見事冥種の頭部を捉え、冥種は地面に叩きつけられ消えた。

ふうっと息を吐くと、レヴァンは顔を上げる。

そこには冥種二体を先に倒した者がいた。

「お疲れ様です、レヴァンくん」

「……なんでいやがる」

この上なく魅力的な微笑みを浮かべるカナンと、相変わらず機嫌悪そうにしているハンスである。その姿を見て、レヴァンは二人が外にいなかったことに納得した。

「二人は塔の見回りだったのか」

「はい。ごめんなさい、模擬戦を見ることができなくて」

本当に申し訳なさそうに腰を折るカナンに、慌ててレヴァンが顔を上げさせる。緊急事態にもかかわらずほのぼのした様子で、レヴァンは調子をずらされた。

「いや、結局冥種のせいで試合してないんだ」

「そうなんです？」

目を丸くしていたカナンに苦笑で応じてから、レヴァンはもう一人の方を向いた。

「よ。仕事頑張ってるみたいだな」

「うっせぇ。てめぇこそなんでここにいやがる」

「あえて言うなら……主人の付き添い？」

そうかよ、と吐き捨てるように言うハンスは、フロルに引っ張られてレヴァンがここまで来た、と勘違いしていたが、レヴァンは気づいた様子はなかった。

友人に会って話すのは仕方ないことではあるけれど、現在は緊急事態。あまりのんびりする時間もない。
「それじゃ、俺行かないと」
話を続けることなく、まだ残っている冥種の方へ向かおうとレヴァンが踵を返す。それをハンスが素早く呼び止めた。
「なんだよ？　……って危な！」
振り返ったレヴァンの鼻先に放り投げられた、そこそこの重量がある物体が二つ。危うく落としそうになるのをなんとかレヴァンは抱えるようにして受け止めた。
しっかり支えるように持ち直した後、改めてそれを見る。そこにあったのはレヴァンが想像もしていない物だった。

「……ナックルダスター？」
「浄魔士の下級装備だ。てめぇに渡しておく」

ハンスがフンと顔を背ける。隣でそれを見たカナンが口元を押さえるようにして笑った。
レヴァンは再び手元に視線を下ろす。ナックルダスター。軽くて丈夫な金属で作られた簡素な手甲に鋭い棘がついている。殴ったものに棘による損傷も与えられるという代物のようだった。
しかし下級装備といえど、レヴァンにはありがたかった。

「あんがとよ」
「知るか」

一瞬レヴァンの右手に視線を向けてからすぐにそらすハンス。正直じゃない奴、とつぶやくと。そうですねとカナンが反応した。レヴァンは早速その手に得物をはめてみると、滲んだ血がついてしまうことは心苦しく思ったものの、装着を完了する。
「うん。ちょうどいい」

軽く手を握ったり開いたりを繰り返してから、満足するように言った。
「そうですか。お兄さんが悩んだ甲斐がありま……むぐむぐ」
途中からハンスに口を押さえられたカナン。それをレヴァンは微笑ましく見ていたのだが、直後に新たな反応を感知する。
「……それじゃ、いっちょ頑張りますか」
そう言ってレヴァンが目を向けた先には数体の冥種。ハンスとカナンもそれぞれの武器を握り直した。しかし、

突然、大きく塔が揺れた。

地震かという直感的な考えをすぐさま打ち消す。それは、空気の振動……咆吼だった。

「しまった！　あの個体か！」
「浄魔士たちの攻撃に弱った様子はなし。上昇し、塔を狙っているそうです！」

レヴァンが焦り、カナンが浄魔士用の端末から連絡を受け取った。予想以上に早い内容にレヴァンは歯噛みする。そしてその上、カナンが続けて紡いだ言葉に目を見開いた。
「強大個体は塔の最上部に向かっているそうです」

瞬間、レヴァンは階段へ駆け出した。

「レヴァンくん！？」

自らを呼び止める声にも振り向かず、レヴァンは一心に駆け上がった。
フロルが危ない。
結界の構築を完成させていればなんとかなるだろう。しかし、準備中なのであれば危険だ。あのフロルが途中で作業を中止させるはずがない。
「間に合え……ッ！」
レヴァンは魔力を脚に回して、階段を高速で登り始めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……くちゅ！」
何故か急なくしゃみをするフロル。
「……誰か私の噂でもしてるのかな」
レヴァンがハンスに対して「主人の付き添い」と発言したのと同刻。フロルはいい感していた。
そんな考えもほどほどに、フロルは目の前の大きな扉を見上げた。荘厳な様式。それでいてあまり華美でない門のようなもの。この門を開ければ、奥にはこの都市の最高権力者がいるはずだ。
――ここに来ることなんてないと思ってたのにな……。
首が痛くなってきたので視線を前に戻し、時間もないので扉に手を当てた。大した力も入れずに、音を立ててその扉が開く。
開いた先にいたのは落ち着いた、それに加えて顔をやや緊張させ

た女性一人だった。しかし、フロルの姿を認めると安堵したような顔になる。

「フロルちゃんか……冥種でも来たのかと思っちゃった」

「驚かしたみたいで……すいません」

丁寧な口調で頭を下げるフロルを見て、その女性、イレーネが一瞬悲しげな顔をするが、すぐにいつも浮かべる微笑みに戻した。

その様子を見ないまま、やがてフロルが顔を上げる。

「監視者に折り入ってお願いがあるんです」

「なに？」

打てば響くように帰ってきた返事に、一瞬口ごもってしまうものの、フロルは意を決して言った。

「私に都市を覆う結界を構築させてください」

「……その魔法は、フロルちゃんが考えたの？」

「はい」

イレーネはまだなにか言いたそうな顔をしたが、フロルの真剣な眼差しを見てそれを改め、二つ返事のような言葉で承諾した。フロルが感謝を言い、再び丁寧に腰を折る。

「それで、お聞きしたいのですけど……なにか結界の核に出来るようなものはありますか？」

「核？」

「はい。魔力親和性の高い物質です」

その言葉にしばらくうーんと悩むイレーネ。正直フロルは焦れていたが、我慢した。するとやがてイレーネは手元のガラスケースを

指さした。
フロルがその方向に目を向けると、そこにあるのはこぶし大の大きさの鉱石だった。
「……これは？」
「外の鉱山で採れたものよ」
へえ、と近づいていくフロル。手を伸ばそうとしてイレーネに止められた。
「魔症になるわよ？」
息を呑む。反応ができないほどに、フロルは驚いていた。
人の限界を越えた魔力は、害にしかならない。それが体を傷つける状態になることを魔症と呼ぶ。魔法の使いすぎによる出血が、魔症の主なものだ。
そして魔症を起こすということは、大きな魔力がそこに存在するということである。
フロルは、大きな魔力が鉱物に含まれているということに驚きを隠せなかった。
「不確定要素の多いものだけど……どうする？」
もし鉱物が魔力を有するというなら、結界の維持がさらに容易になるだろう。フロルにとって悪くない話だ。確かに不安は残るが……選択の余地はなかった。
「貸してもらえますか？」
「わかったわ」
鉱物が乗った台座ごと移動させるように指示して、フロルはその

とおりに台座を監視者用の座椅子の後方、部屋の端へと持っていく。
「一つ聞いてもいい？」
「？　なんですか？」
端の方へ持ってきた鉱石に対し魔法陣を展開し始めたフロルに、イレーネが尋ねた。魔法展開中に気を逸らさせるような真似はご法度なのだが、気にした様子はない。フロルの方も、それによって支障を来すようなことはなかった。
イレーネは内心で感心を示した。
「その結界魔法は、永続するの？」
「それは……」
「最低限のメンテナンスがいるのね？」
「……はい」
フロルが申し訳なさそうに俯く。それでも魔法陣は描き続けた。
「でも私が毎回しま――」
「メンテナンスの方法、教えてくれない？」
「――はい？」
予想外の言葉を投げられ、戸惑うフロル。その姿を見てイレーネは微笑んだ。
「ここによく来てくれるようになるのはとっても嬉しいんだけど、あなたには自由に生きて欲しいし」
「そんな、束縛されるわけじゃないんですし……」
「でも、少しでも一緒に過ごしたい人ができたんでしょ？」
「……」
黙りこんだ少女にイレーネはゆったり微笑む。その顔から目を背けるようにして、

「……お願いします」
フロルは言った。
「任せて～」
嬉しそうに軽い調子で言うイレーネ。しかし、直後考え込み始めた。
「どうしたんですか？」
十層近く魔法陣を組み上げていた手を止めることなく、フロルが尋ねる。難問にぶつかったかのような難しい顔をして、イレーネは答える。
「……結界を維持する役目なら、監視者って役職じゃおかしいかなぁって」
「どうでもいいです」
「切り捨てられたっ！？」
騒ぐイレーネを適当にあしらうフロル。最高権力者に対する態度じゃないが、フロルも彼女が不安を抱えていることはわかっていた。
しかしあえてなにも言うことなく、黙々と魔法陣を組み立てる。片手で魔法陣を描き終える頃、もう片手で次の魔法陣を描き始める。彼女も並列思考の持ち主だった。
魔法陣を作成、積み重ねる。ひたすらこれを続け、魔法の構成が二十層を越えた時、
突如、強大な圧迫感が二人を押し潰そうとした。

「……ッ！」
瞬間息が詰まったイレーネ。一方、フロルの顔は焦りの色に染まっていた。そのとき、座椅子に備えられた端末から連絡が響く。
『強大個体が体勢を持ち直し、上昇！　塔の最上部へ向かっております！　早くお逃げ下さい！』
最悪の状況だ。まだ結界を完成させていないのに。
「フロルちゃん。結界は置いといて、早く逃げましょう！」
「……」
「フロルちゃん！？」
「ごめんなさい。それはできません」
目の前の鉱石から目を離すこともなく、魔法陣を展開し続けるフロル。その大事な使命でも果たすかのような真剣な様子を見て、イレーネは意図せず微笑んだ。
「……そっか。そんなにその子のことを――」
イレーネが言葉を紡ぎ終えるのを待つことなく、部屋の横壁が吹き飛んだ。そこには一体の、それでいて強大な冥種。
濁ったような不快な黒色の体表。獰猛なイタチのような頭部に獅子の体、それに物語の中の悪魔のような羽。どれもこれもが醜く、それは凶悪だった。
「来て！」
瞬間、イレーネが声を張り上げる。するとその脇に控えるように現れた茶色猫型の招魔が、一鳴きする。すると強大種は、イレーネのとフロルのいる場とは反対側へ注意を向けた。

フロルの結界が完成するまで後わずか。それまで耐えるために、イレーネは招魔への指示に集中した。
イレーネの持つ光系招魔の固有技能『イマジナリィ』。光の屈折を利用し、物体の位置を相手に誤認させるものである。強大種には、全く別の位置にフロルとイレーネの姿が見えているはずだ。
そのはずだった。
突然、強大種がとてつもない迫力の咆吼を放つ。それと同時に『イマジナリィ』は破られた。

「うそ……！？」
そして強大種は、イレーネのことなど見えていないかのように、明確な意思を持ってフロルの方を見た。正確にはフロルの前にある鉱石を見ていた。
それを、フロルも感じた。
――狙いはこの石？　この膨大な魔力に引き寄せられてるの……？
そこまで考えながらも、フロルは手を止めない。あと五層。

結界の完成を待つはずもなく、強大種がフロルに向かって動き始めた。イレーネがフロルに逃げるよう叫ぶが、黙殺。彼女はその様子に歯噛みをするが、イレーネの招魔は戦闘向きではないので、向かうこともできない。
しかし、フロルは心配していなかった。ふっと笑いさえ込み上げてくる。
――だって……。
強大種は牙を剥いて目前まで迫っている。そして、

水色の疾風が強大種を、力強く殴り飛ばした。

「……無事？」
「遅刻。埋め合わせしてもらうからね～」
「はぁ、仕方ないな……」
短いやりとりで互いの状態を把握する。浄魔士が束になってかかっても倒せなかった冥種を殴り飛ばした少年は、ボサボサ気味の髪を軽く掻いた。その手にはフロルも見慣れない手甲が付いている。

そこでフロルの方も準備が完了する。

「監視者様！　結界を構築します！　浄魔士に戦線後退の指示をお願いします！」
「わ、わかったわ」
イレーネは衝撃的な光景に絶句しながらも、フロルの言葉に何とか答え、端末を手に取った。イレーネがそれを置いた時、フロルの手元が光り輝く。

「守法特式――『界境』……展開」

フロルのその言葉とともに、都市の外周、隔壁の部分から、空気のゆらぎのようなものが発生する。否、透明な膜だ。光の屈折で揺らぎのように見えているが、都市を覆うように膜が展開され、半球状になろうとしていた。その膜は冥種の侵入を阻み、攻撃を防ぐ。

『■■■……ッ！？』

体勢を立て直した強大種が、その景色に驚くような素振りを見せた。冥種に知能がないというのは誤った認識であることはもう確実だ。そんなことを考えながらも、フロルとその招魔である少年は、その隙を見逃さなかった。
レヴァンが起き上がった強大種の横っ面を殴る。フロルが同時に

二つの魔法を発動させる。強大種はぐらりと体勢を崩した後、風魔法で勢いを増した劫火で焼かれた、ふうに見えた。
直後、強大種が咆吼を放つとともに、フロルの魔法が弾かれた。

「……フロル」
「うん……信じられない……」
短いやりとり。しかしその中で、お互いの驚愕を共有していた。

それは強大種が自らの身にまとう黒の波動を壁にして、自分たちの攻撃を防いでいたという事実に対してのものだった。
魔法に対してはほんの少しのダメージが見られたが、レヴァンによる物理打撃は、ほぼ無効化されていた。

「魔法が少し効くってことは……魔力か？」
「かも」
レヴァンが右手に力を込める。するとナックルダスターを更に覆うように、蒼光が現れた。

レヴァンが駆ける。
邪魔な虫を払うように、強大種が横薙ぎの攻撃をレヴァンに向ける。それを大きく跳んでかわすと、

「……はッ！」
裂帛の気合で、拳をその腕に叩き込んだ。濃紫色のオーラが蒼色の拳とせめぎ合った後に、ナックルダスターが破片を散らして傷つく。が、同時に冥種にもほんの少しではあるがヒビが入った。

『キィィィィィィッッッッ！！』
耳をつんざく鳴き声のようなものを上げて、強大種が大きく身をそらした。そして追い打ちをかけるように、刃の風が縦横無尽に強

大種に襲いかかる。一際大きな苦悶の咆吼が響いた。しかし、

「がぁ」

ガムシャラに振るわれた腕がレヴァンに当たってしまう。レヴァンなら避けられないはずのない攻撃だったが、塔に入るために跳んだ時の無茶がここで裏目に出る。レヴァンはその一撃だけで反対側の壁に飛ばされた。

「レヴァンっ！？」

フロルが咄嗟に叫んでしまったのも、致命的なミスだった。

咆吼。魔力を内包していてもすべてを弾くことができないほどの濃い波動。それがフロルに膝をつかせる。

強大種は怒り狂っていた。

その意志は、自らの前に立つ者の殲滅。その目はフロルを向いていた。

「……っ」

それを感じ取ったフロルは身をすくませる。その目は、意識せず吹っ飛ばされた少年を追いかけていた。壁にめり込んで、身体の動きを阻害されているはずの少年。しかし、彼は立ち上がって強大種を睨むように立っていた。

フロルはこんな時に安堵の息を漏らす。強大種がその手を振り上げる。すっかり腰が抜けてしまって、フロルはそれを避けるために動くことも叶わない。

それでもなお優しい顔で安堵していたフロルだったが、やがてその顔が強張った。その視線の先には相変わらず自分の相方である少

年。
レヴァンは魔法陣を描いていた。
今にも崩れそうに脚を震わせながら、レヴァンは力を込めて陣を描く。魔力の調整もまばら、形も歪なものだったが、その魔法陣にフロルは見覚えがあった。
学校の実習の時間によくふざけてレヴァンにかける魔法。そして、ふざけて使うことが許されない魔法。
囮魔法（ルアー）。
かなり難易度のあるはずの魔法が、レヴァンの手で描かれようとしていた。フロルは反射的に叫ぶ。

「やめてっ！」
レヴァンがやろうとしていることに気づき、止めさせようとするフロル。

「その魔法を使っちゃったら――」
死んじゃう、とフロルは続けられなかった。口にすると本当にそうなってしまいそうで。不安がフロルの喉を塞いだ。

そんなフロルにただ、レヴァンは、
怪我を感じさせないような柔らかな微笑みを向けた。

魔法が完成する。
強大種が振り下ろした腕が、フロルの頭上で止まり、そのギラギラとした目はレヴァンの方へと向けられた。
冥種が踵を返すと同時に、レヴァンもまた足を踏み込んだ。両者の距離が瞬く間にゼロになり、衝突した。
振るわれる腕をかいくぐり、脇に蹴りを叩きこむ。すぐに下がろうとした所でもう一方の腕にはたき落とされ、地面に叩きつけられる。

少しずつダメージは与えているものの、圧倒的にレヴァンがやられていた。フロルがなんとか気を引こうと魔法を何度もぶつけるが、レヴァンの魔法が強力でこちらに目を向けようとすらしない。

「こうなったら……っ！」

フロルが両手を同時に使い、一つの魔法陣を描き始める。大規模魔法陣。複数人用の魔法を一人で発動させようと、魔力をレヴァンから分けた所で、

「……かはっ」

フロルは咳をした。口からなにか飛び出したと思い、地面を見てみればそこには鮮血。鼻からも何かが滴る。手で拭ってみれば、鼻血を出していた。

「……フロル！？」

それに気づいたレヴァンが悲鳴に近い声を上げる。フロルはただ現実のことのようには感じなかった。手についた赤い液体をぼぉっと見ている。

レヴァンは焦った。魔症がフロルの脳にまで影響を及ぼしていたのだ。

「フロルッ！！」

大声で呼びかけながら、レヴァンはフロルと繋がっている不可視のパイプを意識。魔力を奪い返した。途端、フロルがぴくっと身を震わせて、正気を取り戻す。

安堵した途端、レヴァンは再び強大種の攻撃を受けた。

「っ！」

フロルが、心配から魔法を行使しようとする。それをレヴァンは一喝して止めさせた。冷静に判断したのか、フロルは手を止めた。

フロルは悔しそうな顔で見ていることしか出来なかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……ここも片付いたか」

そうつぶやく最年少装器士の少年が、額を拭って周りを見渡す。そこに敵の気配はすでにない。少年は他の気配を探した。しかし、そうしようとした所で、探していた人物の方から来た。

「どうしたんです、ハンスくん？」

「カナン、無事か」

学校とは違う、普段の呼び方に反応して、ハンスは振り返る。一瞥して、近づいてきた妹の状態を確認し、特に以上がないことを知る。しかし、

「……なんで赤くなってやがんだ」

「だって、ハンスくんが心配してくださるから」

いつものように意味のわからない台詞に、ハンスは無視を決め込む。それに文句を言うカナンを遮るように口を開いた。

「次行くぞ」

そう言ってさっさと歩き始めたハンスの後を、カナンは、ついていかなかった。

「ハンスくん」

「どうした？」

なにか危険を察知でもしたのか、カナンが真面目な顔をしている

ので、ハンスは真剣に問いかけた。カナンはその目を見つめて、やはり真剣な様子で口を開いた。

「レヴァンくんは無事でしょうか？」

「……おまえが他人の心配をするなんてな。成長したってことか」

「ありがとう、ハンスくん。でも今は――」

「問題ねぇよ」

二人はレヴァンが向かった場所に強大種が到着したことを、先程連絡で知っていた。フロルもいるであろうことも、レヴァンとの会話で推測している。その二人だけで強大種を相手にしているのだろう。しかし、ハンスは問題ないと言い切った。

「アイツは守るということに一際強い意志を持ってた。だから、心配いらねぇよ」

言葉足らずの説明に、納得行かない表情でもするかと思えば、カナンは美しく微笑んでいた。

「……ハンスくんこそ。レヴァンくんのことを信頼しているんですね」

「ぬかせ」

そう言うと、ハンスは頭上を仰ぐ。その天井の先には、レヴァンたちが奮闘しているはずだ。その間、自分たちに出来ることは数えるほどにしかない。

「次、行くぞ」

「はい」

浄魔士のうちでその名を轟かせるパルメル兄妹は、人間に害をなすモノを殲滅せんと、歩き出した。

【1】-20　反魔法

まずい。その一言に尽きる。

レヴァンはなんとか相手をしているが、ときどき直撃を食らっては確実に消耗していっている。フロルもしばらくは魔法を使うことも叶わず、イレーネも『界境』の維持に力を注いでいる。『界境』は八割方完成しており、後は上空をわずかに残すのみだ。

外にも相当数の冥種が残っているのだろう。応援は来ない。この場はなんとか凌ぐことしかできないようだった。

「……レヴァン」

フロルは唇を噛むことしかできない自分に苛立ち、そんなことをしている自分に苛立った。

――そんなことする暇があるなら、状況を良い方向に持っていく方法を考えなきゃ。

そんなことを理性で思っていてもそう簡単にはいかない。

そもそもあの強大種は倒せるものなのだろうか。あの頑強な胴体。金属でできているかのような硬い皮膚。そしてなにより、物理、魔法問わず大概跳ね返してしまう波動。そのせいでレヴァンがつけているナックルダスターもあちらこちらにヒビが入り、限界が近いようだった。

――そんな事考えちゃダメ。弱気になったら出来るものも出来なく……。

頭を振りながらそんなことを考えたフロルだったが、何かが引っかかったような感覚がして、考えを止めた。もう一度先ほどの思考を思い出す。そして、思い至った。

魔力も跳ね返す波動。

フロルはハッとした。何故今まで気が付かなかったのか。

あの強大種はレヴァンの魔力すら跳ね返した。属性の付加された他の招魔の攻撃なら、物理攻撃を跳ね返すのと大差ない。しかし、

レヴァンの魔力は無属性。外傷を与えるよりもむしろ敵の内側から破壊する性質のものだ。敵の体を妨げられることなく侵す、その魔力が弾かれているというのはどういうことか。
波動には、魔力と反発する性質がある。
単に壁としての機能で攻撃を防いでたのではなく、それに加え魔力と反発する性質があるとしたら、それは類似するものが存在する。他の個体の魔力と反発するという魔力そのものである。
冥種が扱うあの波動が、自分たちの使う魔力と同じものだとしたら。
あまりに常識離れした仮説であったが、フロルは確信に近いものを感じていた。
――もしそうなら、あれが効くかも……。
そう言ってからのフロルの行動は速かった。
「レヴァン、もうしばらく耐えてっ！」

「レヴァン、もうしばらく耐えてっ！」
その言葉が聞こえた時、レヴァンがまず感じた感情は安堵だ。
フロルの元気そうな声。そして、なにか閃いたような雰囲気。そこに信頼を寄せるのは、もはや当たり前の事だった。
「……やれやれ、骨が折れる」
少し口調を変えて気分を新しくするレヴァン。しかしその目は先程までにはない、強い光があった。
強大種がその丸太のような腕を振るう。直前でかわすと同時、ナックルダスターをこすりつけるように振るう。魔力が尾を引き、その部分が鋭く切り裂かれた。
『ッッッ』
先ほどまでとは違う鋭い動きに、戸惑うような仕草を行う強大種にレヴァンは追い打ちを仕掛ける。しかし、その蹴りは波動に遮ら

れた。
「くそ」
そう吐き捨てて、強大種から距離を取った。何をしているのか気になってフロルの方をちらりと見て、目を見開く。フロルが魔法を展開していたのだ。
多少時間が経って体内の魔力汚染も少しは抜けたのかもしれない。しかし、あまり大きな魔法が使えないのは確かだ。ここは止めるべきなのだろう。
しかし、あえてレヴァンは止めない。それほどまでにフロルの顔は真剣そのもので。だから、レヴァンは言われた通りのことを遂行する。
フロルの邪魔はさせない。
「ミグルス……おまえの言いたかったことがやっと分かったよ」
目の前の巨体を睨みつけながら、切れた口元を拭う。そのまま好戦的な笑みを浮かべた。
「招魔はその意志を明確にして初めて力を発揮する」
いつか訓練中に聞かされた内容を、意識したわけでもなくつぶやく。自分の中で出た答えを確かめるようにして、レヴァンは足を踏み込んだ。
『キィッ！？』
先ほどまでより更に一段階速度を増した少年に、強大種が狼狽を見せる。そこを見逃せるほどに、レヴァンは優しくはなかった。
懐に潜り込み、足が力強く地面を捉える。音を立てて地面が陥没した。
それを踏み込みとして、レヴァンは後ろに構えた拳を一直線に強大種の腹部へと決めた。
ギャ、とひしゃげた声を上げて、強大種が反対の壁まで飛ばされた。

「……ふー、ふー……」
一発だけで上がった息を沈めるようにしてレヴァンは深呼吸すると、後ろでペタンと聞こえた。振り返ると、フロルが力なく座り込んでいた。
「フロル！」
慌てて駆け寄る。フロルはふっと力ない笑みを浮かべた。
「やっぱり無理だった……」
笑ったようで悲しそうな声で言うフロルの体を支えて、レヴァンは自らが吹っ飛ばしたものの方を見た。
そこにはむくりと身体を起こす巨体。
多少のダメージは与えていたようだが、まだ足りない。きっとフロルの発動させようとした魔法はあの魔物にとって致命傷となりうるのだろう。しかし、肝心のフロルが魔症で動けない。
レヴァンの頭では方法が一つしかないように思えた。
「レヴァン……ごめんね。結局倒せなか――」
「フロル、俺を使え」
「――え？」
言われた意味が理解できなかったフロル。レヴァンは強大種を睨みつけたまま、自分の腕をフロルの前に差し出した。
「俺が魔力を出すから、この指を使っておまえが魔法陣を描くんだ」
今度こそフロルは絶句する。レヴァンはフロルの手を取って自分の腕を握らせた。
「おまえしかできないんだろ？　頼む」
真剣な表情で、切迫した様子で、レヴァンがフロルを見据えた。
巨体が起き上がる。それも見てからフロルは、
「わかった」
再びその目に光を宿した。
「いい？　魔力の放出は慎重に。魔力の大きさは一定でありさえすれば考えなくてもいいから」
わかった、と了解した後に、レヴァンは目を閉じた。魔力の放出

に集中するためだ。フロルはレヴァンの指先から魔力を確認すると、魔法陣を描き始めた。
強大種が完全に体勢を立て直す。ゆっくりと、しかし確かにこちらへと近づいて来る。それを無意識の部分で感知しながらも、レヴァンはただ魔力を放出し続けた。
大好きな都市を無茶苦茶にされた。
仲間たちを傷つけた。
そして今、フロルを傷つけようとしている。
レヴァンは目を開けた。すでに魔法陣は書き終わりだ。最後の直線を引く。
「レヴァン！？」
フロルの叫びの意味はわかっている。自分が魔力の放出量を上げたからだ。しかし、魔法陣は壊れることなくその形を維持し続けた。
「……ちゃんと起動してる……？」
回路となる魔法陣自体の線の太さは変えずに、そこに無理やり多くの魔力を注ぐ。かなりの力技で、人間には描けない魔法陣がそこに現れようとしていた。
強大種が速度を上げて近づいてくる。本能的に危険だと判断したのかもしれない。レヴァンの目には、なんだか焦っているように見えた。その巨体が間近に迫る。
「フロル」
「うん」
人間には大きな魔力は扱えない。その常識に当てはまらない異例の行動の結果、
魔法陣が二人の身長ほども大きくなり、光り輝いた。
「反法特式――『干渉解体』」
フロルが凛々しくそう告げる。
強大種が禍々しい爪を伸ばし術者を貫こうとするのと、魔法陣か

ら純白の光が伸びて強大種を包んだのは同時だった。
両者の攻撃が交錯する。
途端、断末魔の叫びがその場を支配した。何が上げている悲鳴か意識しないまま、眩しい光に目を細める。それと同時に、強大種の波動が消えて行く。否、まるで分解されているかのように細かな粒子となって散り散りになった。
やがて叫びが途絶え、白い光が止んだ時、そこには黒の波動を脱がされた無防備な冥種がいた。しぶとく生き残り、あわてて波動を展開しようとするその冥種に、
「遅えよ」
レヴァンが肉迫していた。
拳を握る。そこに目を灼くほどの眩い蒼光が宿る。
『ッッッッッ！？』
逃げようと自らが壊した壁の方へと移動する冥種。
「……俺はみんなを守るって決めたから」
そして、レヴァンは右手の拳を叩きつける。

リィィィ……ィィィ……ン……――

はかない響きがその場に残り、きらめく粒子になるものが一つ。
その粒子は風に乗って運ばれて、陽光にきらめきながら空気に溶けていく。

「……やった、の……？」
現実感のない状態で、意識もせずにフロルがつぶやいた。それを聞いて、レヴァンも認識した。自分は守ることができたのだ。
「……やった……やった、レヴァン！」
嬉しそうな幼馴染の声が聞こえてくる。禍々しい波動が消え去ったせいか、視界が明るい。後ろから軽やかな足音。フロルが近づい

ているようだった。レヴァンは振り向いて笑顔を見せようとする。
「……レヴァン？」
しかし、レヴァンは振り返ることも叶わないまま、地面に崩れ落ちた。その脇腹からは新たに滲む赤い色。
「……レヴァンっ！！」
なんでそんな顔してるんだ。
そんなことを言おうとしても力が入らない。最後に食らった強大種の爪が見事に貫いてしまったようだ。フロルの魔法のお蔭で腐食効果がなくなっただけマシかも知れない。
「嘘でしょ……ねえ、レヴァン！　レヴァン！」
なんだようるさいな。頑張ったんだから寝かせてくれてもいいだろ？
そんな文句を考えるのも億劫になってきていた。途端にまぶたが重くなってくる。焼けるように熱かった脇腹もいつのまにか寒くなってきていた。命の赤が、その場に水溜まりを作っていく。
俺も、さすがに、無理かなぁ。
最後の力を振り絞って、必死な様子で呼びかけてくる少女を仰ぎ見る。
……まぁ、コイツを守れたから、いっか……。
「ねぇ、目を開けてよ……！　馬鹿！」
少女が必死に呼びかけて、イレーネが思い出したように救護を呼ぶなかで、
「ダメだよ！　起きてレヴァ――」
レヴァンはふっと意識を手放した。

【1】－21　～エピローグ～　招魔の祈り

「中止になった模擬戦は、後日再びやり直す。各々、鍛錬を怠るなよ」
　では終了だ、という教官の声で教室の空気が一気に弛緩する。教室には冥種の襲撃後も相変わらず、いや襲撃後だからか、まじめに勉強する生徒たち。その中で、一人の少女が一人せっせとノートをまとめていた。

「……フロル」
「ん？　なに、アミナ？」
「……今日も質問。先に行く、ね」

　そっか、といって顔を上げて見送るフロル。垂れてきたスカーレットの髪を耳にかけて、アミナが行ってしまったことを確認すると、再びノートと向かい合う。
　招魔が精獣だという報告が上がったのか、ここ数日、教員に呼び出され質問攻めに遭っているアミナ。精獣クラスの招魔は、それだけで浄魔士の資格を得ることになるという好待遇なのだが、アミナは事実を隠し続けている。
その理由に心当たりがあったフロルは、負けてられないな、とやる気を新たにする。

「よし、できた」
　授業の内容をまとめたノートを自分の鞄へとしまって、立ち上がる。フロルはそのまま教室を出ていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

セイレン中央病院。冥種による腐食を治療できる唯一の場所で、浄魔士御用達の病院。そこの第二種集中治療病棟の一室にて、

「……」

死んだように動かない一人の少年がいた。

安らかな顔で横たわるその姿は、しかし寝息を立てていた。身体中に巻いた包帯。素肌が出ているのは顔だけではないかというほどぐるぐる巻きにされた少年がゆったりと胸を上下させて寝ていた。

「……ごめんなさい」

そんな声が聞こえてきたのは、眠っている少年の脇に立つ女性の口から。白法衣調の衣服に身を包んだ彼女は、ここにいてはならないはずの人間だった。

「……本当に、ごめんなさいね」

そう言って、折りたたまれた紙を近くの机の上にそっと置く。そのまま病室の扉から出ようと、身体の向きを変えた。

「俺には、なんで謝られるのか見当もつきませんよ」

その声に反応して、女性は弾かれたように振り返る。そこには上半身を起こした、先ほどまで寝息を立てていたはずの少年がいた。

「起きてたの……」

驚きを長引かせることもなく、女性は水色の髪を風になびかせている少年――レヴァンの方へと数歩近づいた。机においたばかりの紙を手に取ってくしゃりとつぶした。

「ところでどうして監視者（モニター）は――」
「もう今はモニターじゃないわ。『庇護者（プロテクター）』よ」
「そうですか。庇護者はどうしてここに？」

こんな短期間で役職名が変わったことに内心驚きながら質問を放ったレヴァンに帰ってきた答えは、

「お見舞いよ？」
簡潔なものだった。綺麗な笑顔に二の句が告げなくなる。それを見て、庇護者イレーネはくすくすと笑った。今気づいたが、どこかで見覚えのある笑い方だった。

国家最高権力者に理由もなく見舞いに来てもらえるほど目立ってしまったのだろうかと、今更ながらレヴァンは思っていた。そしてきっと庇護者であるこの女性は、レヴァンの怪我を自分のせいだと思ってしまっているのだろう。

「今回、冥種について常識だと思われていた事柄が、ことごとく覆されちゃったわ。冥種は囮の群れを使って私の目をごまかして、襲撃時間をずらしてきたし。冥種にも知能があるというのはほぼ確定ね」
「は、はぁ……」

突然、事後報告をするイレーネに訝しげな顔をするレヴァンであったが、口を挟むようなことはしなかった。情報があっても困りはしない。

「そして、対応しきれずにいた隊員たちをあなたは救った。それを加味して、あなたにかけられていた制限を無くすことが決定したわ」
「え……？」

「あなたが魔力を放出したあの日。覚えてるわよね？」

フロルを守るために魔物として覚醒したあの時、議会からかけられた制限。

『その能力を公に明かすことなく、監視の下、表舞台に出ないこと。また、監視者直轄の教育機関に通うこと』

それが制限の内容である。当時すでに監視者であった彼女が知っていても不思議ではない。

それが無くなることなど考えもしなかった。レヴァンは驚きから覚めることなく、しばし何も言わなかった。代わりにイレーネが言葉を継ぐ。

「あなたはこの都市の救い主。それは多くの目撃者が証言できるわ。だから議会の人間にも、もうあなたを飼い犬状態にはさせない」

だから、将来は自分のなりたいものにね、とイレーネが決意すらこもった言葉をレヴァンに語りかける。その笑みに、ようやくレヴァンに現実感がやってきた。

「……でも、特に変えたいことはないですよ」

「本当に？　なんでもいいのよ？　今ならパン屋さんにもしてあげちゃうわよ」

「いや、パン焼けませんし」

意外と鋭いツッコミを入れられて、イレーネが目を丸くする。しかし、すぐに笑顔に戻すと、イレーネは嬉しそうに目元を綻ばした。

「よかった……あの子とも仲が良いみたいだし」

「え？」
「なんでもないわ。あ、そうそう……」
そう言ってイレーネは、やはり見覚えのある悪戯っぽい顔をした。
「エルゼ教官が、『明後日ぐらいには訓練に来い』って言っていたわ。ふふ、愛されているのね」
「愛と鞭とは聞きますけど、教官は鞭とトンファーだから行きたくないな……」

その言葉に、イレーネが可笑しそうに笑った。その光景にすらどこか既視感があって、首を傾げるレヴァン。
しかし、すぐにその考えを振り払う。病室の外の廊下から、タタタ、という足音のようなものが近づいてきていたからだ。
その足音が近づいて、レヴァンの病室の前で止まる。少しの間があって、閉められたその扉が開いた。そこに踊るのは、スカーレットの長髪。

「お、フロ――」
やってきた幼馴染の名を呼ぼうと声をあげようとした、そのとき。同時に、フロルも信じられないといった様子で、目をむいて叫んだ。

「お母さんっ！？」
……はい？

まさにそのように心中でつぶやいた。
お母さん、というのは女性の親のこと。そして、この病室にはフロルを除けば女性は一人しかいない。イレーネである。

「……えぇっ！？」
反応が遅い、と二人から即座にツッコまれた。

「え、え、庇護者の娘がフロル？　だってまだ若い……」
「ふふ、ありがとう」
「庇護者？」

役職名の変更を知らないのか――公式な発表はまだあっていないので当然だが――首をかしげて疑問顔になるフロルをとりあえず無視。それにむっとした表情になるが、レヴァンはそんなことにも気づかないほど驚愕で頭がいっぱいになっていた。
そんなレヴァンを一時的に放置することにしたようで、イレーネはフロルに話しかけた

「フロルちゃん。あの結界魔法はあなたが考えたの？」
「いえ、監視……じゃなかった、庇護者さまが考案されました」
「丁寧語はやめてよ～。……やっぱりそうなっちゃうのね」

議会の爺様たちをどうあしらおうかしら、と考えこむイレーネにレヴァンはその内容を聞かなかったことにする。そして、イレーネの悩む仕草に再び訪れる既視感。そして思い至った。妙にあどけなさを残すその仕草は、フロルが見せるものと同じだったのだ。

「それに……第三部隊が『創作魔法を操る者を見た』っていう報告を上げたのも……あなたよね？」
「それはレヴァンってことになってます」
おい、とレヴァンは口を挟んだ。

「ふふ、仲が良さそうでなにより。フロルちゃん」
「はい？」
「……好きなのね？」
途端下から顔を真っ赤にしていくフロルを見て、レヴァンは温度

計を想起した。フロルが早口で何かを言い返したようだが、イレーネはしれっと流す。フロルへのイレーネの言葉が理解できず、自分は反応しないほうがいいな、とレヴァンは判断した。

「レヴァンくん」

呼びかけに答えてレヴァンがその目を見ると、イレーネは声音とは裏腹に真剣な目をしていた。自然、気持ちが引き締まる。

庇護者――いや、一人の母親であるイレーネは、レヴァンに向かって口を開いて。

「この子のこと、これからも守ってあげてくれないかしら」

「もちろんです」

即答。それも単なる肯定より強い表現に、イレーネが驚いたような顔を見せる。その理由を「俺はフロルの招魔ですから」と続けた。イレーネとフロル、二人が同時に残念そうな顔をしたのは、とても印象的だった。

「？」

「気にしないで」

フロルにそう言われて、レヴァンはその通りに。考えこむのは苦手だった。

それを最後に話の種が尽きた時、シュッと音を立てて病室の扉が開いた。

全員が反射的に振り向いた時。イレーネはキョトンとして、レヴァンとフロルは驚きに目を見開いた。来たのは、レヴァンたちのクラスメイトの少年だ。ガタイのいい肉体に、薄茶の刈りこんだような髪。

「……失礼します」
無意識的に出たのか、武道場に入るときのように口を動かしたその少年。

その少年は、以前不用意な発言でレヴァンに思い切り殴られた者だった。
空気を読んだイレーネが壁際に移動して、レヴァンたちから離れた。その少年は、レヴァンの前まで来ると、

「……悪かった」
いきなり深く、頭を下げた。

「……」
口を開けたまま反応ができないでいるレヴァン。少年は身体の向きを変えて、フロルにも頭を下げた。

「アイヤネンも。悪かった」
レヴァンと似た反応をするフロル。何も口にしない二人に緊張をしたのか、その大きな体が強張った。そして続きの言葉を口にする。

「おまえには、きっと嫉妬していたんだ。浄魔士にとって役立つ力。グラフェルトが持つそれを見て、そんなふうに考えていた。しかし、それを持つことで感じる苦しみもあることに気づきさえしなかった。……アイヤネンに気付かされた」

レヴァンはフロルの方を向いた。その泳いだ目を見れば悟った。フロルはレヴァンをクラスに受け入れてもらえるよう、必死に訴えたのだろう。レヴァンは呆れたため息をついた。

「俺たちもいけないとはずっと思っていた。しかし、汚い感情をど

うにか出来なかった。それだが、そんな情けない俺たちをおまえは冥種から救ってくれた……」
「そんなおおげさな」
半ば本気の言葉だったが、その少年は首を横に振る。「俺だけじゃない。みんな感謝している」

今までありえないと思っていた展開を目の当たりにして、レヴァンは返す言葉が思いつかないまま次の言葉を待った。が、

「――俺に戦い方を教えてくれ」
「……は？」
予想外の言葉に、一瞬本気で耳がおかしくなったかと思った。

「おまえが戦う姿を見て、浄魔士になるという目標がはっきりした。今更虫がいいと思われるかもしれないが、おまえとも嫌な関係のままではいたくない」
そこで少年はレヴァンと正面から向かい合った。

「……だから、仲直りのチャンスを与えて欲しい」
もともと根が正直な少年なのだろう。その瞳には影や曇が見当たらない。レヴァンが幼馴染に感じるものと同じものをそこから読み取った。レヴァンは少し考えるようにしてから、口を開いた。

「……俺は戦い方を教えない」
「……ッ」
「……レヴァン」

しっかりと言い返したその言葉に、少年が悲しそうに目を伏せ、フロルが心配そうにつぶやいた。それらを見てから、レヴァンは少年から目を離さないまま、さらに言った。

「俺は招魔だからな。魔法や浄魔士のセオリーは教えられない。戦術の指南ならフロルに請いてくれ、オストワルトくん」
バッと顔をあげた少年に不敵な笑顔を見せる。隣でフロルも微笑んだのが雰囲気で分かった。

「オストワルトじゃなくて、エンケでいい」
「わかったよ、エンケ。俺のこともレヴァンでいいから」

不敵な笑顔のまま手を差し出すレヴァン。エンケはそれにほっとしたように微笑んでから、同じように唇の端を上げて笑った。その笑い方が彼の印象に合っていた。

「ありがとう……。これからよろしく頼む」
「おう」
「うん。よろしくね……」
フロルもともに挨拶して、そして、涙を零した。

「えぇ！？」
「ど、どうした、アイヤネン！」
慌てふためく男二人に、フロルは涙を見せたまま笑った。それにつられて、レヴァンもエンケも笑みを浮かべる。その場に暖かな空気が満ちたように、レヴァンは感じた。

「では俺はこのあたりで。レヴァン、しっかり身体を治してくれ」
少し三人で話した後に、エンケがそう言って席を立った。去っていくたくましい背中を見て、レヴァンは未だに信じられなかった。
受け入れられているかは、まだ微妙なラインだろう。しかし、一

歩目を踏み出すことができた。
そう思うと、レヴァンの目にも温かいものが混じった。それをさり気なく拭ってから、エンケと、ついでに帰るというイレーネをベッドからではあるが見送った。
扉が音を立てずに閉まった後、部屋に残されたのはレヴァンとフロルだけだ。

「ちゃーんと、授業のノート取ってあげてるからね」
ここに置くね、とフロルが机の上にノートを置いたので、レヴァンは嫌そうに顔をしかめた。それにくすっと笑いながら、フロルは口を開いた。

「レヴァン」
「……うん？」
「辛いんでしょ。上体寝かしててだいじょぶだから」

レヴァンは思わず苦笑した。やっぱ見抜かれていたか、と頭を掻こうとするが、包帯で厳重にローリングされていることに気づいて、パタンとベッドに背中を付ける。フロルが「この強がりめ」と笑った。

「ねぇ、レヴァン。おか――庇護者から何か聞いた？」
一転して不安そうな顔を見せるフロルに、わけわからずレヴァンは首を傾げるに留まる。

「なにかその……私のこととか」
「フロルのこと？　いや、全く」

フロルが肩をがくっと落として、「話されるのは恥ずかしいけど、全く話されないのも……」となにかボソボソと言っていたようだっ

たが、レヴァンにはハテナマークを増やすだけの結果となった。
「そういえば、アミナは？」
追及することなく、気になったことを尋ねてみると、何故か睨まれた。
「えい」
「ぎゃあ！」
人差し指で軽く身体をつつかれ、痛みに悲鳴を上げるレヴァン。
「な、なにすんだよ！」
「……なんでもないよう」
その拗ねたような行動が可笑しくてレヴァンは思わず怒りを忘れて笑ってしまったのだが、それがフロルの機嫌を急転直下。
それからしばらくフロルの機嫌直しに時間を取って、「ぷり」っと口で言ってからフロルが機嫌を直すまで三十分近くかかった。
そして、会話がなくなる。しかし気不味くなることなく、穏やかな時間が流れた。
「……綺麗」
外に目をやっていたフロルがつぶやいたのを聞いて、レヴァンもまた視線をそちらへ向ける。夕日に照らされた緑が調和を保ちつつ、主張するように光り輝いているその光景は、確かに目を奪われるものだった。
「俺、やっぱりおまえと浄法院に来てよかったと思うよ」
驚いたように注がれる視線を見ないまま、顔の横で受け止めてレヴァンは微笑んだ。

「魔法はからっきしだけど……なんだか、学校が待ち遠しい」
そう言って外を見続ける少年を見て、フロルも嬉しそうに微笑んだ。

「……それが、『楽しい』ってことだよ」
諭すようなフロルの言葉に、「……そっか」とだけレヴァンは返した。今まであまり感じたことのない感情の動きに、レヴァンは意識することなくふっと笑った。

「あのね、レヴァン」
フロルが強く意志のこもった目で、窓から望める物見塔を見上げるようにしていた。

「ん、どしたよ？」
それにつられて、レヴァンも塔を視界に収める。

「私ね、わかったの。私、周りからのレヴァンの扱いに耐えられない」
レヴァンは口を挟む事もせずに、続きを待った。フロルがすーっと息を吸い込む。そして、優しくレヴァンを見た。

「浄魔士になろう？」
その言葉に、レヴァンは目を再び塔の方へ向けた。

浄魔士にはいくつか階級がある。下の方から、「実習生」、「下級士」、「上級士」、そして上級士の内から五人まで選ばれ、塔の専属守護であり浄魔士たちの頂点――「守護士」。
「……ああ、そうだな」
自分は生きているだけで害となる人外ではない。そのことを示すためにコイツと進んで行くのは良い試みかもしれない。

しかしそれには浄魔士じゃ足りない。もっとその上、全員が自分を認めざるを得ない、その高みまで。
レヴァンは、笑みを不敵なものに変えた。そして、確信を持った。これから必ず、波乱に満ちつつも『楽しく』て仕方ない、そんな日々になることに。
時間がかかるだろう。それでもいい。でもいつかは――

「そうだな、登ってみせるさ。……絶対に、一番上まで」

【1】－21　～エピローグ～　招魔の祈り（後書き）

これで第一章は終了です。
一部一部が長くてすいません。二章から気をつけています。
まだまだ未熟です。けれど、精進しますのでこれからもよろしくお願いします。

【2】ー1　模擬戦リターンズ

薄暗闇の中。
飾り気など微塵も感じられない通路。金属の部品を組み合わせて作られたそこは、どこか不気味な空気が漂っていた。

カッ……カッ……。

そんな音だけが響いてくるその空間には照明の類は見当たらない。しかし、何も無いわけではなかった。
円筒型の水槽。
数えきれないほどのそれが、通路の両脇に並んでいる。そこから漏れる光が、照明無き通路を淡く照らしていた。
そして水槽の中。
全ての水槽に違う形状の生き物が、眠るように体を丸めてゆらゆらと浮かぶ。違う形状とは言ったが、全てに共通している特徴もあった。その生き物たちは、全て濃紫の身体をしていて――
カッ。
唐突に、そんな音が水槽の側で響いたかと思うと、そこにはいつのまにか一人の男が立っていた。

「……被験体からの抽出は困難、ですね」

誰に話しているわけでもない。ただ確認するように、男は一人呟いた。シワひとつない顔を見ると二十歳そこらの青年を思わせるが、身にまとう雰囲気は落ち着いていて、その姿を実際より老けて見せている。身につけた白衣のポケットに手を突っ込んで、水槽を、そしてその内側に眠るモノを冷たい瞳で観察していた。

「……やはり、アレが必要のようですね」

男は一つ頷くと、踵を返して来た道を戻るようにして、通路の奥へ進んだ。

「わざわざ取りに行くのも面倒臭いのですが……やれやれ」

困ったような、それでいておかしくてたまらないという禍々しい笑みをその顔に浮かべて、

「それでは、取りに行きましょうか」

男は薄暗闇の中に消えていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

沸き上がる歓声。それは、壇上の選手が風魔法で敵の招魔を転がしたことに対してのものだった。

招魔を一時的に無効化された契約者は、簡易の防護魔法を生み出すために陣を描く。相手が攻撃を加えるより先に、それを発動。とどめの一撃の筈だった雷撃はその効果を存分に発揮することなく水で出来た膜に阻まれ、消えた。

「……惜しかったなぁ」

そうつぶやいて再び魔法陣を描き始める少女。雷撃が無効化されるとは思っていなかったために、少し悔しそうですらあった。

ダメ元で風魔法を射出。それは体勢を取り戻した大猪の招魔に防

がれた。相変わらずの巨体に少女はため息をつきそうになった。
少女がスカーレットの髪を耳にかけ直す。その仕草を隙と見たか、相手である男子生徒――二つ上の第四学年だ――が大猪に攻撃を命じた。
人間の身長の倍近い巨体に似合わない速さで突撃してくる大猪を、少女は見た。しかし、躱すことはしない。そもそも躱せるほど相手は遅くないのだ。
大猪がフロルを目標に攻撃を加えようとした、そのときに、
一人の少年が少女の前に躍り出た。大猪の牙を掴んでその動きを真正面から受け止める。その手足には、仄かに蒼光が宿っていた。

「……危ない真似するなよ、フロル」

「だってどうせレヴァンが守ってくれるんでしょ？」

対戦相手の驚く顔を視界に収めながら、気楽そうに話す二人。「それにしてもさ……」と不満そうな顔をして、少年――レヴァンがフロルという少女を見る。その隙に大猪はレヴァンを突き飛ばすようにして距離を取る。フロルは右手で魔法陣を展開しながら、それに笑った。

「がんばって、私の招魔なんだしっ」

「楽しそうに言うなよ」

招魔。契約によって、その主を守る役目を持った魔物。レヴァンは特殊な事例だが、フロルと契約する人型の招魔なのだ。

「じゃ、行くよ？」

「……はいはい」
マイペースなフロルに応じるレヴァン。これから、事前に打ち合わせていた作戦を実行するのだ。

フロルが、展開していた魔法を発動させる。それはフロルがかけ慣れ、レヴァンがかけられ慣れているものだった。
大猪の視線がレヴァンへと集中する。生憎、人間には効果が無いようで、契約者の方は魔法の効果が理解できずに訝しげな表情をしている。それもそうだろう。この「囮魔法（ルアー）」はA級魔導書にしか載っていないような、マニアックな魔法なのである。

「レヴァンお願い！」

後ろに下がって更に魔法を展開し始めたフロルの指示に、へいへい、と応じてレヴァンは大猪の方を見据えた。
フロルの展開に焦って、相手も急いで陣を展開し始める。やはりここまで勝ち上がってきた猛者。魔法陣を乱すような事にはならない。
そこまで観察してから、レヴァンは目の前の大猪に集中した。向こうの方も今はレヴァンしか見えていない状況。勢い良く猛っているのが圧迫感として伝わってきた。
彼我の差が一気に縮まる。レヴァンは駆け、そして跳んだ。
大猪は小回りが効かない。勢いに乗った巨体はそのまましばらく前に進み、勢いを落とした時点ですぐにでも振り返ってレヴァンに仕掛けようとする。
が、その頃にはレヴァンが背後から距離を詰めていた。拳を五回、大猪の背に一気に浴びせる。大猪は苦しそうな鳴き声をあげた。
しかし、そのままでは終わらない。反撃として、振り返りざまに牙でレヴァンを突こうとする。それを予測したレヴァンはその攻撃が行われる前に再び跳んだ。

振り返った猪の背後に降り立つ。全力の攻撃が空振りされ体勢を崩したその招魔を、

「……っはぁ！」

気合一発。蹴り飛ばした。

持ち上がることなど想像も出来なかった巨体が、低空飛行で空を舞い、壇上の端へと飛んでいく。

「……うわぁ！？」

相手の生徒が驚いたような声を上げる。仕方ないことだ。大猪の巨体が自分に向かってきているのだから。

魔法展開へ注意を払いすぎていたのか、相手の生徒は咄嗟に動くこともできない。結果として、その巨体に押しつぶされることに。その時に漏れた「うぐぇ」という声には、さすがのレヴァンも耳を塞ぎたくなった。

そして、

「びりびり～」

そんな間の抜けた声と共に発動された雷系射出魔法が”五つ”。フロルの元から相手の元まで綺麗な放物線を描いて雷が走る。着弾と同時、相手側の契約者と招魔の聞くに堪えない叫び声が、試合終了のブザーとなった。

＊

「大勝利だね～」

「もう少し温情を見せよう、温情を」

何気に嬉しそうな声で喜ぶパートナーに、レヴァンは苦笑気味に答える。「勝負に甘えは許されないんだよ？」とキョトンとした顔で言うものだから、レヴァンは背筋が寒くなったのを感じた。

四試合目が終了し、今は選手控え室。そこにはレヴァンやフロルの他にも何人かの生徒がいる。自分の出せる力を出し切ろうと、絶えずウォーミングアップをしているようだ。レヴァンはそんな様子を見ながら、今回のイベントのことを思った。

現在、中止となっていた模擬戦が行われているのだ。

門の近くで行うのは危険と判断したのか、浄法院の修練場を全て使って開かれたこの模擬戦には、先日の倍近い人数の見学者がひしめき合っている。冥種の襲撃を受けたあのときに浄魔士の必要性が最認識され、議会の方も浄魔士育成に力を入れ始めた、と報道でも流れている。

そして、当の浄魔士たちはなるだけ自分たちの部隊に戦力を引きこもうと、こうして隊長職だけに留まらず浄魔士の卵たちを見に来ているというわけだった。

そして、そのことをレヴァンは他人事に出来なかった。

「フロル、今度は何処からもらったんだ？」

「えーっと……四番隊」

なぜなら、フロルが勧誘を受けるからである。

フロルが創作魔法を使うことはなぜか知られておらず、特異性を買われて勧誘されているわけではない。単に優れた魔法戦闘技術を見込まれていた。

まあ、それだけなわけもなく。幾つかの部隊はレヴァンの物珍しさに興味を持って、という理由があるからのように思えた。

「ってあれ？　二番隊の誘いはどうしたんだ？」

先の試合後にもらっていた二番隊の名刺が無くなっているのを見て、レヴァンが尋ねた。すると、フロルが半笑いを浮かべた。レヴァンには、それが怒りを孕んだものだと理解できた。

「だってあそこ……レヴァンをまるで……」

そこまで言って口をつぐんで、暗い顔で俯いてしまうフロルに、レヴァンはふっと笑った。

「ありがとな」

なるべく優しく聞こえるように言う。フロルが顔をわずかに明るくしてハッとレヴァンを見る。レヴァンの言葉に自嘲の響きがないことを感じ取ったのだ。レヴァンが笑いかけると、フロルも微笑み返した。

『二学年のフロル・アイヤネン。三学年のラル・デリアス。次の試合の準備を始めてください』

とそこで流れた出番を知らせる放送に二人とも「え、もう？」という顔をする。まあ勝ち上がったからかな、と瞬間的に納得して、お互いため息をついた。

「もう少しダラダラしたいな……」

「今回ばかりは同感」

優等生のフロルの賛同を得て、サボタージュしようか悩むものの、自分だけの問題ではないのでレヴァンは頬を叩いてその考えを押しのけた。

「よし、行くか！」

レヴァンは気合を入れて立ち上がる。その様子を微笑みで見つめていたフロルも、軽く足首を回してから立ち上がった。が、そのとき、

「お、おい！」

フロルはバランスを崩し、そのまま体勢を崩す。危うい所でレヴァンが支えて、フロルは怪我をせずに済んだ。

「う……？　おかしいな……？」

フロルはレヴァンに咄嗟に謝って、少し身体に力をいれるようにしてみるも、ろくに体が動かせない様子。突然の事態に、レヴァンは慌てた。

「だ、大丈夫か？　さっきの試合で怪我でも……」

「それはないんだけど……少し頭痛いかな」

らしくない姿を目にして、レヴァンの混乱度も上昇。加えて、よく見るとフロルは額に細かな汗をびっしりとかいていた。レヴァンは今まで気づかなかった自分を呪った。

「と、とりあえず、試合は棄権にする。その後保健室に連れて行くから」

仕方ないかな、と弱々しくつぶやく様子は今すぐどうにかなるという感じではなかったが、放ってはおけなかった。

「それじゃ、言ってくる」

安心させるために笑顔を見せたレヴァンは、魔力で活性した脚で模擬戦本部の方へと向かった。

【2】ー1　模擬戦リターンズ（後書き）

第二章スタートです。

第二章からは文字数を少なくして更新しようと思います。それによって更新も早くなるとは思いますが……正確には決まっていません。

もっと気軽に読んでもらえるよう努力していきたいと思うので、これからもよろしくお願いします。

【2】－2　傭兵と少女

「軽い魔症だわ。少し横になっておけばよくなると思うわよ」

養護教諭――保健室勤めとは言っても、浄法院の養護教諭は魔症の権威なのだが――は一見してそう言うと、フロルをベッドの一つへ寝かせるように指示した。レヴァンがゆっくりと運ぶと、フロルは弱々しい視線を向けた。

「ありがと、レヴァン」

「これでも招魔だからな。早く良くなってくれよ？」

それではお願いします、と養護教諭に頭を下げてから保健室を後にしようとするレヴァン。なるべく休めるようにと配慮したことが伝わったのか、フロルは毛布の下で微笑んだ。

「任せて頂戴」

頼もしい声を聞いて、一度フロルを気にしたように視線を移動した後、

「失礼しました……またな、フロル」

レヴァンは保健室を後にした。

パタンと扉の閉まる音を背中越しに聞いてから、ふう、と軽く一息入れると、レヴァンは振り返って視線を上げた。その、保健室の扉を見て、

――そういえばフロルがここで魔法を考えてたっけ。
連日夜更かしをしてまで熱心に開発をしていた魔法。魔法は基本的に理論的な構成式だけでは開発できない。おそらく、自分の知らないところで修練場で実験もしていたのだろう。
そしてその努力の結晶が、今、人々の平和を支えている。レヴァンはそのことを嬉しく感じていた。

「……やったな」

すでに眠ってしまっているだろう自らの契約者に向かって呟いて、レヴァンはそこで考えを止めた。やるべきことを思い出したのである。
訓練用に羽織っていた上着から、つい先日配布された端末を取り出す。そこからアミナに向けての電子文を作成。むやみに心配かけるのは気が進まないが、知らせない訳にはいかないだろう。あまり心配する必要はない、という旨まで書いてから、レヴァンはそれを送信した。
あの襲撃事件の後、実習の時のチーム制を普段から一つの行動単位として活用するようにと教官から通達がされた。詳しく言うと、出席確認からその訓練、そして体調管理までチームごとに確実に行なっていくことで、浄魔士の制度に慣れておくという意図があるということだった。
そのチーム間の伝達のために配布されたのがレヴァンが手に持つ通信端末。使い勝手がいいので、レヴァンはよく使っていた。

「これでよし、と」
端末をポケットにしまって、レヴァンは歩き始める。再び試合会場へと戻るのだ。

アミナの様子を見に行くか、それとも他の上級生の戦いを見てな

にか学ぶべきか、悩みながらも階段を降り、男女寮・保健室兼用の玄関を通る。そのまま修練場へ踏み出そうとした所で、

「……ん？」

レヴァンは不審者を見つけた。

挙動不審にきょろきょろ周りを見渡してはしきりに首をかしげている一人の少女。レヴァンと同じ年頃だろうが、明らかに浄法院生には見えない。ところどころ裂けたように肌を晒しているズボンに、肩むき出しの薄い生地のシャツ。見た目に反して機動性の高い格好というのはレヴァンにも理解できたが、見た目からして浄法院には無関係のものだろう。そしてもう一つ。決定的な違いがあった。

彼女の腰には一見して左右三つずつ、合計六つの、鞘から取り出しやすいコンバットナイフがぶら下がっているのである。

いくら、可愛い女の子でも、それを加えると不審者に変わりない。レヴァンは事情を聞くために近寄った。またこの時、レヴァンに下心はなかったと明言しておく。

「そこの君、どうかした？」

とりあえず意図を知るために曖昧な質問を繰り出すレヴァン。声に反応して、その不審者候補はレヴァンの方を向いた。

色抜きされた茶髪。それを磨耗しない素材で作られた髪留めで後ろにポニーテールにしてまとめあげている。活発そうな印象を抱かせる顔立ちとその雰囲気。そして、その琥珀色の目に宿る強い意志のようなものに、レヴァンは一瞬目を奪われた。

「ん？　なにか用かな？」

小首を傾げるその姿にハッと現実復帰して、レヴァンは一つ咳払いをした。

「いや、何してんのって思って。おまえ、浄法院生じゃないよな」
そう言われて、少女は、げ、といった顔を見せた。レヴァンはそこに疑問を抱いた。

「ここが浄法院……。もしかして、アタシを突き出す？」
恐る恐ると言った様子で聞いてくるその少女を見て、目を丸くした後、レヴァンはぷっと笑ってしまった。

「な、なんだよぅ……笑わないでよぅ」
唇を尖らせて不満そうに言う少女に「そうじゃなくてさ、不審者だったら見逃す訳にはいかないと思っていただけだ」と説明してみせる。
ホント？　としばらく疑うような目を向けていた少女だったが、やがて納得したようだった。顔全体を使って笑みを浮かべる。
それを見て、レヴァンは素直に聞いていた。

「で、なんでここに？」

説明しないと学校に突き出そうかな、と仄めかしながら言った言葉は、無事に伝わったようだ。少女は再び不安そうな顔を見せた。

「それが……」

「うん」

果たして誰かに会いに来たのか、それとも浄法院の方に用があるのか。レヴァンはじっと答えを待つ。

「……道に迷って」

「……は？」

複数考えた予想のいずれも外された形になって、レヴァンは口をポカンと開く。少女が言い訳のように捲したてた。

「いや、だってね、アタシ元々外周の方に住んでるし、ここら辺に来たのも初めてで――」

「あー……なるほど。じゃあ、そのナイフは？」

途中で区切って新しく質問するレヴァンに不満そうな顔を向けるも、少女は腰のナイフのうち一つの鞘を撫でた。

「アタシの仕事。傭兵をしてるんだ」

「傭兵？」

「そうだよ。都市の外に出るときに害獣から依頼人を守るんだ」

へぇ、と呟きながら、レヴァンは目の前の少女を見た。先ほどまでは気づかなかったが少女の体はよく訓練されているようで、無駄な筋肉も少しもないように思えた。

「んじゃ、どこに向かってたの？」

怪しいところは無いだろうとひとまず判断したレヴァンは親切心から、そんな言葉を口にする。

「教えてくれるの？　物見塔って言うところなんだけど……」

「えっ？」

「なに？」

きょとんと尋ねてくる少女を、レヴァンはしばらく凝視してから、人差し指を空中へ向けた。

「あそこに見えるのなんでしょう？」

「真っ白な塔」

「あれが物見塔だよ」

「……あ、そうなんだ」

ぽんと手を打って納得した少女に再び訝しげな視線を送りかけるも、すんでのところで思い止まる。そんなレヴァンに気づいた様子もなく、少女は急に手を差し出してきた。

「アタシ、リンっていうの」

差し出しっ放しにさせるのも悪いので、レヴァンは力を込めずに握り返した。

「俺はレヴァン」

「よろしく、レヴァン！」

どこか嬉しそうに握った手を上下に振り動かす少女の無邪気さとでも言うべきものに、レヴァンは苦笑気味に微笑んだ。とそこで、甲高い電子音が鳴り響いた。

「うわ、アタシだ」
ごめんね、とひとつ断って、リンは背中側についたポーチから端末を取り出して、耳に押し当てた。
「はい……はい……わかりました。今から向かいます」
それだけで終わってしまった電話。おそらく仕事関係か。リンは端末を元に戻すと、レヴァンにぱっと笑顔を向けた。
「すまんの、レヴァン殿。ワシはもう行かなくてはならんて」
「いやおまえ、そんなキャラだったか？」
レヴァンの返しに、ははは と笑ってから、リンは、
「また会えたらいいね！」
と言って手を振りながら去っていこうとする。それに手を振り返して、レヴァンもそれを見送った。
呆気無く幕を引いたやり取り。風のように去っていったな、とか、俺たちと変わらないぐらいなのに働いてるなんて偉いな、などぼんやり考えて、
「あ、模擬戦終わるかも」
そんなに時間が残されていないことに気づき、レヴァンは修練場へと向かった。
結局アミナの試合には間に合わずに、後で「……じー」と非難の目を向けられたのだった。

【2】－2　傭兵と少女（後書き）

予期せぬ更新すいません。今後は3日おきになると思います。

【2】-3　依頼制

翌日。すっかり回復したフロルと、まだ少し膨れているアミナ、その脇にお座りしているミグルスと共にレヴァンは講義を受けた。
今はフロルとアミナが、最近買ったというフロルの雑誌を仲良く読みながら、あーだこーだと言い合っていた。これこそガールズトーク、という雰囲気を作っていたのでレヴァンも混ざるわけにも行かず、ハンスの姿を探すものの、すでにカナンに連れ去られた模様。仕方ないので目の前の黒犬を見た。

「気怠げな顔をしているな。そのまま溶けてしまえばいいものを」

「おまえ、たまに毒舌だよな……」
はあ、とレヴァンはため息をついた。

ミグルスは精獣という魔物の頂点――いくつも林立する頂点だが――であるにもかかわらず、模擬戦でその力を振るわなかった。なんでも、魔物の活動には人間の生命力がいるため、そうホイホイと使えないらしい。人間は己の役に立てるために魔力を欲し、招魔も人間の世界で生きるために生命力を必要とする。要するにギブアンドテイクということ、だそうだ。
聞いた話に完全理解とまではいかないまでも、レヴァンは一応それで納得することにした。

「……それで、あの娘は無事なのか？」

「ん？」

ミグルスの視線の先には、楽しそうに話すフロル。レヴァンはその意図を理解して、答えた。

「保健医の話だと無事だって。でも、あまり魔症にはなっていなかったらしい」

あのフロルが、たいして魔症にもなっていないのに体勢を崩すだろうか、と不安を感じたレヴァンだった。が、現在の笑っているフロルを見ると――無理に笑っている様子もない――心配も無駄なような気がしてくる。ミグルスもそう判断したのだろう、ふい、と顔を別の方へ向けた。

とそこで、

「全員席に着け。伝達事項がある」

いつのまにか教室に入ってきていた教官。生徒は全員ギョッとしながらも、あっという間に席に着く。なんだか教官の調教が効いてきているようで少し恐ろしかった。

「教官。パルメル兄妹がいません」

「構わん」

フロルもさっと雑誌をしまって、教官に注目する。教官も全員の目が自分の方へ向いていることを確認してから、いつものようにきびきびした話し方で始めた。

「今回から実習に新たな単元を追加する」

また変更ー？　とざわつき始めた教室を、教官が咳払い一つで鎮

める。周りを睨めつけた後、説明を再開した。

「庇護者の指示だ。浄魔士の部隊内で更に小分けしたグループを作り、それを行動単位とする、だそうだ。それにあたり、浄法院の方でもチーム制での訓練を活発にして欲しいとの通達があった」

そこで一旦説明を止め、生徒たちの顔を確認するように教官は見渡した。全員が疑問顔をしているのを確認して、今回の指示を出した。

「よって浄法院当局は、依頼制を取り入れることにした。外周部からの依頼を、その想定難度に応じて貴様らにも参加、経験を積んでもらう」

全員がしばらく反応出来なかった。教官が言ったようなことは、普通、浄魔士となって「実習生」として初めて行われるものだったからだ。

「ちなみにこの制度を取り入れることにより、貴様らは実習生を飛ばしてそのまま下級士となることが出来る。よかったな」

詳しい説明を求める者の視線を振りきって「今日は第一修練場に集合しろ」と言って教室を去った。いつものように、教官を止められるものなどいる訳もなく、生徒たちは捨てられた子犬のような目を向けていた。

「どうするよ、キャップ？」

教官が去った方から目を離し、斜め前に座っていたフロルへ尋ねる。フロルはうーん、と軽く首をかしげて、

「とりあえず訓練しよっか」

「……はいよ」

「……了解」

相変わらず真面目な様子に、レヴァンとアミナは同時に嫌そうな顔をした。

＊

パン、パン、パン。

テンポよい音と共に訓練用のゴム弾が、レヴァンへと向かう。それを最小限の動きで躱しながら、レヴァンは相手と距離を詰めようと前に出た。

しかし、相手はそこで銀色の缶を一つ取り出す。起爆と同時に周辺全方位にゴム弾をばら撒く爆弾。

それを見抜いたレヴァンは無理やり方向転換して横へ跳び、魔力で薄く防護膜を展開する。起爆したゴム弾が魔力の膜にめり込むようにして止まった。

「これを避けきるなんて……さすがですね、レヴァンくん」

「さすが装器士だよ、カナン。今のはかなり危なかった」

対人戦闘用の訓練としてカナンと手合わせをしているレヴァン。さすが装器士だけあって熟練した動き。それに感心して、レヴァンは顎先に滴る汗を拭った。

「カナンの武器って双銃なんだな。初めて見たよ」
冥種襲撃の際に、カナンの攻撃を見たはずだが、あまり意識して見ていなかったためレヴァンの言葉に偽りはない。
「ちげぇよ」
脇から聞こえてくる声の方を向くと、そこには相変わらず不機嫌そうな顔のハンス。木刀を肩を担いで、準備運動をしているようだった。
「カナンは武器なら何でも扱える」
「……なんでも？　それってかなり凄いことじゃ……？」
苦笑しているカナンに目を見開いて驚きを表現していると、今度は後ろから声がかかった。
「パルメル家はね、武具で有名な一族なんだよ？」
「……装器士は一度は弟子入りする、らしい」
説明口調のフロルと淡々としたアミナだ。魔法の練習は一段落ついたらしい。
「二人とも、よく知っていますね」
そこでカナンはハンスの方を向いた。ハンスが顔を逸らしたのを見て、「褒めてくれてもいいんですよ？」と言葉をかけ、知るか、と一蹴したハンスに表面だけの悲しそうな顔を見せた。そんな様子のカナンにノリを合わせたのか、フロルが「女の子を悲しちゃダメ

でしょ」と言うと、ハンスは顔をしかめ、カナンはふふ、と微笑んだ。
そう微笑む姿の下に、それなりの訓練をした経験が隠されているんだろうな、とレヴァンが感心していると、
「レヴァンくん」
カナンから声をかけられた。
「え、なに？」
「レヴァンくんも武具を使いますか？」
また唐突な質問に「俺は……」と反射的に否定しかけるものの、少し考える。確かに自分が使うのは徒手空拳。手足を保護する意味でも何かあったほうがいいのかもしれない。
「あー、手袋みたいな手を保護するようなものが欲しいかも」
とりあえず思ったことを言ってみることにした。すると、カナンは美しく微笑んだ。
「わかりました。私が作ってきますね」
「カナン」
瞬間、ハンスが何かを咎めるような視線をカナンへと向ける。
「いいじゃないですか、兄さん。レヴァンくんにはお世話になっていますし」
ハンスはしばらく不満そうにカナンを見ていたが、やがてその視

線を外した。カナンが「ありがとうございます」とよくわからない感謝をしていた。

「えっ……と、カナンって武器を作れるの？」

「はい。……まだ拙い部分はありますけど」

それは凄いと素直に驚くレヴァン。信じられないというように目を見開くフロルとアミナ。そんな中、ハンスだけいまだに不満そうな顔をしていた。……いや、元からそんな顔なのかもしれないが。

「それじゃあ、カナン。よろしくお願いしてもいいか？」

「はい、お願いされました」

にこやかな笑顔で握手をかわす二人。それが終わってから、フロルは口を開いた。

「それじゃ、話し合いをしてもいい？」

全員がなんのことか一瞬考え、そしてああそうかと頷いた。フロル以外は全員、ただ訓練をしているつもりだったのだ。

「……リーダーはやっぱり私になりそうだね」

はぁ、とため息をつくフロルに皆が「はは……」と激励を送った。それを感じてもう一つため息を吐くと、フロルは口を開いた。

「今回から依頼制が始まったんだけど……私たちには早速来たよ」

おお、と上がる声にフロルが咳払い。話を続けた。

「依頼は、資源車の護衛。第一鉱山まで行く道中を害獣から守るんだって。明後日の昼から開始だよ」

とりあえず伝えられている内容を、フロルは持ち前の賢さでわかりやすく教えていく。集合場所、資源車のルート、同伴者。そこまで説明した所で、ふとカナンが申し訳なさそうな顔をして手を上げた。

「フロルさん。明後日の昼と、言いましたか？」

「うん。どうして？」

疑問顔のフロルにやはりすまなそうな様子で口を開いた。

「実は……その日、装器士の方で仕事が入っているのです」

「……そうだったか？」

「忘れないで下さい、お兄さん」

兄妹のやり取りを微笑ましく見るのも大概にして、フロルは指を顔の前に立てて、少し悩んだ。しかし、すぐに一つ頷くと、

「うん、わかったよ」

軽い調子で了解した。カナンは軽く驚いたようだった。

「っていうか、それいいのか？　依頼はチームで全員出なくても」

レヴァンが放った当然の質問にカナンも頷く。しかし、なに言ってるの、という表情でフロルが説明口調で語った。

「浄魔士のグループでだって欠員は必ずあるんだよ？　その欠員の部分を他のメンバーでカバーするのが、チーム制にしている意味じゃない」

きちんと当局の考えを把握した上でのフロルの言葉に、レヴァンとカナンだけではなくて、アミナやハンス、ミグルスまでもが目を見開いて驚いていた。

「……私、師匠に言ってフロルさんを浄魔士に推薦してもらいます」

「いやいやいやっ。そんな大げさなことじゃないから！」

カナンの冗談ともとれない言葉にフロルがストップをかける。その場は笑って、穏やかな空気にすぐなったが、レヴァンは改めて幼馴染の才能に感心した。

「私のことはどうでもいいのっ。それより――」

話し合いを、とフロルが口に出しかけた所で、それを阻むものがあった。

「ねぇ、ちょっといいかなっ？」

元気を言葉にしたようなはきはきした声だ。フロル組の全員がそちらを向くと、そこにはクラスメイトの女子がいた。

「お、ラナ。どうかしたのか？」

レヴァンがそう話しかけたように、その少女は、ラナ・オールウィンだった。亜麻色の短髪をゴムで留め、小柄な身体の隅々まで元

気が行き渡っているような少女。
そのラナが、レヴァンに話しかけると、やや顔を赤らめた。
「今、大丈夫だった？」
レヴァンが頷くと、よかった、とうつむき気味に笑って、ラナは早速本題を切り出した。
「レヴァンくんにお願いなんだけど……体術を教えてくれない？」
「体術？」
「そ。魔法はまだまだ自分たちだけでなんとかなる部分があるんだけど……」
「なるほど」
話を最後まで聞かずに頷くレヴァン。どうかな？　と首を傾げるラナから目を外して、チームリーダーに問いかけた。
「どうしようか、キャップ？」
しかしそこで感じた雰囲気は、若干レヴァンの想像したものと違っていた。
「教えてあげていいと思うよ……少しだけなら」
「……レヴァン優しい……優しすぎ」
「あ、あれ？　二人とも？」
いつも以上の笑顔を浮かべたままの二人に、レヴァンは対処の仕

方がわからない。ハンスは「ざまあねぇな」と鼻で笑い、カナンも「青春ですね」と微笑ましいものを見るような顔をしていた。
そんな居心地の悪さを感じたのだろうか、
「や、やっぱり無理しなくて――」
と、ラナが撤回しようとした所で、一人の大きなガタイの生徒が存在感を放ちながら話に加わった。
「レヴァン、指導を願えないか？」
その少年が放った言葉はとても力強いものだった。
「エンケ？　おまえ、ラナと同じチームなのか？」
エンケ・オストワルトの後ろからついてくる生徒を二、三確認して、そう問いかけるレヴァン。エンケはそれに頷いた。
「ああ。……それで、どうだ？」
そう問われてレヴァンは、仕方ないか、と了承した。
「ラナとエンケの二人に頼まれたら断れないからな」
「ホントっ？　ありがとう、レヴァンくん！」
「恩に着る」
それぞれの「らしい」喜び方に軽く笑ってしまったレヴァン。そして、自分がクラスメイトと普通に話すことができているという事実に内心驚いていた。
「というわけでフロル。いってきます」

「……はぁ。仕方ないね。その代わり、放課後空けてもらうからね。依頼の説明しないといけないし」
フロルの言葉に頷いて、「もう依頼が来たのっ？」「それはすごいな」という声にレヴァンは曖昧に返事をした。

【2】－4　受け入れられた日常

「対冥種のときは、体術と言うより避け方だな。下手に冥種に触られると危ないから」

レヴァンはそう言って、基本となる足運びをやってみせる。それを見て、ラナがまず最初に挑戦していた。

「こ、こうかなっ？」

レヴァンは一つ頷くと、

「かなりいいけど、後はつま先の向きだな。そこをきちんとしておくと次の行動にも移りやすいから」

そう言ってレヴァンは、ラナの足に自らの足を添うように配置して、ゆっくりと動かしてみせた。上手な誘導に今度はラナも完全に成功する。

「こんな感じ。わかったか？」

「……」

「ラナ？」

返事をしないラナの顔を見ると、まるでトマトのよう。まずい、熱中症か。

そうレヴァンが危惧したと同時、近くで足捌きを練習していたラ

ナのチームメイトが、突然声を張り上げた。

「あー！　ラナがグラフェルトくんと仲良さそうにしてる！」

いいないいな、と言いながらニヤニヤしているその女子たちの様子を見て、レヴァンは確認した。

足の動きを完全にサポートするために体勢を整えた結果、レヴァンとラナの身体の距離はほとんど空いておらず、その結果ラナが恥ずかしがっているようだった。

「わ、ごめん」

慌てて離れるレヴァンだったが、ラナの反応は薄い。そんなに嫌だったのか、とレヴァンが思っていると、

「すまない、レヴァン。もう一度見せてくれないか？」

おそらくラナのチームで一番の実力者であるエンケが、真面目にそんなことを言ってきた。

「あ、わかったよ。……ラナ、ほんとにゴメン」

一応念押しで謝ったことに対して、ラナが俯きながらも頷いたのを見て、レヴァンはほっと安心する。

とりあえずそこで一区切りにするように、レヴァンはラナに背を向けてエンケと向かい合った。

「それで、多分エンケは上半身の動きが堅いんだと――」

それから訓練が終わるまで、一時だけ教師になったような気分で

レヴァンはエンケたちにひたすら回避技術を教え続けた。

＊

「……あれ？」

訓練が終わって放課後。トイレを済ませた後、フロルから依頼を聞こうと足を向けた時だった。そこにいたのはフロルだけではなかった。

「……どこ、行ってたの？」

「遅刻ですよ、レヴァンくん」

「……テメェが遅れてどうすんだ」

アミナや、いつもはすぐに浄魔士としての仕事に戻るハンスやカナンまで、そこには勢ぞろいしていた。

「えーっと……なんで？」

「それはね、みんなで寄り道をするからだよ」

レヴァンの疑問に、どこか嬉しそうに胸をはって答えるフロル。昔から変わらない用事を勝手に決める様子に、レヴァンは「またかよ……」という息を吐いた。

「どこに？」

「内緒」

出たよ。すぐもったいぶるんだよなー、とレヴァンが心の中だけ

で文句を言った。

そんなことを知ってか知らずか、フロルが元気よく声を上げた。

「じゃ、レヴァンも来たことだし。行こ〜！」

そう言って歩き始める。教室を去っていくその後ろ姿に続いて、アミナ、カナンと続く。その様子を見て、レヴァンは自然と頬を緩ませた。

「何してる。行くぞ」

まだ教室を出ていなかったハンスが、振り返ってレヴァンを急かす。最初の頃にはなかったその心遣に、レヴァンの心は暖かくなった。

「ハンス……ありがとよ」

「別にテメェのためじゃねぇ。カナンのためだ」

そっぽを向くその姿は、照れているようであった。レヴァンが「素直じゃねえな」とからかうと、ギロリと睨まれてしまう。

「……とにかく行くぞ」

「おう。そうだな」

ハンスの後に続いて、レヴァンも教室を出る。その直前、ふと後ろを振り返ると、そこには夕焼け色の教室が美しかった。

レヴァンは再び前を向くと、すでに離れてしまったフロル達を追いかけるようにして、小走りでかけ出した。

＊

浄法院を出て、雑談を交わしながら歩くこと十数分。フロルが立ち止まったのは、ある喫茶店の前だった。

「ここだよ」

そう言ってメンバー全員を見渡し、店の中へと入っていく。早い行動に、少し慌てながらもその後についていく。入る前にその喫茶店の外観に目を向ける。質素な感じだけれどもほんの少しの装飾がしてあって、なかなか洒落た店だった。看板には「南の大三角（アトリア）」。

レヴァンが店内に入ると、すでに他のメンバーは奥のカウンターに座っており、楽しそうに談笑していた。それに微笑むと、レヴァンは近づいていく。

「……大丈夫？　ぼうっとしてた」

「大丈夫大丈夫」

心配をしてきたアミナに笑顔を見せ、隣に座る。そこでカウンターの内側からマスターがやってきた。

「やぁ、フロルちゃんじゃないか。いつも贔屓にしてくれてありがとうね」

きちんと切り揃えられた清潔な髭をたくわえた男性だ。パッと見渋い印象を抱かせる風貌に人懐っこい笑みを浮かべている。それがまた似合っていた。

「あ、マスター。突然で申し訳ないんですけど――」

フロルがその男性に気づくと、突然頼みごとをし始めた。その様子を他のメンバーが不思議そうに見る。

「このお店がとても気に入ったので、友だちと一緒に使わせてもらっていいですか？」

そんなことを言う。マスターは少し驚いたような顔をしてから、笑みを見せた。

「構わないよ。どんちゃん騒ぎをしないならね」

フロルは何故かレヴァンの方に目を向けてから、

「それは……しないと思います」

「おい待てフロル。なんで俺の方を見た？」

「なんでって……言っていいの？」

「そんな酷いことなのかよっ」

レヴァンがフロルへと文句を言うと、フロルは唇の端でニヤリと笑った。

「だって、レヴァンが一番騒がしいし……」

「……それは、心外だな」

軽く落ち込んでいると、ハンスがふっと声を和らげて珍しく慰めるような口調で口を開いた。

「……気にすんな。テメェが騒がしくなかったら気持ち悪い」

「頼むから哀れむような目で見ないでくれ」

声を荒らげて反論しようとしたのをなんとか我慢して、レヴァンはがっくりと肩を落とした。それをアミナが「……大丈夫」と背中を撫でて励ました。

「ま、とりあえず紹介するね。こっちが『南の大三角（アトリア）』のマスター。でこっちが浄法院でのチームメイトのみんな」

レヴァンたちが一人一人名前を言って自己紹介していくのを、マスターは愛想良く返す。それが終わってよろしくと挨拶をした所で、

「……ん？　あなたは……」

ふと、マスターがアミナの顔を見て何かをつぶやいた。考えるように顎に手を伸ばし、そしてやがて思い出したようだ。

「あ、黒い子犬を連れていた浄法院生だよね？」

「……？　はい」

とりあえず間違ったことを言っていないので頷いたアミナ。しかし、マスターの次の行動に目を丸くした。突然頭を下げたのだ。

「ありがとう。どんなお礼を言っても言い尽くせないよ」

「……頭を、上げて」

困った顔をしているアミナの代わりとでも言うように、「どういうことですか？」フロルが尋ねた。それにマスターはそれはね、と話し始める。

「アミナちゃん、と言ったかな？　この子に、うちの娘を助けてもらったんだよ」

例の冥種襲撃。外で遊んでいて対応が遅れた娘が冥種に襲われかけた時、アミナが魔法でそれを防いだということらしい。

「あれはすごかった。突然辺りが寒くなって、冥種も動きを止めてしまうんだから」

ありがとう、とマスターが感謝すると、アミナが恥ずかしそうに肩を縮こまらせた。それを見て、レヴァンは感心する。きっとアミナは「広範囲属性展開」を使ったのだ。

練習の甲斐があったようだと思うと同時に、ミグルスも喜んでいるだろうな、とレヴァンはぼんやりと思った。

「そうだ、娘を呼ぶよ。お礼をしたいって言っていたから」

おーい、とマスターが店の奥へ声をかける。少し間を空けて、そこにある階段から幼い子の返事が聞こえてくる。トタトタと走ってくるような音を次第に大きくして、やがて階段を幼い女の子が降りてきた。

女の子は父親の元へと走り寄ってその足にぴとっと張り付く。フロルたちが「かわいー」と猫撫で声を上げ、それに反応したように女の子がフロルたちを見る。そこで「あ」と声を上げた。

「おねえちゃん！」

そう言ってアミナの元へと寄る。アミナは照れと困惑が綯交ぜになったような顔をしていた。

困ったアミナがとりあえず起こした行動は、招魔を呼ぶことだった。アミナは心の中でミグルスを呼ぶ。

「うむ？　どうした、我が主。なにか不穏なことでも――むぐっ！？」

主の求めに応じて現れた黒い子犬は、顕現した途端、女の子に抱きつかれた。

「あー、ワンちゃんだぁ！」

「むぐ……誰がワンちゃんだ、誰が」

相手が幼い子と見てか無理に振りほどけないミグルスを見て、アミナは微笑んだ。ミグルスが視線で周りに助けを求めていたが、レヴァンはもちろん、他のメンバーも動かなかった。

「それにしても、かわい～。名前はなんて言うんですか？」

「ノノって言うんだ」

「ノノちゃんですか。ふふ、確かに愛らしいです」

「……世界も羨む」

いやいやそれは大げさだろう、とレヴァンはアミナの言葉に対し

て思っていたが、女性陣はなにも言わない。なんとなくハンスの方を向いた。

「なあ、ハンス」

「……」

「ハンス？」

「……なんだ？」

「……おまえ、今ノノちゃんに見とれてなかったか？　……まさかロ――」

「それは本当ですか？」

ハンスが口で反論するより先に、カナンがやってきていた。しまった、と回避行動を取ろうとするハンス。しかし、その腕はがっちりとカナンに取られている。

「てめっレヴァンッ！　あることないこと口に出すんじゃ――」

「『”あること”ないこと』ですか。あるということですか？」

「お、おい、それはいくらなんでも屁理屈すぎ――」

「あ」

「～～～～～～ッッッッ！？」

なるべく痛むように外された関節が、ハンスの意識を刈り取ろうとする。しかし、ハンスには意識が残っていた。それを見てレヴァンは席を立った。

「……レ、ヴァン……助け……」

ハンスが一縷の希望を見出し、声を絞り出す。レヴァンは、

そのまま喫茶店の出口へと向かった。

「……テメェッ」

「はっはっは。悪いなハンス。俺、女性の権利を優先する男だから」

「話がわかりますね、レヴァンくん」

ハンスが反抗できるのはあとどれくらいかな、と物騒なことを考えながら、レヴァンは構わず喫茶店の扉を開こうとする。

「うん？　レヴァン、どしたの？」

「フロルか。いや、浄法院に忘れ物しちゃってさ」

「一緒行く？」

「いや、急いで取ってくるから。待っててよ」

「わかった。早くしてよ？　十五分以内に戻らないと、アイスパフェ奢ってもらうから」

「……了解」

なかなかに理不尽な条件を呑まされながら、レヴァンは喫茶店の

扉を開いた。

【2】-5　チーム『ファミグリア』

日中の太陽による少し高い気温がレヴァンを包んだ。後ろ手に扉を閉める。
フロルたちが追ってこないのを確認してから、レヴァンは正面へと目を向けた。いつものぼんやりとした目ではない。獣のような鋭い目だ。

レヴァンは店の前から離れ、正面方向の脇道へと入っていく。
夕方で暗くなってきた通りより、もう何段階も暗く、すでに夜であるかのような場所だった。レヴァンはもう一度喫茶店の方の様子を見てから、口を開いた。

「もうそろそろ出て来い。ノゾキは犯罪だぞ？」

台詞だけ見れば気が抜けているようにも見えるが、そこに込められた気迫は、並の人間には出せない代物だった。
レヴァンの眼光が一気に鋭くなる。同時に、路地の闇から襲いかかって来る影があった。
重心を前に半身を倒すことによって、レヴァンは初撃を躱す。その突き出された腕を見極めてから、レヴァンはそれを掴んだ。いや、掴んだはずだった。
しかし、実際は指先に確かな感触を残して掴み損ねる。レヴァンは即座に分析をした。

――幻覚か！

相手の二撃目が見えたと同時、レヴァンは逆に路地の奥に入るよ

うにして距離を取った。素早く振り返って、改めて襲撃者の姿を目に収める。

――……わからない？

レヴァンは自分の目がおかしくなったのかと疑った。襲撃者の体がまるで正しく認識できないのだ。

おそらく何か動きやすい戦闘服を身につけているのだろう。しかし、それ以上のことを知ろうと視線を集中すると、その姿にモザイクが掛かったようにボヤケるのだ。

レヴァンには知る由もないことだが、この時襲撃者は光系の魔法を使っていた。光の集束を妨げることで自らの姿を認識しづらくし、攻撃時は集束する位置をずらして相手を翻弄するというものだ。

「……厄介な奴」

レヴァンの呟きが聞こえたのかどうか。再び攻撃を仕掛けてくる黒い影。魔法の影響か、残影を残しながら近づいてくる姿はまるで物語の中の死神のようだ。

相手の位置が視覚情報に依らない以上、目で見て判断するのは危険だ。レヴァンは意識を違う物へと向けた。すなわち、前方の領域。

意識した場所に集中。レヴァンは内に秘めた力を解放した。

属性展開。暴風に似た乱暴な魔力がレヴァンの前方を支配すると同時、襲撃者の姿が急に明瞭になった。

属性展開はその領域内の相手の魔法を制限する力がある。特にレヴァンは属性に変換する必要のない「無属性展開」なので、出力は桁違いだ。それに逆らうためにはそれ以上の干渉力を必要とする。それを持たない襲撃者が、結果として魔法を暴かれたのだ。

レヴァンはそこで意識を襲撃者に戻す。全身を包むような黒色の

タイトな服。恐らく隠密行動の専門家だろう。
レヴァンは属性展開を解いて加速をかける。相手は自分の魔法が破られたことに驚愕しているようだったが、すぐに攻撃へと移る。さすがにその判断はプロのようだった。
二つの影が互いに拳を突き出す。しかし、それが激突する前に片方がその手を引いた。

「な……ッ！？」

拳の先には誰もいない。襲撃者は攻撃を中断し、脇からレヴァンの背後へと抜けたのだ。背後で魔法が展開される反応。レヴァンは即座に振り向き、対処しようとした。

しかし、背後にもその姿はない。

「くそ……上手いな……」

再び魔法を使って、今度は姿を隠したのだろう。完全に視覚に頼ることができなくなってしまった。
相手の行動がつかめない以上、すぐに行動を起こすべきなのかもしれない。しかし、

「……ふぅ」

レヴァンは静かに目を閉じる。そして、反射神経に身を任せた。
途端に辺りに静寂が降りてくる。
レヴァンは水面に起こる波紋のように動の者の存在を感じ取り、そして、そのものを覆う魔力反応を感知した。
音を立てずにそれが近づいてくる。レヴァンは身じろぎ一つせず

にその場に佇み、待った。背後からそれが迫る。レヴァンはギリギリまで動かない……そして、迫る存在が攻撃のため手を振り上げたその時、

「……はッ！」

レヴァンは勢いを乗せた拳を、背後の、視覚的には何も無い場所へ突き込んだ。

空気が波打つ。そこから襲撃者が姿を表した。

「……く……なぜ……ッ！！」

苦悶の声を漏らしながらも、レヴァンとの距離をとる襲撃者。それを追いかけようと足に魔力を込め踏み出したレヴァンだったが、襲撃者の次の行動でそれを中断した。

襲撃者が黒の袖をまくって、その下から現れた白い髑髏の腕輪から一つの笛を取り出したのだ。

イアクト。魔力を無効化、暴走させる代物だ。

思わず足を止めたレヴァンをフッと嘲笑うようにして、襲撃者はそのまま路地の奥へと消える。レヴァンは追いかけようとしたが、無駄だと悟って足を止めた。

しばらくその場で集中して気配を探ったが、本当に去ったようだ。そのことを確認すると、レヴァンはその場に背を向けた。

――なんだったんだ、あれは。

答えが出ないとわかっていることを思考しながら、レヴァンは先

ほどの一戦を振り返ってもいた。

――アレ使わなかったらヤバかったかもな……。

レヴァンはもともと気配を探る技術に優れている。そのうえ、招魔としての能力を使えば、魔力そのものを感知することすら出来る。

これが、招魔なら必須の能力なのかどうかは知らないが、今の戦いではこの力がないと危険だっただろう。

「まだまだ修行不足ってところか」

バラバラになってしまいそうな思考をすべて捨て、強引にそうまとめると、

「……やべ、心配されてるかも」

路地を抜け出し、レヴァンは喫茶店へと戻っていった。

＊

パフェを、奢らされた。

「う～ん、美味しっ」

「マイ、マネー……」

幸せそうにつぶやくフロルと、軽くなった財布を悲しそうに見るレヴァン。それを、気絶から回復したハンスが同情の視線で見ていた。いつのまにかミグルスはいなくなっていた。

「……至福のとき」

「本当に美味しいですね。レヴァンくん、ありがとうございます」
フロルと同じく幸せそうに店の看板メニューであるアイスパフェを頬張りながら、アミナとカナンが感謝の言葉を送る。それにレヴァンは、
「なんで三人に奢るはめに……」
と、がっくりと肩を落とした。
「だって私だけがパフェ貰うのっておかしいから」
「一つを三人で分けろよ」
「だって一つ食べたいんだもん」
はぁ、とため息をつくレヴァン。次の台詞が口から飛び出しても仕方ないことかもしれない。
「そんなことだとすぐに太――」
「……ふと？」
「ふと……ふと……そう！　布団に潜りたくなっちまうぞ！」
レヴァンは咄嗟に回避。唐突に張り詰めた空気が弛緩し、レヴァンは浮き上がった冷や汗を拭った。
「んー、おいしっ」
フロルの顔をしばらく恨めしそうに見ていたが、やがて、まあいいかと大人しく女性陣の様子を眺めた。

絶えない話題に和気あいあいと話し続ける。正直言うと暇になってきていてはいたが、三人の姿を見るだけで時間は早く潰れてくれた。

「そういえば、狼少女って知ってますか？」

「狼少女？　なに、嘘でもつくの？」

「……知らない」

カナンが提供した話題に、二人が食いつく。興味を持った二人に、カナンが指先を顎に当てて思い出すようにしながら話した。

「えーと、なんでも狼みたいな耳と尻尾を生やした美少女なんですって。浄魔士のほうにも目撃証言があって、最近外周の方に出没するらしいです」

へー、と話を聞くフロルとアミナ。「凄いね。狼少女か……会いたいな」と呟きながら、フロルの視線が動く。

そして、ふとレヴァンのそれと合った。

「……美少女なら、やめたほうがいいよね」

「え、なんで意見変えたの今」

レヴァンが反射的に突っ込む横でアミナもうんうんと頷いていた。何が何やらわからない。

「フロルさん」

「ん？　なに、カナン？」

突然控えめに挙手をしながら何かを主張しようとするカナンを、全員で不思議そうな顔をして見る。それに臆することもなく、カナンは一つの疑問を発した。

「チーム名は決めなくていいのですか？」

「……あ」

フロルが忘れてた、というように口を開く。他のメンバーにしてもそのことは頭から抜け落ちていた。

一つの行動単位であるチームに名前をつけることも、教官から指示されていたのだ。

「『チームフロル』、じゃ、ちょっとなぁ……」

レヴァンも苦笑する。そのまましばらく全員が悩む時間が続いた。とりあえず何かアイデアを挙げようという話になっても、

「フレイム・イクスプロード！」

「ホワイトペガサス、なんてどうでしょう？」

「……百花繚乱」

……なんかもうダメダメだった。フロルの隣でハンスも呆れたため息をついている。

「ガキかよ……」

「そう言うハンスもなんかない？」

「いや」

首を横に振るハンスを見てうなだれるフロル。先に意見を上げた三人がえーいいじゃんこれ的な主張をしつこく続けていた。

さすがにそんな恥ずかしい名前にするわけにはいかない、とフロルはリーダーとしての思考で頭を巡らせる。そして、ふと古い記憶が頭をよぎった。

「……ねぇ、『ファミグリア』はどう思う？」

少し声音が落ちたようなフロルの声に、意外感を示しながらも、レヴァンがまず返事をした。

「『家族（ファミグリア）』、か……。いいと思うよ」

「ありがと。お母さんが好きな言葉だったんだ」

古語を使ったチーム名に、レヴァンは賛成票を投じ、フロルがはにかむ。続いてみんなも口を開いた。

「……いい名前」

「……なにか、いいですね。はい、気に入りました」

「……ふん、勝手にしろ」

満場一致で決定したことに拍子抜けに近いものを味わいながらも、全員が納得したように穏やかな顔をしていた。

ふと、フロルはその細い手指を握って小さな拳を全員の前に差し出した。

首を傾げるメンバーの中、唯一気がついたレヴァンはフロルの意図を察して自分の拳もフロルのものの近くへ持っていく。そこでようやく気がついたのだろう。

慎ましやかな笑顔を浮かべてアミナが、

ふふ、と微笑んでからカナンが、

不機嫌そうな顔を逸らしながらハンスが、拳を差し出した。そして、

同時に小さく突き出して、拳を軽く打ち合わせた。

「じゃあ、チーム『ファミグリア』結成を宣言します！　みんな、これからもよろしくね」

よろしくー、とみんなで声を掛け合った時、このメンバーの仲が一層深くなったように、レヴァンは感じた。

【2】1-6　依頼開始

そのまましばらく雑談で盛り上がっている内に、レヴァンは外が暗くなっていることに気がついた。

「うわ、いつのまにか暗くなってるぞ。そろそろお開きにしないか？」

それもそうだね、というフロルの声を最後に、全員が席を立った。

「……やっと終わったか」

ほっとしたような顔でそんなことを言うハンスに「おつかれ」と声をかけると、「ほんとにな」と返事。思わずレヴァンは苦笑いをした。

「おや、もう帰るのかい？　またのご来店を待っているよ」

「はい、ありがとうございます、マスター」

ひょこっと顔を出したマスターに会釈を返してから、全員が扉を開けて外へ出た。冷えた外気が肌を触って身を震わせる。

「じゃあな、二人とも」

「はい、また明日です」

「……あばよ」

浄魔士として、浄法院の寮には住んでいないパルメル兄妹をレヴァン達は見送る。二人の姿を最後まで見届けると、人数が減ったためか、少し空気が寂しく感じた。
そしてレヴァンは残る二人に顔を向けた。

「行くか」

「そだね」

「……うん」

三人はまだまだ続く話を続けながら、浄法院の方へと向かっていったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「レヴァン……遅いなぁ」

外周西門。冥種の襲撃のショックが大きいのだろう、人がめっきり少なくなってしまったその場所は、洒落っ気のない門と相まって、なんだか寂れた雰囲気すら漂わせていた。
そして依頼の集合場所であるその場所に、フロルは腕を組んで立っていた。
隣でアミナがミグルスを撫でている。嫌がるような素振りを見せるミグルスとそれに構うアミナは、なんだか微笑ましい図になっていた。

「ほんと……なにやって――」

「悪い。遅れた！」

走ってやってきた自らの招魔を、確認してフロルは、まったく、と長いため息をついた。それに居心地が悪くなったレヴァンが「ご、ごめんなさい」と素直に謝罪。

「まぁ、まだ依頼の時間じゃないんだけどね」

「ならなんで今ため息をっ！？」

じろりとレヴァンを睨むフロル。依頼で指定された時間にはまだなっていないが、フロルが決めた集合時間を破ったのには変わりない。それをわかっているのだろう、レヴァンはもう一度謝った。

それからフロルが小言を続けること数分。やがて、他にも人がやってきた。

「あなた方が浄法院の生徒の方ですか？」

その声の方を向くと、門の方からやってくる二人分の人影。

一方はカツカツとハイヒールの音を響かせて歩み寄ってくる女性だ。その女性はフロルの前まで来ると自己紹介のために口を開いた。

「物見塔所属、自然資源調達課のイルナ・バースです。あなた方の依頼人（クライアント）でもあります」

「浄法院二年、フロル・アイヤネンです」

支障の出ない程度に最低限の紹介を互いに済ませ、「早速ですが――」とイルナと呼ばれた女性が説明を始めた。事前に聞いてた通り、資源車に乗り込み、害獣に襲われないよう護衛をする、というもの。

「怪我などはしないように。今回は重要度の低い資源にしてあるため、もしものときは放棄も出来ます」

「そうならないよう、依頼はこなさせて頂きます」

自信満々に言い切るフロルに対してイルナは目を丸くすると、口を綻ばせた。

「いい返事ですね。期待しています」

「はい」

いきなり啖呵を切り出したフロルに冷や汗が背中を流れるのを感じたレヴァンだったが、相手側も気にしていない、と言うよりも気に入ってもらったようでほっとする。

さすがフロルだな、と感心していると、袖を引っ張られる感覚。レヴァンが見ると、それはアミナだった。いつのまにかミグルスは消えている。

「……挨拶。私たち、も」

「お、そうだな」

アミナに促され、挨拶を済ませるレヴァン。

よろしくお願いします、と互いに声をかわしてから、依頼人は連

れていたもう一人を示した。

「こちらは今回同行してもらう用心棒です。浄法院の生徒だけというわけにはいかないので」

用心棒と呼ばれた女性が、挨拶に腰を折った。

フロルとアミナがそれに返すように会釈をした所で、レヴァンはハッと我に返って会釈をした。

「どしたの？」

「い、いや……」

――なんていうか、その……。

レヴァンがそっと伺うように用心棒の女性を見る。いや、女性というよりも若く、年はレヴァンたちと変わらないような少女だ。

「？　どうかしたのかな？」

その少女が、特徴のポニーテールを揺らして明るい口調で話しかけてくる。その腰には六本の戦闘用ナイフ。

「……」

なんとも見覚えがある姿。レヴァンはとりあえず苦笑をしておいた。

＊

乗用車ほどもある双頭の害獣が、資源車から引き剥がされる。

四足歩行の素早い種だったが、レヴァンはその害獣の足に強い魔力を流しておいた。これで足止めにはなるだろう。
レヴァンは息を整え、資源車の後方から辺りを見渡し、危険がないことを確認する。
シレンティアの外に広がる荒野。そこには植物もなにもなく、生物はみんな突然変異をして凶暴化してしまっている。
その中でも特に黒の波動――先の騒動後、便宜的に「冥気」と名が付けられた――を有するものを冥種という。

資源車の上で害獣撃退の任を任されたレヴァンは、ふと自分にとって左側、つまり進行方向右側で柔軟をしている人影に目を向けた。
色落ち気味の茶髪でポニーテール。彼女はやはり、以前浄法院の敷地内で迷子になっていたリンだった。
イルナが助手席に行ってから顔色を気にしなくなったのか、リンは騒がしくレヴァンとの再会を喜んでいた。
その瞬間はムスッとしていたフロルとアミナであったが、レヴァンが紹介するより早くリンは自己紹介を行い、その勢いで圧倒してあっという間にフロルたちとも打ち解けてしまった。フロルたちが目を白黒させながらリンに応えていたのが見ていて面白かった。
リン恐るべし、と一人考察にふけっていると、

「どうしたの？　さっきからこっち見てるみたい」
言われて気づくはもう遅い。レヴァンが目をそらすと同時に、リンはニヤリと笑った。
「にしし。アタシの魅力にメロメロかな？」
――メロメロって……。

もうなかなか聞くことのないフレーズに恥ずかしさを忘れ、レヴァンはリンに近づいた。きちんと害獣への警戒はされているのを見

て、リンも拒まなかった。
リンの隣まで行くと、レヴァンは早速気になっていたことを聞いた。
「リンってさ、体術凄いな。装器士になろうと思わなかったのか？　特別な資格なんていらないだろ」
「え、アタシ？　無理無理」
最初から望む様子がないのを見て、レヴァンは内心首を傾げる。
「そうか？　並の装器士より強いと思うけどな……」
まあ、なりたくない理由があるのかもしれない。そう思って、レヴァンはその話題を打ち切った。
しかし、新しい話題が見つけられずにレヴァンは硬直を余儀なくされる。あまり話すことが得意というわけではないのだ。
「……じゃあ、アタシも聞いていいかな」
だからリンが口を開いたことにほっとして、先を促した。リンはレヴァンと真面目な顔で対面した。
「……レヴァっちは犬耳少女は好き？」
レヴァっち？　犬耳？　言いたいことは山ほどあったが、リンが本当に真面目な顔をしていたので、ツッコめなかった。
「ね、どうかな？」
答えを急かすようにリンが身を乗り出してきた。

「まぁ、嫌いじゃない……ていうか好きだよ」

質問の意味を掴みかねながらも、正直に答えるレヴァン。リンはその姿をじっと見つめて、やがてぷっと吹き出した。

「い、犬耳少女が好きだなんて！」

「わ、笑うな！　それはおまえが――！」

「んー？」

「いや、なんでもない……」

なんだか反論するだけ惨めになりそうだったため、レヴァンは自分から折れる。よくわからないが自分が恥をかいて、心まで折れてしまいそうだ。そして一方、リンは可笑しそうに笑っていた。

しかし、顔をすぐに引き締めた。

「レヴァっち」

「ああ、来る」

もう呼び方はいいや、と投げやりに思いながら、資源車の進行方向を向く。そこには二、三体の害獣がいた。比較的大型のようだが、冥種でないだけましか。

「んじゃ、行くか」

「仕事だね」

レヴァンはハンスから借りたガントレットを装着しなおし、リンは腰のナイフに手を触れさせた。

【2】-7　思わぬ事態

リンの手からナイフが近距離から放たれ、避けることもままならないまま害獣が叫び声を上げる。しかし、次の瞬間にはリンの手には新しいナイフが。

「ていていっ」

緊張感の欠片も感じられない声とは裏腹に、鋭い動きで害獣を切り刻んでいく。冥種ではないので、たとえ切り刻んでも砂へは還らない。追い払うか討伐するかなのだ。

ふと、リンの手からナイフが消える。凄まじい速さで腰へと戻したのだ。空いた両手で害獣に刺さったままのナイフを抜く。

てっきりとどめかと思いきや、リンは害獣の身体を蹴飛ばした。

車体から落ちたそれは、あっというまに後ろへ流されていく。そして、リンは手に持つナイフを鞘へ戻した。

「片付いたぜい」

「おまえってキャラがコロコロ変わるのな」

感心したような呆れたような視線を向けるレヴァンに、リンは屈託ない笑顔を見せた。

「レヴァっちも実はすごいんだね」

「実はってなんだよ、実はって」

「あはは。意外と？」

「いや、変わらねえって」
ポンポンと弾む会話を客観的に認識して、レヴァンはリンと気が合うことに気がついた。そこで、身体にかかるG。資源車が減速を始めたのだ。もうそろそろ目的地へとたどり着くのだろう。
そろそろ準備を、と言いかけた所で、己を呼ぶ声にレヴァンは車体の前方側を向いた。そこで疲れたように、人様には見せられないようなやる気のなさで寝っ転がっている少女が二人いた。
「はぁ、あいつら何やってんだか」
そう言って、ぐでっとしているフロルとアミナに近づいていくレヴァン。その表情は、ため息をつきながらもどこか仕方ないなと言った感じだった。
それをリンがその場で見送っていると、レヴァンが振り返る。
「どしたよ？　早く行こうぜ」
「……え？」
「いや、え、じゃなくて。友達のところへ行こうって言ってるんだよ」
「……友達」
「そう。……ほら行くぞ」
「あ」

レヴァンはリンの元まで一度戻ると、その手を掴んで引っ張る。引っ張った側の不器用さのせいでそれはかなり強い力だったが、リンは体勢を崩すこともなくレヴァンに続いた。

＊

そして、少女二人が出迎えた。

「ヒューヒューおふたりさんお似合いだねー」

「……」

フロルの白けた声とアミナの無言の視線が、レヴァンに深く突き刺さる。硬直して言うことも思いつかないその少年に代わって、リンが口を開いた。

「彼ったら……強引で……ぽっ」

「捏造するな、ぽっとか言うな」

ツッコむことで心の平安を保ちつつ。フロルとアミナも白けた視線はそのままだが、その中にある怖さがなくなった気がした。リンが狙ったのかどうかはレヴァンには知る由もないが、レヴァンはとりあえず助かったと胸を撫で下ろした。

その後すぐに雑談を始めた三人を見てレヴァンは安心し、腰を下ろした。そしてそのまま車体の上を寝転がる。

「あ、レヴァン、なに寝て――」

なんだか安心すると眠くなってきた。ので、フロルの声を無視し

て、レヴァンは仮眠を取り始めたのだった。

＊

鉱山の入口で周りを警戒しながらも休憩時間を取る「ファミグリア」。全員揃ってるわけではないが、ファミグリアの初依頼だ。

フロルであっても緊張しないわけにはいかず、アミナは身体まで強張っている始末だったが、リンが持ち前の明るさでうまく緊張を調節しているようだった。案外いいムードメーカーかもしれない。

そんな時間もあっという間に過ぎ、資源車とその乗組員は作業を終了。積込み部分の扉を閉める音と共に、レヴァンたちも立ち上がった。

「それじゃ、頑張ろ！」

フロルが気合を入れて、それに呼応するようにリンも含めた全員が「おー」と声を上げた。

行きと同様にフロルとアミナは車体上の前方、レヴァンは左側面、リンは右側面を警戒する形を取った。

フロルとアミナが魔法で害獣を牽制、それでも襲いかかってきたものを、レヴァンとリンが対処するのだ。

レヴァンとリンが背中合わせに座る。それを確認して、フロルも所定の位置へつく。すると資源車が一度震えて、走り始めた。

そして行きと同様に、危なげなく都市へ帰還する予定だった。

しかし、ここで予定が狂う。

どうしてこんなことになったのか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「なんだよ……これ……」

レヴァンが苦々しくつぶやく。その視線は資源車の右斜め前方。その視線を追ってみると、すぐ近くの岩場から突然百数十体で構成される害獣の群れが現れた。

群れをなす個体は、そのどれもが中型以上。レヴァンは反射的に動いていた。すると、並走してくる影が。

「レヴァっち、右をお願い！　アタシは左！」

そう短く叫んで、リンは害獣の一群と向かい合って左側へと急行した。レヴァンも負けじと右側へ赴く。

害獣が資源車へ到達するのと、レヴァンが前方限定の属性展開をするのはほぼ同時だった。

無属性展開により肉体を侵された害獣たち。しかし控えめな展開は勢いをすべて殺すことは出来ずに、群れは資源車へと激突。大きく揺れた。

そして不幸なことに、その衝撃が車体の動力源を停止させてしまっていた。

資源車が減速。やがて完全に止まり、それに害獣が目を光らせた、ように見えた。

「ま、まずい……」

レヴァンは思わずそう漏らすと、ハッと我に返った。まだ害獣たちは無効化しきったわけではない。
レヴァンの魔力に侵され身動きがとれない個体と、影響が少なかった後方の個体。もう一発属性展開を放とうとするが、思い止まる。
近くにはリンが、少し離れた所ではフロルとアミナが動いている。さすがにこの数を相手にしながら、属性展開を操作することに意識は割けない。
そうこうしている内に、前から害獣が迫る。レヴァンは資源車から地面へと降り立ち、それを魔力を込めた腕で殴りつけた。
一体が吹っ飛ぶ。しかし、その空いた場所を埋めるように次から次へと新しい個体が殺到。レヴァンはそれを視覚、直感のどちらも使ってカウンターを繰り出し続けた。
しかし殴っただけでは駄目だ。吹っ飛ぶだけですぐに戦線へと戻ってくるだろう。確実なダメージを与えなくては。
そこまで考えたレヴァンは目を鋭く、気迫を鋭く変えていく。
視点で相手を捉えることをしない。
視界全体で相手の流れを読む。
後頭部側から突き出される太い前足。それを見ないまま感じ、首を捻って躱した。それを取って地面へと叩きつける。

――駄目だ。もっと。

レヴァンは自分の拳から力を抜いた。そのまま手刀を作る。それを魔力で保護する――だけではない。
魔力を鋭く。二層の魔力を擦り合わせるようなイメージで。
そのまま前方から迫っていた二体に、レヴァンは両手それぞれを叩きつけた。
切り裂かれた害獣。とりあえず成功したようだ。
それに恐れをなしたように動きを止めた一瞬で、レヴァンはバックステップ。資源車の下へ戻った。

とん。
そのとき、レヴァンの方にぶつかるものがあった。
「……調子はどうだい、レヴァっち？」
「はっきり言って最悪。俺、冥種以外には相性が悪いんだ」
同様にバックステップしてきたリンと状況確認をした後、再び襲いかかってきた害獣の相手をする。
「……ッ……このッ……」
「……くそ、キリがない！」
悪態をつきながらなんとか状況打破の道を探すレヴァン。さきほどチラリと見たところ、フロルやアミナも限界が近いようだった。二人が魔症になり魔法が使えなくなれば、もう状況を覆すのは無理だろう。
そして、その限界は予想より早く来たようだった。
フロルとアミナが車体上でへたり込んだかと思うと、襲いかかって来る個体数が格段に多くなる。
魔法を恐れていたものも攻めてきたのだ。
「やば、間に合わな――ッ！？」
レヴァンが同時に五体を切り裂き、七体が攻める。そのうち一体の爪をかわしきれず、レヴァンの肌を貫こうか、と言うところで。
「……仕方、ないよね」

切羽詰まったような悲しそうな声を、レヴァンは聞いた。

――リン？

レヴァンがそう頭の片隅で思いながら、自らの首筋に迫る敵の爪をゆっくりと流れる時間の中で見ていると、

その爪は、腕ごとその場から掻き消えた。

目の前で起こったことをレヴァンは信じられなかった。しかし、考えにふける前に、周りを囲っていた敵を小規模な無属性展開で片付ける。

そして次の攻撃に対処しようと振り向いた時、そこには害獣はいなかった。

資源車の周りにいた害獣が、大小関係なく倒れていた。

脚を千切られ、腕をもがれ、酷い損傷によるショックで意識を手放している害獣たち。レヴァンが十体倒している間に、四十近い害獣が倒されている。

レヴァンはその光景に畏れすら抱きながら、そのなかで一人立つ少女を呆然と言った様子で見た。両手にはナイフ。それは少女の手ごと、害獣の血液に濡れていた。

そしてその頭の上には――

突然残された数十の害獣たちが攻撃をやめて逃走を始めた。圧倒的な力の差を感じたのだろう。そうなっても仕方のないことだろう、とレヴァンは頭のどこかで思った。

「……リン」
そう、レヴァンが呼びかける後ろ姿は、
「……」
レヴァンの瞳に、ひどく寂しげに写った。

【2】18　人と魔の境

「お疲れ様でした。横転したときはどうなることかと思いましたが、無事で何よりです。浄法院の方には私が依頼達成と報告しておきます」

では、と最後に言い残して、依頼人が去っていく。その方向は物見塔だ。これからも仕事らしい。

それを見送ってから、レヴァン達はお互いを見合った。喜びを分かち合う前にやるべきことがある。

「リン」

ビクッと震える肩に申し訳ない気持ちになりながらも、レヴァンは続けた。

「……さっきのは、なんだ？」

僅かな間で四十体もの害獣を屠る高速戦闘技術。

それだけではない。レヴァンはその直前、かすかな魔力を確かに感じていた。フロルとアミナも遠目から見ていたらしい。三人はそれが気になっていた。

「教えてくれないか？　おまえ――」

レヴァンはそこで一回区切った。言ってもいいものかと再三悩み、結局、口を開いた。

「――魔物、なのか？」

レヴァンがその言葉を発した瞬間、リンの身体から何かが抜けた。それは単に緊張か、それとも――

リンは観念したように首をうなだれると、身体に魔力を込め始めた。身体全体から魔力が滲み出す。反射的に構えるレヴァンたちの前で、その魔力は自己主張をしている。

その色は、緑色。

「緑の魔力……？」

フロルがつぶやくのと同時、リン自身にも変化が現れた。

体表に浮かんでいた澄んだ緑の魔力は、そのまま皮膚に寄り添うように定着、浸透した。そして、より目立つ変化が。

頭からひょこっと何かが顔を出す。同じように腰からも。それはまるで――

「……耳、と尻尾」

アミナの驚愕の声――あまりそうは聞こえないが――にリンは顔をゆがめる。

それと呼応して耳も尻尾もしおれるように元気がなくなる。この時点で作り物の可能性は無くなった。

声をかけられない三人の代わりに、リンは視線を上げたりそらしたりした後、口を開いた。

「……アタシにもわかんないんだ。ただ、育ててくれた人は病気だ

って言ってた」

自分は赤子の頃に捨てられ、拾い主に育てられた。能力は物心ついた頃にはすでに使え、恐らく体質的な病であるだろうと言われたこと。

それらを話したリンは、三人と目を合わせようとはしなかった。

「……ごめん。気持ち悪いよね、こんなの」

リンはおもむろに口を歪めて自嘲した。そんなことをしてもレヴァンたちは口を開かないというのに、まるで助けを求めているように。

「アタシもこんなのがいたら気味悪がると思う。能力はこれだけだけど、危険なことに変わりはないし。レヴァンくんも見たでしょ？馬鹿みたいに速くなって……。

アタシはやっぱり人間じゃないのかも。だから魔物に間違えられてひどい事されたりして――」

「……やめて」

どんどんエスカレートしていくリンを止めたのはフロルだった。

しかし、堪えられないのか、リンは口を止めることなどできない。

「でも、気持ち悪いと思ったよね？」

「……やめて」

「人間の真似をした化物。そう言われる辛さが――」

「やめてよ！　リンちゃんは人間だよ！」
フロルが叫ぶ。
そんな初めて見る姿を、アミナは目を見開いて見ていた。レヴァンも、驚いていた。
「そんな同情は――」
「同情なんてしてない！！　ただそれ以上言わないで！　これ以上レヴァンを傷つけたら許さないからッ！」
「……レヴァンくん？」
リンは首をかしげてレヴァンに視線を向ける。レヴァンは気弱げに笑ってみせた。
その手をリンの前に掲げてみせる。
「……っ」
「まぁ、なんというか……俺も似たようなもんっていうか……」
いつか浄法院の仲間の前で見せたのと同じように魔力を集めてみせるレヴァン。リンは顔を驚愕色に染めていた。
「……そういえば、あの時も」
害獣との戦闘のことを思い出したのだろう。あのときリンはレヴァンの無属性展開を目にしていた。ただ、なにが起こったのか理解していなかったのだ。
リンは驚愕から立ち直っておらず、呆然としている。この間にレ

ヴァンは畳み掛けておくことにした。
「別におまえが人間かどうかなんて関係ないよ。俺だって人のこと言えないし」
そう言いながら、隣に並ぶフロルとアミナに目配せ。二人が頷いたのを見てから、レヴァンは自らの通信端末を取り出した。
「番号交換しよう」
「……え」
「俺たちみんなおまえとはウマが合うみたいでさ。できれば、また俺たちとバカやってくれないかな？」
「いや、バカやるのはレヴァンだけでしょ」
「……私も、したい」
フロルとアミナがそんなことを言いながらも、自分の端末を取り出す。
リンは目の前の三つの端末をじっと見ていた。
本当に見てるのか心配になったレヴァンがリンの目を覗き込もうとして、勢い良く上げた頭と危うくぶつかりそうになる。
「……本当に、いい？」
「もち」
ほら早くしろよ的な視線を向けられて、ようやくリンも端末を取

り出す。配給される装備なので四人とも無骨な代物だが、今、そんなことは関係なかった。

番号交換終了。これで通話も電子文も送れるようになる。

「んじゃ、帰ろう」

レヴァンがそう提案すると、フロルとアミナが「レヴァンの部屋？」と同時に言うので、レヴァンは速攻で否定する。

「俺の部屋は四人も入れないよ」

「うら若き乙女三人を自分の部屋へ連れ込もうとするなんて……恐るべし」

「違うわ！　誰が連れ込みだ、誰が！」

初っ端からボケをかましてくれたリンに安心しながら、その表情をうかがう。

声はいつも通り。しかし表情は未だ不可解だという様子が見て取れた。

――まあ、いいさ。これから分からせればいいんだから。

「とりあえず喫茶店にでも寄るか」

やったーレヴァンのおごりー、という三人の唱和に全力で抵抗し

ながら、四人はまとめて歩き始めた。

――リン。俺もおまえも、人から嫌われるだけの化物じゃないんだよ。

＊

「研究所？」

「うん。使われなくなった無人のはずの研究所～」

物見塔の最上階。そこで疑問の声を発するエルゼと、いつものようにのほほんと答えるイレーネ。周りには誰もおらず、二人だけ。しかし漂う空気は緊張したものだった。

イレーネの言葉を聞いて、エルゼは顔をしかめた。

「……そこに奴らがいるのか？」

「うん。その研究所が、今、『魔の狩人』を雇ってるみたい」

『魔の狩人』。

表向きは武闘派人材派遣を行う団体として名を知られている。冥種の出現の際に、即時戦力として扱えるということで、浄法院はその存在を黙認してはいた。

しかしその実は、種類を問わず、あらゆる依頼をこなす犯罪組織。

そんな組織が、その研究所にいるのだという。

「しかし、研究所は無人なのだろう？」

「誰かが無断で入って設備を使っているみたいなの。閉鎖されていても、機械の持ち出しはしていないから、中はそのままなのね」

詳しいことはわかってない、と言った様子で報告をするイレーネを、エルゼは半眼で見つめた。

「で？」

「犯人は恐らく元魔導研究員のカクタス・テルト。彼はあの研究所の所長だったわ」

他には？　と促すエルゼの視線に、もうないよ、とイレーネは手を顔の前で振る。それを見てエルゼは呆れたように息を吐いた。

「初めから全て言え」

「ちょっとした出来心よ～」

悪びえた様子もなく笑ってみせるイレーネ。エルゼは諦めのため息の後、まとめた。

「都市の外にある研究所に悪事の疑いがある。調査した後、証拠が揃えばその場をおさえる。これでいいんだな？」

「さっすがエルちゃん。頼りになるぅ～」

全くこいつは、とエルゼはつぶやくと、ふと考えにふけった。しばらくして口を開く。

「そういえば、浄法院の生徒のうちに『魔の狩人』の下部組織の者がいるぞ」

「あらら。大丈夫なの？」

『魔の狩人』には幾つかの下部組織がある。

そして、組織の人間に共通していることは腕輪である。髑髏の、白い腕輪をしているのだ。

「まあ、下部組織の方は単なる武闘派育成のような場所のようだが……」

実情はよくわからんからな、とエルゼは肩をすくめてみせる。

「下部組織の方はシレンティアの中だ。そこを警戒させておくさ」

「おねがいね～」

イレーネの言葉を最後に、二人の間の空気が一変する。

途端に緊張を失った空気に、イレーネはほんの少し詰まっていた息を吐き出す。そして、旧友に見せる満面の笑みをその顔に浮かべた。

「真面目な話はこれでお終いとして。じゃあ、エルちゃん、何か楽しいお話を――」

「……ああ、悪い。たった今用事ができてな。今から校庭の雑草に水をやらねば」

「私よりも雑草なのっ！？」

「冗談だ」

ひどい……、と拗ね始めるイレーネにエルゼはしてやったりという顔になる。

しばらくシクシクと拗ね続けたイレーネであったが、疲れたのか、やがて終わった。そして、そういえば、とエルゼに問いかける。

「パルメルの兄妹さんのことなんだけど……なんでエルちゃんは浄法院に二人を通わせてるの？　なんか気になっちゃって」

「……あいつらか」

唐突な質問に狼狽える様子も見せずに、エルゼは視線を上げて何かを思い出しているような表情をした。

「あいつらは……名家だからな。周りの期待が厚く……あいつらはそれを断ち切れるほど強くはなかった」

語りだしたときは淡々とした声音であったが、一度、言葉を区切ると、悲しげな色が声に混じり始めた。

「私が鍛えてはいたが、それだけだ。あいつらには同じ年頃の者たちと同じようなことを味わっていない」

仲間。そうエルゼは口にした。

「困難を乗り越えるには力がいる。その力は、時には周りから求めなくてはならない。それをあいつらに分からせてやりたい」

もうわかっているのだろうがな。そうつぶやくエルゼは、二人が

同じチームの少年少女と仲良くしている場面でも思い出しているのだろう。
そのときエルゼは教官の顔をしていた。鬼教官のそれではなく、親の慈愛にも似た、優しげな表情だ。
そのエルゼを、イレーネは優しく見ていた。

「……そっか」

しばらく沈黙がその場を支配する。
しっとりとした雰囲気がやがて消えてなくなった頃、トントン、と扉を叩く音が聞こえた。

「はい、どうかしましたか？」

イレーネが庇護者としての仮面を装着。エルゼも部屋の端の方へと移動する。

「庇護者様。来客です」

「来客？　今日は予定などは入っていなかったはずだけれど……」

誰？　と言外に尋ねるイレーネに、扉で佇む職員が困ったような表情を浮かべる。

「とりあえず会議室にでも入ってもらってください。私がうかがいますから」

「よろしいのですか？」

「はい。丁度、少し歩こうかと思っていたところです」

「そうでしたか、わかりました」
イレーネの指示にそう答えて一礼すると、職員はゆっくりと扉を閉めた。
その後、しばらくしてエルゼが口を開く。
「いいのか？」
「うん、私も歩かないと。このままじゃ太っちゃう」
「ふ、何を言う。学生時代に『お菓子の国の姫』と呼ばれていたおまえが今更太るわけないだろう」
そんなエルゼの皮肉にイレーネは頬を膨らませた。
「私があの時どれだけ頑張っていたか知らないから、そんな事言うのよ。食べた分の熱量を放出しないといけなかったんだから」
「だったら食べなければよかっただろう？」
「それは無理」
断言する姿に、エルゼはため息をついた。同様にイレーネもため息をつく。
「エルちゃんこそ一体どうなってるの？　ごっつい肉しか食べてないのに何そのスタイル。神様は不公平だよ～」
「いや、おまえ神とか信じていないだろう」
ぶーぶーと文句をいう旧友に再三ため息をつきながら、エルゼは

ふっと笑った。それにつられてイレーネも笑みをこぼす。

「……それじゃ、会議室に行きましょう。サウスオールさん」

「お供します、庇護者」

一体来客っていうのは誰だろう？　そんな疑問を抱いたまま、イレーネはエルゼとともにその部屋――『守り手の間』を後にした。

【2】ー8　人と魔の境（後書き）

区切りの都合上、今回は長くなってしまいました。
次回から少し日常が入って長くなっていくかもしれません。

【2】−9　犬耳少女の企み

どこまでも続く世界。その世界は水のような液体に満たされていた。

上下左右、どこを見ても有るのは闇、闇、闇。しかし完全な暗黒ではなく、どこか深い青色のようなものを感じさせる。

どこまでも澄んだその中で、自分は一人浮かんでいる。自分がどこにいるのかも理解出来ない。体に力が入らない。ゆらゆらと、その水中のような場所で身を任せていた。

……暗い。

意識すらも半分身体から離れているような虚ろさでそんなことを考える。

……僕は……。

その深青の世界には、感情が溢れていた。

不安、悲しみ、怒り、憎しみ……。

そして、失望。

感情が心の中へ流れこんでくる。果たして自分は今、叫んでいるのだろうか、苦しんでいるのだろうか。

わからない。

ただ、ゆらゆらと漂い続けながら、思った。

……僕は……なに……？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

はっと目を覚ますと、そこには自らの寮の部屋が。

「……なんか嫌な夢をみた気がする」

思い出そうとするものの、うまくいかない。頬を叩いた。諦めて出かける用意を始める。

「これが、夢見が悪いってやつかな。なにか楽しいことでもあれば気分が紛れるのに」

そんなことを言いながら、出かけるために着替え、寝ぐせ直し。出かけるといっても、特に用事はない。せいぜい商店街の人を手伝って、お小遣い稼ぎだ。

「よし、ぶらぶらするか！」

そういって、よく分からない気合を入れると、

「いってきます！」

レヴァンは、寮から外へと向かった。

おかしい。

浄法院『ファミグリア』所属、契約者フロル・アイヤネンの招魔

である少年、レヴァン・グラフェルトは現在、不可解な事態に出くわしていた。

「なんで……」

そうつぶやいてから、再び目の前にいる人物に向かい合う。

「本当に何もないの？」

「ああ、少し前に他の手伝いが来てな。もう仕事は残ってない」

丸太のような腕を組みながらそんなことを言うのは、肉屋の店主。

「多分、今日のところは商店街に手伝いはいらないだろうな」

「……そうなのか」

教えてくれてありがとう、と礼を言い、レヴァンはその場を離れた。

「なんてこったい。買いたい道具があったのに……」

浄法院は寮を完備、三食も保証されていて、生活する分には申し分ない。

しかし、自分の欲しいものなどを買いたいときなどは、自分で稼がないといけないのだ。レヴァンの場合は商店街での力仕事だが、浄法院に来る依頼でも稼ぐことは出来る。

ただ、レヴァンは面倒臭いことは嫌いだった。

「はぁー」

長いため息をつきながらトボトボと道を引き返す。

道中で気づいた欲しいものだったが、稼ぐことすらできないとなると、どうしようもない。
どうしようか、依頼でもこなすか。でもメンドイのはなぁ、と悩んでいると、前方からリアカーを引いて歩く人影が見える。リアカーの中には大量の本。積み重なったそれらはどれも新しい。
――仕入れ。と言うことは例の手伝いっていうのは……。
レヴァンは恨みがましい視線でその人影を見つめた。……ってあれ？
「手伝いって、おまえかあああああっ！？」
「ん？　どったのレヴァっち？」
リアカーを止めて首を傾げるリン。どうやらリンの方はレヴァンに気づいていたらしい。レヴァンはなんとか平静を保って目の前に来た少女に問いかけた。
「確認するけどさ、おまえ、商店街の手伝いをあれこれ構わずやってる？」
「うん、やってる。それがどうかしたの？　レヴァっちに関係が？」
「大ありさっ！　買いたい物があるのに稼げないんだよっ」
「買いたい物？　なになに？」
「う」
興味津々といった様子で聞いてくるリンから、レヴァンは目をそ

らす。

「……いかがわしいもの？」

「違うわ！」

全力でツッコむレヴァンをひとしきり笑いながら、リンは次の言葉を紡いだ。

「まぁ聞かないでおいてあげるよ。プライベートに踏み込むのは……ね？」

「おいまだ勘違いしてるだろ、おまえ。俺はただ小説が読みたいんだ」

「あはは、そっか。まぁでも、ゴメンね。どうしても今だけお金がいるんだ」

けっこう真剣な表情でリンが言うものだから、レヴァンは渋々「……そっか」と言って、責めるのはやめた。

それからしばらく雑談を交わしていたが、リンが「あ、本運ばなきゃ」と言ったので、そこで終わりにする。

「レヴァっち……ありがとね」

「ん？　なにが？」

「アタシを嫌わないでくれて」

はにかむリンに、レヴァンはじっと目を向けた。ど、どした？

と顔を赤らめたリンに向かって口を開く。
「意味が分からないよ。なんでおまえを嫌うんだ？」
「だって、アタシ、変だし」
「まぁ、変だな……性格が」
「ひどっ！？　でも、本当に変だから……」
暗くはないものの、まだ引け目に感じているリンに、レヴァンは笑いかけた。
「言ったろ？　俺、犬耳少女好きだからな。おまえと友達になれて嬉しいよ」
その言葉を聞いた瞬間、目を見開きわずかに顔を赤らめるリン。
怒ったかな、とレヴァンが構えていると、リンはいきなり自分の身体を抱きしめた。
「アタシを狙うつもりなのね、このケダモノ！」
「なんでだよっ！」
全力でツッコむとリンが笑う。ま、いっか、とレヴァンもつられて笑う。
「それじゃ、“またね”」
「おう」
それを最後の言葉として、リンがリアカーを引っ張り始める。な

ぜか意味深な笑顔で「またね」の部分を強調された気がしたが、特に気にはしなかった。レヴァンも通りすぎるその姿を見てから、歩き出す。
リンに背中を向ける直前。ありがと、と聞こえた気がした。
レヴァンは立ち止まり、軽く笑う。しばらくして、リンが十分離れたところで、
「心から笑えるようになるといいな、リン」
そうつぶやいて、寮の方へと歩き始めた。

＊

浄法院に登校。早朝練習に身を捧げ、疲れた身体で教室へ。
「つ、疲れたよ……」
「……眠い」
フロルとアミナが机に突っ伏しながら言うのを、レヴァンは苦笑しながら聞いていた。今日は体術を主として、レヴァンがしごいたのだ。
そこでハンスとカナンも登校。二人は浄魔士の書類仕事を終わらせてから浄法院へ来るため、早朝練習にはあまり参加できないのだ。
「ふふ、また疲れていますね。ということはレヴァン先生の仕業ですか」

「なにその俺が悪いみたいな言い方。ひどいな」
「いえいえ、ただお二人への愛の鞭なんだな、と思いまして」
にっこり笑うカナンに呆れた顔を向けるレヴァン。
自分一人で否定するのもなにか虚しいので、何か抗議してもらおうとフロル、アミナの方に声をかける。しかし、二人は反応を示さなかった。
「レヴァンの愛……」
フロルが顔を赤らめてそんなことを言い、アミナもポツリと呟く。
「……鞭」
「待て、アミナ。なんで今おまえ『鞭』って単語で笑顔を浮かべた？」
「……なんでもない」
「……俺は果てしなく不安だよ……」
最近、アミナが変な方向に育ってきているように感じるレヴァン。フロルから離したほうがいいかな、と考えた所で、フロル当人から足を踏まれた。超能力者か。
そこで話をそらす意図も含め、ハンスの方へ顔を向けた。
「よ、ハンス。おはよう」
「ああ」

言葉数は少ないものの、大分態度が軟化してきたハンス。少しは信用してもらえたのかもしれない。そんなことを思い、レヴァンは嬉しくなった。これで、朝の挨拶タイムは終了である。

「ところでみなさん、聞きましたか？」

いつもならそのまま雑談に入るところを、今日はカナンが話題を提供してきた。レヴァンが先を促すと、カナンは続けた。

「また編入生が来るそうですよ」

「え、また？　この学年に？」

「はい。師匠から聞いたんです」

通常有り得ないはずの編入生が三人。レヴァンは驚いた。フロルが話に乗ってくる。

「どんな人かわかる？」

「……そこまでは聞いてなかったです」

聞いておけばよかった、と後悔の表情を見せるカナンに、そうなんだ、とフロルは残念そうな顔をする。

「今の話本当っ！？」

「ラナさん。どうかしたんです？」

近くでチーム内雑談をしていたラナも、横から元気よく話に混ざってくる。そのチームメンバーも近くへ寄ってきた。

「編入生がもし来るんだったら、今度こそ、うちのチームに入ってもらわないと……」

「ああ、そゆこと」

フロルが納得したような声を出した。

しばらく雑談をしていると、クラスメイト全員が揃っているはずの教室の扉が開いた。

教官かと思い、皆姿勢を正すものの、まだ始まるには五分ほどある。教官が来るまでは三分ほどあるはずだ。

じゃあ一体……。

そう思って視線を向けた時、レヴァンは固まった。同様にフロル、アミナも順に固まる。ハンスとカナン、その他のクラスメイトは頭の上にハテナマークを浮かべただけだった。

レヴァンたちの視線の先、クラスメイトの視線を集めているその人物は、片手をレヴァンに向かって上げた。

「や、おはよう」

若干色の抜けた茶髪のポニーテール。人懐っこそうな笑み。そして意志の強さがうかがえる琥珀の瞳。

そこにはリンが立っていた。

【2】ー10　手荒い歓迎

「り、リン？　なんでここに」

「……来ちゃった。ぽ」

「いちいち誤解の招く発言するんじゃねえよ！」

つい強くツッコんでしまってから、レヴァンはしまった、と思った。

「レヴァンくん、知り合い？」

ラナの言葉。続々とこちらへ興味深そうに向けられる視線。即座に耐え切れなくなって、レヴァンはリンの方を見た。

「……まさか、おまえが編入――」

「貴様ら何をしている？」

教官がいらっしゃった。脊髄に刻まれた教育の成果が発揮され、クラスの者は全員が一瞬で席に戻った。

「クエスティ。先に教官室へ寄れと言っただろう？」

「あ、忘れてた。すいません」

「……まあいい」

ほら席に座れ、という教官の言葉に、リンは迷わずレヴァンの後ろへと座った。

他の者も気にはなったようだが、わざわざ教官の注意を買う者もいない。渋々視線を前に向けた。

「……なんでここにいるんだよ」

こっそりリンに尋ねる。リンはわずかにニヤッと笑った後、悲しそうに目を伏せた。

「ひどい……私とのことは遊びだったのね……！」

「それはもういいから」

で？　と追及するレヴァンに、リンは顎で前を示す。教官の話を聞けということだった。

レヴァンが仕方なく前方に意識を向けると、教官がいつものように毅然とした態度で連絡をするところだった。

「庇護者、それと守護士含めた浄魔士隊上層部が新たな決定を下した。浄法院の入学資格についてだ」

そこで言葉を区切って、教官はリンを見た。

「浄法院に、『武装専科』を設立することとなった。これは装器士を志す者用の位置づけである。この『武装専科』にリン・クエスティは入ってもらう。現在まで特例扱いされていたパルメル兄妹も同様だ」

ついでにお前らは『魔法専科』という枠組みになる、と教官の言葉が全員の耳の中へ入っていく。そこで生徒の中から一人が挙手した。

「どうした、レヴァン」
「それはクラスが分かれるんですか？」
レヴァンの簡潔な質問に教官は、なるほど、とつぶやいてから答えた。
「いや、分かれない。あくまでも身分の位置づけだ。今後も同じチームで活動してもらって構わない」
「わかりました」
「よし。それでクエスティだが……」
教官はリンを見た。リンは小首をかしげてそれを見つめ返している。ん、なに？　とでも言いそうな顔だった。
「おまえにはどこかのチームに入ってもらわなくてはならない。といっても分からないだろうから、とりあえず――」
「アタシ、レヴァンくんと同じとこがいいです」
教官の言葉を遮って、リンが主張。その瞬間空気が固まったような気がした。教官が訝しそうな視線でレヴァンを見て、口を開く。
「レヴァン、知り合いか？」
「はぁ……まあ一応」
レヴァンの要領を得ない質問に教官がしばし黙考。後にため息をついた。
「わかった。ではクエスティは『ファミグリア』に入ってもらう」

え〜、と周りから特大の不満の声が上がるものの、教官は黙殺。レヴァンは周りから、昔とはひと味違うネガティブな視線を感じて身を震わせた。

とそこで、背中をチョイチョイとつつかれる。

「レヴァっち、『ファミグリア』って？」

「ああ、俺らのチームの名前」

「ああね」

納得したような満足したような表情を浮かべたリンをなんとはなしに見ていると、教官が手を叩いて生徒の注意を引きつけた。

「よし、これにて連絡は終了。各々訓練を開始しろ。アイヤネン、クエスティを案内してやれ」

その言葉とともに、

「だるいな……」

レヴァン達は席を立った。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

早速、リンのファンクラブが出来たようだ。

今までフロル、カナン、アミナという順で勢力を誇っていたファンクラブ。しかし、リンの編入でそのパワーバランスが崩れたのだ。

リンはその性格の明るさからメキメキとファンを増やし、また他のファンクラブから人数を奪いながらも成長。いきなりカナンに匹敵するほどのファンを手に入れたらしい。

「ま、よくわからないけど」

ファンクラブ無所属のレヴァンは、夕暮れの教室でつぶやいた。

それでリンが編入してきた理由だが、彼女はレヴァンたちを見て浄法院に興味を持ったため、庇護者に直談判して入れてもらった、とのこと。簡単に言っているが、かなり手間と金がかかる方法である。

商店街で小遣い稼ぎをしていたのもそのためだとか。

今回いきなり初めての訓練の時間。歓迎の一貫として訓練相手を申し出た相手をリンは全員体術のみで組み伏せた。

容姿良し、性格良し、そして腕もよし。三拍子揃ったリンは、レヴァンが心配するまでもなくクラスに馴染んでいった。

そんなリンがレヴァンの目の前にいる。彼女は弱気な目をしていた。レヴァンはその少女の目を見つめた。

「た、助けて……」

「……」

「おねがい……お願いだから、これを――」

現在人気ウナギ登りのリン。生徒にも教官にも歓迎された。

「――この縄ほどいてよ～～っ！」

そう言って、彼女が床に倒れている自身の体を瞬間的に反らして

何とか動こうとする。全身が縄に縛られて必死に動こうとするその姿は、海老のようだった。

「よかったじゃん、歓迎されて」

「どこがっ！？　なんでみんなでアタシたちに向かってあんなに縄の魔法を飛ばすの！　そしてなんでレヴァっち達は逃げれたの！」

陸に揚げられた魚のように跳ねながら、リンは抗議してくる。とりあえずレヴァンは出来ることをしておいた。

「ははは」

「……おいこら」

リンがしつこく（「誰がしつこいんだ！」）言ってくるので、レヴァンは仕方なくリンの傍らにしゃがみこんだ。

「いい加減痛いよ～。いたいけな少女を縛るなんて……はっ！　これがレヴァっちの趣――」

「はいさよなら」

「ごめんなさい、反省しています」

踵を返しかけた足を再びリンのところへ戻して、仕方なく、レヴァンは縄を解こうとその縄に手をかけた。

「ひゃっ」

「気持ち悪い声を上げるな」

「ひどっ！　そんな声あげてないよね？」

くすぐったかっただけなのにな、とつぶやいたリンの言葉を、レヴァンはあえて無視した。なんとなく意識しそうになったからだ。

レヴァンは目の前の縄にだけ集中。そこに魔力を流し込んだ。

縄は物質を構築する魔法で作られている。つまり、原材料は魔力ということだ。この世界に物質として定着した魔力、それを新たな魔力に当てる。すると、縄は新たな魔力に触発されて、元の姿を取り戻す……はず。

そんな推論のもとに、レヴァンは実行。

余談だが、レヴァンの仮説は今まであたった試しがない。

予想通り、縄に何も変化はなかった。

しかし、教室の扉に変化が。開いたのだ。

「レヴァン、おまたせ。ちゃんといい子に――」

してた、という言葉を入ってきた少女は口の中で止めてしまう。夕日に映えるスカーレットの髪。フロルだ。

今の今まで、魔法を使える者は教官の補習、ハンスとカナンは浄魔士の仕事で、教室にはレヴァンとリンの二人だけだった。

そして、フロルの目には、縄で縛られた美少女にレヴァンが手をかけているように見えているわけで。

「……教官室に行かなくちゃ」

「待て待て待て」

本当に教官室へ行こうとしたフロルを教室内に引きこむレヴァン。

必死に語りかけ誤解を解いた。
しばらくして、ようやく納得したフロルがじっとリンを縛る縄を観察する。うーん、と唸った後、口を開いた。
「今度は誰の魔法なの？」
「わかんない」
「この魔法の感じは前回と似てるんだけど……」
魔法の感じ？　レヴァンが首を傾げる。人間にそんな感覚備わってたか？
「前回というと、やっぱり……」
頭で考えていることを頭の奥にしまいながら、レヴァンは憐れみたっぷりの視線をリンに向けた。
「？」
「クエスティ。ここにいたか」
疑問符を浮かべるリン。そして同じくして教官が教室へ入ってきた。
「「……やっぱり」」
「え、なに？　なに？」
「クエスティ。歓迎してやるからついてこい」

「え、でも今縄で縛られて動けな――」

「私が何とかしてやろう」

教官が酷薄な笑みを浮かべる。そこでリンも嫌な予感がしたのか、レヴァンたちに助けを求めるような目を向けた。

二人はその視線から全力で目をそらした。

「ほら行くぞ」

そう言って、教官がリンの襟首を掴んでから、引きずる。

「た、助け――」

最後まで言い終わる前に、リンはレヴァンとフロルの前から姿を消した。きっと制限された動きで教官の相手をしなくてはならないだろう。

「レヴァンと全く同じだね」

「わ、笑えないな」

レヴァンとフロルは、リンが引きずられた方向を見つめてから、静かに合掌した。なんまんだぶ。

【2】ー11　仲間と絆

闇。そして端から漏れる青い光。
その二つしか知ることのできない狭い通路。パイプやらなんやらが雑多にあるそんな場所。
そこに、数人の人間が倒れていた。

「……早くも目を付けられてしまいましたか」

白衣のポケットに手を突っ込んだままの男が、その濁った目を倒れている人間へ向ける。その者たちは、浄魔士の隠密偵察部隊の鎧を身につけていた。
軽くて、丈夫。魔法の熱線すら耐えるというその胸当てのような鎧は、まるで蒸発したかのように綺麗に胸の真ん中をくり抜かれていた。
そしてその内側も。
倒れた人間たちにはすでに息がなかった。

「本格的に攻められると都合が悪いですね……」

コツコツと靴の音を響かせながら、男は足元の偵察部隊三人を冷たい目で見る。そのまま横へ視線を向けた。
そこには無惨に破壊された水槽。中にいたモノは不安定な状態から、蒸発してしまっていた。
「研究を邪魔されると、困りますし」
そう言って男はニヤリと口唇を吊り上げる。
「行動は……早いほうがいい」

そう言って男は通信端末を取り出して操作をし、耳に押し当てた。
くく、という笑いが口から漏れた。
「さて、どうしましょうかね」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

浄法院の裏でウロウロしているリンを見つけた。
「お、リンじゃん。どうかしたのか？」
朝の眠気を無くすため軽く走りまわっていたレヴァンは特に意図せず話しかける。その瞬間、リンの肩がびくっと反応したように見えた。
「レヴァっちか……助かった……」
「どしたよ？」
問いかけるレヴァンに、リンは恥ずかしそうな表情を見せる。頭をわしゃわしゃとしながら、口を開いた。
「たはは……迷っちまってさー」
「おまえ、方向音痴だよな」
呆れて笑うレヴァン。お恥ずかしいです、とリンも笑った。
「んじゃそろそろ早朝練習だし、一緒に行くか」
「もうそんな時間？　よろしく」

「せっかく同じチームなんだし、仲良くしような」
それに一瞬驚いたような表情をした後、リンは肘でレヴァンをつついた。
「あちきとレヴァっちはもうマブダチじゃないっすかー」
「いや、それ誰だよ」
そうしていつものやりとりに笑いを交えながら、二人は第一修練場へ向かった。

「おはよう……ってあれ？　レヴァンとリン？　珍しい組み合わせだね」
「おはよー。彼に朝っぱらから人気のない場所に呼び出されて、ね」
修練場にすでに来ていたフロルからの挨拶にリンはいつものように返す。それにキッとフロルがレヴァンを睨むのを見て、
「もう勝手にしてくれ……」
さすがにツッコむのは諦めた。
「……レヴァン、おはよう」
「おう。おはよう、アミナ」
小さくにこっと笑うアミナに癒されつつも、レヴァンはバックステップ。その場所を通るように木刀が高速で振り切られた。

「……チッ」
「おはよう、ハンス。カナンも」
「はい。おはようございます、レヴァンくん」

珍しくパルメル兄妹が早朝練習に参加している。浄魔士の方の仕事が少なかったのかもしれない。
レヴァンは一通り挨拶を済ますと、ハンス、カナンと頷き合ってから、

「おーい、リン。ちょっといいかー？」

フロル、アミナと会話をしていたリンを呼んだ。それに気づいたリンが軽やかに近寄ってくる。

「なにー？」
「来たな。よし。組手をやろう」

え？　という表情をするリンを残す形でレヴァンが拳を構える。続けてハンスとカナンも、それぞれ木刀とゴム弾銃を構えた。

「……どゆこと？」
「四人で組手。乱戦で」

未だ戸惑う彼女に「リンの歓迎行事ってことで」と言ってレヴァンが片目をつむってみせる。
リンは驚いた顔を見せるが、すぐに笑ってみせた。

「……そっか。ならいっちょ片付けてあげよっか」
「そりゃこっちの台詞だっての」

「私たちを忘れてもらっても困ります」
お互いに緊張感を高めていく。
近接戦闘が得意というわけではないフロルとアミナは、おとなしく四人の様子を見ている。
緊張がいい具合になった時、リンがレヴァンにコソっと聞いてきた。
「ハンスくんとカナンちゃんって強いの？　よく知らないんだけどさ」
「なんでも装器士で、しかもその中でもかなり強い方だってさ」
「はぁ、装器士ね……って装器士っ！？」
リンが驚愕している間に、レヴァンは足を一歩踏み出した。それだけでこの場の流れを動かすきっかけには十分。
「「「……っ」」」
「え、え？　ち、ちょっと待ってよ！」
リンが出遅れながらも、四人は真正面からぶつかっていったのだった。
力の強い二匹の虎が闘えば、どちらか片方は致命傷になるほどの傷を負ってしまう。
そんな意味の言葉を聞いた覚えがあるような気がしないでもない。
まして、力が強い四人が真っ向から激突したのだ。結果は目に見えている。

「あ、足がいてえ……」
「あ、アタシは肩……」
「腕がしびれちゃってます……」
「ハッ。てめぇら、だらしねぇな」
「そう言うお兄さんもさり気なく腹部を押さえてます」
「……」

悲惨な有様だった。
講義を無事に乗り越え、訓練時間もしばらくすれば終了する、という頃。レヴァン達は痛みで地面を転がりまわっている状態だった。

「言わんこっちゃない」

フロルがからからと笑いながらその様子を眺め、

「……治癒、使う？」

アミナが心配そうにリン、カナン、ハンスの三人を見る。

「待てアミナ。なぜ俺を心配してくれない？」
「……レヴァンは、いつものこと」
「……」

なにか根本的な部分を否定したかったが、そんな余力もない。レヴァンは力なく仰向けにぐたっと寝転がった。
とそこで、
「お？　終わったか」

チャイムが鳴るのを聞いて、身体からさらに力が抜ける。レヴァンはもう立つ気力すら起きなかった。
しかし、女性陣は違ったようだ。

「今日はもうこれでお終いだよね？」
「はい、そうです」
「……疲れた」
「疲れた後には……？」
「「「甘いものっ！」」」

リンを除いた女子三人が意見を合わせる。

「え、甘いものっ？」

リンも興味惹かれたのか、話に混ざる。その様子を見てレヴァンは微笑ましく思う。
呆れた様子のハンスと共に、帰ろうか、と、コソコソ移動を始めようとした所で、

「二人とも、どこに行くの？」

フロルがレヴァンの、カナンがハンスの、それぞれ肩をつかんで動きを止める。
男性陣二人は、顔を見合わせた後、はぁ、と諦めたように息を吐いた。

【2】ー11　仲間と絆（後書き）

日常っぽいこののんびり感は大事にしたいと思っています。そのせいで少し間延びしてしまうかもしれませんが、そのへんはご容赦ください。

【2】-12　少女の想い

すっかり馴染みとなった喫茶店へと足を運んでいる最中、着替えを済ませて荷物をざっとまとめて教室を出ようとしたところ。

レヴァンは自分を呼ぶ声に振り向いた。

それに気づいたのか、周りのみんながこちらに視線を向けてきたのを感じていたが、レヴァンはとりあえず視線を声の主に向けた。

そこにいたのは淡緑色の髪をラフな感じにアップにした少女だった。小柄で細い手足。その美しいと言うより可愛らしい容姿から、なかなか評判の少女である。

レヴァンはしばらくその顔を見つめ、やがて思い出した。

「エリカ・アクイナス先輩、ですよね。どうかしたんですか？」

名前を呼ばれた、レヴァンより一つ上の第三学年である少女が驚いたように目を見開いた。しかし、レヴァンが自分の言葉を待っているとわかると、その目を真っ直ぐレヴァンの瞳に向けた。

「その……ね、できれば二人で話したいな」

その視線をレヴァンの後ろへそらす。レヴァンはよく事情がわからないまま、後ろのみんなに声をかけた。

「とりあえず、先に行っててくれないか？」

「……」

「フロル？」

「……わかった」

フロルが何か不安そうな顔をしていたが、レヴァンは気にしてやることしか出来なかった。

「じゃ、またあとで」

そう言って全員が廊下を去っていくのを見送ってから、

「少し、落ち着ける場所に移動しましょうか？」

「……うん、お願いするわ」

レヴァンは提案をして、それに頷いた少女を連れて移動を開始した。

「で、話っていうのは――」

「……」

さりげなく促したつもりだったが、失敗。俯く先輩を前にして、レヴァンは我慢強く待つ方針へと変更する。

しばらく沈黙が続いた後に、ようやくエリカが口を開いた。

「……聞いてほしいことがあるの」

「はい」

話が動きだしたことにほっとしながらも、レヴァンは真剣に目の前にいる先輩を見つめる。小柄なため、レヴァンは少し見下ろすような感じだ。

「その、ね……レヴァンくんはウチのこと知ってる？」
「知ってますよ。可愛い系の美人で人気です」
「か、かわっ……！？」

そこで大きく狼狽えるエリカ先輩。
レヴァンは疑問に思った。聞いた話では、クラスメイトの軟派なちょっかいにも冷静に返すのが先輩の美点らしいからだ。
可愛い容姿と冷静沈着な態度が「ギャップ」で良いのだ、と最近話すようになったクラスの男子が言っていた。

「それで、要件は？」

早く済ませて欲しい。
そんな思いが顔に出ていたのか、先輩が焦ったような顔をしたのを見て、レヴァンもしまった、と思う。
とりあえず焦る必要はないと先輩に諭してから、レヴァンは先を促した。
すると、何故か先輩が顔を赤くする。
しばらく迷うように目を泳がしてから、やがて先輩は目をつぶって搾り出すような声で言った。

「……ウチ、レヴァンくんのことが好きなのっ。だから……付き合って！」

そう、言い切った。
ガタッと背後から小さな音がした。レヴァンはそれが、自分の心が動揺した音だと思った。

「え、そ、それって……」
「……」

レヴァンが半歩後ずさる。そして、確かめるような質問も無言の肯定で返された。
黙って上目遣いになる先輩。
それを見つめて、レヴァンは逆に落ち着いた。
「その、ね……ウチ、あの冥種大侵攻のときにレヴァンくんに助けてもらってるんだ。そこでレヴァンくんのこと意識しちゃって……」
赤い顔で必死に言葉を重ねるその姿は、小動物のようで可愛らしい。レヴァンの直感も悪い人ではないと告げている。
レヴァンは冷静にそう判断した後、声色を真剣なものに変えて言った。
真っ直ぐ先輩の目を見る。
「……すいません、先輩。俺は先輩の想いに応えることはできません」
「……っ」
どうして、と問いかける視線を真っ直ぐ見据え、レヴァンは、
「……」
なにも答えなかった。
「……そっか」
エリカ先輩が悲しそうに俯く。その肩は小さく震えている。
それをレヴァンは、
感情の抜けた冷たい視線で見つめていた。

先輩が顔を上げる。同時にレヴァンの目にも感情が戻った。先輩がレヴァンの冷たい視線を見ることはなかった。
う……、と嗚咽を我慢するような音を先輩が漏らす。しかし、その顔には強い激情を宿していた。
「……レヴァンくんがウチの告白を断ったのって――」
申し訳なさそうなレヴァンに向けて、震える声で先輩が問いかけた。
「――やっぱり、人間じゃないから？」
言いながら再び俯いた先輩は、レヴァンの顔が悲しみにゆがむのを見ていない。
きっかけを作ったせいか、余裕を一気になくした一つ年上のその少女は、口を閉じることができなくなってしまっていた。
「人間じゃないレヴァンくんはウチが目に入らないの？　人間とは違うから、ウチらを見下してるの？　力のないウチらはレヴァンくんにとってどうでもいい存在だったりするの？」
表に出すことはなかったが、直情型だった先輩は溜め込んだ思いを歪んだ形で口に出す。それをレヴァンは、じっと見つめていた。
しかしそこで、
「ふざけないでッ！！」
空気を震わせるような叫び声が、レヴァンの耳を打った。
「……フロル？」

レヴァンが呆気に取られて呟くその背後で、フロルが肩を怒らせてスタスタと歩いてくる。

「先輩！　レヴァンにそんな言い方しないでください！　レヴァンは――」

フロルが激情のまま口を開こうとしたところで、先輩はフロルの方を見てぼそっとつぶやいた。

「……そうね。レヴァンくんはアイヤネンさんのモノだものね」

その言葉にフロルが固まる。それで勢いをつけた先輩はさらに続けて口を開く。

「自分の招魔が他人に取られるのは嫌だもんね。でも大丈夫よ。レヴァンくんはウチらみたいな人間はいらないみたい」

もちろんそれはアイヤネンさんもだけどね。

その言葉に今度はフロルの顔が悲しみにゆがんだ。

レヴァンとフロルが口を開くことが出来ず、先輩が持て余した気持ちを発散させるように毒々しい言葉を吐く。そんな時間がどれぐらい過ぎたか。

なんだか疲れたレヴァンが、ふっと目を閉じた。そのとき再び声が聞こえてきた。しかし、その声はひどくのんきで……

「なんだか、見苦しいよ？」

それは、第二の乱入者だった。

「……あなたは？　無関係の人は――」
「出て行かない。関係者だから。これでも『ファミグリア』なんだ」
強く言い返され、口をつぐむ先輩。その口を止めた乱入者は、チャームポイントのポニーテールを風に揺らした。
「先輩とかそういうことは知らない。ただ……そんなことして虚しくならない？」
「……それは、どういうこと？」
未だ内側に燻る感情を言葉として昇華できていない先輩が、訝しげに口を開く。乱入者リンは、あくまで不思議そうな顔で言った。
「小耳に挟んだところだと、アナタはレヴァっちが好きなんだよね？　なのに振られてしまえばレヴァっちに対して醜い言葉を吐く。これってどうなのかな」
説教する感じでもない、ただ事実を確認するようなリンの口調に、ぐっと先輩が怯む。
そこで再び怒りに火がつくフロルだったが、声を発するより先にリンに視線で制され、渋々といった様子で口を閉じる。
それを確認してから、リンは再び先輩の方を向いた。
そのままたたみ込んでしまおうとしたリン。
しかし、その思惑から外れ、先輩は「うるさい！」と癇癪を起こした。
「ウチの告白を断っておいて、理由もない……それは自分が人とは違うことを示しているからなんじゃ――」

「――その口を閉じろ。恥知らず」

「ひっ……！」

おもわず息を呑むその冷たい言葉に、先輩は息を止める。そのまま顔をサーっと青くした。

フロル、そしてレヴァンですら気圧され、反応できないその迫力は、先輩を鋭く睨みつけたリンが発していた。

「人か人じゃないかでアナタの意志が変わる？　アナタの想いは消えてなくなる？　違うでしょ。アナタはレヴァンが招魔だという事実を知った後もこうして告白をした。なのに振られたらコレ？　――バカにするのも大概にしなよ」

針でつつこうものなら怒りをまき散らしそうなその言葉に、先輩は深く俯いた。

「それにレヴァンくんが黙ったのは、不適当な言葉を言ったせいでアナタをさらに傷つけないようにと思ってやったこと！　それが逆にあなたの心を抉ったことも確か。だけど、アナタにレヴァンくんを悪く言う資格なんてない！　レヴァンくんと一緒に歩きたかったら、レヴァンくんの心をよく知ってからにしろ！」

リンは固まったまま動かない先輩に向けて、厳しい視線を向ける。そして、大きく息を吸い込んで、めいいっぱいの大声を叩き込んだ！

「そんなこともわからない奴が、アタシの友達を馬鹿にするなっ！

！　レヴァンはやらないし、フロルも傷つけさせるものか！」

そう言い切って、リンは素早く回りこみ、両腕を広げて二人を庇うようにして立った。

これ以上なにも言うことはない。その意志が、今のリンからはほとばしるように発散されていた。

「……う、ウチ……ウチは……っ！」

とうとう涙を流し、先輩は口からその言葉を漏らす。足をがくがくと震えさせ、やがて耐えきれなくなったのか、彼女は廊下から外へ走り去る。

それを最後まで睨みつけてから、リンはほう、と息を吐く。

そして今気づいたようにレヴァンたちの方を見ると、気まずそうに弱く笑った。

「あ、はは……。なんか熱くなっちった。ゴメンね、アタシがでしゃばるところじゃ――」

なかったよね、と続けようとしていたところで、リンは口をつぐむ。レヴァンたちがリンの言葉を聞いていないようだったからだ。

レヴァンとフロルの二人は、じーっとリンを見つめていて。

なぜかその瞳はキラキラと輝いていた。

「……あ……」

「……あ？」

リンが不思議そうに首をかしげたところで、二人が同時にリンの足元に駆け寄った。

「「姐さんっ！　一生ついて行きます！！」」

「誰が姐さんだこら！」

「「……こわかったよぅ。ぐす」」

「子供か！　あーもうなんでこんなことにっ！？」

足元にすり寄ってくる二人を引きはがしながらも、リンは。

「……はは」

初めて無邪気な、優しい笑顔を浮かべていた。

「てか、レヴァっち！　アタシ一応女なんだから、足元にすり寄ってくるのやめてくれない！？」

「舎弟にしてください～～～～～！」

「誤魔化されるかっ！」

そんなこんなで騒ぎつつも。

リンはここで、本当にレヴァンたちの『家族（ファミグリア）』となったのだった。

【2】ー12　少女の想い（後書き）

なんだかタイトルとはミスマッチな感じがします……が、気にしないでください。

【2】-13　人気なんです

「リンちゃん！　次は私たちでいいよね！」
「おいずりーぞ！　クエスティ！　俺たちが先でいいよな！？」
「あ、はは……。みんな、仲良く……ね？　アタシ、それが一番だと思うんだ……」

講義終了後の休み時間。リンは、クラスのみんなに詰め寄られていた。
次は教官が用事でいないということで自主訓練。てっきり全員がサボるかと思っていたレヴァンであったが、そんなことはない。この学校に通う者は浄魔士を志している。
ただ、今回は教官の見張りがないため、チーム関係なしで大々的に訓練ができるのだ。
装器士を志すことになっているリンは体術の技巧は言うまでもない。今までハンスやカナンには頼みづらかった生徒たちも、これは好機と見て、必死にお願いをしている。そんな場面だった。

「お願い！　私たち魔法援護を主軸においてたから、身のこなしが悪いの。せめて足手まといにならないぐらい動けるようにならないと……」
「そんなの自分でやれよ！　俺らは魔闘士目指してんだ。さっきゅうにクエスティに教えてもらいてえんだよ」

魔闘士。簡略化された魔法と格闘術を用い、近接戦闘を行う浄魔士のことだ。
現在守護士で、『迅雷拳』の二つ名を与えられた人物が編み出した新しい戦闘技術だ。魔法を併用するために、一応装器士とは違う

扱いとなっている。
「なによ。早急に、なんて言葉普段使わないでしょ！　賢ぶらないで！」
「ああ？　今それ関係ないだろ！」
お願いからただの口論に移り変わってきているその様子をすぐそばで見て、
「ははは…は……はぁ……」
リンは引きつった笑いの後にため息を漏らした。
それを少し離れた席からレヴァンが眺める。
「羨ましくはない光景だけど……前までは俺のポジションだったんだけどなぁ」
「え、レヴァンってあんなに詰め寄られてたっけ？」
「純粋に聞かないで……どうせ俺はそんなに人気はなかったよ……」
がっくりと肩を落とすレヴァン。
「え？　でも十人近い子がレヴァンくんのこと――」
「カナン！　余計なことは言わなくていいからっ！」
「……黙秘」
ん？　なんだかいい情報を聞いた気が……。
顔を上げたレヴァン。それに気づいたフロルとアミナが口を開いた。
「まぁレヴァンは人気ないからねー。仕方ないから私たちが話し相

手になってあげるよ」
「……これで、寂しく、ない」
「おまえら……俺に恨みでもあるのか……？」

滅相もない、という顔をしている二人にため息をして、レヴァンは前を向いた。

「よ、おかえり」
「た、ただいま……」

かなり疲れたような顔をしてリンが戻ってくる。とりあえず、交代で訓練を見ることになったようだ。

「レヴァっち……」
「ん？　どした？」
「……ゴメンね」
「へ？」
「なんでもない。……さ！　フロルちゃん、アミナちゃん、カナンちゃん。みんな行こうよ！」

リンがそう言って強引に切ると、三人の手を引っ張って教室を出る。たしかに訓練の時間まではもうそんなに余裕が無いので、教室を出るのはおかしくない。しかし、

「うーん……」
「なにしてる。行かないのか？」

ハンスがそう急かすなかで、レヴァンは悪い予感しか感じていないのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「「「捕縛魔法、発射ー！」」」
「なんでぇーっ！？」
　レヴァンは多種多様な捕縛魔法に追われていた。
　通常の縄タイプ。領域に踏み込むと発動する罠タイプ。水から成る蛇が絡み付いてくるタイプ。そして炎の――
「っておい！　炎の網はあぶねぇだろっ！」
「てへ」
　ふ、フロルのやろう……。
　レヴァンがフロルを恨みがこもった目で見ていると、すぐ右側で魔力の反応。それが直線型の気配を感じ取って、レヴァンは迷わず前方に転がって避けた。
　すぐ後ろを水の蛇が通過していた。
「ああっ！？　なんでバレたの！？　魔法の感知でもできてるみたい！」
　できてるんです。
　そう心の中で応えながら、レヴァンは一息つく。まあ、正確には魔力に反応するんだけど。
　レヴァンがふっと顔を上げると、そこには魔法でなんとかレヴァンを捕らえようとしているクラスメイトの姿。……なぜか全員女子だったが。

レヴァンはなんとかこの状況を抜け出すために、その女子たちの顔を心配そうに見て言った。

「なぁ、もうおまえらもかなり疲れてるみたいだし……そろそろやめようぜ」

そんなレヴァンの提案に、疲れた顔を動かして「そうだね」「そうしよっか」などの声が上がる。

これで終わりかな、とレヴァンが思った所で、

「……っ。甘いわ！」

「「「……ち」」」

レヴァンの背後に同時に展開された多様な網魔法を、あえてその方向に向かって回避することで難を逃れる。同時にその場の女子全員から舌打ちが漏れた。

レヴァンは嘆息しながら、あのなぁ、と語りかけた。

「ほんとにやめようぜ。おまえら、魔症で倒れたりでもしたらどうするんだ？」

「……う」

見事に同時に顔をしかめる女子一同。それにレヴァンは追い打ちをかけるつもりで続けた。

「おまえらが倒れたらって思うと不安になるしさ。いや、ほんとに心配なんだ」

暗に「倒れたら迷惑するんだぞ」というメッセージを込めたつもりのレヴァンだったが、女子たちが顔を朱に染めたのを見て、少し

と言わずに困惑した。

「……心配してくれるの？」

「？　当たり前だろ？」

意味が分からずに首を傾げるレヴァンに、彼女たちは「……きゅん」と言って胸を押さえた。

そして一名。逆に怒りのオーラを纏う者が。

「この、たらし……」

「え、なんで怒るの」

レヴァンは気迫に押され、後退り。そして、

「よくわからないけど……とりあえず、さよなら！」

「あ、逃げるなぁ！」

フロルへの恐怖と状況の不可解さに、レヴァンは脱兎のごとく背を向けて逃げ出した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あ、レヴァっち。おかえり〜」

「……」

クラスの魔闘士志望の女子に真面目に体術を教えていたリンが、軽い調子でレヴァンに挨拶。

レヴァンは恐らく先ほどの状況の元凶である少女に、文句を言っ

た。

「俺を巻き込まないでくれよ……」

「あ、はは……いやーまさか捕まえたら好きなようにしていいって言っただけであんなことになるとは思わなんだ」

「そんなルールがあったのか！？」

つ、捕まらなくてよかった……と内心今更のように冷や汗をかきつつ、状況把握が一応出来たので、もう追求しないことにした。

「……レヴァっちってモテそうだねぇ」

「そうか？　だったら嬉しいけど……」

何やら感心しているふうなリンをしばらく観察した後、レヴァンは、

「じゃ」

と言って、近くの木陰に腰を下ろした。そのまま少しぐらいいいだろと休みを取ろうとする。

「俺、少し休むよ」

「うん、さっきはゴメンね」

「気にすんな。もう終わったことだし」

そう言って目を閉じる。

教官がいない訓練はこう過ごすべきだ、とゆったり考えながら、レヴァンの思考は静かに沈んでいった。

その後もテキトーに訓練をやった後、着替えて教室へ。代理の先生が連絡を口にして、放課後となった。

そこで、

「……この前は本当にごめんなさい」

「エリカ先輩？　いや、いいんですよ。俺も黙りこんじゃったのが悪いんですし」

件のエリカ先輩が謝罪しに来たのをあっさりと受ける。まだ暗いままの顔だったが、

「……まだ諦めていないからね？」

そう不敵に笑って言う姿を見て、レヴァンは安心する。最後には気安げに挨拶をかわして別れた。

「……お人好しなんだから」

フロルにそんなことを苦笑気味に言われて、そうかもなぁ、とほんのり自覚。

その後ろでは、リンがミグルスを撫で回そうと走りまわり、追いかけ回していた。

「や、やめるのだ、娘よ。氷漬けにされたくなければ――」

「問答無用だー！　触らせろー！」

リンはアミナにミグルスを紹介してもらった瞬間、愛玩動物としてミグルスに一目惚れ。それ以来、ミグルスを追いかけ回すことが多くなっていた。
そんなこんなで放課後も時間が経っていく。

そんなこんなで全ての用事が終了し、ファミグリアの面々が大体集まった所で、

「今日はクリームあんみつの解禁日！」
「「「いえーい！」」」

フロルの掛け声に、女性陣が元気よく同調。ハンスは教官に呼ばれていてこの場にいないが、カナンは参加。最近ではリンもすっかり「南の大三角」のデザートが気に入っている様子だった。
と、そういえば。
気になったことがあり、レヴァンはリンに耳打ちした。

「おまえって訓練で能力使わないの？」

そう言って、手を頭の上で動物の耳を表し、ぴょいと動かす。

「うん……まだやっぱり……」
「そっか……。でもま、いつかは見せてくれよな。おまえの姿ってやつをさ」

そう言ってリンの背中を軽く叩く。痛い痛いと言いながらリンは仄かに嬉しそうな表情をしていた……が、

「おまえの姿を見せてくれって……なんかエッチ」

「んなわけあるかっ！」
レヴァンはしばらくツッコミ担当かもしれなかった。
「じゃあ、早く行こ！」
フロルがうきうきと教室の出口へと向かう。それに続いて全員が移動を始めようとした、そのとき。
「あ、ごめんアタシだ」
鳴り響いた電子音。リンの端末からだった。
リンは端末のボタンをぴっと押し込んで耳に当てる。
「……はい……っ。……わかりました」
短い内容だったようで、通話はすぐに終わる。しかし、
「どうかしたか？」
リンはレヴァンの顔を伺うように見て、その後ファミグリアの面々を見渡した。
「……ゴメン。用事ができちゃったよ」
「用事？」
傭兵の仕事はしばらくやめるという話だったが、なにかあったのだろうか。レヴァンはそのまま尋ねる。
しかし、リンは外せない用事だとしか言わず、急ぐような様子を見せた。

「ゴメンね！　また今度一緒に行かせて！」

そう言ってリンは駆け出す。

「……大変、そう」

「どしたんだろ？」

「……そうだな」

アミナとフロルの疑問に返しながら、レヴァンはリンの表情を気にしていた。

あの悲しげな表情は、本当にデザートが食べられないからだろうか。

「とりあえず、行きません？」

ぼんやりと考えながら、レヴァンはカナンの促しに従ったのだった。

【2】ー13　人気なんです（後書き）

そろそろ事態が動き出します。今度は誰の思いが出てくるのか……。

【2】ー14　未知との遭遇

更衣室。
……なぜ喫茶店ではなくこんな場所にいるかというと、レヴァンにとってはどうでもいい、しかしとても重要なことがあるらしい。
「クリームあんみつ……あんみつ……」
レヴァンの目の前には、体術の訓練を重点的にしてなんだか疲れた様子のアミナが木陰で横たわっていた。

リンと別れた一行は喫茶店へと向かったのだが、なんと急な閉店日。思わずと言った様子で泣き崩れた女性陣三人を、レヴァンが（周りの目を気にして）なんとか立たせた。その時の会話で。
「まぁ……たまには我慢しないとね……じゃないと太っちゃうし」
「太……？」
「る……？」
「「「ッッ！？」」」
そこで同時に、カナンは自分の体を確認し、フロルとアミナがバッと振り向いてレヴァンの方を見る。
太るという単語の後に見られるものだから、あれ太ってきたかな、と自分の体を見下ろすレヴァンを置いて、カナンがぼそっとつぶや

いた。
「太ったらお兄さんに嫌われます……」
「「そ、それじゃ私たちも……」」
なんだなんだ、と雲行きが怪しくなってきた会話から少しずつ身を離していった所で、
「「レヴァン（くん）！　体術を教えて（ください）！」」
「……教えて」
「りょ、了解……」
という訳で、今、かなりきつめのトレーニングが終わったところだった。
「アミナ、無事？」
「……冬眠、する」
「いやいやいや、こんなに暑いのに！　いや違った、寝ちゃダメだ、風邪ひくから」
「……冗談」
くすっと笑ってアミナが言う。少し休むだけ、と軽く目を閉じた。
「そ、そっか、身体には気を付けろよ？」
ん、と返事を返したアミナを微笑ましく見てから、レヴァンは歩き出した。
目的の更衣室についてから、レヴァンはポケットから鍵を取り出す。この更衣室は、ファミグリア専用のものだ。
鍵を回して中へ、しかしそこは靴を脱ぐ場所で、中に入るにはも

うひとつ引き戸を通らなくてはならない。
すぐそばの壁に名札が掛かっていないことを確認してから、レヴァンは自分の名札を掛け、引き戸を引いた。

「相変わらず無駄に充実してるなー」

さすがに学年の上位数チームにしか与えられない更衣室だけあって、引き戸の向こう側はトレーニング器具やらリラクゼーショングッズやらがわんさか置いてある。
そこまで広いわけでもないのに器具が充実しすぎて、スペースが狭くなっているというのが玉に瑕か。
レヴァンは、なにか捨てたほうがいいな、と密かに画策していた。

「っと、それより早く着替えないと」

男のレヴァンが着替えていると女子たちが着替えられない。
そう、チームで一つの更衣室なので男女はわかれていない。まあ、鉢合わせを防ぐための工夫が入口でされているのだが。
レヴァンが着替えにしか使っていないこの更衣室は、すぐそばにシャワールームもある。そのため、女子たちはかなり重宝しているようだった。

「着替えた後も少し待つハメになるんだろうけど……」

がらがらがらー。

「ん？」

レヴァンが上着を脱いで上半身裸になった所で、そのシャワールームの方から扉を開けるような音がする。

「おう、ハンス。もうあが――」

ん？　今日、ハンスはいなかったはずでは？

レヴァンがシャワールームのある方へ視線を固定させたまま、思考してかたまっていると、布が擦れるような音のあとに、その音の犯人がレヴァンのいるロッカー室へ姿を現した。

フロルが。

下着姿で。

「……」

「――え？　レ、ヴァン……？」

しばし見つめ合う二人。レヴァンは目をそらすように視線を動かした。

きちんとメリハリをつけて発達した肢体。上気した肌。すっきりとした印象を抱かせる細い体でありながら、女性らしい丸みを帯びている。

胸も大きいわけではないが綺麗な形をしていて、淡いピンクの下着がそれを隠している。しかし、その色合いもスカーレットの髪と対照的で、美しさを際立たせた。

――これが、フロル、か……？

レヴァンがぼんやりとそんなことを思って、目を離せずにいる。トクン、と胸の鼓動が一つ早くなった、レヴァンがそう感じたとき――

「……変……態……！」
「……へ？」

未だ現実感を得られないレヴァンに対して、フロルは思い切り息を吸い込み、噴火した。

「この、馬鹿レヴァンっ！」
「ってちょっ、危なっ！　ダンベル投げんな！」
「うるさいっ！　なんでここにいるの！」
「だって入口に名札下げてなかっただろ！？」
「そんなの知らないもん！　……ああもう！」

理不尽なことを言った後、自分が隠れたほうが速いと判断したのか、ロッカー室にあった着替えを持ってシャワールームの方へと駆けこむ。そこにある脱衣スペースでゴソゴソとした後、私服姿のフロルが登場する。

「このスケベッ！」
「ぐぶっ！？」

走って出口へ向かう途中にレヴァンに膝を入れ、フロルは、

「……ふんっ！」

ドタバタと出ていった。

「……理不尽だ」

レヴァンは腹を押さえてうずくまりながら、つぶやいた。なんのための入口の工夫だよ……。

「……よいしょ」

レヴァンは身を起こし、残りの着替えを済ます。あまり気絶をしているふりもしていられない。そう思って出口へ向かう。が、その前に自分のロッカーの中に一振りのナイフを見つけ、立ち止まった。

少し迷った後、無言でそれを手に持つ。それを逆手に構え、そして、

「ッ！」

一思いに腕の皮膚を切り裂いた。

鮮血が散り、浅い傷口が出来る。

その傷はしばらくしてからカサブタを作り、やがて治癒していくだろう。……そのはずだった。

「……」

レヴァンはつらそうに顔を歪めて自分の腕を見る。その視線の先では、

傷口が、みるみるうちに塞がっていっていた。

カサブタが出来ているのではない。肌がぴったりと合わさるよう

に近づき、そのまま傷跡すら残さないように傷口の端の方から閉じていっているのだ。
数秒も待つと、やがて傷口が完全に塞がった。もう、そこには傷があったことすら感じさせない、不気味に綺麗な肌があった。

「……くそっ」

拳を壁に叩きつける。思いのほか力を込めすぎてひどく擦りむくが、それもすぐに治る。
レヴァンはやり場のない不安を抑えこみ、ちゃちな作りのイスに腰掛けた。
異常が感じたのは、商店街での小遣い稼ぎでのことだ。運搬の仕事の際、道端にあった鋭い葉で腕を軽く切った。運搬をし終えてからその傷の確認をしようとすると、傷が見当たらなかったのだ。
それから何回か機会が重なり、最近、この異変に気がついたのだ。

「……怪我がすぐ治るなんて、便利でいいなー」

気を紛らわすためにそんなことを言うも、レヴァンはより顔を歪める。顔を俯けた。

「いったい俺は……」

「……う……」

レヴァンは口だけ動かしてその先の言葉を紡ぎ、

そして、嗚咽を漏らした。

……みんなには、黙っておこう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊

「……すいません。もう一度お願いします」
「は。今朝、偵察に向かった諜報部隊の精鋭三人からの連絡が断絶。おそらくすでに命はないかと」
「……」
　諜報部隊長が膝をついて報告する内容を、イレーネは最初、信じられなかった。
　研究所はもう間違いなくクロだろう。しかし、イレーネとエルゼは諜報部隊に偵察しか命じていない。その成果によって判断を下す予定だったのだ。
　偵察部隊の、しかも精鋭の存在に気づき、そしてそれを撃破。諜報専門といっても、諜報部隊は弱いわけではない。むしろ強い部類だ。敵はこちらの予想以上に強大だったようだった。
「……わかりました。下がってください。追って指令を下します」
「は」
　足音を立てることなく謁見の間のようなこの場所を後にする諜報部隊長を見送ってから、イレーネはふうっと長く息を吐いた。
　無人のはずの研究所が無断使用され、稼動している。同時に『魔の狩人』の拠点としても機能。
　元所長のカクタスが、『魔の狩人』の雇い主で、何やら不穏な動きが確認されている、が、詳しいことはなにも分からない。
　彼の目的もはっきりしない。敵の戦力も『魔の狩人』だけとは限

らない。

「……どうしよう」

イレーネは途方にくれた。

エルゼは都市内の『魔の狩人』の拠点を警戒させるにあたって、少しの間、塔を離れている。

「フロルちゃんだったら、なにか思い浮かんでくれるかしら……」

思わず漏れたつぶやきをかき消すように手を口の前でバタバタさせた。

あの子にもう重い話は関わらせない。

自らの決意を思い出し、強く頷く。しばらく静かに頭を働かせた。やがて、手元のボタンをゆっくりしっかりと押し込んだ。

「……エルゼ・サウスオールを至急呼び戻してください。それと、守護士三人は都市外周を中心に巡回。よろしくお願いします」

ふうっともう一度息をつくと、

「……しっかりしなきゃね」

庇護者イレーネ・セイレンは、両手で自身の両頬を強く叩いた。

【2】ー15　祝祭と水面下の動き

はっと気がつくと、時は夕暮れ。放課後になっていた。
どうやらぼんやりしたまま、少し昔のことを思い出していたらしい。
アタシはしばらくその余韻を味わって、そして机から立ち上がった。それと同時に、アタシの耳に軽い調子の声が聞こえてきた。

「お、リン。ちょうどよかった」
「ん、どしたの？」

声の方を振り向くと、そこには淡い水色の髪をした少年。恩人のレヴァっちだ。彼は、その端正な顔で笑顔を作ってアタシのそばまでやってきた。

「いや、今フロルたちが教官に呼ばれてるんだけどさ。戻ってきたらみんなで『南の大三角』に行かないかってさ」

おそらくフロルちゃんからそう言われたのだろう。伝聞形のその言葉を聞いてアタシは、

「……ゴメンね。今日は無理なんだ」

胸が痛んだ。

「え、なんか用事か？」

「まぁね。乙女のプライベートさ！」

そう、今日アタシは重要な用事がある。抜けたくてもそうはいかない、そんな用事が。

「え、誰が乙女だって？」

「ここだよ、ここ！　目の前にいるじゃんっ！」

レヴァっちが笑うのを見て、アタシは崩れそうになる表情を新たな笑顔で隠した。漏れそうになった声を堪えた。

「そっか。用事なら仕方ないな。乙女かどうかは別にして」

「しないで！　お願い、乙女って認めて！」

二人して笑ってから、それじゃ、とアタシは荷物を持って教室の外に向かう。まだ教室に残るのだろうレヴァっちに背を向けて歩き出そうとしたところで、後ろから声が飛んできた。

「じゃ、リン。また明日なー」

その言葉に、

「うん、また明日」

アタシは笑顔で答えた。

◇◇◇

「あれ、リンちゃんは？」
「なんか用事があるって。帰ったよ」
「そっか、残念」

肩を落とすフロルに、アミナが静かに手を置いた。ありがと、と口にしてフロルが立ち上がった。
そして、高らかに宣言する。

「そうだ、依頼に行こう！」
「「……え？」」

レヴァンとアミナがシンクロするも、それを気にする様子もなくフロルは話し始めた。

「それがね、なんと今日は商店街主催のお祭りがあるんだって。けっこう都市の中心寄りの場所でやるらしくて……それで」
「……教官から警備の依頼が来た、と」
「正確に言うと監視だって。魔法絡みのトラブルを未然に防ぐために、魔法に詳しい私と魔力に強いレヴァンが適任なんだって言ってた」

うわめんどくせー、とレヴァンが思っていると、フロルが「それでねそれでね」とポケットを嬉しそうな表情で探し始め、やがて何か十数枚ある紙束を取り出した。

「じゃーん、引換券！　コレがあれば商店街系列のお店の品物を、枚数に応じてもらえるの！」
「……すごい」

なるほど、買収されたわけか。教官もよくわかってらっしゃる。

レヴァンは納得して、その引換券を見る。先に代金を払って手に入れる物のようで、どうやらそれが金の代わりになるようだ。
二人して目が輝いている光景を、レヴァンは目を細めて眺めた。

「それじゃ、早速行こうよ！」
「依頼なんだろ？　そこ間違えんなよ」
「……わ、わかってるよ？」

確実にわかっていなかったフロルに苦笑。レヴァンはそのまま女子二人に連れられて会場へと向かった。

◇◇◇

「お、おぉ……」

レヴァンは圧倒されていた。
笑顔の人々、活気のある通り。それはいつもあることだったが、今回は少し違う。
まず、行われている場所だ。商店街から、物見塔の近くまで直線で結んだライン上に、様々な出店が出ているのだ。
そして活気。それはいつもの商店街を更に大きく上回る賑やかさだった。

「これが祭りか……」
「……来たこと、ないの？」

不思議そうに尋ねるアミナに、レヴァンは苦笑を向けた。

「まあね。俺が行ってた孤児院はルールが厳しくてさ」
実はルールが厳しかったのはレヴァンだけだったのだが、それも昔のこと。レヴァンが口にすることはない。フロルが少し悲しそうに眉をひそめた。
「……そう。なら一緒に、楽しむ」
そう言って笑顔を向けてきたアミナに、レヴァンは感謝の言葉を伝えて笑顔を返した。
「よし！　それじゃ行くかー！」
おー、と両側から上がる声を聞いて、レヴァンは人生初の祭りへと赴いた。

両手が食べ物で埋まる頃、レヴァンはふと聞きたいことがあったのを思い出した。
「なぁフロル。どうして今日は祭りがあってるんだ？　なにか特別なことでもあったのか？」
ん？　と果物飴を舐めながら、フロルは小首をかしげた。
「レヴァン、なんで自分がそんなに食べ物もらってるか知らなかったの？」
「え、これ関係あるのか？」

そう言って自分が抱えている山のような食べ物をレヴァンは確認する。焼きそば、焼鳥、果物飴に綿菓子。フロルが舐めているものも、レヴァンが商店街の人々におまけでもらったものだった。
すっかり困惑しているレヴァンを見てため息をつくと、フロルは腰に手を当てて説明を始めた。

「このお祭りは、この前の大侵攻での無事を祝ってるんだから。レヴァンは実質主賓みたいなものなんだよ？　それをわかってる商店街の人がみんなオマケしてくれてるんじゃない」
「……な、なんかそれ恥ずかしいな」

自分が目立つようなことを今までしなかったせいか、妙に照れるレヴァン。その姿をアミナは羨ましそうに見ていた。

「……私も」
「ん？　あぁ、飴？」
「……綿菓子」
「わかった。……はい、ほら」
「……ありがとう」

もふもふという形容ぴったりで綿菓子を食し始めたアミナを眺めて微笑ましい気持ちになり、フロルに耳を引っ張られた所で、突然、大きな声がレヴァンたちを引き止めた。

「あー！　おねえちゃんだぁ！」

てけてけと走ってくる女の子は、『南の大三角』オーナーの娘、ノノだった。

「……元気？」
「うん！　元気だよぅ！　おねえちゃんは？」
「……私も。お父さんは？」
「おしごと！　今日はいっぱいかせぐんだっていってた！」
「……そうなんだ」

アミナがレヴァンたちの方を向いた。即座に意図を読み取ったレヴァンはフロルとアイコンタクトで確認しあい、しっかりと頷いた。
それを見て、アミナがノノの視線の高さに合わせて優しく声をかけた。

「……一緒に、まわる？」
「いいの！？」

はしゃぐノノの様子を見守って、フロルからロの人疑惑を受けながらも、四人組になった一行は出店を回ることにしたのだった。

「じゃあね！　またあそぼうねぇ！」

ブンブンと自分たちに手を振るノノを見て、レヴァンたちも手を振り返す。彼女が一つの出店の中へ戻っていくのを見届けてから、一行は手を下ろした。
ノノはオーナーの店を手伝うことにしたらしい。相変わらずのいい子だった。
そんなことを口にしながら再び歩き始める。大分残りが少なくなってきた引換券を消費する場所を考えながら、一行がぶらぶらしていた時だった。

「……ん？　あれ、リンか？」

レヴァンが前方に注目してそんなことを言う。それに、フロルとアミナは目を凝らしてよく見ようとした。

「え、どれどれ……あ、ホントだ」

「……塔の方向」

「用事って言ってなかったっけ？　……ついて行ってみるか」

即断即決。レヴァンが好奇心旺盛にも歩き出すと、慌てるようにして二人もついて来た。

「君たちも召集された傭兵か？」

「はい、そうです」

なんだか屈強な肉体の男が話しかけてきたので、レヴァンは頷いておいた。その男の後ろでリンが目を見開いて驚いている。それを見て、レヴァンはしてやったりと思った。

「それでは今から仕事だ。入るぞ」

そのレヴァンに声をかけた傭兵が、建物の中へと入っていく。レヴァンはその建物を見上げる。

迫力を備えてそびえ立つその白い建物は、物見塔だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6382v/

招魔の祈り　~law distorters~

2011年12月19日23時56分発行